ISSN 1884-4391

東京外国語大学記述言語学論集

思言

第 17 号

論文

モンゴル語の半母音 j で終わる語の奪格形…… 山田　洋平 (3)
モンゴル語オラド方言の小辞 =jAA について ―とりたての観点から―……ホリロ (27)
フィジー語の叙述所有 ……岡本　進 (49)
西フリジア語の krije 受動に関する研究……佐田　陸 (63)
パピアメント語における疑問文について…… パトリシオ　バレラ　アルミロン (81)

修士論文　要旨

サラール語の極性疑問標識に関する考察…… 原　明海 (111)

卒業論文　要旨

日本語の使役助動詞「せる」「させる」の活用の 五段化の現状……阿部　義隆 (123)
標準ドイツ語における [werden＋(完了)不定詞]:
　共起表現・コンテキスト・英語との対照の点から ……石井　真子 (131)
アラビア語カイロ方言における動詞の bi-接頭辞活用形の意味機能 ……石橋　弘太郎 (139)
イタリア語の前置詞 con, su, per と定冠詞の結合について……小木曽　円香 (147)
ベトナム語の動詞助詞の生起順序に見られる意味的制約 ……小林　剛士 (155)
英語とフランス語の冠詞の対照研究……瀧島　菜央 (163)
メキシコスペイン語の指大辞について…… 東　紘生 (171)
デンマーク語の未来表現について……古屋　さくら (179)
ベトナム語の有声破裂音の音響音声学的研究……宮崎　哲雄 (187)

2021 年
東京外国語大学
総合国際学研究科・言語文化学部
記述言語学研究室

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

序文

『思言』の第 17 号をお届けする。今号もその内容とレベルに関しては十分なものと言えるかわからないが、読んでくださる方々の評価を俟つ。広く御批判御叱正を賜りたい。言語学の進展に何か少しでも寄与するところがあれば幸いである。

今号も個人研究費によって刊行することとなった。『思言』の電子資料は Web 化されているので、ネット上の『思言』も利用していただければ幸いである。なおキーワード検索も可能である（http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kazama/Journal.html）。HP の整理・更新にはいつもながら山田怜央さんにお世話になっている。この場を借りて深くお礼申しあげたい。山田さんとは共著で今年度『28 言語で読む「星の王子さま」 世界の言語を学ぶための言語学入門』を刊行することができた。言語学普及の一助となれば幸いである。

今号の修士論文要旨は 1 つのみで少し寂しいが、今号には 5 名の院生や教員が論考を寄せてくれた。その対象言語や扱っている言語現象は多岐に亘っている。他方、外部から広く投稿を受け付けることは今年度も課題として残されたままである。当研究室での研究会に関しても、年に 8 回頑張って開催しているものの、まだ広く人に聞きに来ていただけるようなレベルには至っていない。より広く世界に発信し、通用するような研究環境を構築していく必要があると考えている。

今年度の当研究室において特筆すべきことについても、ここに報告させていただく。菱山湧人さんがタタール語の人称標識の出現傾向についての博士論文を提出し、博士号を取得した。言語学会でも卒業生たちが多くの発表を行ってくれた。学生や卒業生たちからの刺激を受けつつ、私自身もっと研鑽していきたいと考えている。

今号の編集にあたっては、岡本進君が中心になって尽力してくださった。ゼミの院生諸氏もよく手伝ってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。前号に御意見を下さった方にもこの場を借りて深くお礼申し述べたい。

相変わらずコロナ禍のため先行きの不明な世の中であるが、現状維持は退化と考え、新しいことにもチャレンジしていく一方で、こうした継続的な形での成果も変わらぬ形で出し続けて行けるようでありたいと考えている。

2021 年 12 月 25 日

風間 伸次郎

思言　第 17 号　目次：

論文

モンゴル語の半母音 j で終わる語の奪格形
The Ablative Form of Words Ending with the Semi-vowel /j/ in Mongolian …… 山田　洋平 (3)

モンゴル語オラド方言の小辞 =jAA について ―とりたての観点から―
The Particle =jAA in Urad Mongolian: From the Viewpoint of *toritate*……ホリロ (27)

Predicative Possession in Fijian
フィジー語の叙述所有 ……岡本　進 (49)

On the *krije*-passive in West Frisian
西フリジア語の krije 受動に関する研究……佐田　陸 (63)

Questions in Papiamentu
パピアメント語における疑問文について……パトリシオ　バレラ　アルミロン (81)

修士論文　要旨

サラール語の極性疑問標識に関する考察
An Analysis of Polar Question Markers in Salar……原　明海 (111)

卒業論文要旨

日本語の使役助動詞「せる」「させる」の活用の 五段化の現状
The Present Situation for Using Five Stage Conjugation in Japanese Causative Suffix “-seru” and “-saseru” ……阿部　義隆 (123)

標準ドイツ語における [werden＋(完了)不定詞]: 共起表現・コンテキスト・英語との対照の点から
A Study of [*werden*＋(perfect) infinitive]: From the Perspectives of Co-occurrence, Context, and Comparison with English ……石井　真子 (131)

アラビア語カイロ方言における動詞の bi-接頭辞活用形の意味機能
The Semantic Function of the “bi-” prefix in Cairene Arabic Verb Conjugation……石橋　弘太郎 (139)

イタリア語の前置詞 con, su, per と定冠詞の結合について
An Analysis of Italian Contractions: A Focus on the Prepositions “con”, “su”, “per” and Definite Articles……小木曽　円香 (147)

ベトナム語の動詞助詞の生起順序に見られる意味的制約
A Semantic Constraint on the Order of Verbal Particles in Vietnamese……小林　剛士 (155)

英語とフランス語の冠詞の対照研究
A Comparative Study of English and French Articles……瀧島　菜央 (163)

メキシコスペイン語の指大辞について
Augmentative in Mexican Spanish……東　紘生 (171)

デンマーク語の未来表現について
Future Expressions in Danish……古屋　さくら (179)

ベトナム語の有声破裂音の音響音声学的研究
An Acoustic Study of Voiced Plosive Sound in Northern Vietnamese……宮崎　哲雄 (187)

論文

モンゴル語の半母音 j で終わる語の奪格形

山田洋平
（東京外国語大学世界言語社会教育センター）

キーワード：モンゴル語，音韻形態論，子音 n，具体物

1. はじめに

モンゴル語[1]の奪格接辞 -AAs は、末尾が半母音 j である名詞類につくと、j の直後に子音 n が現れることがある (1)。この子音 n についての形態的な位置づけは不明であるので、本稿では仮に -n を独立した形態素のように分析し、グロスもただの N とする。

(1) noxoj > noxoj-<u>n</u>-oos　　※下線部が該当部分。以下同様。
　犬　　犬-N-ABL

モンゴル語において j で終わる語は稀ではなく[2]、また奪格という格の使用頻度も低くない (1.2. で詳述)。ところが、(1) で見た j で終わる語に奪格接辞が付く際に子音 n が現れることについては、従来きちんと記述されていない。モンゴル語として比較的よく現れうる形式であるにも関わらず十分な記述がないのは、当該形式が比較的新しい言語変化によって生じたものであり、揺れがあるものだからであると考えられる。

本稿ではこの点に注目し、モンゴル語の j で終わる名詞類の語のうち使用頻度の高いものをピックアップし、コーパスや Google 検索を利用して奪格接辞の付き方を記述する。この研究は直接的には第二言語としてのモンゴル語学習において求められるものであるが、その先の展望としてはいわゆる「隠れた n」を含むモンゴル語音韻形態論・形態統語論の解明にも資するものとなるであろう。

以下では 2. において前提となる事項を、3. で先行研究における記述をまとめ、その問題点を指摘する。4. で調査方法を提示し、5. で調査結果を提示し分析する。6. でまとめ、今後の課題を示す。

---

[1] モンゴル語はモンゴル国や中国内モンゴル自治区などに分布する膠着型・接尾辞型の形態論を有する言語である。本稿ではとくにモンゴル国で使用される書き言葉を対象として調査を行った。従って、本稿で扱うモンゴル語の音や語形についての議論は全て文字綴りに則ったものである。本稿ではモンゴル国で使用される文字を以下の通りラテン文字に転写して示す。(右がラテン文字) а:a, б:b, в:w, г:g, д:d, е:yö/ye, ё:yo, ж:ǰ, з:z, и:i, й:j, к:k, л:l, м:m, н:n, о:o, ө:ö, п:p, р:r, с:s, т:t, у:u, ү:ü, ф:f, х:x, ц:c, ч:č, ш:š, ь:’, ы:y, ъ:’’, э:e, ю:yu/yü, я:ya。また接辞の代表形として -AAs のようにラテン文字の大文字を使用している場合、音韻的な条件により複数の異形態 (-aas, -oos, -ees, öös) を以て実現することを意味する。

[2] モンゴル語の語彙集である橋本 (2012) には見出し語が 3204 語掲載されているが、このうち末尾が j であるものは 136 語である。見出し語のうち 985 語が x 終わりの語 (おそらくほとんどが本項での分析に関係のない動詞の辞書形) である。その他の文字 (音素／文字配列上ありえない b, y, ’’, yu/yü と外来語専用の k, p, f を除く 25 文字) が仮に語末位置に平均的に現れるとすると、(見出し語数 3204 – j 終わりの語 136 – x 終わりの語 985)/ その他の文字 25 = 83.32 であるので、この平均値よりは頻度が高いと言える。

2. 前提知識

本節では本稿で扱う基本概念である半母音 j と奪格について、そして子音 n が現れる現象として関わりの深い「隠れた n」というモンゴル語学の用語を説明する。

2.1. 半母音 j

本稿で扱う半母音 j とは、綴りの上では必ず母音文字の後ろに現れて二重母音を成すものである。モンゴル語の基本母音には a, e, i, o, u, ö, ü があり、長母音 aa, ee, oo, uu, öö, üü と二重母音 aj, ej, ij, oj, uj, üj がある[3]。

半母音 j で終わる語に長母音始まりの形態素が付される場合、母音の連続を避けるための子音 g が形態素の頭に挿入される (2)。この振る舞いは長母音で終わる語と同様である。この点で半母音 j は母音音素であると見做すのが妥当であろう。

(2)

子音終わりの名詞類	長母音終りの名詞類	二重母音終りの名詞類
mal	yamaa	gaxaj
家畜	山羊	豚
mal-aar	yamaa-gaar	gaxaj-gaar
家畜-INS	山羊-INS	豚-INS

子音終わりの動詞語幹	長母音終りの動詞語幹	二重母音終りの動詞語幹
aw	xaa	baj
取る	閉める	ある
aw-aad	xaa-gaad	baj-gaad
取る-ANT	閉める-ANT	ある-ANT

ij は音声実現上 i の長母音 [iː] である[4]が、次の (3) のような属格接辞の振る舞いの異なりからして二重母音と見做すのが妥当であると考える。属格接辞は長母音の後ろで -gyn, -gijn、二重母音の後ろで -n という形になるとされる。

(3)

長母音終りの名詞類	ij 以外の二重母音で終る名詞類	ij 終わりの名詞類
cagdaa	dalaj	melxij
警察	海	蛙
cagdaa-gijn	dalaj-n	melxij-n
警察-GEN	海-GEN	蛙-GEN

なお、ij は通時的にも *ei のような母音連続に由来するものが多いものと思われる。他の二重母音についても実際の音声実現は長母音となることがある (aj [æː], oj [œː], ej [eː])。

[3] この他、綴りの上では au, ia, io, ua といった母音字の連続もある。öj という二重母音は認められない。
[4] 例えば「正書法辞典」(276-277, 文献情報の詳細は注 8 を見よ) では ij を長母音であるとしている。

2.2. 奪格

モンゴル語の名詞には属格、奪格、与位格、対格、造格、共同格、方向格といった格があり、接尾辞を付すことによってこれを表す。奪格は -AAs という形式で、主に時間・空間的な起点や比較の基準を表す「～から」「～より」という意味で用いられる。

語に接尾辞を付す際に適用される音韻形態論的な規則として、奪格 -AAs に適用されるものに以下の 3 点がある。

①母音調和

語幹に含まれる母音に併せ、接辞は -aas, -ees, -oos, -öös という実現形を有する (4)。

(4)

mal	ner	nom	xöl
家畜	名前	本	足
mal-aas	ner-ees	nom-oos	xöl-öös
家畜-ABL	名前-ABL	本-ABL	足-ABL

②母音音素の連続制限

綴り上、短母音で終わる語に長母音始まりの接尾辞が付される場合、語末の短母音を削除して接尾辞が付される (5a)。長母音や二重母音で終わる語に長母音始まりの接尾辞が付される場合、形態素境界に挿入子音 g が現れる (5b)(cf. (2))。

(5)

a.	b.
xulgana	cagdaa
鼠	警察
xulgan-aas	cagdaa-gaas
鼠-ABL	警察-ABL

③「隠れた n」と「隠れた g」

一部の語にはモンゴル語学において「隠れた n」「隠れた g」と呼ばれる拡張語幹形を有するものがある。「隠れた n」は属格形・奪格形・与位格形などの場合に語幹末に子音 n が現れる (詳しくは 2.3. で扱う)。「隠れた g」は子音 n で終わる語にのみ現れうるもので、属格形・奪格形・対格形・造格形の語幹末に g が現れる (6)。

(6)

「隠れた n」を有する語	「隠れた g」を有する語	いずれも有さない語
xašaa	bajšin	ger
囲い	建物	移動式家屋
xašaan-d	bajšin-d	ger-t
囲い-DAT	建物-DAT	移動式家屋-DAT
xašaan-aas	bajšing-aas	ger-ees
囲い-ABL	建物-ABL	移動式家屋-ABL

本稿で問題とするのは②と③である。②の説明が正しく、かつ③の「隠れた n」が無いならば、語末が二重母音である (半母音 j で終わる) 名詞類に奪格接尾辞がつく場合、子音 g が挿入されるはずである。この点については 3. で再度触れる。

2.3. 隠れた n

一部の名詞類語幹には「隠れた n」[5]と呼ばれる拡張語幹形がある。「隠れた n」の有無は語彙により、また方言によりある程度決まっているが、どの語に「隠れた n」が現れるか共時的に予測することは難しい[6]。さらに、規範的には「隠れた n」が無いとされる語に、実際の使用においては「隠れた n」が現れるということもよくある[7]。

「隠れた n」は属格・奪格・与位格の接尾辞を付す際の語幹末や複合語を構成する先行する語の語末に現れる。本稿で問題にする奪格接尾辞を付す際の子音 n は属格と与位格を付す際には現れないという点で「隠れた n」とは異なるものであるとひとまず考える。

(7) j で終わり、「隠れた n」を有する語	j で終わり、「隠れた n」を有さない語	
caj	zaj	
お茶	距離	
caj<u>n</u>-aas	zaj-<u>n</u>-aas	
お茶-ABL	距離-N-ABL	
caj<u>n</u>-y	zaj-<u>n</u>	※属格接辞の形態に
お茶-GEN	距離-GEN	ついては 2.1. を参照
caj<u>n</u>-d	zaj-d	
お茶-DAT	距離-DAT	

規範的な「隠れた n」の有無を知るための方法として、モンゴル国政府がウェブ上に公開している「正書法辞典」[8]がある。これについては次節 3.2. で詳細に紹介する。

---

[5] 文献により「不安定な n」(例えば Janhunen 2012: 66. ‘The unstable nasal’ など)「H 交替語幹」(向井 2006. http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/003.html「名詞類の形と変化」解説) などの呼称もある。

[6] モンゴル語学習においては、「単語ごとに覚えなければいけない事項」である。「隠れた n」はもともと n で終わる語 (「安定した n」) には現れない。日常生活に身近な具体物を表す名詞類は「隠れた n」を有することが多いように感じられる、という傾向はある。

[7] 「隠れた n」の有無の判断は辞書によっても異なり、実際の出現の有無は文体差や方言差によっても異なる。ここでいう規範とは「正書法辞典」(注 8 を参照) のことを指すが、より古い形を残しているであろうという意味で伝統的なモンゴル文字綴りにおける「隠れた n」の有無を規範であると考えることもあるであろう。「正書法辞典」では、こうした古い綴りによるのみならず、幾分か実際の使用に合わせて「隠れた n」の有無を認めているところがある。なお、(7) の caj「お茶」という語は、伝統的なモンゴル文字綴りが参照できる「蒙漢辞典」(内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) 1999) では「隠れた n」の無い語として掲載されている (この点は本稿の査読者からご指摘いただいた)。

[8] 本稿では Mongol Ulsyn Yörönxijlögčijn dergedex Xelnij bodlogyn ündesnij zöwlöl (2018) を指す。電子版 (ウェブ上で自由に閲覧可能) と書籍版があり、ここではその両方を指す。内容は基本的に同一であるが、子細に見ると若干の異なりがある。引用する際にページ数を示した場合は書籍より、示さない場合 (各語彙の情報など) はウェブ上で閲覧したものである。本稿では単に「正書法辞典」と記す。

3. 先行研究

本節では半母音 j で終わる語に奪格接辞が付く場合について、3.1. では各種語学書や文法書の記載をまとめ、3.2. では「正書法辞典」での扱いを見る。

3.1. 語学書や文法書の記載

2.2. ②で見たルールからは、末尾が半母音 j である名詞類に奪格接辞がつくときに現れる子音 n (cf. (1)) について説明ができないが、山越 (2012: 69) では「二重母音終わりの名詞に接続するときには間に n が挿入される」と明記されている。この点について山越 (2012) を除くと従来の文法書や語学教科書には十分な記載がない。

その他の代表的な文法書として Kullmann & Tserenpil (2005: 90) では、奪格接辞のつけ方のルールを表で一覧にしている。その表の内容は概略次の表 1 のようなものである。詳しい解説はついていない。

表 1: Kullmann & Tserenpil (2005: 90) における奪格接辞のつけ方のルール (抜粋[9])

規則：語末が…	例
全ての母音と子音[10]	erdenees　宝から xanaas　壁から dargaas　リーダーから axaas　兄から exees　母から nomoos　本から töröös　政府から
「隠れた n」 *例外[11]	talxnaas　パンから modnoos　木から xoninoos　羊から xarandaanaas*　鉛筆から gereenees*　契約から
「隠れた g」	bajšingaas　建物から čijdengees　電球から
-i, -’	angias　クラスから xanias　伴侶から
長母音・二重母音に対する挿入子音 g	xüügees　息子から böögöös　シャーマンから dalajgaas　海から

[9] 和訳は筆者により、本稿で扱わない伝統的な文字綴りについては除外した。またこの他に「“ye” で終わる語 beye はすでに母音 e が含まれているので奪格形は beyees となる」との記載もある。これはラテン文字転写しない本来の綴りについて必要な説明であるので、ここでは混乱を避け除外した。

[10] 「以下の諸条件を除く、全ての母音・子音 (で終わる語)」の意であると解釈できる。なお、短母音で終わる語については語末の短母音が脱落した上で格接辞が付く。

[11] この例外とは、「本来は「隠れた n」が無いとされるのに」あるいは「伝統的な文字綴りでは「隠れた n」が現れないのに」、「隠れた n」が現れるということを表わしているものと思われる。

表 1 からは「「隠れた n」が無い限り、語末が長母音・二重母音であれば形態素境界に子音 g が挿入される」と読める。実際表 1 にも半母音 j で終わる dalaj「海」という語に奪格接辞のついて子音 g が挿入された dalaj-gaas「海から」という語例が見られる。

同様の記述は他でも広く見受けられる。語学教科書として Bayantuul (2017: 62), 向井 (2006: http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/020.html「奪格」解説)、文法書として Janhunen (2012: 106, 108) などでもおしなべて「長母音と二重母音のあとでは子音 g が挿入された -gAAs という形式になる」という説明である。

異なる書き方として奪格に関する説明に「長母音や二重母音で終わる語の場合」を記載していない文法書 (Önörbayan nar (ryed.) 2010: 138-139[12]) や、長母音と二重母音で終わる語のうちヒトに関する語では g が挿入され、モノに関する語では n が挿入されると説明する語学書 (Bayarmaa 2015: 127) もある。Cedendamba nar (ryed.)(1997: 228), Xišigǰargal (2019: 144) では長母音または二重母音終わりの語に奪格接辞がつく場合に子音 n が現れるとしている[13]。また Cedendamba nar (ryed.)(1997: 228-229) では、同音の語が普通名詞と固有名詞とで使い分けられるとき、前者には子音 n が、後者には子音 g が現れる傾向にあるとも指摘している。

3.2. 「正書法辞典」

3.2.1. 「正書法辞典」の概要

「正書法辞典」はモンゴル国において現行のモンゴル語正書法についてルールをまとめ、38,000 の見出し語について品詞及び語形変化の情報を掲載したものである。この出版の経緯については、以下のような説明がある。

> 1940 年代以降今日に至るまで、モンゴル国の社会、経済、政治、教育、文化、科学のあらゆる分野で共通して用いられてきたこの書き言葉の使用をさらに洗練させようと、政府は常に関心を払ってきた。しかし正書法は法律的に認められて来ず、国民が遵守すべき正書法についての詳細な辞書がなかったため、望んだ人が誰でも新しく辞書を作ったり、それによって間違いや混乱が生じたりし、また他方でモンゴル語教育や実用上の問題が多々解決されないままであった。そこで C. Damdinsüren 氏の作成した正書法を再度詳しく改め、説明の追加を行い充実させ、これに基づいた正書法辞典を新たに作る必要が生じた。
>
> (「正書法辞典」ix. 和訳は筆者による)

「正書法辞典」では辞書としての語彙の掲載の他に、モンゴル語の正書法についての説明が子細に記載されたページがある (書籍版では x-xvi, 271-291)。語彙は品詞分類が施され、このうち名詞と動詞については語形変化に関する情報が掲載されている。書籍版では

[12] 奪格に関する説明の直後に、形式のよく似た造格接辞 -AAr に関する説明があり、そこでは「長母音と二重母音のあとでは子音 g が挿入される」とある。このことは「奪格形は長母音と二重母音のあとでも子音 g が挿入されるとは限らない」ということを暗示するものであるとも読める。

[13] ただし、いずれも挙げている長母音終わりの語の例は「正書法辞典」で「隠れた n」があるとされる語である。

語形変化をいくつかのグループに分類し、その分類番号がそれぞれの語彙に示されている。ウェブ版では名詞を検索するとその語に各種格接辞等を付した形式が示される (図 1)。動詞は同一の語形変化のグループに属する代表語の各種接辞を付した形が表示される (図 2)。

гэр I.5.4 ●○○ [ж.н]	<説明>
	[見出し語] [語形変化グループ] [頻度] [品詞]
ТОВЧ УТГА	意味説明
одон зурхайн гуч хоног, нарны ~	(同音異義語の区別に役立つ)
ХУВИЛАЛ	語形変化
гэрийн [харьяалах т.я.]	属格形
гэрт [өгөх орших т.я.]	与位格形
гэрийг [заах т.я.]	対格形
гэрээс [гарах т.я.]	奪格形
гэрээр [үүлдэх т.я.]	造格形
гэртэй [хамтрах т.я.]	共同格形
гэр лүү [чиглэх т.я.]	方向格形
гэрээ [ерөнхийлөн хамаатуулах]	再帰所属が付された形

図 1: 「正書法辞典」で名詞を検索した場合の表示の例

гар II.5.1 ●●● [үй.у]

ТОВЧ УТГА

гадагшаа ~; ил болох; төрөх

ХУВИЛАХ ЖИШЭЭ

дулаар, дулааруул; дулаарчих, дулаарсхий, дулаарзна, дулаарч, дулааралд, дулааран, дулаарсаар, дулааравч, дулаармагц, дулаартал, дулаарахлаар, дулаарвал, дулаарваас, дулаарангуут, дулаарангаа, дулааралгүй; дулаараар; дулааараг, дулааараасай; дулаарсан, дулаардаг, дулаарах, дулаарагч, дулаармаар, дулаарахуйц, дулаарууштай, дулааралтай, дулааршгүй, дулаарам; дулаарна, дулаармуй, дулаарнам, дулааръюу, дулаарчээ, дулаарав, дулаарлаа

<説明> [見出し語 (語幹形)] [語形変化グループ] [頻度] [品詞]
意味説明
語形変化の例
(同一の語形変化グループの代表語に、様々な接辞が付された形式。詳細省略)

図 2: 「正書法辞典」で動詞を検索した場合の表示の例[14]

[14] 従来の一般的な辞書では見出し語として形動詞未来 -x が付された形式が使用されるが、この「正書法辞典」では語幹形 (=命令形) が見出し語になっているところが特徴的である。なお、形動詞未来 -x を付した動詞形を検索窓に入力しても、掲載されている見出し語をサジェストしてくれる機能はある。語形変化は態や相を表す派生接辞から始まり、副動詞接辞、定動詞希求接辞、形動詞接辞、定動詞叙述接辞の順に並んでいるようだが、必ずしも網羅的ではない。

語形変化のグループを表す分類番号について詳細な説明は無いが、掲載されている例を見る限り次のことが分かる。まず分類番号は I.1.1 のように 3 つの数字から成り、この内最初が I であれば名詞[15]であることを、II であれば動詞であることを表わしている。3 つめの数字は母音調和の 4 グループに対応し、1 であれば a、2 は o、3 は ö、4 は e の系列であることを示す。残る中央の数字はその他の分類を担うもので、名詞は 1~32、動詞は 1~16 に分類される。本稿で扱う、j で終わる名詞類は I.15.1~I.15.4 に属する。

3.2.2.「正書法辞典」における半母音 j のあとの奪格について

「正書法辞典」の正書法の説明では、筆者の見る限り「長母音や二重母音で終わる語に長母音始まりの形態素が付される場合に子音 g が挿入される規則」について記載はなく、また奪格接辞のつけ方についても「隠れた n」が現れることについての記載が §44「格接辞の書き方」に書かれているのみである。

しかし、半母音 j で終わる名詞について個別に検索すると、その語形変化のところに奪格接辞の前の子音 n が認められる語がある (8a)。同じ半母音 j で終わる名詞でも「隠れた n」を有する語では属格形と与位格形でも n が生じる点で異なっている (8b)。

(8) a. dalaj「海」という語の語形変化 (「正書法辞典」)

dalajn	属格形
dalajd	与位格形
dalajg	対格形
dalaj<u>n</u>aas	奪格形
dalajgaar	造格形
dalajtaj	共同格形
dalaj ruu	方向格形
dalajgaa	再帰所属が付された形

b.「隠れた n」を有する caj「お茶」という語の語形変化 (「正書法辞典」)

caj<u>n</u>y	属格形
caj<u>n</u>d	与位格形
cajg	対格形
caj<u>n</u>aas	奪格形
cajgaar	造格形
cajtaj	共同格形
caj ruu	方向格形
cajgaa	再帰所属が付された形

[15] 「正書法辞典」には、名詞ではないと判断されたものに関して語形変化が示されないという問題がある。例えばここで形容詞と判断される語は、基本的に全て名詞と同様に格接辞を付すなどの語形変化が可能であるが、示されていない。

こうした記載は、「半母音 j で終わる語に奪格接辞がつく場合は一貫して子音 n を挿入する」と機械的に決められているわけではないようである。例えば oroj「頂上」[16]という語の語形変化は次の (9) の通りで、奪格形で子音 n が現れない。

(9) oroj「頂上」という語の語形変化 (「正書法辞典」)

orojn	属格形
orojd	与位格形
orojg	対格形
orojgoos	奪格形
orojgoor	造格形
orojtoj	共同格形
oroj ruu	方向格形
orojgoo	再帰所属が付された形

すなわち「正書法辞典」では「半母音 j で終わる語に奪格接辞が付される場合に子音 n が付されることがある」という説明はなく、語によってアドホックに「奪格接辞が付された場合に子音 n が現れる」ことを示しているのみ[17]であることが指摘できる。

4. 調査方法

4.1. 調査の目的と概要

先行研究から、二重母音終りの語 (=半母音 j で終わる語) に奪格接辞が付されるとき、その形態素境界に子音 n が現れる現象について次の問題点が指摘できる。すなわちこの現象は山越 (2012) が言及しているものの、半母音 j で終わる語全てに適用される規則ではなく、そのためかその他の文法研究でもきちんと扱われていないことである。そこで本稿では、半母音 j で終わる語について主に Google 検索を用いて子音 n の現れを調査する。

[16] oroj には同音異義語「夜、遅い」という語があるが、これは「正書法辞典」の品詞分類上「時間名詞」(cagijn ner) とされ、名詞とは異なると判断されるためか語形変化が記載されていない。「時間名詞」のほか「形容詞」(temdeg ner)、「場所名詞」(orny ner) など一般に名詞類と呼ばれる語類の下位分類に属する語は名詞同様の語形変化を有するにも関わらず、語形変化の規範を参照することができない (一部の格形式を欠くものも認められるが、奪格接辞は付しうることが多い)。このことは、「正書法辞典」の問題点の一つであると言える。こうした品詞分類はおそらく語義から恣意的に行われており、基準も示されていない。

[17] この点について以下の通り補足する。

語形変化のグループとしては (8a)(9) の語はともに同一の分類番号に入れられている。半母音 j 終りの語に限らず子音 n が不規則に現れる語の例は他にも見られる。「正書法辞典」によると、例えば xajr「愛」という語は属格形 xajryn、与位格形 xajrand、奪格形 xajraas であり、与位格形にのみ n が現れている。xog「ゴミ」という語は属格形 xogijn、与位格形 xogond、奪格形 xognoos であり、与位格形と奪格形にのみ n が現れている。本稿で扱う奪格接辞の前にのみ現れる n を「隠れた n」と呼ばない立場からすれば、こうした不規則な n も「隠れた n」ではない。しかしこうした不規則な n の現れを検討することは「隠れた n」がどのような語に現れるのか、どのような言語変化を経て生じるのか考える材料になるものと思われる。なお、おそらく xajr「愛」xog「ゴミ」という語はともに通時的にもともと語末に子音 n を有さない語である。「正書法辞典」(xii~xiii)では通時的な観点に捕らわれず、実際の使用を鑑みて語形変化を記載するとされているが、その基準は明らかにされていない。

4.2. コーパスと google 検索

調査にあたっては 2 種類のコーパスを使用する。それぞれ、本稿ではジンガン・コーパス、ライプツィヒ・コーパスと呼称する。

ジンガン・コーパスはジンガン (2010) で使用されているジンガン氏が構築した総語数約 180 万語のコーパスであり、小説、新聞、物語、映画のシナリオを含むものである。形態素分析やアノテーションは付されていない。一般公開されているものではなく、ジンガン氏のご厚意で使わせていただいているものである。フリーのコンコーダンスソフト AntConc を使用して検索することで、他のコーパスよりも比較的自由に調べられる点がメリットである。本稿では出現頻度の高い語を調査対象としてピックアップするのに用いた。

ライプツィヒ・コーパス (https://wortschatz.uni-leipzig.de/en) では 250 以上の言語の 900 種類以上のコーパスが公開されており、この中にモンゴル語コーパスも用意されている[18]。基本的に語形からのみ検索が可能で、隣接する語や共起する語の情報が分かりやすくなっている。本稿では補助として部分的に用いた。

調査対象となる形式を調べるのには Google 検索 (https://www.google.com/?hl=ja) を用いた。詳細な検索条件を設定せず、検索窓にモンゴル語の綴りを入力して検索する粗検索を行った。検索窓にスペースなしの文字列を入力すると、基本的にその語形のみを検索するようになっているようである。調査は 2021 年 11 月 8 日から 14 日にかけて行った。

4.3. 調査の方法

調査は次の①②の手順で行った。

①分析対象とする 132 語の選出

まずジンガン・コーパスを用いて半母音 j 終わりの語形を出現頻度順に並べ、必要な取捨選択を行いながら半母音 j 終わりの語使用頻度上位 100 語あまりを抽出する。

半母音 j で終わる語形を検索すると、まず目立つのが -tAj「～を持った／～のある」という意味を成す派生接辞が付された語である。その反義 =güj「～を持たない／～のない」を含む語も多い。これらはほとんどが「正書法辞典」に掲載されていない。また検索結果には {動詞語幹-形動詞接辞=güj} という構造からなる動詞の否定形も含まれる。ここではこれらを分析の対象から外し、そのうちそれぞれ上位 10 位以内の語だけを調べた[19]。

---

[18] 検索可能なコーパスにはウェブ上のニュース記事を収集した 2011, 2019, 2020 年のもの、ウィキペディア記事を収集した 2021 年のもの、伝統的なモンゴル文字で書かれたニュース記事を収集した 2011 年のコーパスがある他、「統計」のみ参照可能なデータも含まれているようである。「統計」からは使用頻度の高い語形が調べられるが、上位 50 位までしか参照できないので今回は利用しなかった。検索結果には出典のリンクが付されているが、ニュース記事に関しては全てリンク切れとなっている。

[19] 除外した理由は、結論を先取りするとおそらく -tAj, =güj の付された形式に奪格接辞が続くときに子音 n が出ないことが予測されるからである。「同一の接尾辞 -tAj が付されたなら、その後ろに接尾辞が続く場合の形態的振る舞いは常に同じであるはず」との予測もあるが、これは必ずしも当たらない。例えば barilga「建物」と xaalga「扉」はそれぞれ bari_「掴む、建てる」、xaa_「閉める」という動詞に出動名詞派生接辞の -lgA が付されたものだが、「正書法辞典」によれば前者 barilga には「隠れた n」がなく、xaalga には「隠れた n」がある。従って -tAj, =güj が付されて成った語についても本来は子細に調査してみる意義はあるが、今回は筆者の力不足で扱いきれなかったものである。今後の課題としたい。

次いで属格 -ij のついた語形が多く検出されるが、代名詞属格形を含め一切除外した[20]。

この他、「典型的な名詞とは言い難い語」も多く含まれるが、②において奪格形が検出されない語など[21]を除いて基本的に調査対象とした。「典型的な名詞とは言い難い語」としては固有名詞や形容詞的な意味を持つもののほか、「ある」という意味の語 bij, buj, büxij、定動詞接辞-tugaj を含む語 bajtugaj、後置詞的な語 tuxaj, garuj などがある。

さらに単語集である橋本 (2012) を参照し、橋本が掲載する j で終わる語のうち上記の 100 語に含まれないもの上位 10 を加え (順位 101~110)、残る語のうち「典型的な名詞」と呼びうるもののうちライプツィヒ・コーパスで出現例のない šeezgij「かご」を除く 22 語 (順位 111~132) も加え、合計 132 語を分析対象とする。

②ピックアップした語を Google 検索で検索し、子音 n の現れを調べる。

①でピックアップした 132 語と、除外した語のうち -tAj, =güj を含む語 30 語について、それぞれ奪格形を google 検索で粗検索する。本稿での関心は奪格接辞が付される際に奪格接辞の直前に子音 n が現れるか否かである。n が現れないとすれば従来の記述通り子音 g が現れるものと考えられるので、全ての語について子音 g が現れる形と子音 n が現れる形を検索する (10)。

(10) noxoj「犬」
　子音 g が現れる形 noxoj<u>g</u>oos
　子音 n が現れる形 noxoj<u>n</u>oos

すべての語の検索結果を次のように整理する (図 3)。

①	②	③	④	⑤	⑥
順位	語	意味	g	n	正書法辞典
5	tolgoj	頭	52,400	1,020,000	g
15	caj	お茶	3,650	137,000	(n)
21	noxoj	犬	1,260	107,000	g

図 3: 検索結果の一覧表 (サンプル)

[20] 除外した代名詞属格形には manaj「我らが」, tanaj「あなた方の」も含まれる。「属格接辞の後ろに奪格接辞が付される二重格」を認める立場もあるが、実際に属格接辞の後ろに奪格接辞が付される場合は「～のところから」という意味を成し、両形態素の間に「～のもの」を意味する -x を付すことが必須である (ex. xün-ij-x-ees {person-GEN-もの-ABL}「人の (もの/ところ) から」)。筆者はこれを二重格であるとは認めないが、少なくとも属格接辞の後ろに奪格接辞が直接に付される例はないということはできる。

[21] 除外した語は次の通りである。奪格接辞のついた例が検出されなかったもののうち bitgij (禁止の意味を表す語), wij (聞き手への勧告の意味を表す語) は語形変化を有さない不変化詞に属するものである。その他、lij (外来語固有名詞の一部を指すものであるため), seleedij (銃火器の一種の名称)(複合語の構成要素として使用される用例が多いために格接辞の付された形の用例が得られなかったものか), taj, toj (共同格接辞が綴りの上で独立語として算出されたもの), aj, maj (おそらく間投詞としての用例などが多く出現数上位に入ったが、格接辞が付される形式とは別物である), üj, xaj (検索上のゴミが多いため: 前者は何故か他の語の一部として検索されてしまう。後者は xajga, xajn などの独立語が存在する) を除外した。

①に示す順位は、分析対象とする語の整理番号である。全 132 語のジンガン・コーパスにおける出現頻度順に対応する。表の中の語は、それぞれこの番号に従って並べる。

②が実際に検索する語の格接辞を付していない形、③はそのおおよその意味である。

④⑤はそれぞれ子音 g が現れる形、子音 n が現れる形の検索件数を指す。検索件数が 2 桁以上の場合は「約 … 件」と表示される概数となるが、表では「約」をつけずに示す。

⑥は「正書法辞典」を参照し、当該の語形変化情報がどのように示されているか示すものである。空欄の場合は、「正書法辞典」で語形変化が掲載されていないこと (≒「正書法辞典」が普通名詞以外の品詞であると判断していること) を表す。- (ハイフン) は「正書法辞典」に見出し語として掲載されていないこと、g は子音 g が現れること、n は子音 n が (奪格形にのみ) 現れること、(n) は「隠れた n」があること (奪格形のみならず属格形、与位格形にも n が現れること) を表す。

なお、奪格接辞の後ろに再帰所属接辞が付された形 (ex. tolgoj-n-oos-oo {頭-N-ABL-REFL}「(自分の) 頭から」) もありうるが、今回は調査対象としなかった。

5. 分析

5.1. 総論

132 語に奪格接辞を付してそれぞれ子音 g の現れる形、子音 n の現れる形で検索した結果、36 語は子音 n の方が多く検出され、残る 96 語は子音 g の方が多く検出された。

ほとんどの語で子音 g が出るケースと子音 n が出るケースの両方の結果が検出されたが、子音 n の方が多く検出された語では子音 g が出る例も比較的多く現れるように見える (揺れが大きい) のに対し、子音 g の方が多く検出された語は子音 n の出る例が比較的少なく現れるように見える (揺れが小さい)。

「正書法辞典」における語形変化の記載は、この結果にあまり関係ないように見えるが、「正書法辞典」に語形変化の記載のない語 (=「正書法辞典」が当該の語を名詞でないと判断した語) には子音 g が現れる傾向にある。

表で示した数字はあくまで粗検索であり、語により検索上のゴミも多く含まれる。語ごとの個別の説明は以下 5.2.~5.4. で述べる。5.2. では 子音 n が現れやすい語、5.3. は子音 g が現れやすい語、5.4. では補足的に本稿で扱う 132 語に含まれない除外した 30 語を見る。5.2., 5.3. では子音 g と子音 n のそれぞれのケースの検索件数の差を、2 桁以上異なるもの、1 桁異なるもの、桁数の異ならないものという 3 段階にして示す (一方の検索件数が 0 であれば、これは 1 桁の数であると見做す)。

5.2. 子音 n が現れやすい語

子音 n が現れた検索件数が子音 g が現れた件数よりも多い 36 語を一覧にする。以下の表 2~4 は、2 桁以上多いもの、1 桁多いもの、桁数の変わらないものである。表 2~4 を通じて、①基本的に具体物を表す語が多く含まれること、②「正書法辞典」が提示する語形変化と実際の使用の実態が連関していないように見えること、③子音 g が現れる用例もそれぞれ多数検出されること、などの傾向が読み取れる。

表 2: 子音 n が子音 g よりも 2 桁以上多く現れた語 (13 語)

順位	語	意味	g	n	正書法辞典
5	tolgoj	頭	52,400	1,020,000	g
15	caj	お茶	3,650	137,000	(n)
21	noxoj	犬	1,260	107,000	g
28	xooloj	喉	8,090	303,000	g
89	šagaj	くるぶし	958	22,700	n
95	xancuj	袖	288	146,000	n
115	cöcgij	クリーム	7	1,250	n
117	zögij	蜜蜂	183	11,500	n
124	šoxoj	石灰	178	16,200	g
125	beelij	手袋	229	12,000	g
128	booxoj	狼 (忌み言葉)	5	388	g
129	buguj	腕	460	25,800	n
132	bajcaj	白菜、葉物野菜	0	250	n

表 2 の bajcaj という語は、橋本 (2012) では bajcaa という語形で掲載されているが、「正書法辞典」で掲載されている語形が bajcaj であることから分析対象とした語である。bajcaj という語形はジンガン・コーパスでの出現例無し、ライプツィヒ・コーパスでは 2011 で 0 件、2019 で 2 件、2020, 2021(Wikipedia) で 0 件[22]である。橋本 (2012) の bajcaa という語形であればジンガン・コーパスで 8 件、ライプツィヒ・コーパスでは 2011 で 28 件 (頻度レベル 12、今回調査語彙のほとんどが含まれるレベル)、2019 で 4 件、2020 で 10 件、2021(Wikipedia) で 1 件と出現数がやや上がる。この語は漢語の baicai に由来する語であり、語源意識から規範的な語形は bajcaj となるのであろう。外来語であることと、実際の使用例は bajcaa という語形が多い[23]ことを考慮すると、ここで扱う他の半母音 j 終わりの語と同列に並べて良いのかは疑問が残る。

表 3: 子音 n が子音 g よりも 1 桁多く現れた語 (16 語)　※表は次ページへ続く

順位	語	意味	g	n	正書法辞典
12	caraj	顔	1,280	49,500	n
29	xedij	いくら	1,630	41,500	
44	zaj	①距離　②電池	24,100	890,000	n
51	duguj	①自転車　②輪	2,000	79,200	n
58	mogoj	蛇	1,320	45,400	g
61	xorxoj	虫	1,330	83,500	g
62	malgaj	帽子	6,240	25,700	n
64	xormoj	裾	3,330	15,800	n
73	tuulaj	兎	2,810	12,700	n
96	toxoj	肘	1,110	59,000	g
99	gaxaj	豚	1,530	12,600	n

[22] 「隠れた n」ありの属格形 bajcajny は 2020 で 1 件、2021(Wikipedia) で 2 件検出される。
[23] おそらくモンゴル語の固有語では 1 つの形態素内に半母音 j が 2 つ以上現れることがないために bajcaj という語形が避けられるものと思われる。

109	šaaxaj	スリッパ	947	7,550	n
113	erweexej	蝶[24]	3,650	11,600	g
116	buudaj	小麦	5,800	10,300	n
122	dugtuj	封筒	308	5,970	n
131	bagwaaxaj	蝙蝠	8,640	22,800	n

表 3 では xedij「いくら」という単語が、「正書法辞典」では代名詞 (「数量を問う代名詞」) として登録されているため語形変化が掲載されていない。

zaj「①距離、②電池」や duguj「①自転車、②輪」のような多義語では、語義によって語形が使い分けられている可能性もあるが、ここではその点の分析には至らなかった。

表 4: 桁数は同じだが子音 n が子音 g よりも多く現れた語 (7 語)

順位	語	意味	g	n	正書法辞典
33	xij	空気	18,700	44,600	g
85	šuudaj	袋	2,640	3,120	n
97	uj	哀悼	32	47	n
110	tuuraj	馬蹄	1,220	7,090	n
118	melxij	蛙	1,360	6,990	g
119	xöömij	①喉　②喉歌、ホーミー	56	92	n
126	angaaxaj	雛	1,190	2,340	n

検索件数のあまり大きくない uj「哀悼」、xöömij「①喉、②喉歌、ホーミー」は僅差、šuudaj「袋」も差はあまり大きくないが、これ以外は凡そ 2 倍ほどかそれ以上の差がある。

5.3. 子音 g が現れやすい語

子音 g が現れた検索件数が子音 n が現れた件数よりも多い 96 語を一覧にする。以下の表 5~7 でも、2 桁以上多いもの、1 桁多いもの、桁数の変わらないもので分割した。表 5~7 を通じて、子音 n が現れた件数の多い語と同様に「正書法辞典」が示す語形変化が実際の使用の実態とが連関していないように見える。他方、「正書法辞典」で語形変化が示されていない語も多く、これは「典型的な名詞ではない語」が多く含まれていることを表す。その他、①具体物を表さない語が多く含まれること、②具体物であっても固有名詞やヒトを表す語[25]であれば子音 g が現れる傾向を見せること (cf. 3.1. Bayarmaa 2015: 127, Cedendamba nar (ryed.) 1997: 228)、③子音 n が現れる用例も多いが、5.2. で見た子音 n が多く現れる語に対する子音 n の比率と比べると揺れは小さいといった傾向が読み取れる。

なお、「典型的な名詞ではない語」に奪格接辞が付されるケースは多分に見られる。それは、-AAs gadna {-ABL outside}「～以外」、-AAs bol-ǰ {-ABL to.become-SIM}「～のせいで」や形容詞の奪格形を用いた強意表現といった表現が存在するからである。

[24] この語は erweexij という異綴りがある。この綴りで調べると g: 5, n: 869 であり、子音 n が現れる例が 2 桁以上多いという結果となるが、この数値には含めていない。

[25] この点について、モンゴル語話者は動物を表す語に子音 g が現れる奪格形を用いると擬人法のように感じられることがあるとの指摘を本稿の査読者からいただいた。今後の調査の課題としたい。

表 5: 子音 g が子音 n よりも 2 桁以上多く現れた語 (57 語)　　※表は次ページへ続く

順位	語	意味	g	n	正書法辞典
1	tuxaj	～について	1,540	29	
2	ügüj	ない	13,600	44	
3	bij	ある	803	2	
4	buj	ある	54,800	3	
6	yörönxij	総合的な	2,020	0	
7	garuj	～あまりの	406	0	
8	todorxoj	明らかな	969	5	
11	guaj	～様	2,530	7	n
14	emegtej	女性[26]	190,000	583	
16	bajtugaj	もちろん	844	0	
17	büxij	ある	668	1	
18	xöörxij	かわいそうに	207	1	
19	muuxaj	汚い	14,200	6	
20	awgaj	夫人、ご婦人	12,800	8	g
22	oj	①森　②記念　③記憶	193,000	39,700	g
24	delxij	世界、地球	297,000	179	g
25	daruj	すぐに	910	3	
26	tödij	～だけ	25,100	0	
27	xaranxuj	暗い	121,000	81	
31	tusgaj	特別な	506	2	
35	oncgoj	特別に	2,400	4	
37	talbaj	広場	419,000	6,350	n
39	ölzij	吉祥	1,880	1	n
41	axuj	生活	78,800	93	g
42	züj	規則	33,300	428	g
45	dalaj	海	151,000	365	n
47	xulgaj	盗み	36,800	2,470	n
48	tüüxij	生の	132	3	
49	xuuraj	乾いた	2,910	45	
53	xar’canguj	比較的	770	6	
54	ijĭj	お母さん	4,050	0	-
55	xentij	ヘンティー (地名)	85,600	3	-
56	eregtej	男性	14,800	7	g
57	zadgaj	開いた	630	0	
59	turanxaj	痩せた	3,270	4	
60	xangaj	ハンガイ (森、地名)	7,140	10	-
65	günzgij	深い	248	2	
66	altaj	アルタイ (地名)	39,600	19	g
67	uurxaj	鉱山	283,000	881	n
68	čingeltej	チンゲルテイ (地名)	1,610	0	-

[26] この語は末尾に -tAj という形態を持っているようであるが、除外しなかった。‘tej’ を取り除いた emeg「祖母」という語は存在するが、「‘emeg’ を有するもの」という意味構造にはなっていないためである。56. eregtej「男性」も同様である。他方、表 9 の 4. büsgüj「女性」という語は「‘büs’ を有さないもの」という構造になっている可能性もあるため、除外し 5.4. で扱っている。

69	ireedüj	未来	77,300	14	g
71	namsraj	ナムスライ (人名)	377	0	-
76	gergij	妻	3,560	0	g
78	šuurxaj	急速な	1,840	0	
79	balaj	暗い	1,050	9	
81	xawtgaj	①平らな ②野生の駱駝	19,700	295	n
83	böörönxij	丸い	250	4	
86	bürij	夕暮れ	3,070	41	
88	tusgaj	特別な	695	2	
94	dambij	ダンビー (人名)	244	0	-
100	buuraj	弱い	965	0	
103	manlaj	先導的な	811	1	
108	muzyej	博物館	73,000	680	g
111	mazaalaj	ゴビ熊	263	8	n
112	xatagtaj	婦人、淑女	35,500	374	g
121	ogtorguj	宇宙	32,400	7	n
123	setgexüj	思想、思考	10,200	686	g

具体物を表す語のうちヒトを表す語 emegtej「女性」、awgaj「夫人、ご婦人」、iǰij「お母さん」、eregtej「男性」、gergij「妻」、xatagtaj「婦人、淑女」がここに含まれるのは Bayarmaa (2015: 127) 「ヒトを表す語では奪格接辞が -gAAs という形を取る」という示唆を反映しているようである。5.2. ではヒトを表す語は現れていない。

表 5 のうち明らかに固有名詞であると思われる xentij (モンゴル国の県名), xangaj (植生を表す語だが地名としても頻用), altaj (山脈や「アルタイ諸言語」), čingeltej (ウランバートル市の区名), namsraj (人名), dambij (人名) があり、Cedendamba nar (ryed.)(1997: 228) の指摘通りである。この他にも talbaj「広場」, uurxaj「鉱山」などは一般名詞としても使用されるが固有名詞としても (「〇〇広場」「△△鉱山」として使用される他、ウランバートル市では talbaj と言えば市の中央の「スフバートル広場」を指すことなど) 使用されることを反映して子音 g が多く現れるが、子音 n が現れる用例も皆無ではないのであろう。dalaj「海」も人名としての用例が多いものと見られる。

oj「①森、②記念、③記憶」や xawtgaj「①平らな、②野生の駱駝」といった多義語は語義によって語形に違いが現れている可能性があるが、この点は精査できなかった。

子音 g が現れていることについて説明しにくい語として、muzyej「博物館」と mazaalaj「ゴビ熊 (ゴビ砂漠に生息する熊)」がある。前者は外来語であるが、5.2. で見た bajcaj「白菜」に子音 n が現れることと整合性がない。外来語としての意識[27]や日常生活における身近さによるものだろうか。mazaalaj「ゴビ熊」は動物名を表す具体物名詞であり、今のところ子音 g が現れやすい理由を説明できない。次の表 6 では baawgaj「熊」[28]も子音 g が現れやすい語になっている。

[27] bajcaj に比して muzyej という語は、少なくとも綴りの上では u と e が共存しているという母音調和の違反、語中で my という子音連続があることなどが外来語らしさを感じさせる。
[28] この語は方言により「妻」の意味で使われることもある点、本稿の査読者からご指摘いただいた。

表 6: 子音 g が子音 n よりも 1 桁多く現れた語 (17 語)

順位	語	意味	g	n	正書法辞典
23	sürxij	すごい	41	0	
30	ödij	これほど	4,050	293	
38	baj	的 (まと)	10,100	2,250	(n)
40	xöndij	空洞	96,700	1,970	
63	baawgaj	熊	14,900	7,010	n
70	doroj	弱い	1,940	205	
75	ölgij	揺り籠	11,000	4,770	n
77	nexij	羊の皮	2,030	712	g
80	erxij	親指	117	73	g
87	dülij	聾	315	16	g
90	šuguj	森	1,970	533	n
91	bulaj	暗い	6,140	269	
98	namxaj	ナムハイ (人名)	95	1	-
101	tasarxaj	断片	2,270	167	
105	garamgaj	優れた	36	0	
106	nyambaj	細緻	28	0	
130	sarnaj	薔薇	18,600	3,280	n

baj「的」という語は、本調査で扱うすべての語の中で caj「お茶」と並び 2 つしかない「隠れた n」を有する語である。「隠れた n」を有する語であるのに子音 g が現れる用例が多いが、baj-gaa-gaas {to.be-IPFV-ABL}「いることから」という語の縮約形が検索結果に含まれている可能性がある。この点十分にゴミを排除することができなかった。

具体物を表す語としては nexij「羊の皮」g: 2030, n: 712、erxij「親指」g: 117, n:73 で子音 g の現れるケースが多いが、僅差である。ölgij「揺り籠」、sarnaj「薔薇」は固有名詞としての用例が多い (前者はモンゴル国の県名 Bayan-Ölgij の一部として、後者は人名として) ために子音 g の検索件数が多くなっているものと思われる。

表 7: 桁数は同じだが子音 g が子音 n よりも多く現れた語 (22 語)　※表は次ページへ続く

順位	語	意味	g	n	正書法辞典
9	araj	ほとんど	34	24	
10	oroj	①夜、遅い　②頂上	227,000	109,000	g (②)
13	demij	無意味な	9	0	
32	šonxoloj	ションホロイ (人名)	6	0	-
34	magnaj	おでこ	2,550	1,440	n
36	zaluudaj	ザローダイ (人名)	6	0	-
43	gaj	害	4,620	1,490	n
46	xeterxij	すこぶる	7	1	
50	günij	深み	5	1	-
52	esgij	フェルト	1,500	1,400	g
72	ilerxij	明らかな	6	0	
74	ewij	よしよし (子をあやす語)	2	0	g

82	šijdemgij	きっぱりと	1	0	
84	uranxaj	ぼろぼろの	7	3	
92	bulxaj	インチキの	590	382	n
93	bürenxij	夕暮れ時	1660	1110	
102	šaazgaj	鵲	373	160	n
104	ongorxoj	開いた	6	1	
107	čadamgaj	有能な	3	0	
114	xaraacaj	燕	513	455	n
120	bulčirxaj	腺	47200	29200	n
127	xüüxeldej	人形	7050	6730	g

具体物を表す語として magnaj「おでこ」は人名としての使用が多いため子音 g が多く現れたものと思われる。

子音 n が現れる例も多数検出された oroj は、「正書法辞典」において「①夜、遅い」と「②頂上」とで別に立項され、前者は時間名詞であるとして語形変化が示されていない。ジンガン・コーパス[29]でも子音 g が現れる語形と子音 n が現れる語形を検索してみると、子音 g が現れる語形は 13 例得られ、その全てが「②頂上」の意味で用いられていた。うち 9 例は uulyn「山の」と共起していた (11)。

(11) *...dornod uulyn orojgoos tom gegčijn sar salǰ yadan mandaǰ bajw.*
dornod　uul-yn　oroj-goos　tom　gegč-ijn　sar　sal-ǰ
東の　山-GEN　頂上-ABL　大きい　という-GEN　月　離れる-SIM
yad-n　mand-ǰ　baj-w
できない-ASS　登る-SIM　いる-PST
「東の山の頂上から大きな月が離れ難そうに登っていた」
Č. Lodojdamba "*Tungalag Tamir*"

子音 n が現れる語形は 6 例で、このうち 5 例が「①夜、遅い」の意味であった (12)。

(12) *...guraw dax' ödrijnxöö orojnoos naaš bucaǰ čadaxgüj bajlaa.*
guraw=dax'　ödör-ijn-x-öö　oroj-n-oos　naaš　buc-ǰ　čad-x=güj
3=番目の　日-GEN-もの-REFL　夜-N-ABL　こちら　戻る-SIM　できる-FUT=NEG
baj-laa
いる-PST
「３日目の夜以来、戻ることができなかった」　Č. Lodojdamba "*Tungalag Tamir*"

[29] Google 検索による調査で子音 g と子音 n のいずれかが 100,000 件以上の検索結果の出た語については、念のためライプツィヒ・コーパス (規模の最も大きい newscrawl_2011) でも用例数を調べている。結果としてこの Google 検索による調査結果に反するものは oroj という語のみで、子音 g: 7, 子音 n: 10 という結果であった。このコーパスの性質上、得られた用例の文脈が不明確なため解釈が不正確になりかねないが、概ねジンガン・コーパスで得られた用例と同様の使い分けがされているように読み取れる。

(11) と (12) は同一作品から得られた用例であり、このように語義によって語形が使い分けられているようである。しかし子音 n が現れた例のうち 1 例は「②頂上」の意味で用いられていた (13) ので、やはり揺れがあると言わざるを得ない。

(13) *...orojnoos xormoj xürtel šinexen ojtoj baruun uulandaa yum uu...*

oroj-n-oos	xormoj	xürtel	šinexen	oj-toj	baruun	uulan-d-aa	yum=uu
頂上-N-ABL	裾	まで	新しい	森-PROP	西	山-DAT-REFL	もの=Q

「頂上から裾野まで真新しい森で覆われた西の山だろうか…」

S. Erdene "*Züüdnij Cagaan Unaga*"

esgij「フェルト」、šaazgaj「鵲」、xaraacaj「燕」、bulčirxaj「腺」、xüüxeldej「人形」 (日用品、動物、身体部位) といった語で子音 g が現れる理由については説明しがたい。

5.4. -tAj, =güj を含む語

今回ピックアップした語からは、形容詞的な語として高頻度の -tAj, =güj を含む語を除外した。-tAj は「～を持つ」という意味の形容詞的な語を派生する接辞であり、=güj はその反意語「～を持たない」を成すものである。=güj は動詞の否定形を成すのにも用いられるが、動詞の否定形も格接辞を付すことが可能である。そこで -tAj がついた語の出現頻度上位 10 語、=güj のついた語 (動詞を除く) の上位 10 語、そして動詞に =güj が付された形式の出現頻度上位 10 語にも 4.2. の②で示した方法で奪格形を調べ、子音 g, n のいずれが出やすいか一覧にした (表 8~10)。順位欄の数は表 2~7 とは関係ない。また、これらの語は「正書法辞典」の見出し語になっていない[30]ものが多いので、表では示していない。

接辞 -tAj を含む 10 語を次の表 8 に示した。接辞 -tAj は「～を持った、～がある」という意味をもつ形容詞的な語を派生する接辞と、共同格接辞「～と」である可能性がある。奪格が付されうるのは前者である。nastaj「歳がある、～歳だ、歳を取った」を除けば子音 n が現れるケースは限定的である。

表 8: -tAj を含む上位 10 語 ※表は次ページへ続く

順位	語	意味	g	n
1	yostoj	道理・礼儀がある、～すべきだ、本当に	33100	0
2	xeregtej	～する必要がある、必要だ	12300	3
3	xolbootoj	関係がある	6370	0
4	durtaj	好みがある、好きだ	7460	0
5	nastaj	歳がある、～歳だ、歳を取った	74700	151

[30] 表 8 で示した語を「正書法辞典」で調べると見出し語としては掲載されていないが、それぞれの語に共同格接辞 -tAj がついたものであると表示される。=güj が付された語は büsgüj「帯がない、女性」と gajgüj「害がない、大丈夫だ」を除けば「正書法辞典」には掲載されておらず、検索すると単に「見つかりませんでした」と表示される。なお、=güj を付した形式がさらに派生接辞を伴うことがあるが、こうした語は「正書法辞典」にも掲載されている。

6	xüntej	人がいる、有人の　／人と	566	0
7	nertej	名前がある、有名な	1030	0
8	xüčtej	力がある、強い	6690	1
9	bololtoj	可能性がある、～であるようだ	8	0
10	mor’toj	馬がいる　／馬と	3	1

次いで =güj を含む 10 語を表 9 に示す[31]。=güj は上記の -tAj の反義「～を持たない、～がない」という意味を成すものである。büsgüj「帯がない、女性」[32]を除けばやはり子音 n が現れるケースは限定的である。

表 9: =güj を含む上位 10 語

順位	語	意味	g	n
1	argagüj	方法がない、仕方ない	1110	0
2	duugüj	音がない、静かだ	45	0
3	erxgüj	権利がない、必ず	759	4
4	büsgüj	帯がない、女性	75000	268
5	magadgüj	確かさがない、～かもしれない	398	0
6	xereggüj	必要がない、～しなくてよい	11300	1
7	xamaagüj	関係がない、大丈夫だ	175	0
8	gajgüj	害がない、大丈夫だ[33]	303	1
9	čimeegüj	騒音がない、静かだ	549	0
10	durgüj	好みがない、嫌いだ	1740	0

次の表 10 は動詞の否定形の検索結果を示したものである。動詞語幹に形動詞接辞 (ここでは -x, -AA, -dAg の 3 形式が該当) を付した形式は、=güj を後続させることで否定形を成す。形式の数を揃えることなく、ここでもあくまで出現数上位 10 語を示す[34]。やはり、基本的に子音 g が現れる。

[31] =güj は母音調和による異形態を有さない。綴りの上で規範的には、この形式に奪格接辞などが付された場合には =güj の母音 ü に母音調和した -ees の形が現れる。しかし実際の用例を見ると、=güǰ の後ろに付された奪格接辞が =güj に先行する語に母音調和する例も見られる。ここではこうした母音調和の従来のルールに反するものは検索の対象としなかった。例えば xamaagüj「関係がない、大丈夫だ」という語は子音 n の現れる形で母音が aa になる形 xamaagüjnaas が 2 例検出された。表 10 の調査結果も同様。

[32] この語は語源意識としては büs「帯」=güj「～がない」と分析されうるが、実際にこのような構造の語であると見るべきかどうかは分からない。「正書法辞典」では büsgüj という語形で掲載されている。ただし、このことによって子音 n が一定数現れることについて説明できるわけではない。

[33] この語も gaj「害」=güj「～がない」と分析されうるが (cf. 注 30, 32)、「大丈夫だ」という意味で用いられる場合について「正書法辞典」では gajgüj という語形で掲載されており、分析できない語であると判断されている可能性がある。

[34] この他に出現頻度の上位に bajlgüj「～であろう」という語も現れたが、これは baj-l=güj {ある-名詞派生接辞=NEG} (ただし bajl という名詞は認められないので、-lgüj という接辞であるとする見方もある) などと分析されるもので、動詞語幹に形動詞接辞を付した形式とは異なると判断した。この語に奪格接辞を付して検索すると、子音 g: 2, 子音 n: 0 であった。

表 10: =güj を含む動詞の否定形 10 語

順位	語	意味	g	n
1	bajxgüj	ない	115000	3
2	čadaxgüj	できない	62000	3
3	boloxgüj	ならない、～してはいけない	12900	9
4	medexgüj	知らない	31200	1
5	udaxgüj	時間がかからない、すぐに	4	0
6	bajgaagüj	ない	9490	1
7	bolоogüj	なっていない、ならなかった	2450	0
8	ögöxgüj	あげない	2800	1
9	üzeegüj	見ていない、見なかった	4290	0
10	boldoggüj	ならない、～してはいけない	522	0

6. おわりに

半母音 j で終わる語について「二重母音で終わる語に奪格接辞が付されると子音 n が挿入される」との指摘は先行研究でなされているが、全ての語で一貫して子音 n が現れるわけではなく、具体物を表す名詞について子音 n が現れやすい傾向にある、と考えるべきであることが判明した。他方、従来の「長母音・二重母音で終わる語に奪格接辞が付されると子音 g が挿入される」という説明に対しても、これに反し無視できない数の用例において子音 g ではなく子音 n が現れることも確認できた。

多義語について語義ごとに現れが異なるのか、また揺れ[35]が大きい語についてその使い分けがあるのかについては十分に検討できなかった。さらに本稿ではあくまで奪格形のみを調査対象としたため、本当に奪格接辞が付される場合のみ子音 n が現れるのか (=「隠れた n」とは異なるのか) については検証できていない。また、なぜ奪格形においてのみこの現象が起こるのかについても検討できなかった。もし「具体物を表す名詞について子音 n が現れやすい傾向にある」という説明が「隠れた n」についても有効であるとすると、本稿で検討した子音 n は「隠れた n」と同等のものであるとも考え得る。この場合、半母音 j で終わる語では、本来「隠れた n」による拡張語幹形の現れるべき属格形と与位格形の方で特殊な形[36]が現れていると見るべきかもしれない。

今後はさらに他の語でも奪格形に偏って現れる子音 n があるのか、また他の語形や格に偏って現れる子音 n があるのか検証していく必要がある。そして上記の「具体物を表す名詞について子音 n が現れやすい傾向にある」という説明が「隠れた n」にも有効であるか検証し、モンゴル語の名詞類の語幹末に現れる子音 n について総合的に記述・解明していく。また本稿では Google 検索に基づく粗検索の結果をもとに単純な比較を行うに留まった。今後は統計学的な分析手法も取り入れていくことが必要である。

[35] モンゴル語のキーボード配列では g と n が並んでいるので、いくらかは打ち間違いによる「揺れ」もあるかもしれない。しかし本稿で得られた結果は、打ち間違いだけでは説明できないものである。

[36] 例えば、半母音 j の後ろに「隠れた n」が現れた属格形 jnij, jny、与位格形 jnd という音の並びが避けられて jn、jd となり、「隠れた n」の無い語形と合流してしまっているなど。現在のところ、これらの音の並びが避けられると見るべき他の証拠は思いつかない。なお属格接辞について Janhunen (2012: 84-85, 107) は -n こそが基本的な形式であり、これに伴う ij, y という部分は挿入母音の類であると見ている。

略号一覧

ABL: ablative	ANT: anterior	ASS: Associative	DAT: dative-locative	
FUT: future	GEN: genitive	INS: instrumental	NEG: negative	PROP: proprietive
PST: past	Q: question	REFL: reflexive	SIM: simultaneous	

参考文献

Bayantuul, Batjaviin. (2017) *Mongolian Grammar.* Third revised edition. Ulaanbaatar: “Soyombo Printing” Co.,Ltd.

Bayarmaa, Xalzaagijn. (2015) *Mongolian Language for Beginners.* [Mongol xel (Exlen suralcagčdad zoriulaw)]. Ulaanbaatar: Lingo Lab.

Cedendamba, C. ba S. Möömöö. (ryed.)(1997) *Orčin Cagijn Mongol Xel*. Ulaanbaatar: Šinǰlex Uxaany Akadyemi Xel Zoxiulyn Xüreelen.

橋本勝 (2012)『ニューエクスプレスモンゴル語単語集』東京: 白水社.

Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

ジンガン (2010)「モンゴル語のモダリティ：コーパスに基づく記述的研究」東京外国語大学博士論文.

Kullmann, Rita & Dandii-Yadmyn Tserenpil (2005) *Mongolian Grammar.* Third edition. Ulaanbaatar: Admon. Co.Ltd.

Mongol Ulsyn Yörönxijlögčijn dergedex Xelnij bodlogyn ündesnij zöwlöl (2018) *Mongol xelnij zöw bičix dürmijn ǰuramlasan tol’* http://toli.gov.mn/ (2021/11/09 確認)

向井晋一 (2006)「モンゴル語文法モジュール」『東京外国語大学言語モジュール』 http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/index.html (2021/11/09 確認)

内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) (1999)《蒙汉词典 (增订本)》呼和浩特：内蒙古大学出版社.

Önörbayan, C., A. Cog-Očir, Ü. Ariunbold (ryed.) (2010) *Orčin Cagijn Mongol Xel*. gurawdugaar xewlel. Ulaanbaatar: Mongol Ulsyn Bolowsrolyn Ix Surguul’ Mongol Sudlalyn Surguul’ Mongol Xelšinǰlelijn tenxim.

Xišigǰargal, J̌. (2019) *Mongol Xel.* Ulaanbaatar: Monsudar xewlelijn gazar.

山越康裕 (2012)『詳しくわかるモンゴル語文法 (CD 付)』東京: 白水社.

The Ablative Form of Words Ending with the Semi-vowel /j/ in Mongolian

YAMADA Yohei
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Khalkha Mongolian, Morphophonology, consonant /n/, concrete objects

In modern colloquial Khalkha Mongolian, when the ablative suffixes -aas (or -ees, -oos, -öös) are added to the stems of nouns ending with the semi-vowel /j/, a consonant /n/ is inserted directly after the semi-vowel /j/ occasionally, as in noxoj > noxoj-n-oos {dog-N-ABL}. Although both the words ending with semi-vowel /j/ and the ablative suffix are not rare, the appearance of the epenthetic consonant /n/ between the semi-vowel /j/ and the ablative suffix has not been argued sufficiently before. That might not be the so-called “hidden /n/,” because it does not appear when the genitive suffix or the dative-locative suffix is added.

Based on research using Google search, I conclude that there are some rules for the appearance of the epenthetic consonant /n/. First, the consonant /n/ tends to appear after specific nouns denoting concrete objects ending with the semi-vowel /j/. In other words, abstract nouns ending with the semi-vowel /j/ tend not to insert the epenthetic consonant /n/. Second, even if the word is a concrete noun, proper names and nouns denoting people tend not to exhibit the inserted consonant /n/. Third, the explanations of those processes see them only as a tendency. Not all the examples of the words with the semi-vowel /j/ attested in the investigation using Google search are nouns only with the consonant /n/ or without it.

モンゴル語オラド方言の小辞 =jAA について
―とりたての観点から―

ホリロ
（東京外国語大学大学院）

キーワード：モンゴル語，オラド方言，小辞，とりたて

0. はじめに

中国領内のモンゴル語には =jAA[1]という小辞があり、しばしば日本語の「も」、「でも」などに訳される。従来の先行研究では、この形式は漢語の「也 yě」に由来するとされており、チャハル方言[2]を始めとする内モンゴル地域のモンゴル語諸方言によく見られる。本稿では、モンゴル語チャハル方言の下位方言とされるオラド方言の =jAA の形態統語的特徴及びその意味・用法を記述することが目的である。

本稿の構成は次の通りである。まず第 1 節でとりたての定義及び、モンゴル語におけるとりたての研究背景について簡単に述べる。第 2 節では先行研究における =jAA の記述を概観したのち、問題点を指摘する。第 3 節で調査方法を提示し、第 4 節でオラド方言の調査資料を用いて =jAA の用例を分析し、この形式の形態統語的特徴及び意味・用法を整理する。最後に第 5 節でまとめと今後の課題を示す。なお、本稿における例文番号、グロス、和訳、文字飾りは特に断りのない限り筆者による。ただし、先行研究における例文の表記は原文のままにした。出典を示していない例文は筆者調査による。

1. 「とりたて」について

とりたてとは、文中のある要素をきわだたせ、同類の要素との関係を背景にして、特別な意味を加えることである (日本語記述文法研究会 (編) 2009: 3)。日本語はとりたて表現が多く、表す意味も多様であり、研究の蓄積が十分にある (野田 2019: 5)。とりたてに関する研究は、日本語では盛んに行われている一方、モンゴル語では研究が遅れている。モンゴル語の文法記述では、「とりたて」という概念が確立しておらず、日本語のとりたて表現にあたるものは「副詞」、「後置詞」、「語気詞」、「小辞」などとして扱われている。

モンゴル語におけるとりたての研究にはナラントヤ (2011)や賽希雅拉図 (2014) などがあげられる。いずれもとりたての観点からモンゴル語の小辞について考察を行った研究であり、従来の先行研究における記述の不足をある程度補うことができたと考えられる。

以上のことを踏まえ、本稿では日本語のとりたての概念や基準、及び記述の仕方に倣い、

---

[1] =jAA は母音調和により=jaa, =jɔɔ, =jεε という 3 つの異形態が存在する。なお大文字は母音調和による異形態があることを示す。また本稿の研究対象である =jAA のグロスは =JAA で統一する。副動詞接尾辞 -jAA のグロスを -JAA とする。

[2] チャハル方言は、中国内モンゴル自治区で話されているモンゴル語の方言の一つであり、中国領内のモンゴル語の標準語とされている。

考察を行うことにしたい。

2. 先行研究

まず、2.1.節で内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) (1999) における =jAA の記述を確認する。次に、2.2.節〜2.4.節でチャハル方言の =jAA 形式に関する道布 (编著) (1983)、Sechenbaatar (2003)と祎丽琦 (2014) による考察を概観する。最後に 2.5.節で先行研究のまとめと問題点を示す。

2.1. 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) (1999)

内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) (1999) は、モンゴル語と漢語の対照辞典である。それによれば、ya（本稿で扱う =jAA の文語形）の品詞分類は語気詞であり、口語で用いられ、IPA は [jaː, jəː, jɔː, joː] となる。「同様、並列、逆接、譲歩、強調、（いずれにしても）などといった語気を表す」(内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) 1999: 1377)。

(1) *delgegür-tü öngge büri-yin bös bain_a, sir_a **ya** baina, köke **ya** bain_a, ulaγan **ya** bain_a.*[3]

delgegür-tü öngge büri-yin bös bai-n_a, sir_a **=ya** bai-na, köke **=ya** bai-n_a,
店-DAT 色 毎-GEN 布 ある-NPST 黄=JAA ある-NPST 青=JAA ある-NPST
ulaγan**=ya** bai-n_a.
赤=JAA ある-NPST
「店に様々な色の布がある。黄もある。青もある。赤もある。」
(内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) 1999: 1377)

(2) *yeke **ya** baγ_a **ya** bür bolun_a.*

yeke**=ya** baγ_a**=ya** bür bol-u-n_a.
大きい=JAA 小さい=JAA すべて なる-EP-NPST
「大きくても、小さくてもいい。」
(内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) 1999: 1377)

2.2. 道布 (编著) (1983)

道布 (编著) (1983) はチャハル方言の文法記述であり、本稿で問題とする =jAA を包括的強調詞として扱っている。道布 (编著) (1983: 97-98) はチャハル方言の強調詞[4]に包括的強調詞 tʃ, tʃilee, jaa/jəə と除外的強調詞 l とがあり、各種の実詞に後続することができると述べている。そして包括的強調詞の tʃ, tʃilee, jaa/jəə は互いに取り替えて用いることができ、いず

[3] 伝統的モンゴル文字 a と e の語末形には、それぞれ ᠠ と ᠡ の形があり、前者は前の子音とつなげて書くのに対し、後者は前の子音と分かち書きをする。したがってモンゴル文字をローマ字転写する際、両者を区別するために、後者の場合は子音と母音の間にアンダー・スコア(_)を入れて書くのが一般的である。

[4] 道布 (編) (1983: 20)が分類したチャハル方言の品詞には、名詞、形容詞、数詞、動詞、代名詞、判断詞、状詞、副詞、情態詞、後置詞、強調詞、語気詞、感嘆詞の 13 種類がある。強調詞は種々の実詞に付加され、その語の論理的意味を強める手段になると同時に、論理的強勢もその語に置かれる(道布 (編) 1983: 97)。

れも漢語の「也 yě」を意味するという(道布 (编著) 1983: 98)。

(3) *tald oŋg oŋgiĩ dʒitʃig bɛɛn, ʃar* ***jaa*** *bɛɛn, gox* ***jəə*** *bɛɛn, ɷlaã* ***jaa*** *bɛɛn.*

tal-d oŋg oŋg-iĩ dʒitʃig bɛɛ-n, ʃar=**jaa** bɛɛ-n, gox=**jəə**
草原-DAT 色 色-GEN 花 ある-NPST 黄色=JAA ある-NPST 青色=JAA
bɛɛ-n, ɷlaã=**jaa** bɛɛ-n.
ある-NPST 赤色=JAA ある-NPST
「草原には色とりどりの花がある。黄もある。青もある。赤もある。」

(道布 (编著) 1983: 98)

(4) *gorbŏl juu* ***jəə*** *gorŏn, gantʃxã juugəə̃ gorxoosŏr.*

gor-bŏl juu=**jəə** gor-ŏ-n, gantʃ-xã juu-g-əə̃ gor-x-oos-ŏ=r.
編む-CVB.COND 何=JAA 編む-EP-NPST ただ-DIM 何-EP-REFL 編む-VN.NPST-ABL-EP=PTCL
「編むのなら何でも編む。ただ何を編むかによる。」

(道布 (编著) 1983: 99)

2.3. Sechenbaatar (2003)

Sechenbaatar (2003) もチャハル方言の文法記述であり、=yaa[4]（本稿で扱う =jAA に当たる形式）に関しては漢語の「也 yě」に由来するとし、=c, =ciléé～=cilee とともに包括的強調小辞 (inclusive emphatic particle)に分類している。この漢語借用形式 =yaa[4] は、=yaa=l[4] や =yaa=c[4] などの拡張された変化形を持ち、これらの形式は名詞後での包括性機能に加えて動詞後にも用いられ、譲歩の意味を表すとしている(Sechenbaatar 2003: 187)。

(5) *iim amarxang yum bol bii* ***yee*** *l shïdan.*

iim amar-xang=yum=bol bii=**yee**=l shïd-a-n.
このような 簡単な-DIM=SFP=COND 1SG.NOM=JAA=PTCL できる-EP-NPST
「こんなに簡単なら、私でもできる。」

(Sechenbaatar 2003: 187)

否定文において、包括的強調小辞は neg「一」や jɑɑxɑng「少し」などの語と組み合わされ「一つも～ (ない)」、「少しの～も (ない)」のような否定的な働きをし、さらに不定代名詞を形成する手段の一つとなっている(Sechenbaatar 2003: 187)。

2.4. 祎丽琦 (2014)

祎丽琦 (2014) はモンゴル語チャハル方言における漢語借用について、特に動詞と副詞の借用を中心に扱った論文であり、jəə[5] の機能を①～⑤のようにまとめている。ただし、-jAA と =jAA の区別を行わずに混同しており、グロスを分かち書きにしている。ここではひとまず筆者の判断によってグロスを -JAA か =JAA に改める。

[5] 母音調和によって jəə は jaa, jəə, jɔɔ, jɵɵ という 4 つの異形態がある (祎丽琦 2014: 79)。

① 疑問代名詞と述語表現が jəə を介して結びつくことによって、「全否定」か「任意肯定」を示すことができる。

(6) *bii juu **jəə** id-deg gue.*

bii　juu=**jəə**　id-deg-gue.

1SG.NOM　何=JAA　食べる-VN.HBT-NEG

「私は何も食べない。」

(祎丽琦 2014: 85)

(7) *xəŋ **jəə** ximtəxəŋ gədʒ xələx jiŋ.*

xəŋ=**jəə**　xɪmt-ə-xəŋ　gə-dʒ　xəl-ə-x=jiŋ.

誰=JAA　安い-EP-DIM　という-CVB.IPFV　言う-EP-VN.NPST=SFP

「誰もが安いと言うのだ。」

(祎丽琦 2014: 85)

② 単数表現と否定辞を結びつけ、「否定」を表す。

(8) *tərnəəs xœœš nəg **jəə** udʒsəŋ gue.*

tər/n-əəs　xœœš　nəg=**jəə**　udʒ-səŋ-gue.

あれ/N-ABL　以降　一=JAA　見る-VN.PFV-NEG

「あれから一度も見ていない。」

(祎丽琦 2014: 86)

③ ある動詞とその否定形を結びつけ、「否定」を表す。

(9) *dogar **jaa** dogarsəŋ gue dəəšəəŋ garaad jɛbtʃəxsəŋ.*

dogar-**jaa**　dogar-səŋ-gue　dəəš-əəŋ　gar-aad　jɛb-tʃəx-səŋ.

言う-JAA　言う-VN.PFV-NEG　上へ-REFL　出る-CVB.PFV　行く-PFV-VN.PFV

「一言も言わずに上へ出て行ってしまった。」

(祎丽琦 2014: 86)

jəə は、dogar- という動詞とその否定形の dogarsəŋgue を結びつけ、その動作が行われなかったことを表す。この場合、jəə に前置する動詞は常に語幹形であり、「動詞語幹＋jəə＋動詞（否定）」の形になるという(祎丽琦 2014: 86)。

④ 譲歩を表す。

(10) *daxued tʃin ərtʃəxɔɔd **jɔɔ** bɛɛbɛɛd, gardʒ irəəd adʒəl ɔləx guɛ.*

daxue[6]-d=tʃin　ər-tʃəx-ɔɔd=**jɔɔ**　bɛɛbɛɛd[7],　gar-dʒ　ir-əəd

大学-DAT=2SG.POSS　入る-PFV-CVB.PFV=JAA　無駄な　出る-CVB.IPFV　来る-CVB.PFV

[6] これは漢語の「大学 dà xué」からの借用であり、ここでは原文のままにピンインで示した。

[7] これは漢語の「白白地 báibáide」からの借用と推測される。

adʒəl　əl-ə-x-guɛ.
仕事　見つかる-EP-VN.NPST-NEG
「大学に入っても無駄だ。卒業しても仕事が見つからない。」

(祎丽琦 2014: 86-87)

(11) *өŋgiign udʒ **jəə** ɪlgtʃixən.*
өŋg-iig=n　udʒ-jəə　ɪlg-tʃix-ə-n.
色-ACC=3.POSS　見る-JAA　識別する-PFV-EP-NPST
「色を見るだけでも判断できる。」

(祎丽琦 2014: 87)

jəə が譲歩文に現れる場合、jəə に前置する動詞には副動詞形や形動詞形がある一方、動詞語幹形で現れるものもある (祎丽琦 2014: 86)。

⑤ 同類を表す。

(12) *bii **jəə** dor gue.*
bii=**jəə**　dor-gue.
1SG.NOM=JAA　興味-NEG
「私も好きじゃない。」

(祎丽琦 2014: 87)

jəə は、それに前置する要素と文脈上対照されるものが存在し、その対照される対象と同類か同じであることを表す (祎丽琦 2014: 87)。

祎丽琦 (2014) はさらに jəə につて、それと同じ働きをすると言われている tʃ, tʃilee, bas、そして漢語の「也 yě」と比較し、その機能を下記の表 1 にまとめている。

表 1：チャハル方言の jəə と tʃ, tʃilee, bas、漢語の「也 yě」の機能のまとめ

機能		也	jəə	tʃ	tʃilee	bas
疑問詞と結びつき全否定か任意肯定を表す	全否定	＋	＋	＋	－	－
	任意肯定	－	＋	＋	＋	－
単数表現と結びつきによる否定		＋	＋	＋	－	－
動詞と動詞の否定形の結びつきによる否定		＋	＋	－	－	－
同類を表す		＋	＋	＋	－	＋
動詞語幹形に付き譲歩文を作る			＋	－	－	－

(祎丽琦 2014: 88 (表 17))

2.5. 先行研究のまとめと問題点

上記の先行研究では、当該形式の解釈や表記などに違いが見られるが、用例や意味解釈を見る限りでは同一の要素について言及していることが分かる。先行研究における =jAA の

記述をまとめると表 2 の通りになる。

表 2: 先行研究における =jAA に当たる形式の扱い

先行研究	表記	呼称	扱い
内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所(编) (1999)	ya	語気詞	同様、並列、逆接、譲歩、強調、（いずれにしても）などの語気を表す
道布 (1983)	jaa/jəə	包括的強調詞	名詞類に後続し、その事柄を包括して強調する
Sechenbaatar (2003)	=yaa^4	包括的強調小辞	漢語由来で、名詞後では包括的強調、動詞後では譲歩を表す；neg や jɑɑxɑng 等と共に (否定詞を伴って) 否定的な機能をする；不定代名詞を形成する
祎丽琦 (2014)	jəə^4	—	漢語由来で、全否定、任意肯定、譲歩、同類、単数表現と共に否定を表す

表 2 から分かるように、先行研究のいずれもチャハル方言を対象にしているものの、=jAA の表記、品詞分類及び扱いに異なりが見られる。チャハル方言の全体像を記述した道布 (编著) (1983) と Sechenbaatar (2003) では、この形式について部分的に触れ、簡略な記述にとどまっており、記述の不足や例文の少なさが如実である。祎丽琦 (2014) では、jAA の機能を網羅的にまとめているものの、-jAA と =jAA の判断を行わずに混同している。そして動詞語幹につく -jAA に関しては、本稿で議論する =jAA と同じものなのか再検討する必要がある。

管見の限りでは、=jAA はモンゴル国のハルハ方言、ロシア連邦のブリヤート語とカルムイク語において確認されていない（Kullmann and Tserenpil (1996)、栗林 (1992)、秀花 (2017)）。しかし、この形式は内モンゴル地域で日常的に使用され、使用頻度の高さは辞書に載せられているという点からも裏付けられる。また先行研究では、=jAA 形式は漢語からの借用である可能性を指摘した記述もあるので、これはモンゴル語固有の形式ではなく、漢語由来の可能性が高いと考えられる。

=jAA の使用頻度の高さに反して先行研究の記述や分析は不十分であるため、本稿ではオラド方言を例に、=jAA の出現環境や使用される文脈を精査し、その形態統語的特徴及び意味・用法について考察する。

3. 調査資料

本稿で提示するオラド方言の用例は、母語話者の自然談話などから得られた実例である。例文の収集は筆者が 2018～2020 年の間に自然談話の録音・書き起こしと面接調査を行ったものを使用した。母語話者の年齢層は 20 代から 60 代である。それに加えて、筆者が予め用意した文をオラド方言に訳してもらったものや、筆者が作成した例文の容認度判定を行ってもらったものもある。

4. 考察

4.1.節で =jAA の形態統語的特徴を、4.2.節でその意味・用法を考察する。

4.1. 形態統語的特徴

まず、オラド方言の =jAA には母音調和による異形態 =jaa, =jɔɔ, =jεε が確認された。しかし、そこに崩れが見られ、漢語の「也 yě」と音声的により近い =jεε が多用される印象を受ける。

沼田 (2009: 25) では、日本語のとりたて詞と他の範疇とを弁別する指標となる統語論的特徴について、一般に①分布の自由性、②任意性、③連体文内性、④非名詞性、を認めることができると述べている。オラド方言の小辞 =jAA にもこの 4 つの特徴が見られる。

4.1.1. 分布の自由性

沼田 (2009: 123) では、日本語のとりたて詞における「分布の自由性とは、格助詞や「と」「や」等の並列詞等の文中での分布が決まっているのに対して、とりたて詞の文中での分布が相当に自由であることをいう」としている。

=jAA の文中での分布が相当自由であり、すべての名詞類、一部の動詞類と不変化詞類に後続する。調査資料に出現した小辞 =jAA に前接する語を品詞ごとに分類し、表 3 にまとめた。

表 3：小辞 =jAA に前接する語の種類

名詞類	名詞、形容詞、代名詞、数詞、後置詞
動詞類	形動詞、副動詞（譲歩を表す -bAč を除く）
不変化詞類	小辞、副詞

次に、名詞類、動詞類や不変化詞類それぞれがホストとなる例をあげる。

(13) *nεmεεd jamar tɔs **jεε** sεεxəŋ taardag.*(名詞)

nεmεε-d　jamar　tɔs**=jεε**　sεεxəŋ　taar-dag.
1SG-DAT　どのような　油=JAA　いい　合う-VN.HBT
「私にはどんな乳液もよく合う。」

(14) *εŋgiiŋ girt xiŋ **jεε** bεεkuu.*（疑問代名詞）

εŋg-iiŋ　gir-t　xiŋ**=jεε**　bεε-kuu.
クラス-GEN　部屋-DAT　誰=JAA　いる-NEG.NPST
「クラスには誰もいない。」

(15) *in ʊdaanɛɛ šalgaltand nig xuŋ **jɛɛ** xir tiŋčsəŋguu.*（数量語）

in ʊdaa-nɛɛ šalgalt-a/n-d nig xuŋ**=jɛɛ** xir tiŋč-səŋ-guu.

これ 回-GEN 試験-EP/N-DAT 一 人=JAA 規格 合う-VN.PFV-NEG

「今回の試験には一人も合格しなかった。」

(16) *in ǰil tidnɛɛ malan barag mjaŋg garɛɛ **jɛɛ** bɔlčilɔɔ waa.* （後置詞）

in ǰil tid-nɛɛ mal-a=n barag mjaŋg garɛɛ**=jɛɛ** bɔl-či-lɔɔ=waa.

これ 年 3PL-GEN 家畜-EP=3.POSS 約 千 余り=JAA なる-PFV-PST=SFP

「今年は彼ん ちの家畜が一千頭にもなっただろう。」

(17) *čii margaaš jaadag **jaa** ir aa.* （形動詞）

čii margaaš jaa-dag**=jaa** ir-ø=aa.

2SG.NOM 明日 どうする-VN.HBT=JAA 来る-2.IMP=SFP

「あなたは明日必ず来てね。」

(18) *bitii tirtɛɛ xald. tir čin ʊʊralxim bʊl jaaǰ **jɛɛ** midnaa.* （副動詞）

bitii tir-tɛɛ xald-ø. tir=čin ʊʊral-x=im=bʊl

PROH 3SG-COM 関わる-2.IMP 3SG.NOM=2SG.POSS 怒る-VN.NPST=SFP=COND

jaa-ǰ**=jɛɛ** mid-n=aa.

どうする-CVB.IPFV=JAA 知る-NPST=SFP

「彼/彼女と関わるな。彼/彼女が怒ると、何をするか分からないよ。」

(19) *manɛɛxɛɛr xaan čaan **jɛɛ** nig irǰɛɛ aa.* （副詞）

manɛɛ-x-ɛɛr xaan+čaan**=jɛɛ** nig ir-ǰɛɛ-ø=aa.

1PL.GEN-EXST-INS どこ+そこ=JAA 一 来る-PROG-2.IMP=SFP

「うちへたまにでいいから、また来てね。」

(20) *tidnɛɛ xuu n dzaoǰiunɛɛ aǰild gartsaŋ, xuuxənən **jɛɛ** in namar tugsən.* （小辞）

tid-nɛɛ xuu=n dzaoǰiu[8]-nɛɛ aǰil-d gar-tsaŋ[9], xuuxən-ə=n**=jɛɛ** in

3PL-GEN 息子=3.POSS とっくに-GEN 仕事-DAT 出る-VN.PFV 娘-EP=3.POSS=JAA これ

namar tugs-ə-n.

秋 卒業する-EP-NPST

「彼ん ちの息子さんはずっと前に就職した。娘さんもこの秋に卒業する。」

オラド方言において =jAA は名詞類全般に後続することができる。動詞類に関しては、

[8] これは漢語の「早就 zǎojiù」からの借用と推測される。

[9] -tsAŋ は [完了アスペクト接尾時 -č ＋形動詞接尾辞 -sAŋ] の縮約形である。グロスは -VN.PFV とする。

副動詞 (譲歩を表す -bAč を除く)[10]と形動詞の後に生起可能だが、定動詞や命令・希望の接尾辞の後に生起しえない。不変化詞類に関しては、各種の小辞や副詞に後続する。

名詞類や形動詞接尾辞が格接尾辞や再帰接尾辞をともなった場合にも =jAA が後続し、それらの成分をとりたてることができる。

(22) *in gʊtal minii biš εε, εǰεεnεε **jεε** biš εε, midkui xinεε jiŋ.*

in gʊtal minii biš=εε, εǰεε-nεε**=jεε** biš=εε, mid-kui xin-εε=jiŋ.
これ ブーツ 1SG.GEN NEG=SFP 兄-GEN=JAA NEG=SFP 知る-NEG.NPST 誰-GEN=SFP
「この長靴は私のではない。兄のでもない。誰のか知らない。」

(23) *εεl εεmgεεrεεŋ **jεε** ɔdɔɔ dimii tigəǰ εεlčilxεεŋ bεεtsəŋ.*

εεl+εεmg-εεr-εεŋ**=jεε** ɔdɔɔ dimii tig-ə-ǰ εεlčil-x-εεŋ
家庭+部族-INS-REFL=JAA 今 あまり そうする-EP-CVB.IPFV 訪ねる-VN.NPST-REFL
bεε-tsəŋ.
やめる-VN.PFV
「隣近所の間でも今や、あまりそうやっておじゃましなくなっている。」

(24) *ǰεrmən ɔdɔɔ tir bux xʊšʊʊnεεxaaŋ nigdəltεε gal tεxdəg gaǰar ɔčɔɔd tεxǰixnεε **jεε** bεεn.*

ǰεrm-ə=n ɔdɔɔ tir bux xʊšʊʊ/n-εε-x-aaŋ nigdəl-tεε
若干-EP=3.POSS 今 あれ 全ての 旗/N-GEN-EXST-REFL 統一-PROP
gal tεx-dəg gaǰar ɔč-ɔɔd tεx-ǰi-x-nεε**=jεε** bεε-n.
火 祭る-VN.HBT ところ 行く-CVB.PFV 祭る-PROG-VN.NPST-GEN=JAA ある-NPST
「一部の人は全旗の統一の火を祭る場所に行って祭るのもいる。」

一つの文の中で =jAA が他の小辞と相互承接したり、複数現れたりすることもできる。

---

[10] 譲歩副動詞接尾辞 -bAč に =jAA が後続する用例は、今回の調査で確認できなかった。その理由として、譲歩の重複を避けるためだと考えられる。並列副動詞接尾辞の -ŋ に後続する用例は一応あるが、それは下記のような副詞的に用いられた場合のみである。

(21) *tɔgɔɔndɔx nɔgɔɔgɔɔŋ ɔrɔŋ garaŋ **jεε** xarǰεε aa.*

tɔgɔɔ/n-d-ɔ-x nɔgɔɔ-g-ɔɔŋ ɔr-ɔ-ŋ gar-a-ŋ**=jεε** xar-ǰεε-ø=aa.
鍋/N-DAT-EP-EXST おかず-EP-REFL 入る-EP-CVB.SIM 出る-EP-CVB.SIM =JAA 見る-PROG-2.IMP=SFP
「鍋にある炒めものを出たり入ったりするときにも見ていてね。」

(25) *tanaanɛɛ ǎjilan jux jaarʊʊ **jaa** l ǰab garsɛɛr ɛŋgəl xilɛɛŋ dabttag.*

tanaa-nɛɛ ǎjil-a=n jux jaarʊʊ**=jaa**=l ǰab gar-sɛɛr ɛŋgəl
PSN-GEN 仕事-EP=3.POSS 大きい 忙しい=JAA=PTCL 暇 出る-CVB.DUR イギリス
xil-ɛɛŋ dabt-dag.
言葉-REFL 復習する-VN.HBT
「タナーはお仕事がとても忙しくても、暇があれば英語を復習している。」

(26) *tir **jɛɛ** č daa, čadax jim biš waa.*

tir**=jɛɛ**=č=daa, čad-a-x jim biš=waa.
3PL=JAA=PTCL=SFP できる-EP-VN.NPST もの NEG=SFP
「彼/彼女もね、できるわけがないよな。」

(27) *tir ubgəŋ tiim bajaŋ bɛɛǰigɛɛd **jɛɛ** in ʊdaanɛɛ ʊčir dɛɛr xinii **jɛɛ** xabsarsaŋguu.*

tir ubgəŋ tiim bajaŋ bɛɛ-ǰi-g-ɛɛd**=jɛɛ** in ʊdaa-nɛɛ
あれ 翁 そのような 裕福な ある-PROG-EP-CVB.PFV=JAA これ 回-GEN
ʊčir dɛɛr xin-ii**=jɛɛ** xabsar-saŋ-guu.
こと 上 誰-ACC=JAA 助ける-VN.PFV-NEG
「あの老人はあれほど裕福なのに、今回のことで誰も助けなかった。」

=jAA は本動詞と補助動詞の間や慣用句の中にも入り込むことが可能であり、先行する要素をとりたてることができる。下記の (28) では、=jAA は本動詞 id-「食べる」と補助動詞 uǰ- 「見る」の間に、 (29)では、=jAA は xul-d ɔr-「(子供が) 歩き始める」という意味を表す慣用句の中に入り込んでいる。

(28) *tir minii xiisəŋ bʊdaagii idəǰ **jɛɛ** uǰsəŋguugɛɛr amtguu giǰin.*

tir minii xii-səŋ bʊdaa-g-ii id-ə-ǰ**=jɛɛ**
3SG.NOM 1SG.GEN 作る-VN.PFV ご飯-EP-ACC 食べる-EP-CVB.IPFV=JAA
uǰ-səŋ-guu-g-ɛɛr amt-guu gi-ǰi-n.
見る-VN.PFV-NEG-EP-INS 味-NEG という-PROG-NPST
「彼/彼女は私が作ったご飯を食べてもみなかったのに、まずいと言っている。」

(29) *in xuuxəd čin xɔjɔr œœ xurčɛɛd xuld **jɛɛ** ɔrɔɔdɛɛ jiŋ?*

in xuuxəd=čin xɔjɔr œœ xur-č-ɛɛd xul-d**=jɛɛ** ɔr-ɔɔdɛɛ=jiŋ?
これ 子供=2SG.POSS 二 歳 着く-PFV-CVB.PFV 足-DAT=JAA 入る-NEG.IPFV=Q
「この子は二歳になったのに、まだ歩けないの？」

以上のように、=jAA は種々の要素に後続することができ、格接尾辞などと較べると文中での分布は相当自由であると言える。しかし、=jAA の分布は全く制限がないわけではない。

例えば、=jAA は修飾要素と被修飾要素の間に入り込むことができず、必ず被修飾要素の直後に位置する。例文 (30) は言えるが、(30') は非文になる。

(30) *in nɔm **jɛɛ** jux ǰugɛɛr.*
in nɔm=jɛɛ jux ǰugɛɛr.
これ 本=JAA 大きい いい
「この本もけっこういい。」

(30')**in **jɛɛ** nɔm jux ǰugɛɛr.*

4.1.2. 任意性

沼田 (2009: 123) は任意性に関して、「それがなくても文の成立に支障がないこと、つまり文構成上任意の要素であるという特徴を指す」と述べている。

=jAA にも任意性があり、次の例文において文中から =jAA をとり除いても文の成立に支障がない。

(31) *xɔjərdʊgaar dabxart **jɛɛ** ǰœrləŋ bɛɛn.*
xɔjərdʊgaar dabxar-t**=jɛɛ** ǰœrləŋ bɛɛ-n.
二番目の 階-DAT=JAA トイレ ある-NPST
「二階にもトイレがある。」

(32) *buxčiŋ xuŋ **jɛɛ** xajagdaǰ uŋgərsəŋ.*
buxčiŋ xuŋ**=jɛɛ** xaj-a-gd-a-ǰ uŋgər-səŋ.
力士 人=JAA 投げる-EP-PASS-EP-CVB.IPFV 経過する-VN.PFV
「お相撲さんも投げられたことがある。」

(31) と (32) では、=jAA がなくても文は成立するが、その文は =jAA が持つ「累加」や「極限」の意味を失うため、それぞれ「二階にトイレがある」「お相撲さんが投げられたことがある」という意味になる。

しかし、2 つの文をつなぐ働きをする場合 (33) や [疑問語＋=jAA] 構造 (34) の文では =jAA がないと非文になる。

(33) *jaaǰ mʊʊ **jɛɛ** ɛrɛɛ tir ximǰɛɛnd xurkui.*
jaa-ǰ mʊʊ**=jɛɛ** ɛrɛɛ tir ximǰɛɛ/n-d xur-kui.
どうする-CVB.IPFV 悪い=JAA まだ あれ 程度/N-DAT 着く-NEG.NPST
「いくら悪くてもまだその程度にはならない。」

(34) *bii juu **jɛɛ** midkui.*

bii　juu=**jɛɛ**　mid-kui.

1SG.NOM　何=JAA　知る-NEG.NPST

「私は何も知らない。」

(33') **jaaǰ mʊʊ ɛrɛɛ tir ximǰɛɛnd xurxɛɛrgui.*

(34') **bii juu midkui.*

4.1.3. 連体文内性

連体文内性は、とりたて詞が連体修飾成分の構成要素となる特徴を指す (沼田 2009: 123)。(35)と(36)の =jAA はいずれも連体文内の要素となっている例である。

(35) *in čin bii **jɛɛ** abii giǰisəŋ nɔm bɛɛn.*

in=čin　bii=**jɛɛ**　ab-ii　gi-ǰi-səŋ　nɔm　bɛɛ-n

これ=2SG.POSS　1SG.NOM=JAA　取る-1.VOL　という-PROG-VN.PFV　本　ある-NPST

「これは私も買おうとしていた本だ。」

(36) *dəlɔɔ nɛɛmaŋ nas giǰ nɔxɛɛ **jɛɛ** gɔldəg čɛg šidɛɛ.*

dəlɔɔ　nɛɛm-a/ŋ　nas　gi-ǰ　nɔxɛɛ=**jɛɛ**　gɔl-dəg　čɛg=šid=ɛɛ.

七　八-EP/N　歳　という-CVB.IPFV　犬=JAA　嫌う-VN.HBT　時間=SFP=SFP

「七、八歳とは犬にも嫌われる頃だよ。」

4.1.4. 非名詞性

とりたて詞が名詞性を持たないという特徴を非名詞性という (金水ほか 2000: 158)。

(37) *tir xuŋ ǰunɛɛ uuriiŋxɛɛŋ nirɛɛŋ **jɛɛ** martatsaŋ.*

tir　xuŋ　ǰun-ɛɛ　uur-iiŋ-x-ɛɛŋ　nir-ɛɛŋ=**jɛɛ**　mart-a-tsaŋ.

あれ　人　ボケる-CVB.PFV　自分-GEN-EXST-REFL　名前-REFL=JAA　忘れる-EP-VN.PFV

「あの人はボケて自分の名前も忘れた。」

(37') *tir xuŋ ǰunɛɛ martatsaŋ uuriiŋ nir*「あの人がボケて忘れた自分の名前」

(37'') **tir xuŋ ǰunɛɛ martatsaŋ uuriiŋ nir **jɛɛ***「あの人がボケて忘れた自分の名前も」

一般に名詞は連体修飾構造の主名詞になり得るが、(37'') は非文になっていることから、=jAA に名詞性がないと判断できる。

4.2. =jAA の意味・用法

結論から述べると、オラド方言における小辞 =jAA は、累加、極限、ぼかし、当たり前、

逆接、譲歩といった意味を表すほか、疑問詞につく、数量語につく、などの用法を持つことがわかった。本節では以上の意味や用法について順に例を示しつつ検討し、オラド方言における小辞 =jAA が持つ意味・用法について考察する。

4.2.1. 累加

日本語記述文法研究会 (編) (2009: 19) によれば、「累加のとりたてとは、文中のある要素をとりたて、同類のほかのものにその要素を加えるという意味を表すこと」であり、「同類のほかのものは、明示される場合と明示されない場合がある」という。

例文 (38) では、muumu「母」が =jAA にとりたてられることにより、girtɛɛŋ bɛɛn「家にいる」ということに関して同類の aabʊ「父」と同様に当てはまるものとして加えられている。例文 (39) では、magaadar「明日」が =jAA にとりたてられることによって同類の učəgdər「昨日」や unəədər「今日」などに xiitrəx「寒くなる」ことが暗示され、それに magaadar「明日」が加えられる。

(38) *aabʊ girtɛɛŋ bɛɛn, muumu **jɛɛ** girtɛɛŋ bɛɛn.*

aabʊ	gir-t-ɛɛŋ	bɛɛ-n,	muumu**=jɛɛ**	gir-t-ɛɛŋ	bɛɛ-n.
父	家-DAT-REFL	いる-NPST	母=JAA	家-DAT-REFL	いる-NPST

「父は家にいる。母も家にいる。」

(39) *magaadar **jaa** xiitrəx majigtɛɛ.*

magaadar**=jaa**	xiitr-ə-x	majig-tɛɛ.
明日=JAA	寒くなる-EP-VN.NPST	様子-PROP

「明日も寒くなるようだ。」

(40) は同類のほかのものが明示される場合であり、累加の要素のみに =jAA がついているが、同類の要素と累加の要素の両方に =jAA がついて並立的に表されること (40') もできる。同類の要素と累加の要素の両方が同じ節の中に立つと非文 (40") になることが多いが、例外 (39) もある。

(40') aabʊ **jɛɛ** girtɛɛŋ bɛɛn, muumu **jɛɛ** girtɛɛŋ bɛɛn.「父も家にいる。母も家にいる。」
(40") *aabʊ **jɛɛ** muumu **jɛɛ** girtɛɛŋ bɛɛn.「父も母も家にいる。」

(41) *saaŋ **jaa** mʊʊ **jaa** bur bɔlən.*

saaŋ**=jaa**	mʊʊ**=jaa**	bur	bɔl-ə-n.
良い=JAA	悪い=JAA	すべて	なる-EP-NPST

「良くても、悪くてもすべていい。」

=jAA は直前の要素だけではなく、それを含むより広い範囲を累加する意味を表す場合も

ある。例えば、(42) では=jAA は直前の要素である xunɛɛrɛɛŋ「人柄」だけではなく、より広い範囲をとりたてている。つまり、ajildaaŋ garamgɛɛ「仕事がうまい」に xunɛɛrɛɛŋ birəx saaŋ「人柄がとてもいい」が加えられているのである。

(42) *tir ajildaaŋ garamgɛɛ, xunɛɛrɛɛŋ **jɛɛ** birəx saaŋ.*

tir	ajil-d-aaŋ	garamgɛɛ,	xun-ɛɛr-ɛɛŋ**=jɛɛ**	birəx	saaŋ.
3SG.NOM	仕事-DAT-REFL	うまい	人-INS-REFL=JAA	とても	いい

「彼/彼女は仕事がうまいし、人柄もとてもいい。」

4.2.2. 極限

極限のとりたてとは、文中のある要素をとりたて、同類のものの中で極端な例として示すとともに、ほかのものは当然そうであるという意味を表すことである(日本語記述文法研究会 (編) 2009: 87)。

(43) *in ʊčrii bii bisguidɛɛŋ **jɛɛ** xilsəŋguu.*

in	ʊčr-ii	bii	bisgui-d-ɛɛŋ**=jɛɛ**	xil-səŋ-guu.
これ	こと-ACC	1SG.NOM	嫁-DAT-REFL=JAA	言う-VN.PFV-NEG

「このことを私は (自分の) 嫁にも言わなかった。」

例文 (43) では、bii「私」にとって bisguidɛɛŋ xilkui「自分の嫁に言わない」ことが考えにくく、それ自体が極端な程度にあるものとして強調されているように受け取れる。bir「嫁」が =jAA でとりたてられ、極限として示され、birdɛɛŋ xilsəŋguu「自分の嫁に言わなかった」という事態の意外さが表されている。同時に、同類のもの（ほかの人）には当然 xilsəŋguu「言わなかった」ことが暗示されている。

4.2.3. ぼかし

ぼかしのとりたてとは、文のある要素をとりたてて、同類のものがほかにあることを漠然としめすことにより、文全体の意味をやわらげることである (日本語記述文法研究会 (編) 2009: 137)。

(44) *xuurxii, muumu **jɛɛ** xugširčǰɛɛ.*

xuurxii,	muumu**=jɛɛ**	xugšir-č-ǰɛɛ.
かわいそう	母=JAA	老ける-PFV-PST

「かわいそうに、母も老けたね。」

(45) *xuu min **jɛɛ** jux bɔlčǰɛɛ.*

xuu=min**=jɛɛ** jux bɔl-č-ǰɛɛ.
息子=1SG.NOM=JAA 大きい なる-PFV-PST
「我が子も大きくなったね。」

(44) では、ぼかしを表す =jAA によって、muumu xugširčǰɛɛ「母が老けた」という望ましくないことが当てはまるものがほかにもあるかのように表現することで、文が和らげられている。(45) では、xuu min jux bɔlčǰɛɛ「我が子が大きくなった」変化について感慨を込めて述べている。この場合、変化の内容が望ましくないものとは限らない。

4.2.4. 当たり前

定延 (1995) は、日本語の当たり前の「も」について次のように述べている。当たり前の「も」とは「言表事態に類似した情報はしょっちゅう生じている。言表事態は驚くにあたらない、当たり前の自然のなりゆきだ」(定延 1995: 236)という。

(46) *uglɛɛnɛɛs abaa jim idsəŋguu bʊl da, gidsən **jɛɛ** gɔrčgɔnjɔɔ ba da.*

uglɛɛ/n-ɛɛs ab-aa jim id-səŋ-guu=bʊl=da, gids-ə=n**=jɛɛ**
朝/N-ABL 取る-CVB.PFV もの 食べる-VN.PFV-NEG=COND=SFP 腹-EP=3.POSS=JAA
gɔrčgɔn-jɔɔ=l=wa=daa.
グーグーと鳴く-1. VOL=PTCL=SFP=SFP
「朝から何も食べていないのなら、腹もグーグーと鳴くだろうね。」

(46) では、gidsən gɔrčgɔn-「お腹がグーグーと鳴く」以外に tɔlgɛɛ irəg-「めまいがする」などの事態が想定されるが、他の事態よりも gidsən gɔrčgɔn-「お腹がグーグーと鳴く」という事態が一番当たり前である。

4.2.5. 逆接

モンゴル語の逆接を表す連用節について、岡田・向井 (2006) は「節の事態が成立するのに伴って主文の事態も成立するという予想や期待が実現しないことを表す」と述べている。

(47) *bii inuunii xičnɛɛŋ ɔrəldsoŋ **jɛɛ** ɔrčʊʊlǰ čadsaŋguu.*

bii inuun-ii xičnɛɛŋ ɔrəld-soŋ**=jɛɛ** ɔrčʊʊl-ǰ čad-saŋ-guu.
1SG.NOM これ-ACC いくら 弄る-VN.PFV=JAA 翻訳する-CVB.IPFV できる-VN.PFV-NEG
「私はこれを何度も試したが、翻訳することができなかった。」

(48) *čii udər udər girɛɛŋ čibrəldəg **jɛɛ** abdar diir čin tɔɔs bɛɛn daa.*

čii udər udər gir-ɛɛŋ čibrəl-dəg**=jɛɛ** abdar diir=čin tɔɔs
2 SG.NOM 日 日 家-REFL 掃除する-VN.HBT=JAA 箪笥 上=2SG.POSS 埃

bɛɛ-n=daa.
ある-NPST=SFP
「あなたが毎日家を掃除していても、箪笥の上に埃があるよ。」

(49) *im ʊʊgaad **jaa** xalʊʊnan bʊʊkuu bɛɛn.*
im ʊʊ-g-aad**=jaa** xalʊʊn-a=n bʊʊ-kuu bɛɛ-n.
薬 飲む-CVB.PFV=JAA 熱-EP=3.POSS 下がる-NEG.NPST ある-NPST
「薬を飲んだのに、熱が下がっていない。」

上記の例文に見るように、逆接を表す連用節には完了や習慣を表す形動詞接尾辞、完了を表す副動詞接尾辞に =jAA が後続している。いずれも従属節の事態が事実的な場合を表している。

4.2.6. 譲歩

岡田・向井 (2006) では、モンゴル語の譲歩を表す連用節について「ふたつの事態をいったん仮定したうえで、それが成り立たないことを示す」と述べている。

(50) *in xʊrald ɔrjɔɔ bɔlɔn, ɔrkuu **jɛɛ** bɔlɔn.*
in xʊral-d ɔr-jɔɔ bɔl-ɔ-n, ɔr-kuu**=jɛɛ** bɔl-ɔ-n.
これ 会議-DAT 入る-JAA なる-EP-NPST 入る-NEG.NPST=JAA なる-EP-NPST
「この会議に参加してもいいし、参加しなくてもいい。」

(50) は評価のモダリティを表す形式である。譲歩を表す副動詞接尾辞 -jAA や小辞 =jAA の働きによって主節の事態を引き起こす従属節を複数並べることができる。いずれも従属節の事態が仮定的な場合を表している。

(50) の ɔr-jɔɔ のように、オラド方言にも先行研究で指摘した [動詞語幹＋-jAA]という形式が確認された。動詞語幹に -jAA が接続され、接続形式や譲歩を表す連用節を作ることができる。筆者は道布（编）(1983) や Sechenbaatar (2003)と同様に、動詞語幹につく -jAA を譲歩副動詞接尾辞として扱うため、本稿では議論せず、今後の課題にしたい。

岡田・向井 (2006) が述べたように、モンゴル語の場合、逆説と譲歩は連続しているので、次の (51) は逆接とも譲歩とも取れる。

(51) *gir dɔtɔr xalʊʊŋ **jaa** gadan siruuxəŋ.*
gir dɔtɔr xalʊʊŋ**=jaa** gadan siruu-xəŋ.
家 中 熱い=JAA 外 涼しい-DIM
「家の中は熱くても、外は涼しい。」

4.2.7. 疑問語＋=jAA

オラド方言では、疑問語に =jAA がついたものは、基本的に肯定の述語とも否定の述語とも共起できる。同類のものをすべて肯定、あるいは否定する意味を表す。

・[疑問語句＋=jAA＋否定] 全否定

(52) *magaadar bii barag juu **jɛɛ** xiikuu waa.*

magaadar bii barag juu**=jɛɛ** xii-kuu=waa.
明日 1SG.NOM 多分 何=JAA する-NEG.NPST=SFP
「明日私は多分何もしないだろう。」

(53) *čɛmɛɛgii bii xiǰɛɛ **jɛɛ** martkʊɛ.*

čɛmɛɛ-g-ii bii xiǰɛɛ**=jɛɛ** mart-kʊɛ
2SG-EP-ACC 1SG.NOM いつ=JAA 忘れる-NEG.NPST
「あなたのことを私はいつでも忘れない。」

・[疑問語句＋=jAA＋肯定] 全肯定

(54) *širɛɛ duurəŋ juu **jɛɛ** bɛɛna.*

širɛɛ duurəŋ juu**=jɛɛ** bɛɛ-na.
テーブル 満ちた 何=JAA ある-NPST
「テーブルいっぱい何でもある。」

(55) *činii xiisəŋ nɔgɔɔ ɛlən **jɛɛ** amttɛɛ.*

činii xiisəŋ nɔgɔɔ ɛl-ə=n**=jɛɛ** amt-tɛɛ.
2SG.GEN 作る-VN.PFV おかず どれ-EP=3.POSS=JAA 味-PROP
「あなたが作ったおかずは、どれも美味しい。」

4.2.8. 数量語＋=jAA

数量語に =jAA がつく場合、様々な用法がある。

・[数詞 (＋類別詞)＋=jAA＋肯定] 大量評価強調

(56) *saaŋ tʊgal jim čin gʊrbaŋ mjaŋg bɛɛtgʊɛ, tabaŋ mjaŋg **jɛɛ** xurna.*

saaŋ tʊgal=jim=čin gʊrb-a/ŋ mjaŋg bɛɛtgʊɛ, tabaŋ mjaŋg**=jɛɛ** xur-na.
いい 小牛=SFP=2SG.POSS 三-EP/N 千 どころか 五-EP/N 千=JAA 達する-NPST
「いい小牛だから三千元どころか、五千元にもなる。」

例文(56)では、tabaŋ mjaŋg「五千(円)」という数量は自分の予想、あるいは世間の常識より多いことを強調している。

・[数詞 (＋類別詞)＋=jAA＋否定] 意外性

(57) *unɛɛdriiŋ xʊrald arbaŋ xuŋ **jɛɛ** čʊglarsaŋgui.*

unɛɛdr-iiŋ　xʊral-d　arb-a/ŋ　xuŋ**=jɛɛ**　čʊglar-saŋ-gui.

今日-GEN　会議-DAT　十-EP/N　人=JAA　集まる-VN.PFV-NEG

「今日の会議では十人も集まらなかった。」

例文(57)の場合、事実は arbaŋ xuŋ「十人」の予想数に達していないという意味になる。

・[少ない数量 (＋類別詞)＋=jAA＋否定] 小量評価強調

(58) *bii œrɛɛ arbaŋ nigəŋ čɛg xagsad ɔrɔndɔɔŋ ɔrɔɔ dimii ʊdsaŋgui ǰiu ʊntatsaŋ. ʊntax murtɛɛŋ nig **jɛɛ** sirsəŋgui uglɛɛ bɔlɔgtsɔŋ.*

bii　œrɛɛ　arb-a/ŋ　nig-ə/ŋ　čɛg　xags-a-d　ɔr-ɔ/n-d-ɔɔŋ　ɔr-ɔɔ

1SG.NOM　夜　十-EP/N　一-EP/N　時間　半-EP-DAT　ベッド-EP/N-DAT-REFL　入る-CVB.PFV

dimii　ʊd-saŋ-gui　ǰiu[11]　ʊnt-a-tsaŋ.　ʊnt-a-x　murtɛɛŋ　nig**=jɛɛ**

あまり　経つ-VN.PFV-NEG　すぐに　寝る-EP-VN.PFV　寝る-EP-VN.NPST　しかも　一=も

sir-səŋ-gui　uglɛɛ　bɔl-ɔ-g-tsɔŋ.

目覚める-VN.PFV-NEG　朝　なる-EP-PASS-PST

「私は夜 11 時半にベッドに入った。すぐに寝てしまい、しかも一晩中一度も起きずに朝になった。」

(59) *in œœrd jaaraa nɔmɔɔŋ ǰaaxaŋ **jaa** uǰsəŋguu.*

in　œœr-d　jaar-aa　nɔm-ɔɔŋ　ǰaaxaŋ**=jaa**　uǰ-səŋ-guu.

これ　近い-DAT　急ぐ-CVB.PFV　本-REFL　少し=JAA　見る-VN.PFV-NEG

「ここ最近忙しくて、本を少しも読まなかった。」

nig「一」や ǰaaxaŋ「少し」を代表とする少量を表す名詞類に =jAA が付き、それが否定の述語と結びつくと、一般に少なさの強調、いわゆる全部否定になる。

・[数詞 (＋類別詞)＋=jAA＋非断定表現] 確定回避

=jAA は数量語につき、非断定表現とともに用いられ、話し手の見積もりによる大体の数量を表すことができる。定延 (1995: 243) は、このような表現を確定回避の「も」と呼び、「事態実現の度合いを敢えて確定せず、その前後の度合いも候補に含めて表す時に用いられる」と述べている。

[11] 漢語の「就 jiù」からの借用と推測される。

(60) *iim buduuŋ xœrœœ jim čin tabaŋ ǰʊʊŋ jamaa* ***jaa*** *bagtjaa waa.*

iim　buduuŋ　xœrœœ=jim=čin　tab-a/ŋ　ǰʊʊ/ŋ　jamaa=jaa
このような　大きい　小屋=SFP=2SG.POSS　五-EP/N　百/N　ヤギ=JAA
bagt-jaa=waa.
収容する-1.VOL=SFP
「こんなに大きい小屋だから、五百頭のヤギでもはいれるだろう。」

(60) では、tabaŋ ǰʊʊŋ jamaa bagt-「五百頭のヤギがはいれる」ははっきり肯定されず、否定もされていない。断定を回避させる機能を持つ文末表現 bagtjaa waa「はいれるだろう」を用いて tabaŋ ǰʊʊŋ jamaa「五百頭のヤギ」だけではなく、その前後の度合いも候補に含めて、度合いの確定を回避している。

5. まとめと今後の課題

本稿は、モンゴル語オラド方言における小辞 =jAA について、とりたての観点から形態統語的特徴及び意味・用法を記述することを試みた。その結果、明らかになったことは以下の通りである。

=jAA の形態統語的特徴：

1) 分布の自由性：名詞類全般と一部の動詞類や不変化詞類に後続する；格成分、副詞的成分、節など先行する要素をとりたてる；本動詞と補助動詞の間や慣用句の中に入り込むことができる。

2) 任意性：文構成上任意の要素であり、削除しても文の成立に支障がないが、その文が表す意味やニュアンスなどが少し異なる場合がある。

3) 連体文内性：連体修飾成分の構成要素になる。

4) 非名詞性：名詞性を持たない。

=jAA の意味・用法：

累加、極限、ぼかし、当たり前、逆接、譲歩などの意味を表し、疑問詞や数量語につくといった用法を有していることが明らかとなった。

今回の記述により、=jAA の形態統語的特徴、意味・用法を大まかに整理することができた。オラド方言の =jAA は沼田 (2009) があげたとりたて詞の統語論的特徴をすべて有することから、とりたて小辞であることは確認できた。しかし、=jAA の周辺的な用法について上記の特徴で説明できないこともあった。また =jAA の意味・用法に関しては、各用法の間に連続性があるように感じる。そして、=jAA の意味用法と類似する =č や bas などとの異同も興味深い。今後は以上の点を含め、=jAA の振る舞いについてさらなる考察を進めていくことを課題としたい。

略語一覧

-	形態素境界	EP	挿入音	PFV	完了
=	接語境界	EXST	存在	PL	複数
+	複合語内部の語境界	FP	小辞	POSS	所有
*	非文	GEN	属格	PROG	進行
1	1 人称	HBT	習慣	PROH	禁止
2	2 人称	IMP	命令	PROP	所有
3	3 人称	IMPF	不完了	PSN	人名
ABL	奪格	INN	内格	PTCL	小辞
ACC	対格	INS	道具格	Q	疑問小辞
COM	共同格	LMT	限界	RECP	相互
CONC	譲歩	N	n 語幹	REFL	再帰
COND	条件	NEG	否定	SFP	文末小辞
CVB	副動詞	NOM	主格	SG	単数
DAT	与位格	NPST	非過去	VN	形動詞
DIM	指小辞	PASS	受身	VOL	意志
DUR	持続	PST	過去		

参考文献

道布 (编著) (1983)《蒙古语简志》北京：民族出版社.

金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000)『時・否定と取り立て』（日本語の文法 2）東京：岩波書店.

Kullmann, R. and D. Tserenpil (1996 [2008 (第 4 版)]) *Mongolian Grammar.* Hongkong. Jenso. Ltd. (第 4 版は Ulaanbaatar: Admon Co., Ltd.)

栗林均 (1989)「内蒙古語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典　第 2 巻　世界言語編 (中)』1426-1434. 東京：三省堂.

栗林均 (1992)「ブリヤート語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典　第 2 巻　世界言語編 (中)』814-827. 東京：三省堂.

ナラントヤ (2011)「モンゴル語の小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol に関する考察：取り立ての観点から」『北方言語研究』(1): 165-184.

内蒙古大学蒙古学研究院蒙古语文研究所 (编) (1999)《蒙汉词典 (增订本)》呼和浩特：内蒙古大学出版社

日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 5　第 9 部 とりたて　第 10 部 主題』東京：くろしお出版.

野田尚史 (2019)「とりたて表現の対照研究の方法」野田尚史 (編)『日本語と世界の言語のとりたて表現』3-20. 東京：くろしお出版.

沼田善子 (2009)『現代日本語とりたて詞の研究』東京：ひつじ書房.

岡田和行・向井晋一 (2006 [2016 改訂])「東京外国語言語モジュール：モンゴル語文法モジ

ュール（項目別復習コース Lesson 21, Step 4. 連用節 (4) 逆接と譲歩）[解説]」 http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/087.html (2021/11/27 確認)

賽希雅拉図 (2014)『日本語とモンゴル語の主題マーカーの対照研究』大阪府立大学博士学位論文.

定延利之 (1995)「心的プロセスからみたとりたて詞モ・デモ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編)『日本語の主題と取り立て』227-260. 東京：くろしお出版.

Sečen, Či. baγatur, M. sengge (2002) *Ordus aman ayalγun-u sudulul.* Kökeqota：Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy_a.

Sechenbaatar, Borjigin (2003) *The Chakhar dialect of mongol: A morphological description.* Helsinki: The Finno-Ugrian Society.

秀花 (2017)《卡尔梅克语土尔扈特土语研究》沈阳：辽宁民族出版社.

祎丽琦 (2014)『モンゴル語チャハル方言における漢語借用―動詞と副詞の借用を中心に―』千葉大学博士学位論文.

The Particle =jAA in Urad Mongolian From the Viewpoint of *toritate*

HAO Rile
(Tokyo University of Foreign Studies)

The purpose of this paper is to describe the syntactic features, meanings and functions of the particle =jAA in Urad Mongolian. Although the use of the Chinese-derived particle =jAA is very frequent in the Mongolian language in the Chinese territory, it has not been sufficiently described and analyzed in the previous studies. This paper is an attempt to describe the syntactic features, meaning, and usage of =jAA from the viewpoint of toritate, using the Urad dialect as an example.

In conclusion, the following was found. The particle =jAA has the same characteristics as Japanese toritate particles: (1) freedom of distribution, (2) optionality, (3) to be added to a component within adnominal modification, and (4) non-nominality. It was also found that the particle =jAA has the following meanings: accumulative, extreme, blur, natural, adversative, and concession. It can be used with interrogatives and quantifiers.

Predicative Possession in Fijian†

Susumu OKAMOTO
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Fijian, possession, linguistic typology

1. Introduction

In every language, possessive relationship can be expressed both within a noun phrase (nominal possession) and within a clause (predicative possession). Nominal possession in Fijian is well described in previous studies (Pawley and Sayaba 1990, Geraghty 2000, Lynch 2001, and so forth) but predicative possession has been less explored. This paper points out that Fijian employs two types of possessive construction, namely the Locational possessive and the Genitive possessive, and claims that the former is semantically restricted while the latter is widely observed.

The organization of the paper is as follows. Section 2 and 3 provide a typological overview of predicative possession and some preliminaries on possessive expression in Fijian respectively. Section 4 describes two types of possession (the Locational possessive and the Genitive possessive). Section 5 concludes the paper. Examples without sources were collected through elicitation with two consultants LG (male, born in 1962) and SG (female, born in 1962). Note that this work deals mainly with Standard Fijian, hereafter just Fijian.

2. Typological overview on predicative possession

Stassen (2013), the chapter of predicative possession on the World Atlas of Language Structures (WALS), provides five types of predicative possession. That is to say, the Have-possessive, the Locational possessive, the Genitive possessive, the Topic possessive, and the Conjunctional possessive. This study adopts these concepts to describe predicative possession in Fijian.

Among them, the Have-possessive utilizes a transitive verb as a predicate, so the possessor appears as a subject while the possessed item as an object (1).

(1) Have-possessive: English
John has a motorcycle (Stassen 2013)

Other four types contain in common an existential verb as a predicate. In the Locational possessive, the possessor is expressed by a locational noun phrase (2). In the Genitive possessive, the possessor occurs within a noun phrase (3). As discussed below, Fijian employs both the Locational and the

† This paper is a revised and expanded version of a presentation made at the 158th Meeting of the Linguistic Society of Japan. I would like to thank those who provided me with many helpful and constructive comments.

Genitive possessive. Stassen (2013) calls these two types of predicative possession the Oblique possessive.

(2) Locational possessive: Written Mongolic[1]

na-dur morin bui

1SG-at horse be.3SG.PRES

'I have a horse (lit. A horse exists at me)' (Poppe 1954: 147, glosses by Stassen 2013)

(3) Genitive possessive: Avar (Daghestanian, Caucasus)

dir mašina b-ugo

1SG.GEN car III-be.PRES

'I have a car (lit. My car exists)' (Kalinina 1993: 97, glosses by Stassen 2013)

In the Topic possessive, as its name suggests, the possessor is a topic noun phrase (4).

(4) Topic possessive: Tondano (Austronesian, northern Sulawesi)

si tuama si wewean wale rua

ANIM.SG man TOP exist house two

'The man has two houses (lit. As for the man, there are two houses exist)'

(Sneddon 1975: 175, glosses by Stassen 2013)

The Conjunctional possessive has an existential verb just like the Oblique possessive (2), (3) and the Topic possessive (4). However, it differs from them in that the possessor appears as the subject of the clause (5).

(5) Conjunctional possessive: Sango (Adamawa-Ubangi, Central African Republic)

lo eke na bongo

3SG be and/with garment

'She has a garment (lit. She exists with a garment)'

(Samarin 1967: 95, glosses by Stassen 2013)

3. Possessive construction in Fijian

3.1. Preliminaries

Before moving onto the main discussion of the paper, let me provide some preliminaries on Fijian. Fijian is an Oceanic language (Austronesian, Malayo-Polynesian) with a basic word order of VS/VPA. The phoneme inventory is as follows: /p, b [^{m}b] , t, d [^{n}d], k, q [^{ŋ}g], r, dr [^{n}r], v [β], f, c [ð],

[1] Poppe (1954) himself does not regard *bui* in (2) as a predicate that agrees with the third person singular subject (Yohei Yamada, personal communication).

j [tʃ], z [ⁿdʒ], m, n, g [ŋ], l, w, y, a, aː, e, eː, i, iː, o, oː, u, uː/. Long vowels are indicated by a macron. Note that a predicate may consist of more than one phonological word. Nouns are divided into two types: common and proper. Each noun class co-occurs with different articles and prepositions (Table 1). The proper class includes not only proper nouns but also personal pronouns.

Table 1: Two noun classes

	Article	Preposition		
		in, at	to	from
Common	*na*	*e*	*ki*	*mai*
Proper	*o*	*vei*		*mai vei*

Section 3.2 and 3.3 below show nominal possession and predicative possession in Fijian respectively.

3.2. Nominal possession

Nominal possession is a construction where the possessive relationship is expressed within a noun phrase as in *John's book*. Although this paper discusses predicative possession, this section briefly summarizes nominal possession in Fijian.

Oceanic languages including Fijian formally distinguish two types of nominal possessive construction: 'direct' and 'indirect' possession. This distinction generally corresponds to a semantic distinction between inalienable and alienable possession. Lynch et al. (2002: 40) state that in direct possession, "a possessor suffix [...] is attached directly to the possessed noun", while in indirect possession, "an uninflected possessed noun is either preceded or followed by an independent possessive constituent, which is itself marked with one of the possessor suffixes". Fijian is no exception to this. Direct possession (i.e. possession of body parts and kinship terms) is expressed by attaching a possessive suffix directly to the possessed noun (6). A possessive suffix indicates the person and the number of the possessor (Table 2).

(6) Direct possession

a. *na ulu-**na***
ART head-3SG
'his head'

b. *na tama-**na***
ART father-3SG
'his father'

Table 2: Possessive suffix (Schütz 2014: 305)

	1st person		2nd person	3rd person
	exclusive	inclusive		
singular	*-qu*		*-mu*	*-na*
dual	*-irau*	*-daru*	*-mudrau*	*-drau*
paucal	*-itou*	*-datou*	*-mutou*	*-dratou*
plural	*-imami*	*-da*	*-munī*	*-dra*

In indirect possession, on the other hand, the possessor is signaled by an independent word consisting of a classifier and a possessive suffix, which precedes the possessed noun. The correct classifier must be chosen according to the relationship between the possessor and the possessed item. There are three types of classifiers: *ke-* (edible), *me-* (drinkable), and *no-* (neutral) (7). These modifiers may or may not co-occur with the article *na*.

(7) Indirect possession

a. *na* ***ke-na*** *ika*
ART CLF.E-3SG fish
'his fish'

b. *na* ***me-na*** *tī*
ART CLF.D-3SG tea
'his tea'

c. *na* ***no-na*** *vale*
ART CLF.N-3SG house
'his house'

The possessor is indicated by not only pronouns but also independent nouns such as proper nouns and common nouns. When the possessor is a proper noun, the suffix *-i* is used as in (8).

(8) a. *na* *ulu-**i*** *Mere*
ART head-of Mere
'Mere's head'

b. *na* *ika* ***ke-i*** *Mere*
ART fish CLF.E-of Mere
'Mere's fish'

c. *na* *tī* ***me-i*** *Mere*
ART tea CLF.D-of Mere
'Mere's tea'

d. *na* *vale* ***ne-i*** *Mere*
ART house CLF.N-of Mere
'Mere's house'

When the possessor is a common noun, on the other hand, it is placed after the possessed noun (9a) or indicated by the preposition *ni* 'of' (9b). Note that in (9b) the distinction of possessive relationship, which is indicated by the classifier *ke-* in (9a), is neutralized.

(9) a. *na* *ke-na* *ika* *na* *gone*
ART CLF.E-3SG fish ART child
'the child's fish (to eat)'

b. *na* *ika* *ni* *gone*
ART fish of child
'the child's fish'

3.3. Predicative possession

Typological studies on predicative possession have classified Fijian as a language which uses the Locational possessive (Heine 1997: 51, Stassen 2009: 130, 755, Stassen 2013, and so forth). Existential verbs such as *tiko* and *tū* are used for the predicate, which I gloss just as 'be'[2].

Dixon (1988) also provides examples of the Locational possessive in Boumaa Fijian. In (10)[3], the existential verb *tiʔo* is used. The possessed noun *puaʔa* 'pig' appears as an intransitive subject. It should be noted that the subject agrees with a bound pronoun in person and number (cf. (11), (12) below) but the third person singular bound pronoun *e* cannot co-occur with the aspect marker *sā*. The possessor *au* 'me', on the other hand, is signaled by the preposition *vei*.

(10) *Sā tiʔo vei au e dua a puaʔa*
ASP be to.PRP 1SG 3SG one ART pig
'I now have a pig' (Dixon 1988: 128)

Milner (1956), however, provides examples of not only the Locational possessive but also the Genitive possessive. (11) is an example of the Locational possessive, where the possessed item *e dua na ilavo* 'some money' agrees with the bound pronoun *e* while the possessor is marked by the preposition *vei*.

(11) *E tū vei au e dua na ilavo*
3SG be to.PRP 1SG 3SG one ART money
'I have some money' (Milner 1956: 59)

In the Genitive possessive (12), on the other hand, the possessor occurs as a possessive suffix within an NP.

(12) *E dua na no-na cina vou*
3SG one ART CLF.N-3SG lamp new
'He has a new lamp' (Milner 1956: 36)

Here the predicate is *dua* 'one' (cf. footnote 1). Fijian numerals, which obligatorily occur with the third person singular bound pronoun *e*, are often used in predicative possession instead of existential verbs. Stassen (2009: 31) refers to this construction as 'quantifier/modifier-raising'.

---

[2] Dixon (1988: 128) points out that existential verbs are related to the difference in meaning in Boumaa Fijian. This paper focuses mainly on a constructional difference between the Locational possessive and the Genitive possessive.

[3] In Fijian, numerals are analyzed as a subtype of verb. In (10), *e dua* forms a relative clause to modify the subsequent noun *puaʔa* 'pig'. *E dua* often functions like an 'indefinite article' as in (11).

4. Locational and Genitive possessive in Fijian

As shown in Section 3.3 above, Fijian has both the Locational possessive and the Genitive possessive. Section 4.1 describes these two types of predicative possession within the framework of Heine (1997) and claims that the permanence of the possessive relationship is related. Section 4.2 points out that the noun class of possessor is also concerned.

4.1. Permanence of the possessive relationship

Heine (1997) suggests seven possessive types as shown in (13).

(13) Possessive relationship (Heine 1997: 34-5)

a. Physical possession (PHYS)
I want to fill in this form: do you have a pen?

b. Temporary possession (TEMP)
I have a car that I use to go to the office but it belongs to Judy.

c. Permanent possession (PERM)
Judy has a car but I use it all the time.

d. Inalienable possession (INAL)
I have blue eyes/two sisters.

e. Abstract possession (ABST)
He has no time/no mercy.

f. Inanimate inalienable possession (IN/I)
That tree has few branches.

g. Inanimate alienable possession (IN/A)
That tree has crows on it.

The following subsections show which predicative possession type (i.e. the Locational possessive or the Genitive possessive) is preferred in each possessive type.

4.1.1. Physical possession

Physical possession is a relationship where “the possessor and the possessee are physically associated with one another at reference time” (Heine 1997: 34). In this possessive relationship, both types are observed (14). Note that in the examples below the capital letters L and G represent the Locational possessive and the Genitive possessive respectively and the possessor noun phrase is shown in bold.

(14) Do you have a pen?

L: *E* *tiko* ***vei*** ***iko*** *e* *dua* *na* *peni?*
3SG be to.PRP 2SG 3SG one ART pen

G: *E* *dua* ***no-mu*** *peni?*
3SG one CLF.N-2SG pen

4.1.2. Temporary possession

In temporary possession, "the possessor can dispose of the possessee for a limited time but s/he cannot claim ownership to it" (Heine 1997: 34). As shown in (15), both types are used.

(15) I have a book (that I borrowed)

L: *E* *tiko* ***vei*** ***au*** *na* *ivola*
3SG be to.PRP 1SG ART book

G: *E* *dua* ***no-qu*** *ivola*
3SG one CLF.N-1SG book

4.1.3. Permanent possession

Permanent possession is a relationship where "the possessee is the property of the possessor, and typically the possessor has a legal title to the possessee" (Heine 1997: 34). In this possessive relationship, the Genitive possessive is preferred (16).

(16) Jone has a car (that he bought)

G: *E* *dua* *na* *motokā* ***ne-i*** ***Jone***
3SG one ART car CLF.N-of Jone

4.1.4. Inalienable possession

In inalienable possession, "the possessee is conceived of typically as being inseparable from the possessor" (Heine 1997: 34). Inalienable possession is divided into kinship terms and body parts. As for the possession of kinship term, only the Genitive possessive is observed (17).

(17) I have two brothers

G: *E* *rua* *na* *taci-**qu***
3SG two ART younger_sibling-1SG

Similarly, the Genitive possessive is dominantly used for body parts as shown in (18), whose literal meaning is "his eggs of eye (i.e. eye balls) are blue".

(18) He has blue eyes

E	*karakarawa*	*na*	*yaloka*	*ni*	*mata-**na***
3SG	blue	ART	egg	of	eye-3SG

One explanation of the reason why only the Genitive possessive is allowed in inalienable possession is that the majority of kinship terms and body parts are bound nouns, which require a possessive suffix within a noun phrase. In addition, quantifier/modifier-raising is common in inalienable possession because the possessive relationship is expectable by definition, therefore the property of a possessed noun is foregrounded. For instance, the numeral *rua* 'two' in (17) and the adjective *karakarawa* 'blue' in (18) are 'raised' to the predicate respectively.

4.1.5. Abstract possession

In abstract possession, "the possessee is a concept that is not visible or tangible, like a disease, a feeling, or some other psychological state" (Heine 1997: 34). In Fijian, such states are expressed not by possessive constructions but by adjectives. Heine (1997: 35) adds that "abstract possession may be said to be also present when the meaning of the proposition concerned is actually the contrary to possession, as in *I have a missing tooth*". 'Absence' like this is expressed by both possessive types in Fijian. In such a case, the predicate is the negative verb *sega* (19).

(19) I have no money

L:	*E*	*sega*	***vei***	***au***	*na*	*ilavo*
	3SG	NEGV	to.PRP	1SG	ART	money
G:	*E*	*sega*	*na*	***no-qu***		*ilavo*
	3SG	NEGV	ART	CLF.N-1SG		money

4.1.6. Inanimate inalienable possession

Inanimate inalienable possession is often referred to as a part-whole relationship (Heine 1997: 35). This type differs from inalienable possession discussed in Section 4.1.4 in that the possessor is inanimate. Whether the possessor is animate or inanimate, what inalienable possession types have in common is that they are expressed only by the Genitive possessive. In (20), *taba* 'branch' is a bound noun so the possessor is signaled by the possessive suffix *-na* and the following noun phrase.

(20) The tree has three branches

G:	*E*	*tolu*	*na*	*taba-**na***	***na***	***vunikau***
	3SG	three	ART	branch-3SG	ART	tree

In (21), the possessor is expressed by the preposition *ni* 'of'.

(21) My room has two doors

G: *E* *rua* *na* *katuba* ***ni*** ***no-qu*** ***vale***

3SG two ART door of CLF.N-1SG house

4.1.7. Inanimate alienable possession

The last type of possession is inanimate alienable possession, where the possessor is inanimate and the possessee is separable from the possessor (Heine 1997: 35). As shown in (22), only the Locational possessive is used here.

(22) This room has a table

L: *E* *tiko* ***e*** ***na*** ***rumu*** ***qō*** *e* *dua* *na* *tēveli*

3SG be in ART room this 3SG one ART table

4.1.8. Intermediate conclusion

Table 3 summarizes what I demonstrated above.

Table 3: Predicative possession in Fijian

	IN/A	PHYS	TEMP	ABST	PERM	INAL	IN/I
Permanence	−	−	−	+/−	+	+	+
Locational	+	+	+	+	−	−	−
Genitive	−	+	+	+	+	+	+

As shown in the table, the Locational possessive can be used only for less permanent possessive relationships. It follows from what has been said that the Genitive possessive, rather than the Locational possessive, is the prototypical predicative possession of Fijian since it has almost no restriction on the subtypes of possession.

The Locational possessive, as its name indicates, can be claimed to be a 'locational expression' rather than a possessive one. In other words, it just expresses that something exits somewhere and possessive relationship does not imply. Accordingly, it is used for temporary possession and inanimate alienable possession. (23) makes it clear that the genitive *nomu* 'your' is the 'true' possessor of a pen while the locational *vei au* 'to me' is a mere place where a pen is.

(23) *E* *dua* *vei* *au* *na* ***no-mu*** *peni*

3SG one to.PRP 1SG ART CLF.N-2SG pen

'Your pen exists to me'

4.2. Noun class of possessor

As shown in Table 1 in Section 3.1, Fijian nouns are divided into the common class or the proper class. Nouns of the proper class (i.e. pronouns and proper nouns) can be the possessor of both the Locational possessive and the Genitive possessive (24), (25).

(24) I have a book

L: *E* *dua* ***vei*** ***au*** *na* *ivola*
3SG one to.PRP 1SG ART book

G: *E* *dua* ***no-qu*** *ivola*
3SG one CLF.N-1SG book

(25) Mere has a book

L: *E* *dua* ***vei*** ***Mere*** *na* *ivola*
3SG one to.PRP Mere ART book

G: *E* *dua* *na* *ivola* ***ne-i*** ***Mere***
3SG one ART book CLF.N-of Mere

Nouns of the common class, on the other hand, cannot be the possessor of the Locational possessive so common nouns as the possessor should be within a noun phrase (26).

(26) The child has a book

L: * *E* *dua* ***ki*** ***na*** ***gone*** *na* *ivola* / * *E* *dua* ***e*** ***na*** ***gone*** *na* *ivola*
3SG one to ART child ART book 3SG one in ART child ART book

G: *E* *dua* ***no-na*** *ivola* ***na*** ***gone*** / *E* *dua* *na* *ivola* ***ni*** ***gone***
3SG one CLF.N-3SG book ART child 3SG one ART book of child

Perhaps, the selection of possessive types is related to information structure. The proper class (i.e. pronouns and proper nouns) are semantically definite by definition. Therefore, as shown in (24) and (25), both possessive types can have a definite possessor. An indefinite possessor, on the other hand, might tend to appear in the Genitive possessive. As to this point, Milner (1956: 36) states that the Genitive possessive is “especially useful as a sentence opening”. It follows that the Genitive possessive is apt to have an indefinite possessor since opening sentences consist wholly of new information. The relation between possessive type and information structure needs to be addressed in future research.

5. Conclusion

Typological studies have classified Fijian as a language that employs the Locational possessive for predicative possession. However, this study reveals that the Genitive possessive, not the Locational

possessive, is the prototypical possessive expression. There are two supporting reasons for this. First, the Genitive possessive is used regardless of the temporal properties of possession, while the Locational possessive is used only for temporary possessive relationships. Second, the Genitive possessive can take all types of nouns as its possessor, while the Locational possessive can only have nouns of the proper class.

Stassen (2013) points out that predicative possessives consisting of an existential verb might be transitivized, which he calls a HAVE-Drift. It should be emphasized that in Fijian a HAVE-Drift has not happened so far. In (27a) below, the subject is not the possessor but the possessed item, which is confirmed by the agreement. A bound pronoun at the left edge of a predicate never agrees with a possessor NP (27b).

(27) a. *E dua vei au na motokā*
3SG one to.PRP 1SG ART car
'I have a car'
b. * *Au dua vei au na motokā*
1SG one to.PRP 1SG ART car

This work focuses on predicative possession of Standard Fijian but it is worth noting that Vatulele Fijian, a Western Fijian dialect, has the same tendency. That is, the Genitive possessive can be said to be the default possessive type.

Abbreviations

1, 2, 3	1st, 2nd, 3rd person	GEN	genitive
III	noun class III	N	neutral
ANIM	animate	NEGV	negative verb
ART	article	PRES	present
ASP	aspect	PRP	proper
CLF	classifier	SG	singular
D	drinkable	TOP	topic
E	edible		

References

Dixon, R. M. W. (1988) *A grammar of Boumaa Fijian*. Chicago: The University of Chicago Press.

Geraghty, P. (2000) Possession in the Fijian languages. *Sprachtypologie und Universalien-furschung* 53 (3/4): 243-50.

Heine, B. (1997) *Possession: cognitive sources, forces and grammaticalization.* Cambridge: Cambridge University Press.

Kalinina, E. (1993) Sentences with non-verbal predicates in the Sogratl dialect of Avar. In: A. E. Kibrik (ed.), *The noun phrase in the Andalal dialect of Avar as spoken at Sogratl'*, 90-104. Strasbourg: Eurotyp Working Papers.

Lynch, J. (2001) Passive and food possession in Oceanic languages. In: A. Pawley, M. Ross and D. Tryon (eds.) *The boy from Bundaberg: studies in Melanesian linguistics in honour of Tom Dutton*, 193-214. Canberra: Pacific Linguistics.

Lynch, J., M. D. Ross and T. Crowley (eds.) (2002) *The Oceanic Languages*. Richmond, Surrey: Curzon Press.

Milner, G. B. (1956) *Fijian grammar*. Suva: Government Press.

Pawley, A. and T. Sayaba. (1990) Possessive-marking in Wayan, a western Fijian language: noun class or relational system? In: Jeremy H .CS. Davidson (ed.) *Pacific island languages: essays in honour of G. B. Milner*, 147-171. London/Honolulu: School of Oriental and African Studies, University of London/University of Hawaii Press.

Poppe, N. (1954) *Grammar of Written Mongolian*. (Porta linguarum orientalum, Neue Serie, 1.) Wiesbaden: Harrassowitz.

Samarin, W. J. (1967) *A Grammar of Sango*. The Hague: Mouton.

Sneddon, J. N. (1975) Tondano *Phonology and Grammar*. (Pacific Linguistics, Series B, 38.) Canberra: Australian National University.

Stassen, L. (2009) *Predicative possession.* Oxford: Oxford University Press.

_____ (2013) Predicative possession. In: Dryer, Matthew S. and Haspelmath, Martin (eds.) *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at http://wals.info/chapter/117, Accessed on 2021-11-1.)

Schütz, A. J. (2014) *Fijian Reference Grammar*. Honolulu: Pacific Voices Press.

フィジー語の叙述所有

岡本　進
（東京外国語大学大学院）

キーワード：フィジー語，所有，言語類型論

フィジー語の叙述所有は、類型論的に、所有者を斜格で標示する場所型 (私に本がある) であるとされてきた。しかし実際には、所有者を属格的形式で標示する属格型 (私の本がある) も観察される。両者の違いは所有関係の時間的特性によるものである。場所型は恒常性の低い所有関係に用いられ、譲渡不可能所有や全体部分、所有権関係にはなじまない傾向にある。それに加えて、場所型は、その名の示す通り場所と連続しており、必ずしも所有関係を表すわけではない。一方、属格型には時間的特性について制限がなく、必ず所有関係を含意する。場所型と属格型の相違には、意味的な要因に加え、所有者の名詞クラスも関わっており、場所型は人称代名詞・固有名詞の所有者しか許容しない一方、属格型にはそのような制限がない。このことから、フィジー語において属格型が原型的な叙述所有表現であるといえる。

On the *krije*-passive in West Frisian

SATA Hitoshi
(Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: West Frisian, West Germanic Languages, *Krije*-Passive, Corpus-Based Study

1. Introduction

Shimizu (2006) and Popkema (2018[2006]) have both given descriptions of West Frisian grammar, and recently, the Fryske Akademy[1] established *Taalportaal*, which allows anyone to view descriptions of West Frisian grammar online for free. However, there are no descriptions of the *krije*-passive in Popkema's (2018[2006]) grammar or on the *Taalportaal*, and although Shimizu (2006) mentions the *krije*-passive, the description is not comprehensive.

This paper analyzes examples of the *krije*-passive collected from the West Frisian corpora and details the characteristics of the *krije*-passive. This paper is structured as follows. After the introduction, Section 2 gives an overview of some previous studies on the *krije*-passive and equivalent forms in other Germanic languages, Section 3 raises some issues that need to be addressed, Section 4 explains the research methods, Section 5 analyzes the examples from the data, and Section 6 summarizes the characteristics of the *krije*-passive.

Before the discussion, an overview of the linguistic profile of West Frisian is provided. West Frisian (West Germanic, Germanic, and Indo-European) is spoken in the Province of Friesland and the western part of the Province of Groningen in the Netherlands, where around 300,000–400,000 native West Frisian speakers live. West Frisian is the second official language of the Netherlands, and all West Frisian speakers can also speak Dutch. See *Taalportaal* for more information.

2. Previous studies

Section 2.1 summarizes Shimizu's (2006) West Frisian *krije*-passive descriptions and the following sections give an overview of previous studies on similar forms in other Germanic languages. Section 2.2 summarizes Broekhuis et al.'s (2020) Dutch *krijgen*-passive description, and Section 2.3 summarizes Ozono's (2002) *bekommen*-passive in German.

2.1. Shimizu (2006)

The descriptions in this section are based on Shimizu (2006: 483–485, 489–490). The examples were translated into English by the author. The basic passive form in West Frisian is [PP + *wurde*/*wêze*]. *Wurde*, whose lexical meaning is "to become," is used as an auxiliary in the dynamic passive, while *wêze*, whose lexical meaning is "to be," is used as an auxiliary in the stative passive. Table 1 shows

[1] Fryske Akademy was established in 1938. Since then, research not only on Frisian language but also the society, culture and the history of Friesland has been conducted. See Shimizu (2018) for more information.

the standard inflections for these two passive auxiliaries.

Table 1: Standard inflections for passive auxiliaries *wurde* and *wêze*

wurde

	PRS	PST
1SG	*wurd*	*waard*
2SG	*wurdst*	*waardst*
3SG	*wurdt*	*waard*
PL	*wurde*	*waarden*

wêze

	PRS	PST
1SG	*bin*	*wie*
2SG	*bist*	*wiest*
3SG	*is*	*wie*
PL	*binne*	*wiene(n)*

In the (personal) passive, the original direct object in the active sentence is promoted to the subject and the original subject is demoted to the oblique, which is specified in the form [*troch* + NP] if necessary. (1) and (2) are respective examples of the dynamic passive and the stative passive.

(1) *De meanmasine waard troch twa hynder-s lutsen.* <Dynamic passive>
DEF.C lawn_mower.C WURDE.PST.3SG by two horse.N-PL draw.PP
"The lawn mower was drawn by two horses." (Shimizu 2006: 484)

(2) *De stoel is foar jo ornearre.* <Stative passive>
DEF.C chair.C WEZE.PRS.3SG for you prepare.PP
"The chair {is/has been} prepared for you." (Shimizu 2006: 486)

The original indirect object cannot be promoted to the subject in the *wurde*/*wêze* passive. When it is promoted to a passive subject, *krije*, whose lexical meaning is "to get," is used as the passive auxiliary. The semantic role for this type of passive subject is the beneficiary.

(3) *De boek-je-s mei de program-s foar de nij-e kursuss-en kin-st*[2]
DEF.PL book.N-DIM-PL with DEF.PL program-PL for DEF.PL new-PL course.C-PL can.PRS-2SG
fergees ta-stjoer-d krij-e.
for_free PRT-send-PP KRIJE-INF
"You can be sent for free the booklets with the programs for the new courses."
(Shimizu 2006: 490)

[2] The second person singular pronoun *do* should occur in this position. However, it is cliticized, and the resulting form is *kinsto*, or it does not appear in the spelling or pronunciation, if it follows the finite verb (Shimizu 2006: 163).

(4) *In groep-ke fan fjouwer of fiif minsken* *krige-t* *in tal*
INDF group.C-DIM of four or five people KRIJE.PRS-3SG INDF number.N
foarwerp-en *ta-skik-t.*
object.N-PL PRT-arrange-PP
"A group of four or five people is assigned a number of tasks." (Shimizu 2006: 490)

Table 2 shows the inflections for the auxiliary *krije*.

Table 2: Inflections in *krije*

	PRS	PST
1SG	*krij*	*krige/krych/kriich*
2SG	*krigest/krijst*	*krigest/krychst/kriichst*
3SG	*kriget/krijt*	*krige/krych/kriich*
PL	*krije*	*krigen*

This type of passive is referred to as the *krije*-passive in this paper.

2.2. Broekhuis et al. (2020)

In Dutch, *krijgen*, which is cognate with *krije*, is used as an auxiliary for the passive. This type of passive construction is referred to as the *krijgen*-passive by Broekhuis et al. (2020). The descriptions in this section are based on Broekhuis et al.'s (2020) descriptions of the *krijgen*-passive. The translations and interlinear glosses are cited from Broekhuis et al. (2020).

In the *krijgen*-passive, the original indirect object is promoted to the passive subject.

(5) a. *Marie* Subject *biedt* *hun* IO *het boek* DO *aan.*
Marie offers them the book PRT

a'. *Zij* Subject *krijgen* *het boek* DO *aan-geboden.*
they get the book PRT-offered
"They are offered the book."

b. *Jan* Subject *schonk* *hem* IO *een glas bier* DO *in.*
Jan poured him a glass beer PRT
"Jan gave (poured) him a glass of beer."

b'. *Hij* Subject *kreeg* *(door Jan)* *een glas bier* DO *in-geschonken*.
he got by Jan a glass beer PRT-poured
"He was given (poured) a glass of beer."

(Broekhuis et al. 2020, Example 114)

It has often been claimed that the use of the *krijgen*-passive is lexically defined. For example, the prototypical ditransitive verb *geven* "to give" cannot be passivized with *krijgen*.

(6) a. *Jan* Subject *geeft* *de kinderen* dat *een cadeautje* DO.
Jan gives the children a present
"Jan gives the children a present."

b. *Er* *werd* *de kinderen* IO *een cadeautje* Subject[3] *gegeven*.
there was the children a present given
"The children were given a present."

b'. **De kinderen* Subject *kregen* *een cadeautje* DO *gegeven*.
the children got a present given

(Broekhuis et al. 2020, Example 115, translated into English by the author)

However, it is assumed that the use of the *krijgen*-passive is syntactically defined because it is fairly productive.

As the verbs used in the *krijgen*-passive are a smaller subset of the verb set passivized with the auxiliaries *worden*/*zijn*[4], the *krijgen*-passive is less common than the regular passive. In an original active sentence, an indirect object is required, which means that the *krijgen*-passive is accepted with ditransitive verbs.

(7) a. Regular passive with an intransitive verb
Er *werd* *(door de jongens)* *gelachen*.
there was by the boys laughed
(translation unavailable in English)

[3] The indefinite passive subject remains in the original position and does not have to move to the preverbal position.
[4] Broekhuis et al. (2020) referred to this type of passive as the regular passive. In the regular passive, the original active direct object is promoted to the passive subject. The lexical meanings of *worden* and *zijn* are "to become" and "to be" respectively.

b. Regular passive with a transitive verb

De hond Theme *werd* (*door de jongens*) *geknuffeld*.
the dog was by the boys cuddled
"The dog was cuddled (by the boys)."

c. Regular passive with a ditransitive verb

De prijs Theme *werd* *de meisjes* goal (*door Jan*) *over-handigd*.
the reward was the girls by Jan PRT-handed
"The reward was handed to the girls (by Jan)."

c'. *Krijgen*-passive with a ditransitive verb

De meisjes goal *kregen* *de prijs* Theme (*door Jan*) *over-handigd*.
the girls got the reward by Jan PRT-handed
"The girls were handed the reward (by Jan)."

(Broekhuis et al. 2020, Example 116)

The ditransitive verbs that can be used in the *krijgen*-passive are divided "into four semantic subclasses on the basis of the semantic role of the indirect object: recipient/goal, source, benefactive and possessor." (Broekhuis et al. 2020)

A. Indirect object is the recipient/goal argument

These types of verbs denote "an event that involves or aims at the transmission of the referent of the theme[5] argument to the referent of the indirect object." (Broekhuis et al. 2020) See example (8). In addition, the transmission of information is regarded as a type of transmission. See example (9).

(8) a. *Marie biedt hem* goal *die boeken* Theme *aan*.
Marie offers him those books PRT
"Marie is offering him those books."

b. *Hij krijgt die boeken aan-geboden*.
he gets those books PRT-offered
"He is offered those books."

(Broekhuis et al. 2020, Example 117)

[5] In common, it is referred to as patient. It is a direct object in terms of syntax.

(9) a. *Peter deelde* $\boxed{\textit{ons}}$ goal *gisteren mee [dat hij ontslag neemt]* Theme.
Peter informed us yesterday PRT that he resignation takes
"Peter told us yesterday that he'll leave his job."

b. $\boxed{\textit{Wij}}$ *kregen gisteren mee-gedeeld [dat hij ontslag neemt].*
we got yesterday PRT-informed that he resignation takes
"We were told yesterday that he'll leave his job."

c. *Er werd* $\boxed{\textit{ons}}$ *mee-gedeeld [dat hij ontslag neemt].*
there was us PRT-informed that he resignation takes
"It was communicated to us that he'll leave his job."

(Broekhuis et al. 2020, Example 118)

"The majority of ditransitive verbs with a recipient/goal argument can undergo *krijgen*-passivization." (Broekhuis et al. 2020) See (10). The verbs in (10) denote an actual transmission of the theme argument. If used idiomatically, they cannot undergo *krijgen*-passivization.

(10) Ditransitive verbs with a goal object that allow *krijgen*-passivization

A: Transmission verbs

aanbieden "to offer," *aanreiken* "to hand," *betalen* "to pay," *bezorgen* "to deliver," *doneren* "to donate," *nabrengen* "to deliver subsequently," *opdragen* "to dedicate," *opleggen* "to impose," *opspelden* "to pin on," *overdragen* "to hand over," *overhandigen* "to pass over," *presenteren* "to present," *retourneren* "to return," *toedienen* "to administer," *toekennen* "to assign," *toemeten* "to allot," *toestoppen* "to slip," *toewijzen* "to assign," *uitbetalen* "to pay out," *uitreiken* "to hand," *vergoeden* "to reimburse," *voorschrijven* "to prescribe," *voorzetten* "to serve," and etc.

B: Communication verbs

bijbrengen "to teach," *meedelen* "to announce," *onderwijzen* "to teach," *toewensen* "to wish," *uitleggen* "to explain," *vertellen* "to tell," and *voorlezen* "to read aloud."

(Broekhuis et al. 2020, Example 119)

However, the verbs in (11) cannot undergo *krijgen*-passivization.

(11) Ditransitive verbs with a goal object that do not allow *krijgen*-passivization

A: Transmission verbs

geven "to give," *schenken* "to offer," *sturen* "to send," *verschaffen* "to provide," and *zenden* "to send."

B: Communication verbs

schrijven “to write,” *vertellen* “to tell/narrate,” and *zeggen* “to say.”

(Broekhuis et al. 2020, Example 121)

The prototypical ditransitive verb *geven* “to give” cannot undergo *krijgen*-passivization because *geven* “is neutral with respect to the mode of transmission.” (Broekhuis et al. 2020) However, *geven* can undergo *krijgen*-passivization if it co-occurs with a particle that adds sufficient information about the transmission mode.

(12) a. *Jan geeft* [*de kinderen*] goal *een cadeautje* Theme.
Jan gives the children a present
“Jan is giving the children a present.”

b. * [*De kinderen*] goal *kregen een cadeautje* Theme *gegeven*.
the children got a present given

c. [*De kinderen*] *kregen een cadeautje*.
the children got a present
“The children {were given/got} a present.”

(Broekhuis et al. 2020, Example 122)

(13) a. *Marie gaf* [*hem*] goal *het zout* Theme ***door*** / ***aan***.
Marie gave him the salt PRT / PRT
“Marie passed/handed him the salt.”

b. [*Hij*] goal *kreeg het zout* Theme ***door*** /?***aan*** *gegeven*.
he got the salt PRT / PRT given
“He was handed the salt.”

(Broekhuis et al. 2020, Example 123)

B. Indirect object is the source

These types of verbs cannot undergo *krijgen*-passivization. See example (14). Colleman (2006: 265), claimed that this was because the intended interpretation was incompatible with the meaning of *krijgen*. Similarly, verbs denoting a denial of transmission cannot undergo *krijgen*-passivization. See example (15). However, *krijgen*-passives for these types of verbs have been found on the internet and Standard Dutch speakers accept such examples. See example (16).

(14) a. *Jan pakte* [*Marie / haar*] Source *het boek* Theme *af*.
Jan took Marie / her the book PRT
"Jan took the book from Marie."

b. * [*Marie / zij*] Source *kreeg* *het boek* Theme *af-gepakt*.
Marie / she got the book PRT-taken

c. *Het boek* Theme *werd* [*Marie / haar*] Source *af-gepakt*.
the book was Marie / her PRT-take
"The book was taken from Marie."

(Broekhuis et al. 2020, Example 125)

(15) a. *Jan weigerde* [*haar*] *het boek*.
Jan refused her the book
"Jan denied her the book."

b. * [*Zij*] *kreeg* *het boek* *geweigerd*.
she got the book refused

c. *Het boek* *werd* [*haar*] *geweigerd*.
the book was her refused
"She was denied the book."

(Broekhuis et al. 2020, Example 126)

(16) a. *dat* [*hij*] *een levensverzekering* *geweigerd kreeg*.
that he a life.insurance refused got
"that he was refused life insurance."

b. *[een kliniek] waar* [*een kankerpatiënt*] *een abortus* *geweigerd kreeg*
a clinic where a cancer.patient an abortion refused got
"[a clinic] where a cancer patient was refused an abortion"

(Broekhuis et al. 2020, Example 127)

C. Indirect object is a benefactive

Only a few verbs belong to this type. These types of verbs can undergo *krijgen*-passivization. See example (17).

(17) a. *Jan schenkt* [*Els*] benefactive *een kop koffie* Theme *in*.
Jan pours Els a cup coffee PRT
"Jan pours Els a cup of coffee."

b. [*Els*] benefactive *krijgt een kop koffie* Theme *in-geschonken*.
Els gets a cup coffee PRT-poured
"Els was poured a cup of coffee."

(Broekhuis et al. 2020, Example 128)

D. Indirect object is a possessor

If the original indirect object is an inalienable possessor, the verb can undergo *krijgen*-passivization. See example (18). In this case, the possessor is considered to be a recipient of the theme argument. However, in example (19), the verb denotes that the theme argument is removed from the original indirect object; therefore, the verb cannot undergo *krijgen*-passivization; however, some passivization is possible in some regions.

(18) a. *Marie zet* [*hem*] possessor *het kind* ***op de knie***.
Marie puts him the child on the knee
"Marie is putting the child on his knee."

b. [*Hij*] possessor *krijgt het kind* ***op de knie*** *gezet*.
he gets the child on the knee put
"The child was put on his knee."

(Broekhuis et al. 2020, Example 129)

(19) a. *Peter trekt* [*hem*] possessor *een haar* ***uit zijn baard***.
Peter pulls him a hair out.of his beard
"Perer pulls a hair out of his beard."

b. * [*Hij*] *krijgt een haar* ***uit zijn baard*** *getrokken*.
he gets a hair out.of his beard pulled
"Someone (Peter) pulls a hair out of his beard."

(Broekhuis et al. 2020, Example 130)

E. Special case of the *krijgen*-passive

There are some examples in which the corresponding active constructions do not contain an indirect object. See example (20).

(20) a. *Ik stuur de hond op hem af.*
I send the dog on him PRT
"I set the dog on him."

b. *Hij kreeg de hond op zich af-gestuurd.*
he got the dog on REFL PRT-sent
"He was sent the dog."
(Broekhuis et al. 2020, Example 131, b. is translated into English by the author)

Verbs of transmission can undergo *krijgen*-passivization if the transmission mode is indicated and the indirect object referent is the recipient/goal of the transmission, the beneficiary, or the possessor. Therefore, *krijgen*-passivization is based on a productive syntactic rule rather than a lexical rule.

Broekhuis et al. (2020) also examined the demoted subject in the *krijgen*-passive; however, this is not addressed in this paper.

2.3. Ozono (2002)

German has a similar passive form to the *krije*-passive in West Frisian, the *bekommen*-passive, whose form is [PP + *bekommen*/*erhalten*/*krigen*]. The original meaning for these verbs is "to get." The descriptions in this section are based on the *bekommen*-passive descriptions in Ozono (2002). The German examples are translated into English by the author.

There are 64 *bekommen*-passive examples in Mannheimer Korpus 1, with the main past participle verb forms being *schenken* "to present, to give," *bieten* "to offer," *reichen* "to pass, to hand in," and so on. These three verbs are used in one-third of the examples; however, other than these verbs, verbs that denote giving or receiving in a broader sense are also used. See examples (21) and (22). This is probably because the original meaning of *bekommen*, which is "for the subject to receive the object," is compatible with verbs that denote giving or receiving.

(21) Receiving concrete material
Wir bekomm-en d-en Ohrschmuck-Ø ge-schenk-t […]
1PL.NOM KRIJE-1PL DEF-M.ACC ear_accessory.M-ACC PP-present-PP
"We are given the ear accessory." (Ozono 2002: 51)

(22) A little more abstract receiving (= communication)
D-er 75jährig-e Propst-Ø […] erhielt-Ø von d-er
DEF-M.NOM 75_year_old-M.NOM priest.M-NOM KRIJE.PST-3SG from DEF-F.DAT
Volkspolizei-Ø mit-ge-teil-t, daß […]
Volkspolizei.F-DAT PRT-PP-share-PP that.CONJ
"The 75-year-old priest was informed by the Volkspolizei that…" (Ozono 2002: 51)

Some examples have verbs that do not necessarily denote giving or receiving. In these cases, the verbs co-occur with prepositional phrases that define the place around the subject participant as the goal of the object. See example (23). The situation represented by the *bekommen*-passive can also be expanded from receiving a concrete object to receiving an abstract action. See example (24).

(23) The verb itself does not denote receiving

[…]	*eigentlich*	*müß-te-Ø*	*sie*	*jetzt*	*d-en*	*Kranz-Ø*	*um*
	actually	must.SBJV-PST-3SG	3SG.F.NOM	now	DEF-M.ACC	wreath.M-ACC	around

d-en	*Hals-Ø*	*ge-häng-t*	*krieg-en*
DEF-M.ACC	neck.M-ACC	PP-hang-PP	KRIJE-INF

" […] actually she must have hung the wreath around her neck by now" (Ozono 2008: 51)

(24) Receiving a more abstract action

[…]	*krieg-en*	*sie*	*meistens*	*d-ie*	*Tür-Ø*	*vor*	*d-er*	*Nase-Ø*	*zu-ge-knall-t*
	KRIJE-PL	3PL	usually	DEF-F.ACC	door.F-ACC	before	DEF-F.DAT	nose.F-DAT	PRT-PP-bang-PP

"They are often turned away at the door." (Ozono 2008: 53)

3. Issues to address

The following three issues are addressed in this paper;

i. When considering the *krije*-passive in West Frisian, is it meaningful to classify the verbs based on the semantic role of the indirect object as was done in Broekhuis et al. (2020)?
ii. How can the strange examples of the *krije*-passive in West Frisian be explained?
iii. What motivated the use of the *krije*-passive?

4. Corpora

I. *Korpus Sprutsen Frysk* (KSF)

Examples of the *krije*-passive were collected from the KSF, which is a corpus of 650,000 spoken West Frisian words developed by the Fryske Akademy and published online. The language data is classified based on four types of speech context monologues; news, reading, speech, and stories; and four types of multilogues; conversations, discussions, interviews, and meetings. Information about the 219 speakers (gender, education level, dialect, birth year, profession) is also included in each file.

The *krije*-passive examples were collected as follows:

i. each inflected form of the auxiliary *krije* was entered in the corpus search box;
ii. a search was conducted and the results collected; and
iii. *krije*-passives were searched for in the results.

Users of the KSF corpus must search each inflected form as it is not possible to search by lemmata. The auxiliary *krije* inflections are shown in Table 2.

In the KSF corpus, *krije* occurs 662 times, of which 17 examples (2.57%) are *krije*-passives.

II. *Nederlandse Volksverhalenbank* (NV)

Examples were also collected from texts written in (Wood[6]) Frisian in the NV, which contains various stories from the past to the present, such as fairytales, sagas, legends, riddles, and jokes. The *krije*-passives in this corpus were extracted from the approximately 1,600,000 words using the same process as used for the KSF.

Krije occurs 5,142 times in the NV corpus, of which 13 examples (0.25%) are *krije*-passives.

From these results, it was concluded that the *krije*-passive frequency is extremely low.

5. Analysis of the *krije*-passive

The verbs that use the *krije*-passive form are shown in the following by corpus, with the numbers in parentheses indicating the number of occurrences for each verb.

I. KSF

tastjoere (6) "to hand in, send," *oanbiede* (2) "to offer," *oansizze* (2) "to give notice," *taspylje* (2) "to pass," *oplizze* (1) "to enforce, to charge," *tamjitte* (1) "to assign," *tawize* (1) "to assign," *úttelle* (1) "to pay," *weromspilje* (1) "to play (the ball) back."

II. NV

tastjoere (3) "to hand in; to send," *betelje* (2) "to pay," *fergoedzje* (2) "to compensate," *útbetelje* (2) "pay," *bestelle* (1) "to bring," *foarsette* (1) "to feed," *omkeare* (1) "to turn (over)," and *útwiskje* (1) "to wipe out."

Ten of the 16 verbs appear to denote a physical act of giving or receiving a concrete object or information. These ten verbs are underlined in the list above. Below are some typical examples of these types of *krije*-passive. See examples (25)–(28).

[6] Wood Frisian (*Wâldfrysk* in West Frisian) is one of the dialects of West Frisian. It is spoken in the eastern part of Friesland. There are several dialects of West Frisian, but the difference between them is small.

(25) *As ik de ierpel-s broch-t-Ø, dan krig-e-Ø ik faak ek in*
if 1SG.NOM DEF.PL potato.C-PL bring-PST-1SG then get-PST-1SG 1SG.NOM often also INDF
sek-je mais bestel-d. Sa groei-de-Ø de handel.
sack.C-DIM corn.C bring-PP so grow-PST-3SG DEF.C trade.C
"When I brought the potatoes, I was also often given a sack of corn, too. That's the way the trade grew."

(NV: WOUDA00901)

(26) *hie-Ø ik trije artikel-en ta-stjoer-d krig-en dy't yn Boek stien-en […]*
have.PST-1SG 1SG.NOM three article.N-PL PRT-send-PP KRIJE-PP that.REL in book.N stand.PST-PL
"I was three articles that appear in the Book."

(KSF)

(27) *De man en de faam wakker priz-e doe't se al dy*
DEF.C man.C and DEF.C girl.C very_much praise-PST.PL when they already that.PL
lik-en yn 'e kelder seag-en en sy krig-e-(e)n
corpse.N-PL in DEF.C cellar.C see-PST.PL and 3PL.NOM KRIJE-PST-PL
in grou stik jild útbetell-e.
INDF large piece.N money.N pay-PP
"[…] and they were paid a large amount of money."

(NV: CJ062301)

(28) *75 minsken dy fûn-en fan 'e moarn de doar op slot en*
75 people that.PL find.PST-PL of DEF.C morning.C DEF.C door.C on lock.N and
kri-je ûntslach oansein.
KRIJE-PL dismissal.N give.notice.PP
"Seventy-five people found the door closed this morning and were dismissed."

(KSF)

The following examples, however, do not denote the transmission of concrete objects or information, and the semantic role of the subject is neither recipient, goal, or beneficiary. These examples appear to indicate that the auxiliary *krije* has, to some extent, lost its original lexical meaning, and is being grammaticalized. See examples (29)–(32).

(29) *troch it gewicht fan de agrarysk-e sektor ha-t de Frysk-e*
by DEF.N weight.N of DEF.C agrarian-C sector.C have-3SG DEF.C Frisian-C
ekonomy yn de 19e ieu wol ris it karakter oplein krig-en fan in
economy.C in DEF.C 19th century.C once DEF.N character.N assign.PP KRIJE-PP of INDF
monokultuer
monoculture.C
"From the weight of the agricultural sector, the Frisian economy in the nineteenth century was seen as having monocultural characteristics."

(KSF)

(30) *As wy de ko oan 'e Heare jouw-e, krij-e wy 't dûbel fergoed-e.*
if we DEF.C cow.C on DEF.C Lord.C give-PL KRIJE-PL we DEF.N double compensate-PP
"If we give the cow to the Lord, we are compensated twice."

(NV: CJ117507)

(31) *[…] wêrby't it Frysk net it twadderangs plak*
whereby DEF.N Frisian_language.N not DEF.N second-class place.N
tametten krije mei
assign.PP KRIJE-INF may.3SG
"[…] whereby Frisian may not be assigned the second-class place."

(KSF)

(32) *Mei grut lijen krig-en se him op it lêst omkear-d.*
with great.N pain.N KRIJE.PST-PL they him on DEF.N last.N turn_over-PP
"With great pain, they had it turned over at last."

(NV: CJ022701)

Example (33) appears to be an atypical example of the *krije*-passive.

(33) An atypical *krije*-passive?
In bloedplak dat troch moard ûntstien is,
INDF blood_stain.N that.REL by murder.C arise.PP be.3SG
kin men net útwisk-e krij-e.
can.3SG one not wipe_out-PP KRIJE-INF
"A bloodstain that was made by murder cannot be wiped out."

(NV: CJ099417)

Ozono (2002) argued that when a verb that does not denote the receiving of concrete objects is used in the *bekommen*-passive, a prepositional phrase expressing a place near the subject co-occurs. However, in example (33), there is no such prepositional phrase. Broekhuis et al. (2020) gave some *krijgen*-passive examples that did not have a recipient as the original indirect object in the corresponding active sentence. See B, C, and D in subsection 2.2. The *krije*-passive occurrence in example (33) seems to be related to the situation in Dutch. The fact that the indefinite pronoun *men* is the subject of the sentence is remarkable; however, this is the only atypical *krije*-passive example that was found. Although it is not clear if the *krije*-passive can be broadly used, its denotation may be able to be broadened to receiving an abstract action as was argued by Ozono (2002) when discussing the *bekommen*-passive in German.

Is it meaningful to classify verbs based on the semantic role of the indirect object as described by Broekhuis et al. (2020)? I consider it is not meaningful. Broekhuis et al. (2020) implied that a verb that had an indirect object as the source had a tendency not to be passivized by *krijgen* in Dutch and that, in some cases, even if the original active sentence had no indirect object, the *krijgen*-passive was still possible. Broekhuis et al. (2020) gave some examples of this type, which implied that it was possible to classify verbs based on the semantic role of the indirect object. However, here I conclude that the denotation of the *krije*-passive in West Frisian can be broadened from getting and receiving a concrete object to receiving an abstract action, as was argued by Ozono (2002) when discussing the *bekommen*-passive in German. Thus, the *krije*-passivization may be possible regardless of the semantic role of the indirect object.

What motivates the use of the *krije*-passive? See example (25) again. Both in the *as* "if" clause and in the main clause, the subject is *ik* "I." One of the reasons the *krije*-passive may have been used here was to keep the subject consistent across the whole sentence or in a portion of the discourse.

The *krije*-passive can also be used to attract attention to the recipient as in example (34).

(34) *Hans Vonk* *ha-t* *de bal* *ta-spil-e krig-en*

PN have-3SG DEF.C ball.C PRT-play-PP KRIJE-PP

"Hans Vonk was passed the ball."

(KSF)

This sentence appears to have been uttered by a reporter at a football game with the intent of drawing attention to the player (Hans Vonk). Therefore, the reporter used the *krije*-passive to put the player in the subject position.

6. Conclusions

In summary, this paper examined three properties for the use of the *krije*-passive in West Frisian.

i. The *krije*-passive is grammaticalized and productive to some extent, that is, its denotation may be broadened from getting or receiving a concrete object to receiving an abstract action.
ii. However, the *krije*-passive frequency in West Frisian is much lower than its equivalent in German and Dutch.
iii. Some reasons why the *krije*-passive is used are (a) to keep the subject consistent across the whole sentence or in a portion of the discourse; and (b) to draw attention to the recipient.

Abbreviations

1, 2, 3	1st, 2nd, 3rd person	NOM	nominative
ACC	accusative	PL	plural
C	common gender	PN	proper noun
CONJ	conjunction	PP	past participle
DAT	dative	PRS	present
DEF	definite	PRT	particle
DIM	diminutive	PST	past
F	feminine	REL	relative
INDF	indefinite	SBJV	subjunctive
INF	infinitive	SG	singular
KRIJE	auxiliary *krije* and its equivalent in other languages	WEZE	auxiliary *wêze* and its equivalent in other languages
M	masculine	WURDE	auxiliary *wurde* and its equivalent in other languages
N	neuter		

References

Broekhuis, Hans, Norbert Corver and Riet Vos (2020) 3.2.1.4. The *krijgen*-passive. *Taalportaal*. http://www.taalportaal.org/taalportaal/topic/link/syntax____Dutch__vp__V3_alternations__V3_alternations.3.2.1.4.xml. (Accessed November 24, 2021).

Colleman, Timothy (2006) *De Nederlandse datiefalternatie. Een constructioneel en corpusgebaseerd onderzoek.* Thesis, Ghent University.

Ozono, Masahiko (2002) Kopasu ni yoru *bekommen* judo bunseki [An Analysis of *bekommen*-Passive with Corpus]. In: Yasushi Iguchi (ed.) *Möglichkeiten Korpusbasierter Untersuchungen zur Syntax*. Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 9: 47–59. Tokyo: Japanische Gesellschaft für Germanistik.

Popkema, Jan (2018[2006]) *Grammatica Fries*, *tweede druk*. Leeuwarden: Afûk.

Shimizu, Makoto (2006) *Grammatika fan it Westerlauwersk Frysk: In systematyske beskriuwing fan*

in moderne Noardseegermaanske taalstruktuer. Sapporo: Hokkaido University Press.

_____ (2018) Fryske Akademy to Furizia-go no yogo [Fryske Akademy and the protection of the Frisian language]. *Dokugo-Dokubungaku Kenkyu Nenpo [Jahresbericht des Germanistischen Seminars der Hokkaido Universität]* 44: 105–126.

Corpora

Korpus Sprutsen Frysk https://www1.fa.knaw.nl/ksf.html (Accessed November 30, 2021)

Nederlandse Volksverhalenbank https://www.verhalenbank.nl/ (Accessed November 30, 2021)

西フリジア語の krije 受動に関する研究

佐田　陸
（東京外国語大学大学院）

キーワード：西フリジア語，西ゲルマン諸語，krije 受動，コーパス調査

本稿では，西フリジア語の krije 受動に関する分析を行う．西フリジア語の文法については，これまで清水 (2006) や Popkema (2006[2018]) などが記述を行っており，さらに近年，Fryske Akademy が *Taalportaal* の名で誰でも容易に参照できるポータルサイトを整備している．しかし，殊，krije 受動の記述ということに関しては，Popkema (2006[2018]) や Taalportaal は全く触れておらず，清水 (2006) も部分的に言及しているのみである．

本稿では，Fryske Akademy が公開している西フリジア語の口語コーパス，ならびに西フリジア語で書かれた物語のデータベースから収集したデータに基づき，西フリジア語の krije 受動の実態を探る．同系統のドイツ語，およびオランダ語の krije 受動相当形式に関する先行研究も適宜参照し，西フリジア語の krije 受動との異同を概観する．そして，調査・分析を通じ，次の 3 点を示す：(i) krije 受動はある程度まで文法化が進み生産的な形式となっており，その意味は具体的な物の受容から抽象的な行為の受容へと拡大しつつある，(ii) とはいえ，その出現頻度はドイツ語，オランダ語における相当形式よりも低い，(iii) krije 受動を使用する動機付けとして，(a) 主語を文全体，あるいは一纏まりの談話において一貫させること，(b) 聞き手・読み手の注意を受取手に向けさせることなどが考えられる．

Questions in Papiamentu

Patricio Varela Almiron
(Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Papiamentu, Creole Languages, Question words, Prepositions

0. Introduction

In this paper[1] I describe the multiple uses of interrogative pronouns and adverbs (question words) in Papiamentu, focusing on some secondary uses that have not been described and the difference between words with the "same meaning". The frequency of question words used together with prepositions will be provided when possible. I also briefly describe the relationship between *ta* (copula/TAM marker/focus marker) and questions.

I utilize the Curaçaon spelling for this paper since it is more phonologically accurate than the etymological spelling. All examples using other spellings (including the ones from other pieces of research) have been modified to be consistent with this paper. The use of cursive and bold letters is based on the topics of this paper and is not necessarily present in the original sources. I have also slightly modified the use of punctuation in some examples taken from corpora in order to make them easier to read.

In section 1, I introduce some general facts about word order and questions in Papiamentu. In section 2, I summarize the previous research on Papiamentu questions in general and question words. In section 3, I present my analysis of how question words are used in Papiamentu and I provide data of which prepositions tend to precede which question words. In section 4, I briefly describe how focal *ta* (also known as "emphatic *ta*") is used in interrogative sentences. In section 5, I present my conclusions.

1. Background knowledge

Papiamentu has an SVO word order in unmarked contexts. For yes/no questions, the word order is the same as in declarative sentences and the only distinction between the two is that questions have a rising pitch on the final syllable and no downdrift (Kouwenberg and Murray 1994: 35). This paper will focus on interrogative pronouns and adverbs which are usually fronted and can be preceded by the so-called "emphatic *ta*" (which also works as the non-past copula and a preverbal marker expressing the imperfective). I will cite some information regarding the interrogative pronouns and adverbs from previous research and attempt to cover most functions/uses of each element, as well as point out which prepositions can control them.

[1] This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP21J10486.

2. Previous research

2.1. Questions in Papiamentu

2.1.1. Interrogative sentences in Papiamentu

Luidens et al (2015: 99) divide interrogative contructions in direct and indirect interrogative sentences. The following (1) and (2) are examples of each type of sentence.

(1) ***Ken*** *a yama mi na mi selular?* (direct type)
who PFV call 1SG at 1SG cellphone
"Who called me to my cellphone?" (Luidens et al 2015: 99)

(2) *Mi no sa mas* ***kiko*** *pa mi hasi pa por komplas=é.* (indirect type)
1SG NEG know more what for 1SG do for can please=3SG
"I don't know what else to do in order to please him/her." (Luidens et al 2015: 99)

As it can be seen in (2), Luidens et al (2015: 99) consider the usage of interrogative pronouns and adverbs in subordinate clauses as expressing an indirect question.

Luidens et al (2015: 100) further subdivide direct interrogative sentences into yes/no questions and interrogative sentences with an interrogative pronoun or adverb. Yes/no questions have the same word order as their declarative counterparts. See (3) and (4).

(3) *E mucha a pasa su eksamen eksitosamente?*
ART.DEF youngster PFV pass 3SG.POSS exam successfully
"Did the young man/woman pass his/her exam successfully?" (Luidens et al 2015: 100)

(4) *E mucha a pasa su eksamen eksitosamente.*
ART.DEF youngster PFV pass 3SG.POSS exam successfully
"The young man/woman passed his/her exam successfully." (Luidens et al 2015: 100)

In interrogative sentences with an interrogative pronoun or adverb, these question words ask about a specific part of the sentence. See (5)-(7).

(5) ***Ken*** *a yama Buchi na telefon ayera?* (interrogative pronoun as subject)
who PFV call PN at telephone yesterday
"Who called Buchi by phone yesterday?" (Luidens et al 2015: 101)

(6) ***Kiko*** *e yùfrou a bisa=bo siman pasá?* (interrogative pronoun as direct object)
what ART.DEF lady PFV say=2SG week last
"What did the lady tell you last week?" (Luidens et al 2015: 101)

(7) ***Kon*** *bo por a subi e dak di e kas ei?* (interrogative adverbial)
how 2SG can PFV lift ART.DEF roof of ART.DEF house there
"How can you lift the roof of that house?" (Luidens et al 2015: 101)

Kouwenberg and Murray (1994: 36) show that a prepositional phrase with a question word can be preposed as in (8).

(8) *Ta* ***te na unda*** *e bùs aki ta bai?*
COP until at where ART.DEF bus here IPFV go
"How far does this bus go?"
(Todd Dandaré (1978), cited in Kouwenberg and Murray(1994: 36))

Luidens et al (2015: 101) also point out that "direct" interrogative sentences can be used as rhetorical questions. These types of questions usually express disapproval (9), irritation (10), or orders (11).

(9) *Bo kabes un ta bon?* (disaproval)
2SG head NEG COP good
"Your head isn't straight?" (Luidens et al 2015: 101)
(10) *Bo kier a keda keto, por fabor?* (irritation)
2SG want PFV stay quite please
"Could you be quite, please?" (Luidens et al 2015: 101)
(11) *Bo por ta asina bon di sali for di akiden?* (order)
2SG can COP that good of go_out from of here
"Could you be so good to leave?" (Luidens et al 2015: 101)

According to Luidens et al (2015: 103), all interrogative sentences can be emphasized by the use of *ta*. See (12) and (13).

(12) ***(Ta)*** *Marcia a laga traha un kash=i kushina nobo?*
FOC PN PFV let work ART.INDEF cupboard=of kitchen new
"Did Maria get a new kitchen cupboard done?" (Luidens et al 2015: 103)
(13) ***(Ta)*** *ken a yama Buchi na telefon ayera?*
FOC who PFV call PN at telephone yesterday
"Who called Buchi by phone yesterday?" (Luidens et al 2015: 103)

Kouwenberg and Murray (1994: 35) refer to this use of *ta* as the "copula/focus marker".

2.1.2. Question words in Papiamentu

As seen in Luidens et al (2015), question words are divided into interrogative pronouns and interrogative adverbs.

According to Departamento di Enseñansa Aruba (2010: 60), interrogative pronouns can be used independently in direct interrogative sentences, or as part of a subordinate phrase in indirect interrogative sentences. The following are the interrogative pronouns in Papiamentu: *ki/kiko* "what", *kua/kual* "which", and *ken/kende* "who"[2].

Interrogative adverbs introduce a sentence whose answer is an adverbial complement (Departamento di Enseñansa Aruba 2010: 29). *Kon* "how", *kuantu* "how much/how many", *dikon* "why", *pakiko* "why", *pasikiko* "why", *(na) unda* "where" are provided as examples of interrogative adverbs.

Kouwenberg and Murray (1994: 36) provide further examples of interrogative adverbs: *ki ora* "when / what time" (lit. which hour), *ki dia* "when / which day" (lit. which day), *ki tempu* "when" (lit. which time), *pa unda* "which way" (lit. for where). They also point out that *kua*, *kual*, and *ki* can be used in an adjectival way (as is shown in the complex adverbs *ki ora*, *ki dia*, and *ki tempu*).

3. Analysis of question words in Papiamentu

This analysis is based on samples of both spoken[3] and written[4] Papiamentu. In order to analyze the relationship between prepositions and question words, separate from the spoken and written samples of data, I have also taken examples from the Papiamento Corpus from the Leipzig Corpora Collection[5], which is composed of examples taken from Papiamentu newspapers. Hereafter, the source of the examples will be provided as follows: "Spoken data" for the transcribed data, "Written data" for the collection of news articles from the Curaçaoan newspaper "Èxtra", and "Corpus data data" for the Papiamento Corpus from the Leipzig Corpora Collection.

In this paper, I classify question words as in Table 1 below. I will use uppercase to represent a set of question words. Most sets are comprised of only one member but some sets have two or three. Since *ki* "what" can modify nouns unlike *kiko* "what", these two will be counted separately.

---

[2] Question words in Papiamentu might have more than one phonological realization. These realizations will be dealt with in section 3.

[3] For the spoken data, I had a native speaker J.C. (Year of birth: 1990; Sex: male; Place of birth: Curaçao; Second language(s): English, Dutch, Spanish) transcribe the dialogs of the show "Djis un tiki love". "Djis un tiki love" is a television show filmed in Curaçao in 2016, spoken mostly in Papiamentu. The transcription of the whole series (8 episodes in total, each of an average 25 minutes length) consists of approximately 40,000 words.

[4] For the written data, I collected the articles of five versions of the Curaçaoan newspaper "Èxtra" published in 2019. All the text was converted from image to text using the OCR function on Google Drive. I included only the articles and excluded the subtext below photos (unless they stand as a single article) and commercials (commercials presented as articles were not excluded). This data consists of approximately 121,300 words. Even though "Èxtra" is a newspaper from Curaçao, the news coming from Aruba seem to be written in the Aruban spelling. There are also news from Bonaire, but it is not clear whether their spelling is the Bonairean or the Curaçaoan variety.

[5] The Leipzig Papiamento Corpus (https://corpora.uni-leipzig.de/en?corpusId=pap_newscrawl_2011) consists of materials gathered up until 2011 from Papiamentu Newspapers. This corpus consists of 301,921 sentences, 111,738 types, and 6,183,663 tokens.

Kende “who” has a lower frequency than *ken* “who” and seems to be mainly used in subordinate clauses, therefore these two will also be counted separately. Nevertheless, since both *ki* “what” and *kiko* “what” have many similarities, they will be dealt with in the same section. The same applies to *ken* “who” and *kende* “who”; *ki dia* “when”, *ki ora* “when” and *ki tempu* “when”; as well as *pakiko* “why” (derived from *pa* “for” and *kiko* “what”) and *dikon* “why” (derived from *di* “of” and *kon* “how”).

Table 1: Classification of question words in Papiamentu

Question word	Realizations	Meaning	Noun modifier function
KIKO	*kiko*	what	no
KI	*ki*	what	yes
KEN	*ken*	who	no
KENDE	*kende*	who	no
KUAL	*kua, kual*	which	yes
KON	*kon*	how	no
UNDA	*unda*	where	no
KI DIA	*ki dia*	when	no
KI ORA	*ki ora*	when	no
KI TEMPU	*ki tempu*	when	no
KUANTU	*kuantu*	how much, how many	yes
PAKIKO	*pakiko, pasikiko*[6]	why	no
DIKON	*dikon*	why	no

In this paper, I will mainly focus on prepositions that can control phrases (not clauses) and have no other function. I will use the samples of spoken and written data to analyze the general use of each question word and the corpus data to analyze the co-occurrence of those words with prepositions.

I consider *den* “in”, *entre* “among”, *for di/fo’i* “from”, *kontra* “against”, *na* “at”, *over* “about”, *(a)riba* “on/about”, *te* “until”, and *tokante* “about” to be pure prepositions which can only take noun phrases. In addition to these *dilanti* “in front of” can also function as a preposition as in (14), as well as an adverb as in (15). Since these two uses seem to be easily distinguished, I will also deal with their use.

(14) *Un problema ku a inisiá na trùk di pan*
ART.INDEF problem that PFV start at truck of bread
a bin kulminá ***dilanti*** *Bar Buraku.*
PFV come end in_front PN
“A problem that started at a food truck ended up in front of Bar Buraku.” (Corpus data)

[6] This form derives from the phrase *pa hasi kiko* “to do what”.

(15) *Un ehèmpel ku a bin* ***dilanti*** *ta*
ART.INDEF example that PFV come forward COP
e manera ku partido MAN a mira e kaso aktual.
ART.DEF way that party PN PFV look ART.DEF case current
"An example that has come forward is the way that the MAN party has looked at the current case." (Corpus data)

While *ku* "with" can also be said to belong to the group of "pure prepositions" (16), it is identical in form to the complementizer *ku* "that" (17) and they can be formally distinguished when preceding the third person singular pronoun *e*, in which case the prepositional *ku* is realized as *kun*, yielding *kun=e* "with him/her".

(16) *Kampionato di sòftbòl femenino AA a kontinuá ayera* ***ku*** *4 partido.*
championship of softball feminine PN PFV continue yesterday with 4 match
"Women's softball championship AA continued yesterday with 4 matches." (Corpus data)
(17) *Pero ora nan puntra si bo a tende, bisa nan* ***ku*** *no a tende kaba.*
but time 3PL ask if 2SG PFV hear say 3PL that NEG PFV hear already
"But when they ask if you heard, tell them you did not hear yet." (Corpus data)

As for *di* "of" and *pa* "for", they can act both as a preposition (18, 20) and as a complementizer (19, 21), and distinguishing both uses is not simple.

(18) *Direktor* ***di*** *Fundashon Sedreko*
director of foundation PN
"Director of the Sedreko Foundation" (Corpus data)
(19) *Lorito a topa un hende ku a kaba* ***di*** *yega for di Ulanda (...)*
Lorito PFV run_into ART.INDEF people that PFV just_done of arrive from PN
"Lorito ran into a person who had just come from the Netherlands (...)" (Corpus data)
(20) *Eksepshon* ***pa*** *hende=nan lokal ku ke inisiá un negoshi propio.*
exception for people=PL local that want start ART.INDEF business own
"Exception for local people who want to start their own business." (Corpus data)
(21) *Sino* ***pa*** *semper keda keto.*
instead for always stay still
"But instead to always stay still." (Corpus data)

The uses of each preposition can be seen in Table 2 below. In this section, I will provide the number of examples of the combinations of the pure prepositions and the prepositional use of *dilanti* with the question words provided in Table 1.

Table 2: Clasification of prepositions in Papiamentu

Preposition	Meaning	Adverbial use	Complementizer use
den	in	no	no
entre	between/among	no	no
for di	from	no	no
kontra	against	no	no
na	at	no	no
te	until	no	no
over	about	no	no
(a)riba	on / about	no	no
tokante	about	no	no
dilanti	in front of	**yes**	no
ku	with	no	**no***
di	of	no	**yes**
pa	for	no	**yes**

In each section below, I describe the uses of each question word and by which prepositions they were preceded in the corpus data.

3.1. KIKO and KI "what"

Both *KIKO* and *KI* can be translated as "what". *KIKO* comes from *ki kos* (lit. what thing). This etymology might be related to the fact that *KIKO* cannot be used as a modifier to a noun while *KI* can. This was seen before in constructions like *KI ORA* "when / what time" where *KI* cannot be replaced by *KIKO* (**kiko ora*).

In my data of spoken Papiamentu, both *KI* and *KIKO* can be seen used as independent interrogative pronouns. See (22) and (23) for examples of *KI* and *KIKO* respectively.

(22) ***Ki*** *bo ke bebe?*
what 2SG want drink
"What do you want to drink?" (Spoken data)

(23) ***Kiko*** *el a bisa=bu?*
what 3SG PFV say=2SG
"What did he/she tell you?" (Spoken data)

While in most cases KI and KIKO are used to ask about the direct object like (22) and (23), there are some examples of them being used to ask about the subject like (24) and (25).

(24) *Ta* ***ki*** *ta pasa-ndo?*
FOC what IPFV happen-GER
"What is happening?" (Spoken data)

(25) *Pero* ***kiko*** *a pasa presis?*
but what PFV happen exactly
"But, what happened exactly?" (Spoken data)

In my written data of Papiamentu, there was not a single example of *KI* being used independently. This coincides with J.C.'s opinion that *KI* being used on its own (i.e. not as a modifier) is restricted to informal registers. It should be noted that nevertheless, the journalistic genre in Papiamentu seems to rarely make use of direct questions, so this analysis might be skewered.

Both *KI* and *KIKO* can be used in a set phrase where the meaning of "what" seems to be lost. See (26).

(26) *(...) anto* ***ki ku ta*** *ki señora mester*
and what that COP what madam need
señora por yama=mi e or=ei libremente.
madam can call=1SG ART.DEF time=there freely
"(...) and in any case, whatever that you need, you can call me freely then." (Spoken data)

According to J.C., *ki ku ta* (or *kiko ku ta*) is used to mean "in any case". The second *KI* is used in order to create the phrase *ki señora mester* "whatever you need" (lit. what madam need. *Señora* "madam" functions as a second person pronoun in this context).

Regarding *KI*, this pronoun is homophonous with a reduction of the word *aki* "here", used sometimes in spoken Papiamentu. The full form *aki* is used in both spoken and written Papiamentu. It is not clear what triggers the use of the reduced form *ki*. See (27).

(27) *E dia=nan* ***ki*** *mi ta topa yen hende di antes.*
ART.DEF day=PL here 1SG IPFV encounter lot people of before
"These days I meet a lot of people from my past." (Spoken data)

There were examples of the [preposition + *KIKO*] construction in the corpus data which can be summarized as seen in Table 3.

Table 3: Number of occurrences of [preposition + *KIKO*][7]

Expression	Number of occurrences	Percentage
(a)riba KIKO	104	1.83
na KIKO	30	0.53
den KIKO	23	0.40
tokante KIKO	14	0.25
over KIKO	7	0.12
for di KIKO	3	0.05
entre KIKO	0	0.00
kontra KIKO	0	0.00
te KIKO	0	0.00
dilanti KIKO	0	0.00
KIKO (total)	5,668	100.00

KIKO was mostly preceded by *(a)riba* "on/about". It is remarkable that the prepositions *tokante* and *over* which can both be translated to "about" rarely precede *KIKO*. This difference might be because *(a)riba* still has the spacial meaning of "on" which can be used in a broader context while the other two prepositions can only be used in a very specific, abstract meaning. For example, while *(a)riba* can be seen as synonymous to *tokante* and *over* in (28), the same cannot be said about (29). In the Leipzig Corpus, there were no examples of *basa* "base" being used with *tokante* or *over*, but plenty with *(a)riba*.

(28) *No tabata posibel haña mas detaye* ***riba kiko*** *eksaktamente lo bai hasi awor aki.*
NEG IPFV.PST possible get more detail on what exactly IRR go do now here
"It was not possible to find more details on what exactly will be done right now."
(Corpus data)

(29) *Basa* ***riba kiko*** *bo ta bisa esaki?*
base on what 2SG IPFV say this
"Based on what do you say this?" (Corpus data)

While the preposition *na* is usually used to express a place where an action occurs, when preceding *KIKO* it seems to express the dative. It should be noted that Papiamentu does not usually use this preposition for recipients of verbs of giving, nor destinations of verbs of movement. See (30).

(30) *Tur hende a kuminsá buska* ***na kiko*** *e partido aki por a mara Boneiru.*
all people PFV start search at what ART.DEF party here can PFV tie PN
"Everybody started looking to what this party tied Bonaire with." (Corpus data)

[7] The total number of occurrences includes context where the corresponding question word is not preceded by any preposition.

The expression [*den KIKO*] seems to be used in a metaphorical sense not expressing a concrete place but rather an institution or a state, as in example (31).

(31) *Segun Carlos Monk, gobièrnu tin derechi di skohe*
according_to PN government have right of choose
den kiko *i kua proyekto e ta partisipá finansieramente.*
in what and which project 3SG IPFV participate financially
"According to Carlos Monk, the government has a right to choose in what and which projects it participates financially." (Corpus data)

The expression [*for di KIKO*] can be used in a metaphorical sense. It seems that prepositions with a spatial meaning are highly unlikely to be used with their literal sense when preceding *KIKO*. See (32).

(32) *Lòs* ***for di kiko*** *tur hende ta pensa di*
separate from what all people IPFV think of
e dia aki un kos ta sigur: (...)
ART.DEF day here ART.INDEF thing COP sure
"Apart of everything that everybody thinks about this day one thing is sure: (...)"
(Corpus data)

Concerning the [preposition + *KI*] construction, the examples taken from the corpus data can be summarized as seen in Table 4.

Table 4: Number of occurrences of [preposition + *KI*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
den KI	87	5.85
na KI	35	2.35
(a)riba KI	15	1.01
te KI	4	0.27
for di KI	3	0.20
over KI	1	0.06
entre KI	0	0.00
kontra KI	0	0.00
tokante KI	0	0.00
dilanti KI	0	0.00
KI (total)	1,487	100.00

Since in spoken Papiamentu *KI* seems to be used almost exclusively as a noun modifier, the prepositions it takes are determined by the noun it modifies. Thus yielding results that are

strikingly different from *KIKO*. (33) is an example of an NP containing *KI* preceded by a preposition.

(33) *Gobièrnu mester indiká klaramente* ***den ki direkshon*** *kier bai ku ADC.*
government must show clearly in what direction want go with PN
"The government must show clearly in what direction they want to go with ADC."
(Corpus data)

The fact that *KI* is used as a noun modifier also means that the prepositions preceding it can express a literal spatial meaning as in (34). Prepositions preceding *KI* can have a metaphorical meaning as well.

(34) *No ta konosí* ***riba ki boto*** *òf di*
NEG COP know.PSTPTCP on what boat or of
ki nashonalidat e persona=nan abordo ta.
what nationality ART.DEF people=PL onboard COP
"It is not known on what boat or of what nationality the people onboard are." (Corpus data)

3.2. *KEN* and *KENDE* "who"

Both *KEN* and *KENDE* mean "who" in questions. In most examples in my spoken data set of Papiamentu, *KEN* and *KENDE* are used to ask about the subject (35) but there are some instances where it is used to ask about the object (36) or a noun governed by a preposition (37). It should be noted that in the spoken variety of Curaçaoan Papiamentu *KENDE* seems not to be used since there was not a single example in the spoken data. J.C. also pointed out that *KENDE* is rarely used in the Curaçaoan dialect.

(35) ***Ken*** *ta bai hasi un kos asina ku un hende?*
who IPFV go do ART.INDEF thing like_this with ART.INDEF person
"Who goes and does a thing like this with somebody?" (Spoken data)

(36) *Pero ta* ***ken*** *b=a bèl anto?*
but FOC who 2SG=PFV call then
"But who did you call then?" (Spoken data)

(37) *Ku* ***ken*** *bo kemen, Sharlon?*
with who 2SG mean PN
"With whom do you mean, Sharlon?" (Spoken data)

Just like *KI* and *KIKO*, *KEN* can be used in a set phrase with *ku ta* to mean "anybody", as in (38).

(38) *E no ta sali ku* ***ken ku ta***.
3SG NEG IPFV go_out with who that COP
"He/she does not go out with anybody." (Spoken data)

There were some examples of *KENDE* being used in the written data which seem to be used to create non-restrictive relative clauses. See example (39).

(39) *Curry* ***kende*** *a partisipá na seis okashon den wega di tur strea=nan (...)*
PN who PFV participate at 6 time in game of all star=PL
"Curry, who participated six times in the game of all stars (...)" (Written data)

Regarding the [preposition + *KEN*] construction, the number of examples can be summarized as seen in Table 5.

Table 5: Number of occurrences of [preposition + *KEN*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
(a)riba KEN	21	1.05
na KEN	18	0.90
kontra KEN	16	0.80
for di KEN	6	0.30
den KEN	2	0.10
tokante KEN	2	0.10
te KEN	1	0.05
over KEN	1	0.05
entre KEN	0	0.00
dilanti KEN	0	0.00
KEN (total)	1,994	100.00

KEN contrasts with *KI* and *KIKO* because while it takes prepositions much more rarely, it takes almost all possible types of prepositions. It is worth mentioning that [*na KEN*] is used as a dative expression as in (40).

(40) *Un suplika ta bai* ***na ken*** *ku por a mira*
ART.INDEF request IPFV go at who that can PFV see
moveshon sospechoso di un persona (...)
movement suspicious of ART.INDEF person
"A request goes to anyone who could have seen suspicious movements of a person (...)"
(Corpus data)

KEN can also be preceded by *for di* "by", expressing the meaning "from whom" as in (41). Or it can also create a larger NP where *KEN* modifies another noun preceded by the possessive third-person *su* (42).

(41) *No ta interesa=mi* ***for di ken*** *nan a kumpr=é òf unda nan a pone.*
NEG IPFV concern=1SG from who 3PL PFV buy=3SG or were 3PL PFV put
"I do not care from whom they bought it or where they put it." (Corpus data)

(42) ***For di ken i riba ken su kustia*** *nos kier sak=é?*
from who and on who 3SG.POSS pocket 1PL want take=3SG
"Out of whose and from whose expense do we want to take it?" (Corpus data)

In Table 6, I present the data regarding the number of occurrences of the [preposition + *KENDE*] construction.

Table 6: Number of occurrences of [preposition + *KENDE*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
na KENDE	19	1.01
(a)riba KENDE	4	0.21
den KENDE	1	0.05
kontra KENDE	1	0.05
entre KENDE	0	0.00
for di KENDE	0	0.00
te KENDE	0	0.00
over KENDE	0	0.00
tokante KENDE	0	0.00
dilanti KENDE	0	0.00
KENDE (total)	1,881	100.00

KENDE seems to take prepositions even more sparsely than *KEN*. Only the [*na KENDE*] construction seems somewhat common. It should be pointed out that most examples of [*na KENDE*] seem to be used to introduce a relative clause as in (43).

(43) *Fanny Bonifacia* ***na kende*** *e torneo a wòrdu dediká!*
PN at who ART.DEF tournament PFV PASS dedicate.PSTPTCP
"Fanny Bonifacia, to whom the tournament was dedicated!" (Corpus data)

3.3. *KUAL* "which (one)"

Both *kua* and *kual* can be translated as "which" or "which one" and can be used to modify a noun or on its own. In my spoken data of Papiamentu, most examples were of *kua* modifying a noun but there were three examples of *kua* being used independently (44). In two of those examples,

kua is used as the subject while in the third example it is used in the set phrase *kua di nan* "which one of them" (45).

(44) ***Kua*** *ta esun ultimo ku e ta saka?*
which COP the_one last that 3SG IPFV take_out
"Which is the last one he takes?" (Spoken data)

(45) *Ken ta'ta na bùrt ayera, Alexander òf Bryan?* ***Kua*** *di nan?*
who COP.PST at turn yesterday PN or PN which of them
"Who was at the turn yesterday, Alexander or Bryan? Which one of them?" (Spoken data)

There was not a single example of the form *kual* used in the spoken data. On the other hand, the form *kual* seems to be preferred over *kua* in written Papiamentu. In my set of written data *kual* is used roughly three times more than *kua*. See (46).

(46) *Un trein na Pakistan,* ***kual*** *a registrá un eksploshon*
ART.INDEF train at PN which PFV register ART.INDEF explosion
na bordo a tarda 20 minüt pa para.
at board PFV take 20 minute for stop
"A train in Pakistan, which had registered an explosion onboard, took 20 minutes to stop."
(Written data)

The data regarding the prepositional phrases with *KUAL* is provided in Table 7 below.

Table 7: Number of occurrences of [preposition + *KUAL*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
den KUAL	1,064	18.09
(a)riba KUAL	247	4.20
entre KUAL	147	2.50
na KUAL	138	2.35
for di KUAL	114	1.94
kontra KUAL	12	0.20
tokante KUAL	2	0.03
te KUAL	1	0.02
over KUAL	0	0.00
dilanti KUAL	0	0.00
KUAL (total)	5,881	100.00

KUAL seems to be used in a set expression with the meaning of "in which" when preceded by *den* as in (47). It should be noted that because *KUAL* can act as a noun modifier, the preposition might have scope over the whole noun phrase as in (48).

(47) *Revisá e manera* ***den kua*** *bo ta bai realisá bo plan=nan.*
check ART.DEF way in which 2SG IPFV go make 2SG plan=PL
"Check the way in which you are going to make your plans." (Corpus data)

(48) *Tambe a keda stipulá* ***den kua área*** *ta pèrmití pa kue masbangu.*
also PFV stay stipulate.PSTPTCP in which area COP allowed for take masbangu
"Also it was stipulated in which area it is allowed to catch masbangu (type of fish)."
(Corpus data)

Entre "among/between" precedes *KUAL* in many examples probably because this question word implies the existence of other alternatives to it. See (49).

(49) *Maria ta anotá dos kareda* ***entre kual*** *un hit*
PN IPFV score two run among which ART.INDEF hit
di Betrand Peters ku a empuhá dos kareda.
of PN that PFV push two run
"Maria scores two runs among which a hit from Betrand Peters that pushed two runs."
(Corpus data)

According to J.C., in some cases, [*na KUAL*] can be replaced by [*den KUAL*] without any changes in meaning. For example, in (50), using [*den KUAL*] is also possible.

(50) *E promé kampionato internashonal* ***na kua*** *nos*
ART.DEF first championship international at which 1PL
selekshon=nan femenino i maskulino a partisipá
selection=PL female and male PFV participate
tabata durante e Juegos C.A.C. na Caracas, Venezuela.
COP.PST during ART.DEF games PN at PN PN
"The first international championship at which our female and male selection teams participated was during the Juegos C.A.C. in Caracas, Venezuela." (Corpus data)

Similarly, J.C. stated that [*den KUA*] could be replaced by [*riba KUA*] in (51), although not by [*na KUA*] interestingly.

(51) *E fayo atministrativo ta, ku riba*
ART.DEF mistake administrative COP that on
e papel ***den kua*** *ta registrá e number=nan ganadó,*
ART.DEF paper in which IPFV register ART.DEF number=PL winning
no a koregí esun di e sorteo pasá.
NEG PFV correct that of ART.DEF raffle past
"The administrative mistake is that on the paper on which the winning numbers are registered, those from the last raffle were not corrected." (Corpus data)

3.4. *KON* "how"

KON can be translated as "how". It usually asks the way an action is done (52) but it can also modify an adjective (53).

(52) *Anto* ***kon*** *mi por sa ku ta un hende ku mi no tin gana di wak?*
and how 1SG can know that COP ART.INDEF people that 1SG NEG have wish of watch
"And how can I know that it is a person who I do not want to see?" (Spoken data)

(53) *E ta dependé di* ***kon largu*** *nos por hasi=é.*
3SG IPFV depend of how long 1PL can make=3SG
"It depends on how long we can make it." (Spoken data)

The speaker can also show that s/he does not understand what s/he is being told by repeating the previous sentence or part of it after *KON* (54).

(54) ***Kon*** *ken? Christopher.*
how who PN
"What do you mean by who? Christoper." (Spoken data)

With regards to the [preposition + *KON*] construction, the examples taken from the corpus data can be summarized as seen in Table 8.

Table 8: Number of occurrences of [preposition + *KON*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
(a)riba KON	68	1.05
te KON	47	0.73
den KON	12	0.19
tokante KON	8	0.12
na KON	6	0.09
entre KON	0	0.00
for di KON	0	0.00
kontra KON	0	0.00
over KON	0	0.00
dilanti KON	0	0.00
KON (total)	6,470	100.00

When preceded by prepositions, *KON* is part of a headless subordinate clause (55). This contrasts with interrogative pronouns, which become heads of the subordinate clause.

(55) *Durante e reunion na Bonaire entre otro*
during ART.DEF reunion at PN among other
lo diskutí ***tokante*** *[**kon** por hisa e partisipashon*
IRR discuss about how can raise ART.DEF participation
aktivo di e pais=nan den region].
active of ART.DEF country=PL in region
"During the reunion in Bonaire among other thing it will be discussed about how to raise the active participation of the countries in the region." (Corpus data)

The [*te KON*] construction seems to be used exclusively in the expression *te kon leu* "how far / to what extent". See (56).

(56) *Nos mester wak* ***te kon leu*** *nos ta yega ku e asuntu aki.*
1PL must watch until how far 1PL IPFV arrive with ART.DEF issue here
"We must watch to how far we can get with this issue." (Corpus data)

3.5. *UNDA* "where"

UNDA means "where". (57) is an example of *UNDA* in a direct question.

(57) ***Unda*** *bo outo ta?*
where 2SG car COP
"Where is your car?" (Spoken data)

While *UNDA* can be used as a relative adverb, this use is quite formal and not common in casual conversations, where *kaminda* is preferred. Example (58) is from the written data of Papiamentu, while example (59) is from the spoken data, showing the difference in registers.

(58) *(...) Island Fest,* ***unda*** *nos tur hunto por demostra*
PN where 1PL all together can show
e ambiente kaluroso uniko ku Aruba tin (...)
ART.DEF ambience warm unique that PN have
"(...) Island Fest, where we all together can show the warm and unique ambiance Aruba has (...)" (Written data)

(59) *Bai fo=i* ***kaminda*** *b=a sali.*
go from=of where 2SG=PFV go_out
"Leave from where you came from." (Spoken data)

According to J.C., it is possible to say something to the effect of "Where is here?" to ask where one is (60). This suggests that *UNDA* can function not only as an adverb but also as a pronoun since it occupies the syntactic spot of the subject.

(60) ***Unda*** *akinan ta?*
where here COP
"Where am I/Where are we? (Lit. Where here is?)" (Provided by J.C.)

Regarding the [preposition + *UNDA*] construction, the number of examples can be summarized as seen in Table 9.

Table 9: Number of occurrences of [preposition + *UNDA*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
na UNDA	1,013	22.75
for di UNDA	68	1.53
te UNDA	19	0.43
(a)riba UNDA	5	0.11
den UNDA	2	0.04
dilanti UNDA	1	0.02
entre UNDA	0	0.00
kontra UNDA	0	0.00
over UNDA	0	0.00
tokante UNDA	0	0.00
UNDA (total)	4,453	100.00

UNDA seems to be preceded by the preposition *na* in approximately one in five cases, suggesting that this *na* is probably in the process of grammaticalization in this form. This could

be expected when compared to other question words like *DIKON* and *PAKIKO* which are formed by the grammaticalization of a [preposition + question word] construction. See (61).

(61) *Ta importante pa un persona sa di unda*
COP important for ART.INDEF person know of where
el a bin pa e por definí ta ***na unda*** *e ke bai.*
3SG PFV come for 3SG can define FOC at where 3SG want go
"It is important for a person to know from where s/he has come and to define where s/he wants to go." (Corpus data)

UNDA can be preceded by *for di* to mean "from where" as in (62). It should be noted that this meaning can be expressed without *for di* in some contexts as in (63).

(62) *Ta* ***for di unda*** *nos krudo ta bini anto?*
FOC from where 1PL raw (petrol) IPFV come then
"Where does our petrol come from then?" (Corpus data)

(63) ***Na unda*** *b=a saka esaki?*
at where 2SG=PFV take this
"Where did you get this from? / Where did you find this?" (Spoken data)

3.6. *KI DIA*, *KI ORA* and *KI TEMPU*

KI DIA, *KI ORA*, and *KI TEMPU* can all be translated to "when". *KI TEMPU* seems to be rarely used since no example was found in either the spoken or the written data. There does not seem to be a noticeable difference in the use of *KI DIA* and *KI ORA*. See (64) and (65).

(64) *Hey,* ***ki dia*** *mi ta haña un chèns di papia ku bo?*
hey what day 1SG IPFV get ART.INDEF chance of speak with you
"Hey, when will I get a chance to speak with you?" (Spoken data)

(65) *Vincent sa ku* ***ki ora*** *ku mi graba,*
PN know that what time that 1SG record
e tin ku laga mi na pas pa mi por hasi mi kos.
3SG have that let 1SG at peace for 1SG can do 1SG thing
"Vincent knows that when I am recording he has to let me at peace for me to be able to do my thing." (Written data)

Below in Tables 10, 11, and 12, I present the data regarding the prepositional phrases with each question word.

Table 10: Number of occurrences of [preposition + *KI DIA*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
te KI DIA	15	4.05
for di KI DIA	4	1.08
(a)riba KI DIA	1	0.27
den KI DIA	0	0.00
entre KI DIA	0	0.00
kontra KI DIA	0	0.00
na KI DIA	0	0.00
over KI DIA	0	0.00
tokante KI DIA	0	0.00
dilanti KI DIA	0	0.00
KI DIA (total)	370	100.00

Table 11: Number of occurrences of [preposition + *KI ORA*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
na KI ORA	2	0.85
te KI ORA	1	0.43
den KI ORA	0	0.00
entre KI ORA	0	0.00
for di KI ORA	0	0.00
kontra KI ORA	0	0.00
over KI ORA	0	0.00
(a)riba KI ORA	0	0.00
tokante KI ORA	0	0.00
dilanti KI ORA	0	0.00
KI ORA (total)	235	100.00

Table 12: Number of occurrences of [preposition + *KI TEMPU*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
den KI TEMPU	1	16.67
for di KI TEMPU	1	16.67
entre KI TEMPU	0	0.00
kontra KI TEMPU	0	0.00
na KI TEMPU	0	0.00
te KI TEMPU	0	0.00
over KI TEMPU	0	0.00
(a)riba KI TEMPU	0	0.00
tokante KI TEMPU	0	0.00
dilanti KI TEMPU	0	0.00
KI TEMPU (total)	6	100.00

While *KI DIA* and *KI ORA* have a couple of hundred examples, it is clear that *KI TEMPU* is rarely used in Papiamentu, even at the scale of a Corpus. This suggests that *KI TEMPU* might be better analyzed as a normal noun phrase headed by *KI*, rather than a grammaticalized question word.

The use of the prepositions *te* "until" (66) and *for di* "from" (67) with question words expressing time can be expected.

(66) *Ta* ***for di ki dia*** *un partido di oposishon a profilá*
FOC from what day ART.INDEF party of opposition PFV look_like
komo un alternativa real di gobernashon?
as ART.INDEF alternative real of governance
"From when did the opposition party present itself as a real alternative of governance?"
(Corpus data)

(67) (...) *kuanto turista ta bisita nos nightclub=nan*
how_many tourist IPFV visit 1PL nightclub=PL
i ***te ki ora*** *nan ta keda einan.*
and until what time 3PL IPFV stay there
"(...) how many tourists visit our nightclubs and until what time they stay there."
(Corpus data)

What is surprising is the use of the preposition *na* "at". According to J.C. this use is emphatic and does not change the meaning of the phrase (i.e. it can be omitted). See (68).

(68) *Kuanto i* ***na ki ora*** *nos departamento=nan tabata sa algo?*
how_much and at what time 1PL departament=PL IPFV.PST know something
"How much and at what time our departments came to know something?" (Corpus data)

3.7. *KUANTU* "how much / how many"

KUANTU means "how much" (69) or "how many" (70) depending on whether there is a following noun, and whether that noun is countable or uncountable.

(69) *Bo sa* ***kuantu*** *m=a warda p=e kos aki?*
2SG know how_much 1SG=PFV wait for=ART.DEF thing here
"Do you know how much I've waited for this?" (Spoken data)

(70) *M=a perde konteo di* ***kuantu*** *be m=a saka.*
1SG=PFV lost count of how_many times 1SG=PFV take_out
"I've lost count of how many times I've taken it out." (Spoken data)

Regarding the [preposition + *KUANTU*] construction, the number of examples can be summarized as seen below in Table 13.

Table 13: Number of occurrences of [preposition + *KUANTU*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
den KUANTU	5	0.97
na KUANTU	3	0.58
(a)riba KUANTU	2	0.39
te KUANTU	1	0.19
entre KUANTU	0	0.00
for di KUANTU	0	0.00
kontra KUANTU	0	0.00
over KUANTU	0	0.00
tokante KUANTU	0	0.00
dilanti KUANTU	0	0.00
KUANTU (total)	513	100.00

Since *KUANTU* can be used to modify nouns, some of the prepositional phrases have scope over the whole noun phrase (71). Nevertheless, there are a few examples where *KUANTU* is part of a headless clause (72).

(71) *Cijntje a dediká hopi atenshon* ***na kuantu desaroyo***
PN PFV dedicate many attention at how_much developement
a tuma lugá den nos tráfiko último aña=nan.
PFV take place in 1PL traffic last year=PL
"Cijntje dedicated a lot of attention to how much developement took place in our traffic in the last years." (Corpus data)

(72) *E problema no ta sinta* ***den kuantu*** *ta*
ART.DEF problem NEG IPFV sit in how_much IPFV
alkansá e tòp i kuantu ta keda den bòm (...)
reach ART.DEF top and how_much IPFV stay in bottom
"The problem does not lie on how much you reach the top and how much you stay in the bottom (...)" (Corpus data)

3.8. *PAKIKO* and *DIKON*

Both *PAKIKO* and *DIKON* can be translated as "why". In my spoken data of Papiamentu, *DIKON* seems to be roughly four times more than *PAKIKO*. While not as extreme, the tendency of *DIKON* being used more frequently than *PAKIKO* also applies to written Papiamentu. See (73) and (74).

(73) *(...)* ***dikon*** *b=a* *bini?*
why 2SG=PFV come
"(...) why did you come?" (Spoken data)

(74) ***Pakiko*** *bo* *tin* *ku* *stres* *tantu* *asina?*
why 2SG have that stress that_much like_this
"Why do you have to stress yourself that much?" (Spoken data)

There is no apparent difference between the meaning or use of *PAKIKO* and *DIKON*.

Below in Tables 14 and 15, I present the data regarding the prepositional phrases with *PAKIKO* and *DIKON*, respectively.

Table 14: Number of occurrences of [preposition + *PAKIKO*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
tokante PAKIKO	1	0.13
den PAKIKO	0	0.00
entre PAKIKO	0	0.00
for di PAKIKO	0	0.00
kontra PAKIKO	0	0.00
na PAKIKO	0	0.00
te PAKIKO	0	0.00
over PAKIKO	0	0.00
(a)riba PAKIKO	0	0.00
dilanti PAKIKO	0	0.00
PAKIKO (total)	799	100.00

Table 15: Number of occurrences of [preposition + *DIKON*]

Expression	Number of occurrences	Percentage
(a)riba DIKON	3	0.39
over DIKON	1	0.13
tokante DIKON	1	0.13
den DIKON	0	0.00
entre DIKON	0	0.00
for di DIKON	0	0.00
kontra DIKON	0	0.00
na DIKON	0	0.00
te DIKON	0	0.00
dilanti DIKON	0	0.00
DIKON (total)	773	100.00

For both *PAKIKO* and *DIKON*, there were only examples of prepositions with the meaning of "about" preceding them. These prepositions have scope over the whole headless clause. See (75) and (76).

(75) *Pero tin hopi pregunta* ***tokante pakiko*** *Gobierno=nan*
but have many question about why government=PL
no a aktuá tokante kriminalidat, edukashon, i etc.
NEG PFV act about crime education and etc
"But there are many questions regarding why governments have not acted on crime, education, etc." (Corpus data)

(76) *E kampaña komo tal ta mas riba alternativa=nan den*
ART.DEF campaign as such COP more about alternative=PL in
gobernashon ku e ta ***riba dikon*** *gobièrnu a kai (...)*
governance that 3SG COP about how government PFV fall
"The campaign as such is come about the alternatives in governance that about how the government had fallen (...)" (Corpus data)

4. *Ta* and interrogative sentences

The so-called emphatic *ta* could be found in some of the interrogative sentences in the spoken data of Papiamentu. What seems remarkable is the fact that this *ta* can be used even when there is no verb. This can be seen in (77) and (78).

(77) ***Ta*** *ken?*
FOC who
"Who?" (Spoken data)

(78) ***Ta*** *kiko anto?*
FOC what then
"What then?" (Spoken data)

While one might think that *ta* is being used as the copula in those two examples, it should be noted that phrases with the copula following the interrogative pronoun without any complements, i.e. **Ken ta? *Kiko ta anto?* were considered ungrammatical by J.C. Only in full sentences can *ta* be used after the interrogative pronoun, whether as the copula (79) or as the imperfective marker (80).

(79) *Kiko* ***ta*** *e problema anto?*
what COP ART.DEF problem then
"What's the problem then?" (Provided by J.C.)

(80) *Ta ken* ***ta*** *bai kumpra pan?*
FOC who COP go buy bread
"Who is going to buy bread?" (Provided by J.C.)

According to J.C., in full sentences, using *ta* before the interrogative pronoun is "correct", while not using it is "either slang or showing the person talking is angry". While the expressions "correct" and "slang" may reflect a prescriptive view which is not relevant to the description of the use of *ta*, the idea that the lack of *ta* implies anger is in contrast with the description of it as "emphatic". Therefore, it might be possible to see this use of *ta* not just as expressing focus but also as an unmarked expression in questions with interrogative pronouns (and maybe adverbs?). Nevertheless, this may also change according to the register used and the dialect of the speaker.

While this use of focal *ta* is usually seen as different from the copula, there are some examples where an impersonal use of *ta* at the beginning of the sentence is present in a question and it seems hard to distinguish both uses. Nevertheless, only the impersonal use of *ta* seems to be able to conjugate in its past form *tabata*. This can be used as a test to distinguish both uses of the copula. See (81) and (82) for examples of the copula being used at the beginning of a sentence in the non-past and past form respectively.

(81) ***Ta*** *dor ku bo no a bai date ku bo mener di skol?*
COP because 2SG NEG PFV go date with 2SG sir of school
"Is it because you did not date with your teacher from school?" (Spoken data)

(82) ***Tabata*** *dor ku bo no a bai date ku bo mener di skol?*
COP.PST because 2SG NEG PFV go date with 2SG sir of school
"Was it because you did not date with your teacher from school?" Spoken data)

5. Summary

While question words (interrogative pronouns and adverbs) have been described in previous pieces of research, the difference in meaning between similar expressions, as well as the prepositions that tend to precede them were not. Some of these differences might be general while some seem to be according to register. Further dialectal differences might be worth analyzing.

The characterization of *unda* as an adverb seems to be insufficient since it can also act as a pronoun. Previous research on question words seems to be influenced by the description of those types of words in European languages. Nevertheless, Papiamentu word classes seem to be much more flexible compared to European languages. This is shown by the fact that some words like *(a)riba* "on" and *dilanti* "in front of" can function as prepositions when preceding nouns in some contexts, but also as adverbs/nouns when used with *di*, yielding *(a)riba di* "on top of" and *dilanti di* "in front of". These uses need to be explored in further depth in order to understand how word classes function in Papiamentu.

The co-occurrence of prepositions with question words does not seem to be clearly connected to whether those words are more pronominal or adverbial. It is worth noting that question words which etymologically contain a preposition (i.e. *dikon* "why" and *pakiko* "why") seem to only be preceded by prepositions meaning "about", which have scope over the whole subordinate clasu.

This might be seen as proof that despite the high degree of grammaticalization of these words, native speakers might still perceive them as containing a preposition already, therefore avoiding double prepositions when possible. This is also supported by the fact that when spelling these words are sometimes separated into their components (i.e. *di kon* and *pa kiko*). Nevertheless, this might be due to the meaning of these questions words (i.e. "why") in a subordinate clause being easily associated with prepositions meaning "about". Prepositions with a spatial meaning may just be semantically incompatible.

The use of focal *ta* in questions is different from the canonical use of the copula in its position and its inability to conjugate into past form. The fact that the focal *ta* can be used when there is no main verb shines a light on how this marker of information structure can be considered to be a different word than the copula.

Abbreviations

1	First-person	IRR	Irrealis	DEF	Definite	PN	Proper noun
2	Second-person	NEG	Negative	FOC	Focus	POSS	Possesive
3	Third-person	PASS	Passive	GER	Gerund	PST	Past
ART	Article	PFV	Perfective	INDEF	Indefinite	PTCP	Participle
COP	Copula	PL	Plural	IPFV	Imperfective	SG	Singular

References

Departamento di Enseñansa Aruba (2010) *Manual di Gramatica di Papiamento – Morfologia*. Aruba: Departamento di Enseñansa.

Kouwenberg, Silvia and Eric Murray (1994) *Papiamentu (Languages of the world/Materials 68)*. München: Lincom Europa.

Luidens, Maureen, Juan Maduro, Ramon Todd Dandaré, Selvia Lumenier and Mary Lou Boezem (2015) *Manual di Gramatica di Papiamento – Sintaxis*. Aruba: Departamento di Enseñansa.

パピアメント語における疑問文について

パトリシオ　バレラ　アルミロン
（東京外国語大学大学院）

キーワード：パピアメント語，クレオール，疑問詞，前置詞

本稿ではパピアメント語の疑問文の特徴を詳細に述べる。主に疑問詞に焦点を当て、それぞれの意味と用法に関して考察した。疑問詞は先行研究では「疑問代名詞」と「疑問副詞」に分類されている。扱った疑問代名詞は kiko「何」、ki「何／何の」、ken「誰」、kende「誰」、kual「どれ／どの」である。扱った疑問副詞は kon「どうやって・どのくらい」、unda「どこ」、ki dia「いつ」、ki ora「いつ」、ki tempu「いつ」、kuantu「どれくらい／いくつ」、pakiko「なぜ」、dikon「なぜ」である。

さらに、コーパスから例を収集して前置詞句における疑問詞の出現とその意味を記述した。den「に／で」、entre「の間」、for di「から」、kontra「に対して」、na「に／で」、te「まで」、over「について」、(a)riba「の上／について」、tokante「について」、dilanti「の前」が導入する前置詞句における疑問詞の出現数および、コーパスにおけるその疑問詞全例に対する出現頻度も挙げている。前置詞 ku「と共に／をもって」、di「の」、pa「のために」は補文標識と同形であり、その 2 つを分けることが容易でないため対象外とした。

この調査で明らかになった点としては、以下の点が挙げられる。

1) 単独で用いられる疑問詞と名詞修飾に用いられる疑問詞の前置詞句での出現には大きな差異が見られることがある。それは、名詞修飾用法の場合、修飾される名詞が主要部となり、それによって支配できる前置詞が決まるためである。

2) 疑問詞を含む前置詞句が慣用句となる場合は結果に予想しにくい偏りが現れることがある。例えば前置詞 te「まで」と kon「どうやって・どのくらい」が “te kon leu”「どこまで・どの程度まで」という慣用句をなし、その前置詞と疑問詞の組み合わせの例がもっぱらこの慣用句の形で現れる。

3) 2)と類似して、［前置詞 + 疑問詞］の組み合わせが 1 つの塊としてふるまい、文法化の過渡的な段階になっているような例が見つかった。それは na「に／で」と unda「どこ」の組み合わせである。これはもはや新しい疑問詞の誕生としてもとらえうる。この過程は前置詞と疑問詞の組み合わせを語源とする疑問詞に類似しているかもしれない。pakiko「なぜ」（pa「のために」+ kiko「何」）、dikon「なぜ」（di「の」+ kon「どうやって・どのくらい」）はこの種の疑問詞である。これらの疑問詞は、場所を表す前置詞に支配される例がなかったことから、母語話者の認識では前置詞の意味が疑問詞には残っており前置詞が二重に現れにくいということを反映しているかもしれない。

4) 先行研究では疑問詞の品詞は「疑問代名詞」と「疑問副詞」に分類されているが、その分類の基準は、疑問文に対して想定される叙述文の現れ方にのみ基づいているようである。unda が代名詞として用いられる用法を取り上げ、出現の仕方を観察して疑問詞の品

詞を問い直す必要性にも言及している。

最後に、疑問文によく見られる焦点標識の ta の現れ方、およびその同形のコピュラ・TAM 標識との相違点について述べた。焦点標識の ta は同形のコピュラ・TAM 標識と異なる統語的位置を占める、不変化詞であることが明らかになった。

修士論文　要旨

サラール語の極性疑問標識に関する考察

原　明海
（博士前期課程 世界言語社会専攻）

キーワード：サラール語，疑問，証拠性

修士論文の構成（太字箇所は本稿で主に取り上げる内容である）

0. はじめに	**3.3. 調査 I: mi**
1. サラール語概要	3.4 調査 II: (r)u, (r)o
2. 先行研究	3.5. 調査 III: mu
3. 調査	**4. 考察**
3.1 調査に用いる資料	5. 結論と今後の課題
3.2 予備調査: 疑問標識別の出現頻度	

0. はじめに

修士論文では、サラール語[1]の街子 (gezi) 方言の極性疑問文において出現頻度が高かった 4 種類の疑問標識を主に調査、考察した。本稿では、紙幅の都合上、予備調査と mi に関する調査 I の内容を主に取り上げる。

サラール語の極性疑問文は、文末に疑問標識が現れるが、筆者の観察によれば少なくとも 6 種類 (mu, mo, mi, (r)u, (r)o, (r)i) の異なる標識が母音調和によらず独立して用いられる。従来の先行研究には、これら個々の標識の特徴に関する明確な記述が無いため、本稿では、映画資料による調査とエリシテーション調査を通して個々の疑問標識の特徴を明らかにすることを目的とする。

なお、断りのない限り、例文番号、文献の和訳、グロスは筆者によるものとする。本稿で取り上げる例文の表記体系は、基本的に马伟 (2013: 6-8) の表記体系[2]に従うものとする。

[1] チュルク諸語に属する言語であり、主に中国青海省、甘粛省、新疆ウイグル自治区で話されている (林莲云 (1985: 1-2) より適宜要約)。2010 年第六回全国人口調査によれば、サラール族人口は約 13 万人である。

[2] 马伟 (2013) で使用されている表記体系は以下の通りである (漢語を示すための zh, ch, sh を除く)。a = /a/, b = /p/, č = /ʧʰ/, d = /t/, e = /e/, f = /f/, g = /k/, ǧ = /ɣ/, h = /h/, i = /i/, ï = /ɨ/, j = /ʧ/, k = /kʰ/, l = /l/, m = /m/, n = /n/, ng = /ŋ/, o = /o/, ö = /ø/, p = /pʰ/, q = /q/, r = /r/, s = /s/, š = /ʃ/, t = /tʰ/, u = u, ü = /y/, v = /v/, x = /x/, y = /j/, z = /z/. 马伟 (2013) では、漢語由来の語を表記するのに zh, ch, sh を導入しているが、本稿ではサラール語の音韻体系に同化していない漢語からの借用語については一律漢語のピンインを用いて、斜字体で表記する。

1. 先行研究

本節では 1.1 節で马伟 (2013)、1.2 節で林莲云 (1985)、1.3 節では Simon (2016) を取り上げる。

1.1. 马伟 (2013)

马伟 (2013: 230) は、疑問を表す標識は、mu, mo, mi, o, ba, a, u, i の 8 種類があり、全て文末に現れると述べている。

马伟 (2013: 230-232) が列挙した疑問標識及びそれらの用法を以下の表に整理した。

表 **1**: サラール語の疑問標識と機能

mu	（確認ではなく単に）疑問が生じたため質問する。
mo	（確認ではなく単に）疑問が生じたため質問する。
o	（確認ではなく単に）疑問が生じたため質問する。 過去を表す -di に後続して do という形をとることもある。
mi	話し手が一部の事実をすでに知っているものの確証が持てないため、相手に確認を取るという意味合いで質問する。
u	話し手がすでに一部の事実を知っているが、確証が持てないため、相手に証明してほしいという意味合いで質問する。 過去を表す -di に後続して du という形をとることもある。
i	話し手がすでに一部の事実を知っているが、確証が持てないため、相手に証明してほしいという意味合いで質問する。u , mi より確信度が高い。 なお、疑問詞疑問文の文末にも出現する。
ba	推測を表す。
a	推測を表す。ba より遥かに高い確信度を持つ。

(马伟 (2013: 230-232) を適宜要約して筆者が作成)

1.2. 林莲云 (1985)

mu ~ mo ~ mi, u, o, i は述語の末尾に付加して疑問を表す (林莲云 (1985: 90 - 91))。特に，動詞の過去形の疑問は、動詞のテンス・アスペクトの後ろに疑問標識 mu~mo~mi と u を用いることで表す (林莲云 (1985: 70 - 71))。

(1)　u　gel-miš　**u?**
　　3SG　来る-PST.INDIR　(r)u
　　「彼は来ましたか？」

(林莲云 (1985: 71))

林莲云 (1985: 71) によれば、動詞語幹に -du~-do をつけることで、話し手が直接聞き手の動作の完了を見たことを表す。

(2) sen iki-sing gel-**du (~do)**？
2SG 2-2SG.POSS 来る-du (~do)
「2 人とも来たんですね？」

(林莲云 (1985: 71))

1.3. Simon (2016)

Simon (2016: 160-162) は、サラール語の疑問を表す形式を r 系列と m 系列に分類した。それぞれの形式と用法は次表の通りである。

表 **2**: Simon (2016) によるサラール語疑問標識の分類

r 系列	(r)o	極性疑問文に用いる。間接疑問文には用いない。
	(r)i, (r)e	疑問詞疑問文に用いる。間接疑問文には用いない。
m 系列	mi, ma, mo, mu, mï	間接疑問文と自分宛ての質問に用いる。

(Simon (2016: 160-162) を適宜要約して筆者作成)

r 系列の形態的特徴について、Simon (2016: 162) では「r を伴わないはずのテンス・アスペクト標識の直後に、r が現れることがある。したがって、r は疑問標識の一部である」と述べている。

m 系列の疑問標識について、Simon (2016: 160-161) によれば、m 系列は間接疑問文と自分宛ての質問に用いることができる。

(3) dağïda gudïr gun-i yaqin vol-yoxwa
未だに 少し 心-3SG.POSS 近い なる-ない.INDIR
edir **mu**？ emes-dir **mu**？ olal-yoxwa.
COP.DIR mu COP.NEG-DIR mu 理解する-ない.INDIR
「未だにその心は明らかになっていない『そうなのか，そうではないのか』
彼は理解していない．」

(Simon (2016: 161))

Simon (2016: 162) によれば、サラール語の過去形 -ji と頻繁に疑問標識と融合するため、-du, -do という標識が得られる。

1.4. 先行研究のまとめ

本節では、疑問標識の形と用法それぞれの観点から先行研究の記述を整理する。

①疑問標識の形

先行研究はそれぞれ次のように極性疑問標識を列挙している。

马伟 (2013a): mu, mo, mi, u, o, i, ba, a
林莲云 (1985): mu ~ mo ~ mi, u, o, i, -do ~ -du
Simon (2016): mi, ma, mo, mu, mï, (r)i, (r)ə, (r)o

本稿の指す疑問標識の形とは、筆者が挙げる以下の 6 種類とする：

mu, mo, mi, (r)u, (r)o, (r)i

上記 6 種類に定めた理由は、筆者の観察によると、確かに mu, mo, mi, u, o, i の 6 種類は異なる形式として区別されることが確認できたからである。そして、Simon (2016) が述べたとおり、u, o, i は、筆者が調査した中でも確かにいずれも ru, ro, ri の形で出現するときがあるため、括弧を用いて示す。马伟 (2013) は、ba, a を疑問標識として取り上げているものの、その実際の意味は推測を表していることから、ba, a は研究対象に含めないとする。

なお、-do, -du は马伟 (2013)、Simon (2016) の記述に従い、直接経験過去接辞に(r)o, (r)u が付加した形式として扱い、動詞語幹につく接辞とする。

②各疑問標識の用法

筆者が①に挙げた分類に従って、それぞれの用法に関する先行研究の記述を次の表に整理した。

表 3: 疑問標識の用法に関する先行研究のまとめ

	马伟 (2013)	林莲云 (1985)	Simon (2016)
mu	疑問があるから質問する。	特に過去形に用いる。 この 3 つは互換可能。	間接疑問文と自分宛ての質問に用いる。
mo	疑問があるから質問する。		
mi	一部の事実を知っている上で確かめるため質問する。		
(r)u	一部の事実を知っている上で確かめるため質問する。	-du、 -do は、動詞語幹に直接接続 ある動作の完了を観察した際にのみ用いる	(記述なし)
(r)o	疑問があるから質問する。		極性疑問文に用いる。 間接疑問文には用い

			ない。
(r)i	一部の事実を知っている上で確かめるため質問する、mi, (r)u より確信度が高い。疑問詞疑問文にも用いる。	疑問詞疑問文に用いる。	疑問詞疑問文に用いる。間接疑問文には用いない。

先行研究ではいずれも，疑問標識の用法を区別するための有効な具体例が挙がっていなく、個々の特徴が十分に記述されていないことが問題点である。本稿では、映画資料とエリシテーション調査を通して、それらの特徴をより明らかにする。

2. 調査

本節では、2.1 節で本稿の調査で用いる資料とインフォーマント情報を紹介し、2.2 節で予備調査の調査方法と調査結果、2.3 節で調査 I の調査方法と調査結果を取り上げる。

2.1. 調査に用いる資料

A: 映画資料を用いた調査

映画資料を用いた調査では、中国で製作された 2 つの漢語の映画 (下記、資料 1 及び資料 2) をサラール語母語話者が自主的に全編サラール語で吹き替えしたものを用いた。

調査手順は次のとおりである。映画を見ながら、疑問形式が出現した文を抜き出した。それらをまとめた簡易コーパスを作成した。詳細の調査方法は、調査項目ごとに述べる。

なお、本映画作品は吹き替え版作成時に一部不自然なサラール語があるという話者からの指摘を受けたため、本稿で取り上げる例文は全てインフォーマント A 氏によるネイティブチェックを受けたものである。

資料 1：《北京爱情故事》(「北京ラブストーリー」)
監督：陈思成、公開年：2014 年、作品時間：57:40
資料 2：《无人区》(「無人地帯」)
監督：宁浩、公開年：2013 年、作品時間：1’56:54

資料 1、資料 2 ともサラール語吹替版は、筆者が映画製作者より直接入手したものであり、現時点 (2020 年 12 月) では、対外的に公開されていないものである。

例文の出典と映画での出現箇所について、例文の末尾に中括弧 [ ] を用いて [資料 1 または資料 2 – 出現時間] のように記述する。

B: エリシテーション調査

各調査項目に相応しい問いを立て、母語話者に尋ねて自由に話してもらった。話者への問いの詳細は、それぞれの調査項目の調査方法で記載している。

調査に協力して頂いたインフォーマントの情報は以下の通りである。出身地はそれぞれ言語形成期を過ごした地域に等しく、いずれも本稿で扱う街子方言の地域に相当する。

表 **4**: インフォーマント情報

	生年	性別	出身地
A 氏	1988 年	男	青海省循化县清水乡
B 氏	1984 年	男	青海省循化县查汗都斯乡

2.2.　予備調査：各疑問標識別の出現回数

2.1 節 A の手順に従って得られた資料 1 と資料 2 の用例の疑問標識別の出現回数を集計し、その割合を算出する。

马伟 (2013) によれば「極性疑問文の疑問標識はすべて文末に出現する」が、映画資料から収集した用例には、文末ではなく文中に出現する用例も見られた。疑問標識の出現箇所が文中あるいは文末の場合の出現回数と、それらの合計を集計したものを調査結果とする。

なお、表中の“ー”は疑問標識が出現しなかった例を示す。

調査結果は表 5 の通りである。

表 5: 疑問標識の出現回数

	文中	文末	計
mu	8	15	23 (43.4 %)
mi	1	13	14 (26.4 %)
(r)u	—	12	12 (22.6 %)
(r)i	—	7	7 (13.2 %)
(r)o	—	2	2 (3.8 %)
mo	—	1	1 (1.9 %)
計			53

集計結果によれば、極性疑問文の文末では、(r)u, mu, mi の 3 つの出現頻度が高く、次に(r)o は 2 例、mo と(r)i が 1 例ずつ出現している。

先行研究では言及がなかったものの、極性疑問文の文中に疑問標識が現れることがある。文中に現れた疑問標識の 9 例のうち、8 例は mu、1 例は mi である。

(4) *zhen*-dïr **mu** yarğïn-dïr **ri**? [1 – 9:29]
本当-COP.DIR mu 偽り-COP.DIR (r)i
「本当か？」（lit.　本当なのか嘘なのか？）

(5) sevgi var-a **mi** yox-a **ri**? [1 – 46:21]
愛 ある-INDIR mi 無い-INDIR (r)i
「愛 (というものは) あるのか、それとも無いのか？」

さらに、文中に疑問標識が現れた 9 例のうち、6 例は文末に (r)i を伴い，残りの 3 例は文末に(r)i は現れなかった。

(6) bu iš-ler yar-ar **mu** yar-ar emes? [2 – 9:08]
この 事-PL 至る-PRS mu 至る-PRS COP
「このことは出来るのか？」

文中に疑問標識が現れた 9 例には、下記 3 種類の構文が含まれていた。いずれも 2 つの選択肢 A, B にそれぞれ疑問標識を付けた疑問文であり、本稿ではそれを『選択疑問文』とする。

A mu B (r)i ? / A mi B (r)i ?　/ A mu B ?

なお、Simon (2016: 161) で取り上げられた [A mu B mu] のような形は、筆者の管見の限り観察されなかった。

2 つの選択肢 A, B は、すべて相反する選択肢であり、対義語である「本当」「嘘」を選択肢 A, B として取っている (4) の文以外の 8 例はすべて [動詞またはコピュラ A] と [A の否定形] を選択肢として並べて、疑問文を形成している。なお、「北京に行くか、西寧に行くか？」のような並列の選択肢を含む選択疑問文の用例は得られなかった。

2.3. 調査 I: mi

筆者の観察により、mi を用いた極性疑問文には『想定外』の意味を帯びていることが多いと仮説を立てた。

極性疑問文における『想定外』の判定方法を次のように定義する。極性疑問文から mi を除いた叙述部の命題内容を P、その否定を¬P としたとき、＜実際の状況＞＝P かつ＜話し手が想定している状況＞＝¬P が成り立つものを『想定外』とする。

以下、映画資料に現れた mi の用例 11 例のうちどれくらいの用例が『想定外』に当てはまるかの調査 (調査 I - A)、そして、mi を他の疑問標識と置き換えた場合どのように意味が異なるかについてのエリシテーション調査 (調査 I - B) をそれぞれ取り上げる。

2.3.1. 調査 I – A: コーパス調査

上記で定義した『想定外』の判定方法に従い、映画資料から抽出した用例 11 例に対して、その例文が発話された＜実際の状況＞と＜話し手が想定している状況＞がそれぞれ命題内容と一致するものと異なるものに分類することで、どれくらいの用例が『想定外』に該当するかを調査した。

次のような結果が得られた。以下、『想定外』に該当した用例をいくつか取り上げる。mi の調査結果『想定外』の基準を満たすものは 11 例中 9 例であった。

次の例文 (7) は勢いだけで結婚をしようとしている友人を話し手が止める場面である。実際起こっている状況としては「聞き手が (結婚生活に失敗した話し手の現状を) 見ていない」かのようであるが、話し手と聞き手は頻繁に会う友人であるため、話し手は「聞き手が (話し手の現状を) 見ている」はずだと想定している。

(7)　gör-mor　**mi**　sen? [1 – 18: 03]
　　見る-NEG.PRS　mi　2SG
　　「あなたは見ていないのか？」

(7) の命題内容、実際の状況、話し手の想定を整理したのが次のリストである。

命題	聞き手 (あなた) は見ていない	
実際の状況	聞き手 (あなた) は見ていない (かのような状況)	P
話し手の想定	聞き手 (あなた) は見ている	¬P

次の例文 (8) は、明らかに自分 (話し手) の職業を知っているはずの知人に、職業を尋ねられた場面である。実際起こっている状況としては、「聞き手は職業を知らない」かのような状況であるが、話し手は「聞き手は職業を知っている」と想定している。

(8)　se　bil-mez　**mi**　sen? [2 – 17: 55]
　　2SG　知る-NEG.PRS　mi　2SG
　　「あなたは知らないのか」

(8) の命題内容、実際の状況、話し手の想定を整理したのが次のリストである。

命題	聞き手 (あなた) は知らない	
実際の状況	聞き手 (あなた) は知らない (かのような状況)	P
話し手の想定	聞き手 (あなた) は知っている	¬P

2.3.2. 調査 I - B: エリシテーション調査

『想定外』の用法が mi のみに現れるものか、他の疑問標識にも出現するかを検証するために、他の疑問標識と置き換えた疑問文を用いて、サラール語母語話者 2 名にエリシテーション調査を行った。筆者が提示した次のサラール語文について、疑問標識を他の 5 種類の疑問標識に変えてそれぞれの意味を尋ねたところ、次のように答えていた。

(9) se va-ğur **mi**?
2SG 行く-FUT mi
「あなたは行ってしまうのか？」

(筆者作例)

B 氏によれば、(9) の文は、mi を用いた疑問文のみ「聞き手と食事をするつもりでわざわざ家を訪ねたが、聞き手は今から他のところに行くと聞いて予想外だ」という場面が想定される。

(10) u *riben* kiš idïr **mi**?
3SG 日本人 COP.DIR mi
「彼は日本人だったのか？」

(筆者作例)

A 氏によれば、(10) の文は、mi を用いた疑問文のみ「彼が日本人であると知った上で驚いて聞き返している」という場面が想定されると答えていた。

いずれも実際発生している状況が P、話し手の想定が¬P として出現したのは、mi を用いた文のみであったことから、mi が持つ『想定外』の用法は、他の疑問標識と区別される用法であることがいえる。

3. 考察

調査結果から、本稿では 2 つの結論が導かれた。

1 つ目は、選択疑問文の形式についてである。先行研究では疑問標識は「文末に出現する (马伟 (2013: 230))」と述べられているが、本稿の予備調査から、mi と mu は文中にも出現する事が判明した。それらの疑問文は、2 つの選択肢 A、B の直後に疑問標識を伴う疑問文であり、本稿では『選択疑問文』と定義した。

映画資料から収集した選択疑問文の用例には、「A mu B (r)i ? 」「A mi B (r)i ?」「A mu B ?」の 3 つの構文が見られた。選択肢 A, B の性質に関しては、 (4) のように互いに対義語を成すもの、または (5), (6) のように肯定形 A とそれに対する否定形 B を並べたものが見られた。

2 つ目は、mi の用法についてである。映画資料により、mi は「実際に発生した状況と、話し手または聞き手が想定していた事柄が相反する場合、実際に発生した状況を表す命題に付け加えることにより、『想定外』を示す」はたらきを持つ傾向にあることが明らかになった。エリシテーション調査からは、mi を用いた疑問文を他の疑問標識に変更した表現には『想定外』の意味合いはないことから、『想定外』は mi に限られた用法であると示された。

4. おわりに

本稿では、先行研究では十分に明らかにされなかった mi の用法を明らかにし、今まで記述がなかった選択疑問文について新たに記述した。

修士論文では、個別の疑問標識の調査にとどまったため、サラール語の疑問標識が全体としてどのような体系にあるのか、そしてテンス・アスペクト及び証拠性とどのような相関関係にあるのかについて考察することを今後の課題としたい。

略号一覧

1	1st person	1 人称	NEG	negative	否定
2	2nd person	2 人称	PL	plural	複数
3	3rd person	3 人称	POSS	singular	所有人称接辞
COP	copula	コピュラ	PRS	present	現在
DIR	directive	直接経験	PST	past	過去
FUT	future	未来	SG	singular	単数
INDIR	indirective	間接経験			

参考文献

林莲云 (1985) 《撒拉语简志》四川：四川人民出版社.

马伟 (2013a) 《撒拉语形态结构》北京：中国社会科学出版社.

Simon, Camille (2016) *Morphosyntaxe et sémantique grammaticale du salar et du tibétain de l'Amdo : analyse d'un contact de langues.* Université Sorbonne Nouvelle - Paris 3.

卒業論文　要旨

日本語の使役助動詞「せる」「させる」の活用の五段化の現状

阿部　義隆
(言語文化学部　日本語専攻)

キーワード：使役助動詞，異形態，五段活用，使役受身形，他動的使役

1. はじめに

日本語の使役助動詞には「せる」「させる」の 2 種類があり、これらは接続する動詞の活用の種類によって使い分けられる異形態である。いずれも活用型は下一段型である。しかし現在、これを五段型で用いる用例がみられる。本稿では、日本語の使役助動詞「せる」「させる」が五段活用化したものの 30 歳未満の人による使用の実態について、2020 年現在での傾向を調査した結果を報告する。

本稿で筆者が論を展開するにあたり、次のことがらを指す用語を以下のように定義する。あくまでも本稿での説明のために筆者が定義したもので、一般的な呼称ではない。

・動詞に使役助動詞が接続したもの:　「使役助動詞がついた動詞」
・五段活用[1]する使役助動詞:　「五段活用化した使役助動詞」

2. 先行研究

先行研究間で使役の助動詞についての呼称が異なっているが、先行研究の要約や引用においては、各先行研究で用いられている呼称を用いる。

2.1. 日本語記述文法研究会（2009）

以下、日本語記述文法研究会 (2009: 257–261) を要約して示す。

2.1.1. 使役とは

使役文の述語は、「歩かせる」(aruk-ase-ru)、「着させる」(ki-sase-ru)のように動詞の語幹に -(s)ase-ru という接辞を付加してつくられる。一般的な使役文は、対応する能動文には含まれていない人や物を主語として、能動文の表す事態の成立に影響を与える主体として表現する。

例: 父親が子どもにテレビを消させた。

例文は、「父親」が指示を与えることで、「子供がテレビを消す」という事態が起きたことを表す。このように使役文は、主語として表される使役者 (使役の主体) が能動主体 (動きの主体) に働きかけ、それが原因となり能動主体に動きや変化を引き起こす事態を描き出す。

[1] 動詞の活用の種類の 1 つで、「活用語尾が五十音図のア・イ・ウ・エ・オの五段にわたって変化するもの」(湯澤 (1953: 45)) である。

2.1.2. 使役の接辞の縮約

使役の動詞には、「歩かす」(aruk-as-u)、「着さす」(ki-sas-u) など、その接辞が-(s)-as-u という縮約形を取るものが多い。一般にⅠ型動詞[2]の使役受身文では縮約形が用いられることが多いが、Ⅱ型動詞[3]の使役受身文ではやや落ち着きが悪い。

・歩かせられる (aruk-ase-rare-ru) -歩かされる (aruk-as-are-ru)

・着させられる (ki-sase-rare-ru) - ? 着さされる (ki-sas-are-ru)

2.2. 湯澤 (1953)

以下、湯澤 (1953: 137–139) を要約する。

使役の助動詞「せる」「させる」の活用はいずれも下一段活用[4]型で、「せる」は未然・連用・終止・連体・仮定・命令の順にせ・せ・せる・せる・せれ・せろとなる。「させる」は同順にさせ・させ・させる・させる・させれ・させろとなる。命令形にはそれぞれせよ、させよという形もある。この活用を、「読まして」「書かす」などのように五段活用として用いる人が多くなってきた。特に連用形、終止形、連体形でそれが多い。

2.3. 森田 (2007)

森田 (2007) によると、「せる」がついているからといってすべて使役の助動詞がついているとみなすとは限らないという。以下の例は元来他動詞として存在していたが、他の使役表現形式[5]の影響で「～せる」の形ができたものである。

・例：浮かす＞浮かせる、飛ばす＞飛ばせる

3. 問題点

日本語記述文法研究会 (2009)、湯澤 (1953) のいずれも、どの動詞のどの活用形で五段活用化した使役助動詞の頻度が高いのかが明確に数値などで記されていない。

4. コーパスによる素頻度調査とその調査方法および結果

筆者は、「使役助動詞が用いられる頻度が高い動詞ほど、その動詞に接続した使役助動詞が五段活用になりやすい」という仮説を立てた。これに従い日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)、日本語話し言葉コーパス (CSJ) を用いて、使役助動詞がつく頻度の高い動詞を抽出した。BCCWJ は記号などを除き計 1 億 491 万 1,460 語収録している。対して CSJ は、記号などを除き計 757 万 6,046 語収録している。

使役助動詞がつく頻度が高い動詞の抽出と集計は以下の手順で進める。

---

[2] 五段活用動詞を指す。

[3] 上一段活用、または下一段活用動詞を指す。上一段活用の活用語尾は、「五十音図のイの段の音と、それに「る、れ、ろ (よ)」の付いたもの」(湯澤 (1953: 48)) である。

[4] 動詞の活用の種類の 1 つで、「五十音図のエの段の音と、それに「る、れ、ろ (よ)」の付いたもの」(湯澤 (1953: 51)) である。

[5] 2.2 節の湯澤 (1953) で「使役の助動詞」と表されたものと同一内容である。

① BCCWJ と CSJ の「短単位検索」にそれぞれ書字形出現形で「せる」「させる」を入力し検索する。用例文の単語は品詞ごとに記号「｜」で区切る。
② 検索してヒットした用例文の集合を、エクセルの任意のファイルに貼りつける。ファイルは BCCWJ の「せる」、BCCWJ の「させる」、CSJ の「せる」、CSJ の「させる」の 4 つ作成する。
③ ②で作成したエクセルファイル上で使役助動詞より前の部分、使役助動詞、使役助動詞より後の部分の異なる 3 列に分け、使役助動詞の直前を見て、使役形になる頻度の高い動詞を抽出する。例えば、「｜われわれ｜の｜ため｜に｜なる｜ように｜働か｜せる｜べき｜で｜ある｜。」という文が使役助動詞より前、使役助動詞、使役助動詞より後の部分の 3 つに分かれ、隣り合って異なる列にそれぞれ入っているとする。｜せる｜以降は動詞の抽出に関係しないため、その列全体の｜を削除する。そして使役助動詞より前の｜を一括で削除し、動詞だけを抜き出した列を作る。すると「われわれのためになるように」と「働か」と「せる」が異なる 3 列にわけられる。頻度の算出はエクセルの COUNTIF 関数等による。

以上の手順で動詞を抽出すると、「する」「持つ」「感じる」「食べる」が BCCWJ と CSJ に共通して使用頻度の上位 5 位以内に表れた。この 4 語を用いてアンケート調査を行った。

5. アンケート調査 1、2 の調査方法、判明した動詞の活用の種類別頻度

5.1. アンケート調査 1、2 の調査方法

「する」「持つ」「感じる」「食べる」を五段活用化した使役助動詞を伴った形で用いた文を挙げ、それぞれ使用状況を回答してもらうアンケートを実施した。アンケートはアンケート調査 1 と 2 の 2 種類実施した。両アンケートにおいて共通した調査方法を以下に記す。

① 上記の 4 つの動詞の使役形を五段活用式に活用させた各形式を、Twitter の「高度な検索」機能を用いて検索し、実例を抽出する。
② 抽出された実例を、google form を用いたアンケート調査の設問とする。設問例は「ご飯食べさすゲームは苦手だったりする。」「誰にも荷物は持たさない。」などである。
③ 30 歳未満の日本語母語話者に、設問文中の使役形の使用状況に関する 4 つの選択肢から、1 つを選んで回答してもらう。選択肢は「自分も言い、人が言うのも耳にする」、「自分は言うが、人が言うのは耳にしない」、「自分は言わないが、人が言うのは耳にする」、「自分も言わず、人が言うのも耳にしない」とする。

5.2. 調査 1、2 から判明した動詞の活用の種類別頻度と考察

調査に用いた動詞「(漢語＋) する」「持つ」「感じる」「食べる」を、それぞれサ行変格活用、五段活用、上一段活用、下一段活用の代表とする。各活用の種類の動詞について、全回答数に対する五段化回答数の割合を算出した。全回答数とは、アンケート調査 1 の回答者 33 人×回答数 30 と、アンケート調査 2 の回答者 18 人×回答数 9 の和である。五段化回答数とは、このうち「自分は言い、人が言うのも耳にする」「自分は言わないが、人が言うのは耳にする」と回答した数の和である。

表 1: 活用の種類別の五段活用化傾向

	五段化回答数	全回答数	割合
五段活用	219	318	68.9%
上一段活用	67	198	33.8%
下一段活用	152	318	47.8%
サ行変格活用	115	318	36.2%
合計	553	1,152	48.0%

五段活用化した使役助動詞が半分以上容認されているのは五段活用動詞だけである。上一段活用、下一段活用、サ行変格活用の動詞は、五段活用動詞に比べそれぞれ 35.1%、21.1%、32.7%低い。いずれも 2 割以上低い数値となっていて、この 3 つの活用の種類は五段活用動詞よりも五段活用化した使役助動詞を容認されていない。これを踏まえ次の調査では、5 割以上五段活用化した使役助動詞がみられた五段活用動詞と、終止形が「つ」である動詞に焦点を当て、3 つ目のアンケートを実施した。終止形が「つ」の動詞に着目したのは、アンケート調査 2 で用いた動詞「持つ」の五段化回答数が高くなったためである。加えて日本語記述文法研究会 (2009) が指摘する、五段活用動詞における使役受身形についても調査した。

6. アンケート調査 3 とその結果、および考察

6.1. アンケート調査 3 の調査方法と内容

アンケート調査 3 では、使役助動詞がついた用例が 100 例以上ある五段活用動詞を、4 節に記した手順で BCCWJ より抽出した。抽出した動詞は、「思う」「言う」「行う」「咲く」「聞く」「やる」「終わる」「飲む」「働く」「思い出す」「抱く」「起こす」「喜ぶ」「うかがう」「休む」「行く」「笑う」「負う」「読む」「書く」である。加えて、5.2 節で言及した「つ」で終わる動詞のうち、「打つ」「勝つ」「立つ」「目立つ」「待つ」「育つ」「保つ」も抽出した。

以上の動詞を用いて本アンケート調査を 5.1 節と同様の手順で進める。注意点として以下の点を挙げる。選択肢「自分は言うが、人が言うのは耳にしない」は、「客観的にありえない」という指摘を受け削除した。1 つのアンケートで取り上げる動詞は 5 語ずつにし、6 つの異なるアンケートを作成する。回答者は各々6 つのアンケートのうち 1 つに対して回答し、他の 5 つのアンケートは回答していない。以下、調査結果ではそれぞれ「アンケート A, B, C, D, E, F」と表記する。それぞれのアンケートを実施した結果、A: 7 人、B: 5 人、C: 4 人、D: 9 人、E: 14 人、F: 4 人の計 43 人から回答を得た。

6.2. 活用形による使役助動詞の五段活用化への影響と考察

はじめに、用いた動詞の各活用形別に考察する。表 2 は五段化回答数が 70%以上の活用形を集計したものである。五段化回答数と全回答数の定義は、和を除き 5.2 節と同じである。

表 2: 活用形ごとの使役助動詞五段活用化頻度

	五段化回答数	全回答数	割合
使役受身	85	104	81.7%
連体	148	199	74.4%
推量	147	199	73.9%
終止	143	199	71.9%

使役受身形や終止形や連体形のときに五段活用化した使役助動詞が容認されやすいことは、日本語記述文法研究会 (2009) や湯澤 (1953) の記述を実証している。

使役受身形の五段化回答数割合が高くなった理由は 2 つ考えられる。1 つ目は、モーラ数の削減である。「読む」を例にとる。これに下一段活用の使役助動詞をつけて使役受身形にすると「読ませられる」となる。五段活用化した使役助動詞を用いた場合、「読まされる」となる。発音しやすいのはモーラが短い後者である。2 つ目は同じ母音の連続である。「読ませられる」という場合、動詞の活用形、使役助動詞、受身助動詞のはじめの母音の組み合わせが /a/, /e/, /a/ となり、2 度調音位置を変える必要がある。対して「読まされる」の場合、母音の組み合わせは /a/, /a/, /e/ となり、調音位置を変えるのは 1 度で済み、発音しやすい。この 2 つの要因により、使役受身形の容認度が高くなったと推察される。

推量形の数値が高いのは、使役受身形と同じ理由が考えられる。つまり、「〜せよう」から「〜そう」とモーラ数が少なくなり、かつ長音だけになることで母音を変化させる必要がなくなり、発音しやすくなるためだと推察される。

6.3. 動詞の語幹末音による使役助動詞の五段活用化への影響と考察

次に、動詞の語幹末音による使役助動詞の五段活用化への影響を考察する。表 3 はアンケートに用いた動詞から、終止形の種類別に 1 語ずつ抽出したものである。五段化回答数と全回答数の定義は、和を除き 5.2 節と同じである。

表 3: 調査に用いた動詞ごとに見た使役助動詞の五段活用化傾向

	調査区分	五段化回答数	全回答数	割合
喜ぶ／喜ばす	C	34	44	77.3%
飲む／飲ます	B	41	54	75.9%
言う／言わす	A	51	74	68.9%
聞く／聞かす	A	50	74	67.6%
待つ／待たす	E	97	144	67.4%
やる／やらす	B	36	54	66.7%
起こす／起こさす	C	16	40	40.0%
思い出す／思い出さす	B	9	54	16.7%

「う」「く」「つ」「ぶ」「む」「る」で終わる動詞は、いずれも半分以上で五段活用化した使役助動詞を容認されている。しかし「思い出す」は 16.7%、「起こす」は 40.0%など、「す」で終わる動詞は五段活用化した使役助動詞の容認度が低い。「す」で終わる動詞全体の、五段活用化した使役助動詞の容認度は、計 94 例中 25 例、およそ 27%である。これは「起こささない」「思い出ささない」など、同じサ行のモーラ連続を避けるためと推察される。

6.4. 自動詞、他動詞による五段活用化した使役助動詞の容認度への影響と考察

他動詞で五段化回答数の割合が 70%以上となったのは、紙幅の都合上載せていない動詞を含めた 16 語中、表 3 にある 2 語である。一方自動詞は、10 語中 6 語で五段化回答数の割合が 70%以上となった。この差が生じた原因を最後に考察する。なお、自動詞と他動詞を区分する基準は、便宜上新村 (2018) の見出し語に記載しているものに従う。

はじめに 10 語の自動詞に五段活用化した使役助動詞がついた形、「休ます」「喜ばす」「働かす」「咲かす」「終わらす」「笑わす」「立たす」「目立たす」「勝たす」「行かす」を BCCWJ の短単位検索で用例検索すると、「目立たす」を除き用例が見つかった。次に BCCWJ で見つかった用例のなかから、任意の用例をそれぞれ代表して 1 文ずつ抽出した。抽出した用例は、紙幅の都合上省略する。ここで、日本語記述文法研究会 (2009: 261–270) の記す使役文のタイプについて、以下 12 行にわたり要約する。

① 使役者が間接的に事態の成立に関わるもの:
ことばや身ぶりを用いて間接的に事態の成立に関与する。能動的使役文と受容的使役文に分かれる。被使役者がその事態の成立を望む場合は受容的使役、望まない場合は能動的使役に分類される。

② 使役者が直接的に事態の成立に関わるもの:
原因的使役文と他動的使役文に分かれる。原因的使役文は「落胆する」、「納得する」など心的活動を表す動詞や、「笑う」など感情の変化によって起こる動作を表す動詞を伴う。他動的使役文は、元の動詞を自動詞とする使役文の場合に対応する他動詞がない穴を埋めるために用いられる。

③ 使役者が事態の成立には積極的に関わらないもの:
有責的使役文がある。使役者が気づかないうちに事態が進展した、使役者が有効な手だてを講じなかったため望まない事態が生じたなどの意味を表す。

この基準をもとに、コーパスより抽出した使役文の用例を分類したところ、次の結果を得た。表 4、5 では、便宜上コーパスより抽出したそれぞれの 1 文をもって、使われているそれぞれの動詞の用例全体がその使役文のタイプに分類されるとみなした。つまり項目「使役文のタイプ」は、標本調査のような手法で出した結果である。用例が見つからなかった「目立たす」に関しては省略する。

表 4: 自動詞における五段活用化した使役助動詞の容認度と使役文のタイプの関係

	BCCWJ 用例数	五段化回答数容認度	使役文のタイプ
休む／休ます	2	81.8%	間接、受容的
喜ぶ／喜ばす	30	77.3%	直接、原因的
働く／働かす	17	75.9%	直接、他動的
咲く／咲かす	19	74.3%	直接、他動的
終わる／終わらす	18	74.1%	直接、他動的
笑う／笑わす	11	72.3%	直接、原因的
立つ／立たす	7	56.3%	間接、能動的
勝つ／勝たす	1	54.2%	間接、受容的
行く／行かす	9	52.1%	間接、受容的

表 4 より、自動詞が直接的に事態の成立に関わる使役文の要素として使われている場合、五段活用化した使役助動詞が容認されやすいと推察される。容認度が 70%以上の 6 つの自動詞に、それぞれ五段活用化した使役助動詞がついた形の使役文のタイプに着目する。すると、「休ます」を除く 5 つの動詞は直接的に事態の成立に関わる使役文として使われていることが分かる。これらの動詞に五段活用化した使役助動詞が容認されやすい要因は、日本語記述文法研究会 (2009) が述べる「主体からの働きかけによって対象に変化が生じる」という他動詞の特徴が関係する。「喜ばす」「笑わす」は、別の感情からそれぞれの感情に対象が変化している。「働かす」は、精神的な能力が発揮していない状態から発揮した状態に変化している。「咲かす」は花のつぼみが閉じた状態から開いた状態に変化している。「終わらす」は続いていたものがおしまいになるという変化を示している。いずれも「主体からの働きかけによって対象に変化が生じる」という他動詞の特徴と類似している。

一方、容認度が 70%未満の 3 つの自動詞「立つ」「勝つ」「行く」に五段活用化した使役助動詞がついた形、「立たす」「勝たす」「行かす」は、間接的に事態の成立に関わる使役文の要素として使われている。これらの動詞に五段活用化した使役助動詞を伴うことが容認されにくいのは、これらの使役形の表す事態が持つ、対象を変化させる働きが弱いためだと推察される。

他動詞は、五段活用化した使役助動詞の容認度の高低にかかわらず、使役文の 3 タイプに違いが出なかった。表 5 は、調査で用いた他動詞のうち、五段活用化した使役助動詞の容認度が高い動詞と低い動詞をそれぞれ 2 語ずつ抽出したものである。

表 5: 他動詞における五段活用化した使役助動詞の容認度と使役文のタイプの関係

	調査区分	割合	使役文のタイプ
飲む／飲ます	B	75.9%	間接、能動的
言う／言わす	A	68.9%	間接、受容的
行う／行わす	A	41.3%	間接、能動的
負う／負わす	D	31.1%	間接、能動的

7. 調査全体の結論

一連の調査により得られた結果から、以下の結論に至った。これにより、4 節で筆者が立てた仮説は支持されない。

形式的な原因①: 使役受身の形式: 自動詞他動詞ともに、その動詞が使役受身形の場合は使役助動詞が五段活用化しやすい。これは、調音方法変更回数およびモーラ数の削減という発音の簡略化が関係している。

形式的な原因②: 同じ音連続を避ける: 「す」で終わる五段活用動詞に使役助動詞がついた場合はあまり五段活用化しない。これは同じサ行音の連続を避けるという音韻上の理由による。「持つ」に比べて、「感じる」「食べる」「する」が五段活用化した使役助動詞を容認されにくいのも、同じ理由による。

他動詞的機能: 五段活用の自動詞が直接的に事態の成立に関わる使役文として使われている場合、その使役助動詞が五段活用化しやすい傾向にある。この場合、当該の自動詞は他動詞のように機能することが多い。

8. 反省と今後の課題

アンケート回答者の母方言の影響を考慮しなかった。そのため方言による五段活用化の容認度の影響も視野に調査する必要がある。6 節でのアンケートには、回答者が 5 人以下のものもあり、やや客観性が欠けているものもある。そのアンケートについては、最低でも 10 人ほどの回答者に協力してもらえるように尽力すべきであった。

参考文献

新村出 (2018) 『広辞苑』第 7 版. 初版発行: (1955) 東京: 岩波書店.

日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法　第 3 部格と構文　第 4 部ヴォイス』第 2 巻 東京: くろしお出版.

森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京: 東京堂出版.

湯澤幸吉郎 (1953) 『口語法精説』東京: 明治書院.

参考 URL

日本語書き言葉均衡コーパス https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search (最終閲覧日 2020/12/20)

日本語話し言葉コーパス https://chunagon.ninjal.ac.jp/csj/search (最終閲覧日 2020/12/19)

Twitter 高度な検索　https://twitter.com/explore (最終閲覧日 2020/10/21)

標準ドイツ語における [werden＋(完了)不定詞]: 共起表現・コンテキスト・英語との対照の点から

石井　真子
（言語文化学部　英語専攻）

キーワード: ドイツ語，助動詞，モダリティ，未来時制，共起表現

1. はじめに

ドイツ語[1]の [werden＋(完了)不定詞][2] という形式は、推量・命令などの意味を表して話法の助動詞的に用いられるほか、未来時制を表す形式としても用いられる。このため、werden は話法の助動詞とも時制の助動詞とも言える。そこで、本稿は [werden＋(完了)不定詞] と共起する表現の調査、英語[3]との対照調査を通して、この形式について、用いられる状況や表し得る意味の傾向を明らかにすることを目的とする。なお、本稿での日本語訳、グロス、文字飾りは、特に断りのない限り筆者によるものである。

2. 先行研究

2.1. ヘルビヒ・ブッシャ（2006）

ドイツ語の時制と形式、[werden＋(完了)不定詞] について、現代ドイツ語の文法書であるヘルビヒ・ブッシャ (2006: 32-34, 128, 135, 151-152) の記述を要約する。

ドイツ語の直説法の時制は、<u>現在時制</u>・<u>現在完了時制</u>・過去時制・過去完了時制・<u>単純未来時制</u>・<u>未来完了時制</u>の 6 種類である。このうち下線を引いた 4 時制は、時間とモダリティを同時に表す。他の時制形式では、モダリティは主に話法詞[4]で表す。共起する時間副詞類によって文の客観的時間が左右されるため、各時制が 1 つの客観的時間のみを表すわけではない。werden は不定詞とともに単純未来時制 (＝[werden＋不定詞])、完了不定詞とともに未来完了時制 (＝[werden＋完了不定詞]) を作るのに用いる。[werden＋(完了)不定詞] における werden は、不定形・直説法過去の形式をとらない。

例 (1) で、[werden＋不定詞] の例文と日本語訳を引用して示す。太字と下線は筆者によるものであり、太字は werden、下線は不定詞であることを示す。

(1) Wir　**werden**　am　Wochenende　<u>verreisen</u>.
　1PL.NOM　will.1PL.PRS　at+DEF.N.SG.DAT　weekend.N.SG.DAT　go on a trip.INF
「私達は週末に<u>出かける</u>でしょう。」　(ヘルビヒ・ブッシャ 2006: 135)

---

[1] 主にドイツ中部で話されている標準ドイツ語を扱う。
[2] [werden＋不定詞]、[werden＋完了不定詞] をまとめて [werden＋(完了)不定詞] と表記する。
[3] イギリス標準英語を標準英語として扱う。
[4] ヘルビヒ・ブッシャ (2006: 560, 563-5) によると、話法詞は形態と文中の位置が副詞と同じだが、事柄の客観的な様態ではなく、事柄に対する話者の主観的な論評を表す。

2.2. 中村 (1994)

中村 (1994) は Helbig und Buscha (1991)[5] による時制の形式の用法から、現在時制と単純未来時制、現在完了時制と未来完了時制を比較し、各形式が表す意味を考察している。

中村 (1994: 132-136) によると、現在形は現在・未来の事柄を表し、単純未来形は現在・未来の推量的な事柄を表す。現在完了形は過去・未来の事柄を表し、未来完了形は過去・未来の推量的な[6]事柄を表す。このことから、werden は文にモダリティを加えると言える。特に未来完了時制で未来の事柄を表す場合、時間副詞類が必須であるため、文が表す時間を決定しているのは werden というより時間副詞類であり、werden の有無はモダリティの有無にのみ関係するという。文が表す時間を決定しているのは werden 以外の部分 (不定詞・時間副詞類・コンテキストなど) であるという。

2.3. 嶋﨑 (2018)

嶋﨑 (2018) は、ドイツ語の現在形と未来形を比較し、その使い分けをモダリティの面から考察している。嶋﨑 (2018: 41) は、未来形について、「話し手にとっては事態の生起が確実という点では、未来形は未来の事態を表す「時制」であり、聞き手が確実であるか疑いを抱く可能性があると話し手が判断しているという点では、未来形の werden は「話法の助動詞」に近い」と述べている。

現在形と未来形の使い分けについて、嶋﨑 (2018: 39, 41) を一部要約する。

現在形は、「事態の生起に聞き手が疑いを抱かないだろうと話し手が判断」する場合や、すぐに実現しそうな事態の場合に用いられ、未来形は、①「話し手は、事態の生起が確実だと思っているが、聞き手はその生起に疑いを抱くだろうと判断する場合」、②すぐに実現しそうな兆候がない場合、③確実性を強調する場合に用いられるという。

嶋﨑 (2018: 39-41) は、従来の研究の記述をこの使い分けの根拠としている。表 1 に、嶋﨑 (2018) が引用した先行研究[7]と、各研究による未来形についての記述をまとめる。

表 1: 各先行研究における未来形の説明

先行研究	未来形の説明
Fritz (1997)	しばしば話し手の事態に対する強い感情を表す (＝①・③)
Bichsel (1985)	通常脅迫として使う[8] (＝①)
関口	「未来」よりはむしろ「確実らしく言うための表現法」(＝①～③)
Welke (2005)	現在形よりも遠い未来の出来事を表すように感じられる(＝②・③)

[5] 筆者未見。ヘルビヒ・ブッシャ (2006) と同書であるが、版の違いにより記述に差異がみられる。
[6] 中村 (1994: 140) は、未来完了時制が過去の事柄を表す場合は推量のモダリティが含まれるが、未来の事柄を表す場合、モダリティは含まれるがその意味は推量とは限らないとしている。
[7] いずれも筆者未見。なお、関口の出典については、嶋﨑 (2018) に記述がない。
[8] これについて嶋﨑 (2018: 40) は、「ビクセルは勿論、未来形＝「脅迫形」と本気で主張しているわけではない」と述べている。ただし、「脅迫」には相手の考え違いを正し、自分の考えが正しいと主張する強い気持ちが含まれるため、「これは単なる冗談というわけでもなく、半分は本気と受け取るべきであろう」としている。

2.4. 板山 (1997)

板山 (1997: 48-49) は、[werden＋(完了)不定詞] の意味を「非現前性」であると考え、これを、ある事柄を時間的・空間的に、今・ここで話者が確認や知覚できないものだとしている[9]。板山 (1997) は、[werden＋(完了)不定詞] が表す意味や時間は、①werden と結びつく動詞のアクチオンスアルト・随意性、②主語の人称、③文の種類 (平叙文か疑問文か)、④文中の副詞(句) の 4 つの要素から導かれると仮説を立て、H. Böll の小説 „Ansichten eines Clowns“ における werden の用例を調べ、同小説の日本語訳・英語訳から得た対応表現と比較しながら上記の仮説を検証した。

板山 (1997: 49, 56-57) は上記の①～③の場合の文の意味の変化をまとめ、英語との対照調査の結果も踏まえ、英語では werden の部分に概ね will が用いられていること、werden は話法か時制の助動詞というよりも「非現前性」を表す助動詞であり、この「非現前性」が過去から未来までの時間を示し、推量や意志などの意味に解釈されていると述べている。

2.5. Quirk et al. (1985)

現代英語の文法書である Quirk et al. (1985: 136-137, 219) によると、英語のモダリティを表す動詞には話法の助動詞や dare など 1 つの動詞から、 [be going to] のような慣用表現まで程度や構造が様々なものがあり、その意味は、①許可・義務・意志など、事象に関して人間の制御の内側にある意味と、②可能性・必要性・予言[10]など、事象に関して人間の制御の外側にあり、事態の生起に関して人間の判断を伴う意味の 2 つに分けられる。モダリティを表す動詞は①･②両方の用法をもつが、その中間に位置する意味をもつこともあり、例えば話法の助動詞 will は、①の意志・②の予言の 2 つの意味をもつが、“I'll see you tomorrow then.” という文での will の意味は意志と予言の組み合わせと言えるという。

3. 先行研究のまとめと問題点

各先行研究において、[werden＋(完了)不定詞] の形式における werden についてそれぞれ異なる見方がされていることがわかる。表 2 に、各先行研究の werden についての説明をまとめる。ヘルビヒ・ブッシャ (2006) は形式についての記述であるため省略する。

表 2: 各先行研究における werden の説明

先行研究	werden の説明
中村 (1994)	モダリティの有無を表す助動詞
嶋崎 (2018)	時制かつ話法の助動詞 (事態の生起について聞き手が疑うかどうかについての話者の判断)
Fritz (1997)	しばしば話し手の事態に対する強い感情を表す

[9] 「非現実」と同義にとられるかもしれないが、ドイツ語で「非現実」は一般に接続法を用いて表すため、板山 (1997) は「非現実」と「非現前性」を区別していると思われる。
[10] 一般に、未来の事柄を述べる際には「推量」という語が用いられると思われるが、Quirk (1985) が用いている “prediction” という語にもとづき、本稿では「予言」という語で訳す。

Bichsel (1985)	通常脅迫として使う
関口	「未来」よりはむしろ「確実らしく言うための表現法」
Welke (2005)	現在形よりも遠い未来の出来事を表すように感じられる
板山 (1997)	「非現前性」を表す助動詞

さらに、中村 (1994)・板山 (1997) は、[werden＋(完了)不定詞] の形式を用いた文が表す時間と意味を左右する要素について言及している。両者とも、文の時間を左右する要素として不定詞のアクチオンスアルト・時間副詞類・コンテキスト、文の意味を左右する要素として主語の人称・コンテキストを挙げている。板山 (1997) は、不定詞の随意性・文の種類・話法詞も文の意味を左右するという。下線を引いた要素は、両者のうちいずれかの先行研究でその傾向などが明らかにされたが、それ以外は具体的な語などの詳細な記述がされていない。さらに、板山 (1997) はドイツ語の werden と英語の will が概ね対応していると述べているが、will 以外に現れた英語表現については言及していない。そこで、本稿では次の 3 点を先行研究の問題点とする。調査は問題点②・③について行い、その結果から問題点①について考察する。

① [werden＋(完了)不定詞] における werden の説明が先行研究間で一致していない

② [werden＋(完了)不定詞] を用いた文における時間・モダリティを表す表現、コンテキストについて、具体的な調査や記述がなされていない

③ [werden＋(完了)不定詞] における werden 部分に対応する英語表現として、will 以外の表現についての言及がない

4. 調査

本稿では、調査資料として現代ドイツの代表的な児童文学作家 Otfried Preußler による小説 “Krabat“ (1971 年[11]発行、350 頁)、およびその英語版・日本語版を用いた。これらの調査資料を用いて、調査を 2 種類行う。

調査 1 は問題点②についての調査であり、調査対象となる文における、時を表す表現、条件を表す表現、モダリティを表す表現、動詞、命令文の 5 点の共起表現と、コンテキストについて分析する。調査対象とする文は、a. [werden＋(完了)不定詞] の形式を用いている文と、b. 英語で [will＋(完了)不定詞][12] を用いているが、ドイツ語では [werden＋(完了)不定詞] を用いていない文である。ただし、a. のうち、ヘルビヒ・ブッシャ (2006: 200-201, 205-208, 211-214)・板山 (1997: 52-56) の記述にもとづき、接続法の代用形[13]として [werden の接続法II式現在形＋(完了)不定詞] が用いられている文と、b. のうち、ドイツ語で直接対

[11] 初版の発行は 1971 年であるが、入手の都合上、本調査では 2018 年に出版された版を用いた。

[12] [will＋不定詞]、[will＋完了不定詞]、[would＋不定詞]、[would＋完了不定詞] をまとめて [will＋(完了)不定詞] と表記する。英語の表現を[will＋(完了)不定詞]に限るのは、will/would は werden 同様、時間とモダリティを表し、かつその 2 つの意味の区別が難しいためである。

[13] ドイツ語には接続法があり、接続法I式・II式の 2 種類の活用形態がある。活用によっては直説法と同形になるため、代用形として [werden の接続法II式現在形＋(完了)不定詞] が用いられることがある。

応する表現がない文、ドイツ語の対応表現が接続法II式・話法の助動詞など具体的なモダリティを表す文は調査対象から除外する。

調査 2 は問題点③についての調査であり、[werden＋(完了)不定詞] 部分に対応する英語表現とその割合を明らかにする。調査対象とする文は調査 1 で対象とした a. の文である。

例の数え方は、I. 上記の分析対象となる要素が一文中に複数ある場合、II. 全く同じ文が複数あるが場面や話者が異なる場合、III. werden または will が 1 つあるのに対し、(完了)不定詞部分の動詞が複数ある場合は、それぞれを 1 つの例として数える。ただし、聞き返すなどして話者が同一の文を直後か同じ場面で復唱した場合は、まとめて 1 つの例とする。

5. 調査結果

5.1. 調査 1 の結果

時を表す表現、条件を表す表現、モダリティを表す表現、動詞、命令文の 5 点の共起表現と、コンテキストについて、それぞれの特徴と、そこから考察される [werden＋(完了)不定詞] の特徴をまとめる。調査対象となる文は、a. の文は 139 例、b. の文は 169 例であった。共起表現の回数や割合は、特に断りのない限り a. の文についてのものである。

A. 時を表す共起表現は、主に直近よりは少し遠い未来や、時期が不定の未来を表し、eines Tag (いつか), nächste＋名詞 (次の～) などの副詞(句) か、wenn (～するときに) などの接続詞による従属節として共起する傾向にある。[werden＋(完了)不定詞] は、事態の生起する時間が比較的遠い未来、または不定であるために事態の生起の確実性が低いと判断されるときに用いられる傾向にある。このタイプの共起表現は、全部で 67 回出現した。

調査資料から得られたドイツ語・英語の例文を引用する。日本語訳・太字・下線・波線は筆者によるものであり、太字は werden、下線は不定詞、波線は分析対象とした共起表現であることを示す。以下の例もすべて同じである。

(2) Ich **werde** dir Botschaft senden,
1SG.NOM will.1SG.PRS 2SG.DAT message.F.SG.ACC send.INF
wenn es so weit ist, […]
when 3SG.N.NOM so advanced be.3SG.PRS
"I **will** send you word when the time comes […]"
「その時が来たら、きみに知らせを送るよ」

B. 条件を表す共起表現は、仮定・推量などのモダリティを表し、sonst (そうでなければ) などの副詞(句) か、wenn (もし～ならば) などの接続詞による従属節として共起する傾向にある。[werden＋(完了)不定詞] は、主に根拠や具体性に乏しいために事態の生起の確実性が低いと判断されるときに用いられる傾向にある。このタイプの共起表現は、全部で 21 回出現した。

(3) Wenn du auf meinen Vorschlag nicht eingehst,
if 2SG.NOM on my.M.SG.ACC offer.M.SG.ACC not undertake.2SG.PRS

wirst du wohl sterben müssen.
will.2SG.PRS 2SG.NOM surely die.INF must.INF
"For if you refuse my offer, you **will** have to die."
「もし俺の申し出に応じなければ、おまえはきっと死ななければならないだろう。」

C. モダリティを表す共起表現は、wohl (おそらく、確かに) (例 (3)), kein Zweifel (疑いなく) など主に確信の程度を強める表現であるが、出現頻度は低く、全部で 10 回であった。先行研究を踏まえると、[werden＋(完了)不定詞] は文にモダリティが含まれることを示すため、モダリティを表す共起表現をあまり必要とせず、共起するとしてもモダリティの程度に差をつける表現になると言える。

D. [werden＋(完了)不定詞] と共起した動詞の位置と意味は、図 1 のようにまとめられる。

<table>
<tr><th>文の主語</th><th>文の動詞</th><th>従位接続詞</th><th>節の主語</th><th>(完了)不定詞</th><th>節の動詞</th></tr>
<tr><td rowspan="2">話者</td><td>「思う」/
「言う」</td><td>(, dass
＝that)</td><td>話者が伝えたい
事柄の主語</td><td>「なる」/
「わかる」</td><td>werden</td></tr>
<tr><td colspan="5">話者の考えの内容</td></tr>
</table>

図 1: [werden＋(完了)不定詞] と共起動詞の位置と意味

共起動詞は、[werden＋(完了)不定詞] を従属節に含む場合 (例 (4))、denken (思う), fragen (質問する) など、事実や話者の考えを客観的に伝える動詞が多く、それらの意味をもつ動詞は 24 回共起した。[werden＋(完了)不定詞] の(完了)不定詞部分になるもの (例 (5)) は、erfahren (知る), bekommen (～になる) など、事態の変化を表す動詞が多く、55 回共起した。

(4) Aber ich denke, dass es dich kaum überraschen **wird**, […]
but 1SG.NOM think that 3SG.N.NOM 2SG.ACC hardly surprise.INF will.3SG.PRS
"I don't suppose you'**ll** be surprised to hear…"
「でもあなたは全然驚かないと思いますが……」

(5) Du **wirst** es erfahren.
2SG.NOM will.2SG.PRS 3SG.N.ACC learn.INF
"You'**ll** find out why."
「きみはそのうちわかるだろう。」

E. 命令文や、義務・要求を表す節は、常に [werden＋(完了)不定詞] に先行する節に現れた。[werden＋(完了)不定詞] は、事態の生起の確実性が低い場合に用いられるが、命令・要求されたことは通常、実行される (＝事態の生起の確実性が高い) ため、命令文や、義務・要求を表す節とは共起しにくい。命令・要求を表す節との共起は、a. の文では 9 例であったが、b. の文では 24 例であった。

(6) Komm nach Schwarzkollm in die Mühle,
come.2SG.IMP to Schwarzkollm in DEF.F.SG.ACC mill.F.SG.ACC

es **wird** nicht zu deinem Schaden sein!
3SG.N.NOM will.3SG.PRS not to your.M.SG.DAT damage.M.SG.DAT be.INF
"Come to the mill at Schwarzkollm, and you **will** not regret it!"
「シュヴァルツコルムの水車場へ来い、お前の損にはならないだろう！」

F. コンテキストとして、[werden＋(完了)不定詞] は、84.8%が会話文中で用いられ、主に「意志」・「推量」のモダリティを表した。一人称が主語の場合は「～してやる！」という「脅迫」のモダリティを表す (例 (7)) こともあり、一人称が主語の文の 23.3%を占めた。

(7) Ich **werde** dir eine Lektion erteilen,
1SG.NOM will.1SG.PRS 2SG.DAT INDF.F.SG.ACC lesson.F.SG.ACC give.INF
an die du dein Lebtag
at what.F.SG.ACC.REL 2SG.NOM your.M.SG.NOM lifetime.M.SG.NOM
denken sollst!
remember.INF should.2SG.PRS
"Now I **am going to** give you a lesson you will remember all your life!"
「おまえが生涯覚えているべき授業をしてやる！」

5.2. 調査 2 の結果

調査結果では、[werden＋不定詞] には 76.9%の割合で [will/would＋不定詞] が対応し、先行研究の記述が正しいことを確かめた一方、13.4%の割合で [be (going/about/sure) to] (例 (7)) や will 以外の助動詞など具体的なモダリティを表す表現が対応した。[werden＋完了不定詞] は、過去の推量か、未来の事柄を表す未来完了時制の形式であるが、前者の用法で用いられやすく、推量のモダリティが優先して訳出され、助動詞など具体的なモダリティを表す英語表現が対応する (例 (8))。[werden＋不定詞] の werden が接続法II式の場合、英語でも接続法が用いられ、94.4%の割合で [would＋不定詞] が対応した (例 (9))。

(8) Der Ring **wird** es kaum gewesen sein...
DEF.M.SG.NOM ring.M.SG.NOM will.3.SG.PRS 3SG.N.NOM haldly be.PP be.INF
"It **can hardly** have been the ring..."
「このリングだったはずはないだろうし……。」

(9) [...] bald **würde** es ein Gewitter geben.
soon will.3SG.SBJNII 3SG.N.NOM INDF.N.SG.ACC thunderstorm.N.SG.ACC give.INF
"[…] soon after a storm **would** break."
「まもなく雷雨になる。」

5.3. 助動詞 werden についての考察

本稿では先行研究から問題点を 3 点挙げ、問題点②について調査 1、問題点③について調査 2 を行った。調査の結果を踏まえ、問題点①である助動詞 werden について考察する。werden を用いた文は、主に直近よりは遠い未来、あるいは時間が不定の未来に起こる事態

について、条件文・命令文などが共起して「ある事態が実現したら、現状や別の事態がどう変化するか」を表し、事態の生起の確実性が低い場合に、確実性を強調するために用いられる傾向があることを示した。文が表す時間は共起表現によって左右されるため、werden は時制・話法どちらの助動詞かというと話法の助動詞であると言える。

Werden は主に会話文中で「意志」・「推量」・「脅迫」のモダリティを表す。Werden が表すモダリティは通常、英語の will 同様はっきりと特定しにくいが、対応する英語の表現を見る限り、[be (going/about/sure) to] や will 以外の助動詞が表すような具体的なものである場合もあることを示した。

先行研究の記述と比較すると、werden の有無はモダリティの有無を表すという中村 (1994) の記述と最も近いと言える。嶋﨑 (2018)、Fritz (1997)、Bichsel (1985)、関口、Welke (2005)、板山 (1997) の記述については、各記述に当てはまる例や傾向はみられたが、それぞれの反例も得られた。特に嶋﨑 (2018) については、未来形は「聞き手が事態の生起を疑うかどうかに関わらず、話者が事態の生起の確実性を強調するときに用いられることもある」という方がより適切であると言える。

これらのことから、werden は、表す事態が未来のこと・仮定したこと・変化を伴うことであるために、話者あるいは聞き手が事態の生起や成り行きを確信できないときに用いる助動詞であり、確信や強調の程度によって、意志や脅迫など具体的なモダリティを表し得ると結論付ける。

6. 今後の課題

本稿では、調査対象を werden, will に限ったため、今後は分析する対象を広げ、英語原作のドイツ語訳文献を用いるなど例を求める対象も広げて調査し、さらなる考察を行いたい。

略号一覧

1, 2, 3: 1, 2, 3 人称 / ACC: 対格 / DAT: 与格 / DEF: 定冠詞 / F: 女性 / IMP: 命令 / INDF: 不定冠詞 / INF: 不定詞 / M: 男性 / N: 中性 / NOM: 主格 / PL: 複数 / PP: 過去分詞 / PRS: 現在 / REL: 関係詞 / SBJNⅡ: 接続法Ⅱ式 / SG: 単数

参考文献・調査資料

板山眞由美 (1997) 「現代ドイツ語における werden＋不定詞について」『獨逸文學』99: 48-59. / 嶋﨑啓 (2018) 「ドイツ語の現在完了形と過去形の意味的相違と未来形と現在形の意味的相違の並行性について」『東北大学文学研究科研究年報』67: 50-37. / 中村雅美 (1994) 「現代ドイツ語における werden＋Infinitiv についての一考察: Futur II と Präsens との関連にて」『人文論究』44 (3): 131-141. / ゲアハルト・ヘルビヒ、ヨアヒム・ブッシャ、在間進 (訳) (2006) 『新装版 現代ドイツ文法』東京: 三修社 (*Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht.* 4, Auflage. Leipzig: Verlag Enzyklopädie, 1977). / Bichsel, Peter (1985) Die grammatikalische Zukunft. *Schulmeistereien*. Darmstadt: Luchterhand. / Böll, Heinrich (1982) *Ansichten eines Clowns*. München: dtv Verlagsgesellschaft. / Fritz, Thomas (1997) Zur Grammtikalisierung der zusammengesetzten Verbformen mit *werden* - *werden* und die Modalverben im frühen Deutsch und heute. *Zu Tempusu und Modus im Deutschen.* Trier: Wissenschaftlicher Verlag. / Helbig, Gerhard und Joachim Buscha (1991) *Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. 10, Auflage. Leipzig: Verlag Enzyklopädie. / Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman. / Welke, Klaus (2005) Tempus im Deutschen: Rekonstruktion eines semantischen Systems. *Linguistik – Impulse&Tendenzen.* Berlin: Gruyter. / プロイスラー、オトフリート、中村浩三 (訳) (2002) 『クラバート [上] 』東京: 偕成社文庫 (*Krabat*. Stuttgart: K. Thienemanns Verlag, 1985). / プロイスラー、オトフリート、中村浩三 (訳) (1999) 『クラバート [下] 』東京: 偕成社文庫 (*Krabat*. Stuttgart: K. Thienemanns Verlag, 1985). / Preußler, Otfried (2018) *Krabat*. 15, Auflage. München: dtv Verlagsgesellschaft. / Preußler, Otfried, Anthea Bell (trans.) (2010) *Krabat*. London: HaroerCollins Publishers.

アラビア語カイロ方言における動詞の bi- 接頭辞活用形の意味機能

石橋　弘太郎
（言語文化学部　アラビア語専攻）

キーワード: アラビア語，カイロ方言，動詞，テンス，アスペクト

0. はじめに

本稿は、アラビア語カイロ方言 (以下カイロ方言) の動詞形式のひとつである bi- 接頭辞活用形に焦点を当て、カイロ方言で書かれた小説を使い、他形式との比較や、動詞分類ごとの出現頻度についての調査を行って、bi- 接頭辞活用形の表す意味について詳細な記述を試みるものである。

本文中の転写は、カイロ方言の教科書である Abdel-Massih et al. (1979) の巻頭付録 Key to Transcription を参考にした[1]。ذ のみ記述がなかったため、この文字については中道 (2002) を参考にした。尚、本稿における転写・例文番号・図表番号・グロスは、特に断りのない限り筆者によるものである。

1. カイロ方言の動詞形式

中道 (2002: 9) によれば、カイロ方言の定形動詞には、接尾辞活用形、ゼロ接頭辞活用形、bi- 接頭辞活用形、ha- 接頭辞活用形、更に能動分詞が動詞として用いられるので、動詞の役割を果たす形式が全部で 5 つある。本稿では、それぞれの略号として、ss (Suffix Set)、Ø-PS (Prefix Set)、BI-PS、HA-PS、AP (Active Participle) を用い、例文のグロスにおいてもこれらを使用する。尚、ha- 接頭辞活用形については、bi- 接頭辞活用形の意味と重複する部分が少ないため、比較の対象から外し、本稿では特に扱わない。

2. 先行研究

2.1. 中道 (2002)

2.1.1. bi- 接頭辞活用形のアスペクト的意味

bi- 接頭辞活用形は、進行相、習慣相、一時的状態、一般的・恒常的事実といった意味で用いられる (中道 2002: 33)。

(1a) bi-yʕuum　　dilwaʔti.
　　BI-swim.3M.SG (PS)　now
　　「彼は今泳いでいる。」　　(中道 2002: 33)

---

[1]本稿で用いる転写は以下の通り。
子音: أ = ʔ, ب = b, ت = t, ث = t / s, ج = g, ح = ħ, خ = x, د =d, ذ = d / z, ر = r, ز =z, س = s, ش = š, ص = ṣ, ض = ḍ, ط = ṭ, ظ = ẓ, ع = ʕ, غ = ɣ, ف = f, ق = q, ك = k, ل = l, م = m, ن = n, ه = h, و = w, ي = y
短母音: a, i, u, e, o　長母音: aa, ii, uu, ee, oo
ذ,ث の転写について、これらの文字の発音は、語によって揺れが生じる場合がある。このため、複数の転写を併記した。

(1b) bi-yʕuum kulli yoom.
BI-swim.3M.SG (PS) every day
「彼は毎日泳いでいる。」 (中道 2002: 33)

(1c) id-daftar bi-yḍumm kulli ʔasmaaʔ l-muwaẓẓafiin.
DEF-register BI-contain.3M.SG (PS) all names DEF-employees
「その名簿は全ての従業員の名前を収録している。」 (中道 2002: 36)

(1d) is-sukkar bi-yduub fi l-mayya.
DEF-sugar BI-dissolve.3M.SG (PS) in DEF-water
「砂糖は水に溶ける。」 (中道 2002: 37)

2.1.2. ゼロ接頭辞活用形のテンス・アスペクト的意味

動詞が表す事象を事実として客観的に述べる bi- 接頭辞活用形に対して、ゼロ接頭辞活用形は、義務や禁止といったモダリティを表す (中道 2002: 48)。

以下 (2a) では bi- 接頭辞活用形が用いられ、「掃除している」という事実を客観的に示しているのに対し、(2b) ではゼロ接頭辞活用形が用いられ、「掃除しなければならない」という話者の態度が表されている。

(2a) huwwa bi-yinaḍḍaf ʔooḍa.
he BI-clean.3M.SG (PS) room
「彼は部屋を掃除している。」 (中道 2002: 48)

(2b) huwwa ø-yinaḍḍaf ʔooḍa.
he ø-clean.3M.SG (PS) room
「彼は部屋を掃除しなければならない。」 (中道 2002: 48)

ゼロ接頭辞活用形は、超時間的叙述にも用いられ、現実に起こっている事態を指して述べるのではなく、恒常的事実、一般的真理として述べる際に用いられるという (中道 2002: 52)。

(3) is-sukkar ø-yiduub fi l-mayya.
DEF-sugar ø-dissolve.3M.SG (PS) in DEF-water
「砂糖は水に溶ける。」 (中道 2002: 52)

2.1.3. bi- 接頭辞活用形、接尾辞活用形、能動分詞のテンス・アスペクト的意味の比較

中道 (2002: 82-120) は、工藤 (1995) の分類に従い、動詞を主体動作動詞、主体動作・客体変化動詞、主体動作・主体変化動詞、主体変化動詞、長期的活動を表す動詞、心理・知覚動詞、移動動詞の 7 つに分類し、接尾辞活用形、bi- 接頭辞活用形、能動分詞それぞれの形式を、動詞が表すテンス・アスペクトにおいて比較している。その内容を以下表 1 に示す。

表 1: 各動詞分類における動詞形式別テンス・アスペクト的意味

	bi- 接頭辞活用形	接尾辞活用形	能動分詞
主体動作	進行相現在	完成相過去	パーフェクト相現在
主体動作客体変化	進行相現在	完成相過去	パーフェクト相現在
主体動作主体変化	進行相現在	完成相過去	状態相現在
主体変化	進行相現在	完成相過去	状態相現在
長期的活動	使えない	完成相過去	活動の継続的状態
心理・知覚	状態相現在	過去の一時的状態	状態相現在
移動	使えない	完成相過去	進行相現在

(中道 2002: 81-120 を基に筆者作成)

2.2. 榮谷 (2002)

2.2.1. アクチュアル性における bi- 接頭辞活用形とゼロ接頭辞活用形の違い

榮谷 (2002:272-275) では、ゼロ接頭辞活用形は、アクチュアル性が低い、つまり時間を超越した普遍的な事柄を表し、一方の bi- 接頭辞活用形は、アクチュアル性が高い、つまり時間的に個別具体的な事実を表すと述べている。

(4) firʕuun yimuut, ø-yintiʔil[2] li l-ʕaalam l-ʔaaxar,
Pharaoh ø-die.3M.SG (PS) ø-move.3M.SG (PS) for DEF-world DEF-another
yuɦukum hinaak.
ø-govern.3M.SG (PS) there
「ファラオは死に、別の世界に移り、そこで統治するのだ。」 (榮谷 2002: 273)

ここでは、ファラオは人間なのだから、死ぬ運命にある、という意味合いで、ゼロ接頭辞活用形が用いられている。他方、bi- 接頭辞活用形を用いた例として (5) を挙げている。

(5) Haruko bi-tumuut.
Haruko BI-die.3F.SG (PS)
「ハルコが死につつある。」 (榮谷 2002: 273)

このように bi- 接頭辞活用形を用いた場合、「誰かが今、死につつある」という現在進行中の事態を表す。

榮谷 (2002: 275) も中道 (2002) 同様に、bi- 接頭辞活用形の習慣を表す用法を認めている。しかし、どの程度の反復があれば習慣といえるのか、習慣と一般的事実の境界はどこなのかといったことが不明瞭であることから、bi- 接頭辞活用形とゼロ接頭辞活用形は完全に分裂した範疇ではなく、連続的であるとしている。

[2] 原文ではゼロ記号の表記はないが、本稿におけるゼロ接頭辞活用形と同じものを指すと解釈し、筆者がゼロ記号を付け加えた。(6) の tuʔuul についても同様。

2.2.2. 能動分詞

榮谷 (2002: 294) によると、能動分詞は基本的に結果を表すことが指摘されている。

2.2.3. ゼロ接頭辞活用形のいわゆる不定詞的な用法

現実世界で具体的な形で生じていないことを示すゼロ接頭辞活用形の用法に、いわゆる不定詞的な用法を挙げている。

(6) ʕeeb ø-tuʔuul ħaaga zayy kida li waaħid ʔaddi waalid-ak.
shame ø-say.2M.SG (PS) thing like that for someone equivalent father-your
「あなたの父のような人に向かって、そのようなことを言ってはいけません。」
(榮谷 2002: 292)

この例は、「あなたの父のような人に向かって、あなたがそのようなことを言うこと」という意味でゼロ接頭辞活用形が用いられ、それが罪である、という構文になっている。

3. 先行研究のまとめと問題点

まず、中道 (2002) は、bi- 接頭辞活用形の表す意味について、進行、習慣、一時的状態、一般的事実のうち、進行相でしか bi- 接頭辞活用形と他形式との比較を行っていない。このため、bi- 接頭辞活用形は用いられないとされている例についても、習慣相でなら意味が通る文になるものもある。中道 (2002: 35, 46) でもそのことに対する言及はあるものの、習慣相で用いられている例について、動詞分類ごとの他形式との比較は行われていない。bi- 接頭辞活用形の最も基本的なアスペクトである進行相と習慣相 (中道: 2002: 33) のうち、習慣相について詳しく比較が行われていないというのは、考察として不十分であると筆者は考える。榮谷 (2002) に関しては、各動詞形式の用法を示しているが、bi- 接頭辞活用形がどのような動詞と結びつきどの程度の出現するかなどが明らかにされていない。以上を踏まえて、bi- 接頭辞活用形の進行相だけでなく、習慣相も含めて他形式と比較し、さらにはどのような動詞と結びつきどの程度用いられるかといった、更に詳細な考察を行う余地があると思われる。

4. 調査

4.1. 調査資料

調査では、Al-Khamiisii (2006) *Taksii ħawaadiit l-mašawiir* (タクシー 道中での出来事) を調査資料として用いる。著者の Khaled Al-Khamissi はカイロ出身である (Al-Khamissi (2006) 裏表紙より)。会話部分がカイロ方言で書かれており、地の文は現代標準アラビア語で書かれているため、本稿では会話部分を調査対象とする。

4.2. 調査の方法

調査では、上記小説から、bi- 接頭辞活用形、ゼロ接頭辞活用形、能動分詞を用いた文を手作業で全て抜き出し、それぞれどのような意味で用いられているか調査する。

ただし、意味の判定において客観性を持たせるため、時間を表す副詞と共起するもののみ抜き出した。動詞分類については、中道 (2002: 86) の分類に従い、中道 (2002) に記述がない場合は中道 (2002) が動詞を分類する上で参考としている工藤 (1995: 69-79) に従った。工藤 (1995: 69-79) にも記述がない場合のみ、筆者が分類を行った。

4.2.1. 意味の判定方法

動詞が表す動作が、時間副詞が表す範囲内で反復可能な場合、反復されているとみられるときは習慣・反復の意味とした。反復可能で、実際には反復して行われるまたは起こるが、主体の意思によるというよりは、そのものの一般的な性質として定着しているとみなされると思われる場合は、超時間的叙述とした。反復可能でも、繰り返されておらず、時間副詞が表す範囲内で継続している場合は進行の意味とした。反復可能ではない場合、時間副詞が表す範囲内で具体的動作として継続している場合は進行の意味とした。継続しているが具体的な動作として顕在化しない場合などは、一時的状態の意味とした。

動詞が、laazim (～しなければならない)、mumkin (～かもしれない) などのモダリティを表す語や、別の動詞に後続し、「～すること」の意味で用いられている場合、他のアスペクト的要素にかかわらず、いわゆる不定詞的な用法とした。複数の動詞が同じレベルで並列し、後ろの動詞も前の動詞と同じアスペクト的意味を表すと思われる場合には、他のアスペクト的要素にかかわらず、前の動詞との並列とした。動詞が表す動作に、話者の何かしらの評価や態度が現れていると思われる場合には、他のアスペクト的要素にかかわらず、モダリティを表す用法とした。

動詞の表す動作による影響、結果が発話時に有効でありその状態が継続していると思われる場合はパーフェクトとした。また動詞の表す動作がまだ行われていない、これから行われるものと思われる場合は、未来を表す用法とした。

4.3. 調査の結果

4.3.1. bi- 接頭辞活用形

時間を表す副詞と共起する bi- 接頭辞活用形が用いられていた文は 56 例抽出された。

表 2: bi- 接頭辞活用形の意味別用例数

習慣・反復		進行		一時的状態		合計	
41 例	73%	12 例	21%	3 例	5%	56 例	100%

意味別でみると、bi- 接頭辞活用形は、習慣・反復の意味が 56 例中 41 例と最も多く用いられているという結果になった。続いて進行が 12 例、一時的状態が 3 例と続くという結果となった。

4.3.2. ゼロ接頭辞活用形

時間を表す副詞と共起するゼロ接頭辞活用形が用いられていた文は 91 例抽出された。

表 3: ゼロ接頭辞活用形の意味別用例数

不定詞的用法	超時間的叙述	前の動詞との並列[3]	モダリティ	合計
53 例　56%	24 例　26%	11 例　12%	3 例　3%	91 例　100%

ゼロ接頭辞活用形が用いられていた用例を意味別でみると、ゼロ接頭辞活用形は、いわゆる不定詞的な用法が 91 例中 53 例と最も多く用いられているという結果となった。続いて超時間的叙述が 24 例、前の動詞との並列が 11 例、モダリティを表すのは 3 例という結果となった。

4.3.3. 能動分詞

時間を表す副詞と共起する能動分詞が用いられていた文は 47 例抽出された。

表 4: 能動分詞の意味別用例数

継続的状態	活動の継続	進行	真偽判断のモダリティ
16 例　34%	7 例　15%	6 例　13%	5 例　11%
パーフェクト	不定詞的用法	一時的状態	慣行儀礼のモダリティ
5 例　11%	3 例　6%	2 例　4%	2 例　4%
未来	合計		
1 例　2%	47 例　100%		

意味別でみると、能動分詞は、継続的状態の意味が 47 例中 16 例と最も多く用いられているという結果となった。それに次いで多いのが活動の継続で 7 例、この 2 つを合わせると 23 例となり、能動分詞は全体の約半数が、継続に関わる意味で用いられていることがわかった。

5. 結果の考察

5.1. 動詞分類による比較

bi- 接頭辞活用形、ゼロ接頭辞活用形、能動分詞がそれぞれどのような動詞分類で用いられていたか、用例数順に上から並べ、次頁の表 5 に示す。

bi- 接頭辞活用形とゼロ接頭辞活用形ではどちらも、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞が上位 2 位を占め、心理知覚動詞や主体動作主体変化動詞は下位という結果で共通しているが、能動分詞では逆に、心理知覚動詞が最も多く、主体動作動詞や主体動作客体変化動詞は下位であるという結果となった。このことから、bi- 接頭辞活用形とゼロ接頭辞活用形はどちらも定形動詞で、動きが顕在的な動詞で用いられやすく、能動分詞は具体的動きを伴わない動詞で用いられやすいと言える。

[3]「前の動詞との並列」とは、「～して…する」のように同じレベルで複数の動詞が並列する際、前の動詞が bi- 接頭辞活用形や ha- 接頭辞活用形である場合、後ろの動詞では接頭辞の bi- や ha- が省略されて、意味的には前述の動詞の bi- や ha- の意味を引き継いでいるが見かけ上はゼロ接頭辞活用形として出現していることが窺えたため、このカテゴリーを設定した。

表 5: 各動詞形式で用いられていた動詞分類

bi- 接頭辞活用形			ゼロ接頭辞活用形			能動分詞		
主体動作	19 例	34%	主体動作客体変化	29 例	31%	心理・知覚	15 例	32%
主体動作客体変化	17 例	30%	主体動作	22 例	23%	状態	9 例	19%
移動	7 例	13%	移動	14 例	15%	移動	8 例	17%
主体変化	6 例	11%	主体変化	13 例	14%	長期的活動	7 例	15%
心理・知覚	4 例	7%	心理・知覚	10 例	11%	主体動作客体変化	3 例	6%
主体動作主体変化	3 例	5%	主体動作主体変化	1 例	1%	主体変化	3 例	6%
			長期的活動	1 例	1%	主体動作	2 例	2%

5.2. 共起する時間を表す副詞による比較

次に、bi- 接頭辞活用形、ゼロ接頭辞活用形、能動分詞が、それぞれどのような時間を表す副詞と共起したか、用例数の割合が 5%以上だったものを用例数が多い順に上から並べ、表 6 に示す。

表 6: 各動詞形式で共起した時間を表す副詞

bi- 接頭辞活用形			ゼロ接頭辞活用形			能動分詞		
毎日	8 例	14%	今	6 例	7%	～している間ずっと	6 例	13%
ひと月に	5 例	9%	その年の末に	6 例	7%	今	5 例	11%
日中ずっと	4 例	7%	1 日に	6 例	7%	今まで	4 例	9%
何時間か	3 例	5%	今日	5 例	5%			
			3 週間	5 例	5%			

bi- 接頭辞活用形は習慣・反復の意味で用いられることが多いと上述したが、「毎日」「ひと月に」などの頻度を表す副詞と共起することが多いということもそれを裏付ける結果と考えられる。実際、これら 2 つの時間を表す副詞と共起した例は全て習慣・反復の意味で用いられていた (4.3.1. を参照)。ゼロ接頭辞活用形と能動分詞に関しては、特にはっきりと認められる傾向はないように思われる。このことから、bi- 接頭辞活用形は他の 2 形式よりも、より時間の概念、特に習慣・反復の意味と結びついた形式であると考えることができる。

5.3. bi- 接頭辞活用形の表す意味について

先行研究のうち、中道 (2002) では、bi- 接頭辞活用形は使えないとされていた移動動詞でも、習慣・反復の意味での用例が確認できた。

(7) wi henaak yoom l-ʔaħad kunt b-aruuħ maθħaf l-luufr.
and there day DEF-Sunday be.1SG (SS) BI-go.1SG (PS) museum DEF-Louvre
「そしてそこ (パリ) では、日曜日にルーブル美術館へ行っていた。」

よって、bi- 接頭辞活用形を他の形式と比較する際、進行の意味でしか比較しないのは不十分であり、習慣・反復の意味こそ bi- 接頭辞活用形の表す最も一般的な意味であると考えられる。

bi- 接頭辞活用形では使用例がなかった長期的活動を表す動詞が、能動分詞では 7 例と、より多く観察された。その 7 例中 7 例が活動の継続を表す意味で用いられていたことから、長期的活動の継続を表すには能動分詞が用いられ、この意味を bi- 接頭辞活用形で表すことはできないという中道 (2002) の記述を裏付ける結果となった。

(8) da ʕaayiš fi s-saʕudiyya baʔaa l-u yiigii ʕišriinsana.
that live.M.SG (AP) in Saudi Arabia become for-him about 20 years
「その人はサウジアラビアで暮らしていて、もう 20 年になる。」

この ʕaaš (暮らす、生活する) という動詞を含む長期的活動を表す動詞について、中道 (2002: 111) は、人間の活動 (=動き) を表すが、その活動のスパンは長期にわたるものが多く、具体的・顕在的な動作は含まない (「住む」という一つの具体的な動作があるわけではない) 点が特徴的だと述べている。

6. 終わりに

本稿では、カイロ方言の bi- 接頭辞活用形の意味について、他の 2 つの形式との比較を通じて論じた。先行研究では用いられないとされている意味について、小説内での使用例を確認できた。しかし今回の調査では、調査対象を時間の副詞と共起するものに限定したため、抽出された用例数が少なく、個々の動詞や時間を表す副詞について、カイロ方言の bi- 接頭辞活用形や他の動詞形式の使用例をまんべんなく得られたとは言い難い。客観性を持たせつつ、より広範囲な調査を行い、カイロ方言の bi- 接頭辞活用形の意味や他形式との比較をより明確なものにすることを今後の課題とする。

略号一覧

1: 一人称 / 2: 二人称 / 3: 三人称 / AP: 能動分詞 / DEF: 定 / F: 女性 / M: 男性 / NEG: 否定 / PL: 複数 / PS: 接頭辞活用形 / SG: 単数 / SS: 接尾辞活用形

参考文献・調査資料

Abdel-Massih, Ernest T., Zaki N. Abdel-Malek and El-Said M. Badawi (1979) *A Reference Grammar of Egyptian Arabic*. Washington, DC: Georgetown University Press. / Al-Khamissi, Khaled (2006) *Taaksi ħawadiit l-mašawiir* Cairo: Daar š-šuruuq. / 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』東京: ひつじ書房. / 中道静香 (2002)『アラビア語カイロ方言におけるテンス・アスペクト―談話機能的観点から―』大阪大学言語文化研究科博士論文. / 榮谷温子 (2002)「アラビア語エジプト方言の未完了形の用法」『アジア・アフリカ言語文化研究 (Journal of Asian and African Studies)』63: 265-301.

イタリア語の前置詞 con, su, per と定冠詞の結合について

小木曽　円香
（言語文化学部　日本語専攻）

キーワード：イタリア語，前置詞，定冠詞，結合，コーパス

0. はじめに

イタリア語では、いくつかの前置詞が直後に来る定冠詞と結合した形式を取ることがある。イタリア語における前置詞と定冠詞の結合について、先行研究でまだ分析されていない前置詞 con, su, per に注目し、コーパス調査を通じて形態の通時的変遷や結合の起こる条件について考察を行うことが本稿の目的である。なお、本文中の図表、例文番号、グロス、訳は特に断りのない限り筆者によるものである。本稿では、前置詞と定冠詞が結合している形を結合形、分離している形を分離形と定義する。

1. 前置詞と定冠詞の結合について

坂本 (1979) に基づき、イタリア語の定冠詞、および前置詞と定冠詞の結合した形式について簡潔に述べる。定冠詞は後続する名詞の性・数、および定冠詞の直後に置かれる語の語頭音の種類によって表 1 のような形を取る。これらの定冠詞が先行する前置詞と結合すると表 2 のような形態になる (両表は坂本 1979: 37 を基に筆者が作成)。

表 1: イタリア語の定冠詞

	単数	複数	次にくる語の語頭音
男性	il	i	下記以外の子音
	lo	gli	s+子音, z, gn, ps, x および半母音[j] (j で表わされるものに限る)
	l’	gli	母音
女性	la	le	子音
	l’	le	母音

表 2: 前置詞と定冠詞の結合

	il	lo	la	l’	i	gli	le
a “at, to”	al	allo	alla	all’	ai	agli	alle
di “of”	del	dello	della	dell’	dei	degli	delle
in “in, to”	nel	nello	nella	nell’	nei	negli	nelle
da “from”	dal	dallo	dalla	dall’	dai	dagli	dalle
su “on”	sul	sullo	sulla	sull’	sui	sugli	sulle
con “with”	col	con lo	con la	con l’	coi	con gli	con le

con は定冠詞 lo, gli, la, le, l’と結合するとき collo, cogli, colla, colle, coll’としても間違いではない。しかし、同音同綴意義語 collo「首」、colla「糊」、colle「丘」と混同される恐れが生じるためこれらの形は避けるのが普通である。英語の for にあたる前置詞 per は il, i と結ばれて pel, pei の形を作ることができるが、現代語では普通とは言えない。

2. 先行研究

2.1. 上野・谷岡（2006）

上野・谷岡 (2006) では、イタリア語の文学作品をコーパスとして各コーパスにおける冠詞前置詞[1]の計量的調査を行い、各時代の冠詞前置詞の量的分布を明らかにした。さらに、数値化した冠詞前置詞の使用割合のデータを基にクラスター分析と主成分分析を用いて時系列的な推移パターンの考察を行った。コーパスの選定にあたっては、トスカーナ方言[2]で書かれたものに限定し、散文の中で極端に口語調のものを避けた。散文作品が口語調であるかどうかという判断は、D’Achille (1990) の基準に基づいている。イタリア語史の時代区分も D’Achille (1990) を応用した。各コーパスのデータを基に、7 つの前置詞における結合形の使用割合の時系列推移の類似度をクラスター分析したところ、a, di, da, in が一つのクラスターを形成していたことから、考察対象を a, di, da, in としている。4 つの前置詞 a, di, da, in をまとめて結合形と分離形の時系列的推移を見ると、最も古い時代のコーパス以外では結合形の使用が全て優位となっていた。さらに、1 節で述べたように冠詞前置詞は後続する名詞によって定冠詞が変わることから様々な形態的ヴァリエーションを持つため、それらの形態別に使用割合を調査し主成分分析を行ったが、時系列推移のパターンを完全には提示することができなかった。

2.2. 研究の見通し

先行研究には次の問題点が認められる。①時系列的推移を分析する前置詞が a, di, da, in の 4 つにとどまっており con, su, per について詳しく扱っていない。②定冠詞が通時的変遷の中で多くの揺れを持つために、主成分分析で形態別に推移パターンを追っても複雑な結果となりデータの扱いが難しくなっている。③一部の前置詞と定冠詞の結合については sui と su i のように分かち書きでしか分離形との区別が出来ないものがあり、古い文献の写本、それを刊本にしたものの信憑性について検討する必要がある。④研究対象が結合形の時系列的推移に留まり、結合形の現れる条件などについては言及されていない。

したがって本稿では、前置詞 con, su, per について上野・谷岡 (2006) よりもコーパスの種類と量を増やし、結合形と分離形のみに絞って推移パターンを調査する。その後、コーパスごとに前置詞自体の頻度や構文、共起する語などを調べ、結合形の現れる条件を探る。

---

[1] 上野・谷岡 (2006) の指す「冠詞前置詞」は、本稿における結合形と同じ。

[2] Dardano and Trifone (1997: 90) によると、13 世紀後半から 14 世紀初めにかけてイタリア全土の著作においてトスカーナ方言の使用が課されたため、トスカーナ方言は標準イタリア語の基礎となったという。

3. 調査

3.1. 使用するコーパス

コーパスとするのは、「(i) 上野・谷岡 (2006) で用いられていた 9 作」「(ii) 上野・谷岡 (2006) では用いられなかったが、D'Achille (1990) の基準を満たす 5 作」「(iii) 上野・谷岡 (2006) における第VI期に該当し、D'Achille (1990) の基準を満たすと筆者が判断した 3 作」の計 17 作の文学作品である。いずれもオンライン上[3]で収集し、全範囲を用いる。表 3 に使用するコーパスの一覧を示す。(ii), (iii) のコーパスについては網掛けを施している。

表 3: 調査で使用するコーパス

時代区分	著者	作品名	語数[4]
第Ⅱ期 1250～1375	Bono Giamboni (1240-1292)	*Il Libro de' Vizî e delle virtudi* (不明)	32,149
	Dante Alighieri (1265-1321)	*Convivio* (1304-1307)	71,137
	Giovanni Boccaccio (1313-1375)	*Decameron* (1349-1353)	273,232
第Ⅲ期 1375～1525	Giovanni Cavalcanti (1381-1451)	*Istorie fiorentine* (1423-1447)	198,284
	Alberti Leon Battista (1404-1472)	*I libri della famiglias* (1432-1443)	120,558
	Niccolò Machiavelli (1469-1527)	*Il Principe* (1513)	28,371
第Ⅳ期 1525～1612	Francesco Guicciardini (1483-1540)	*Storia d'Italia* (1537-1540)	621,970
	Antonio Francesco Grazzini (1503-1584)	*Le Cene* (1549)	126,701
	Giovanni Della Casa (1503-1556)	*Galateo* (1551-1555)	23,179
	Giorgio Vasari (1511-1574)	*Le Vite* (1568)	288,718
第Ⅴ期 1612～1840	Galileo Galilei (1564-1642)	*Dialogo sopra I due massimi sistemi del mondo* (1632)	177,354
	Vincenzo Viviani (1622-1703)	*Discorso intorno al difendersi da' riempimenti* (1688)	不明[5]
	Giacomo Leopardi (1798-1837)	*Operette Morali* (1824)	86,357
第VI期 1840～現在	Gabriele D'Annunzio (1863-1938)	*Il Piacere* (1889)	102,636
	Italo Svevo (1861- 1928)	*La coscienza di Zeno* (1923)	143,149
	Italo Calvino (1923-1985)	*Il castello dei destini incrociati* (1973)	29,052
	Umberto Eco (1932-2016)	*Il nome della rosa* (1980)	185,543

3.2. 調査方法

本研究では、以下の 3 つの方法で調査を行う。

【調査 1】con, su, per と定冠詞が統語的に連続するものについて、結合形と分離形のどちらが用いられているか調べる。コーパスを Adobe Acrobat Reader DC (以下リーダー) で開き、全文一致検索機能を用いて結合形と分離形でそれぞれ検索する。脚注、引用など本

[3] Academia.edu (https://www.academia.edu), Edoardo Mori (http://www.mori.bz.it), Google Books (https://books.google.co.jp), Internet Archive (https://archive.org), Liber Liber (https://www.liberliber.it/online), PDF Drive (https://www.pdfdrive.com), SkypeScuola (https://skypescuola.wordpress.com) より収集。
[4] Monterey Language Services (http://www.montereylanguages.com) の語数計算ツールで算出した。
[5] ツールにエラーが発生したためカウントできなかった。

文以外でヒットしたもの、同音同綴異義語を手作業で除外し、結合形と分離形の用例数をカウントする。ただし、結合形と分離形の区別が分かち書きでしかされない sui と su i、sugli と su gli は調査対象から除外する。結合形の用例数を結合形・分離形の用例数の合計で割り、結合形の使用割合を求める。以上の作業を con, su, per それぞれについて行う。

【調査 2】「前置詞の登場頻度が高ければ結合形もよく出現する」という仮説を立て、調査 1 で得られた結合形の使用割合と、コーパス全体に占める各前置詞の割合に関係があるかどうか調べる。リーダーの検索機能を用いて前置詞を検索する (結合形も含む)。調査 1 同様不適な例を除外し、前置詞の登場回数を数える。前置詞の登場回数をコーパス全体の語数で割り、全語数に占める前置詞の割合を求める。ただし、全体の語数が求められなかった Viviani コーパスは調査対象から除外する。以上の作業を con, su, per それぞれについて行う。それぞれのコーパスで結合形の使用割合との相関係数を求める。

【調査 3】共起する語や構文に結合形の現れやすい条件があるかどうか調べる。con, su, per いずれの前置詞でも結合形と分離形が混在している第Ⅲ期の Alberti コーパスを用いる。リーダーの検索機能を用いて結合形と分離形をそれぞれ検索する。ヒットした文を抽出し、文中の前置詞と共起する語を記録する。抽出した文の中から、統語上は等位接続で、意味的に並列・対比・比較の関係にある同じ種類の前置詞句が登場するものをさらに抽出し、それらの形態を記録する。以上の作業を con, su, per それぞれについて行う。

4. 調査結果

4.1. 調査 1

調査 1 の結果は図 1 のようになった。(ii), (iii) のコーパスについては、図中の星印で示している。数値が 1.0000 となっているところはそのコーパスにおいて全て結合形を使用していることを、0.0000 は全て分離形として出現していることを意味する。

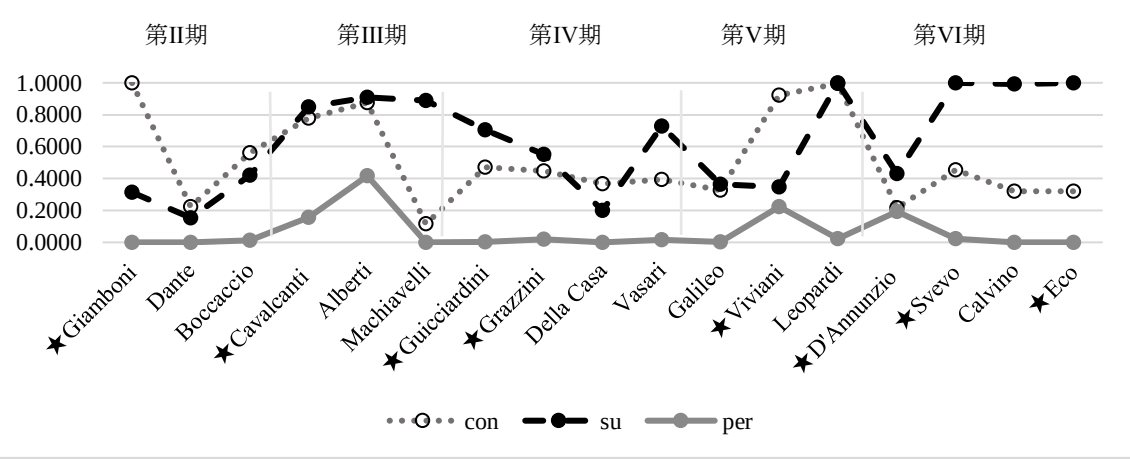

図 1: 各コーパスにおける con, su, per の結合形の使用割合 (小数第 5 位で四捨五入)

各コーパスの結合形の使用割合を調べた結果、本研究で用いたコーパスの範囲内では con, su, per の結合形の使用割合の変遷ははっきりとは読み取れなかったが、図 1 から分か

るように、第Ⅲ期の Alberti コーパスと第Ⅴ期の Viviani～Leopardi コーパスを中心に二回、結合形が比較的多く現れる山が見られた。

表 4 は、全てのコーパスを用いて定冠詞別に見た con, su, per の結合形の使用割合平均である。それぞれの前置詞で最も使用割合平均が高かった定冠詞を太字と下線、次に使用割合平均が高かった定冠詞を太字で示している。

表 4: 定冠詞別に見た con, su, per の結合形の使用割合平均

	con	su	per
X-il	**<u>0.9151</u>**	**<u>0.9739</u>**	**<u>0.3455</u>**
X-lo	0.3167	**0.5614**	0.0000
X-l'	0.2912	0.4844	0.0118
X-la	0.2850	0.4923	0.0096
X-i	**0.7780**		**0.3091**
X-gli[6]	0.1590		0.0000
X-le	0.3051	0.5298	0.0210
X-li[7]	0.2885	0.5000	0.0000

il はいずれの前置詞でも最も多く結合形が現れていた。i は、su との結合について調査対象から外したが、con と per との結合形が il に次いで多かった。1 節でも見たように、いくつかの結合形は同音同綴異義語が存在し、混同を避けるために結合形が用いられないと坂本 (1979: 37) で述べられていて (collo「首」とその複数形 colli、colla「糊」、colle「丘」、さらに pelle「肌」とその複数形 pelli)、確かに同音同綴意義語が存在する結合形の使用割合の平均は il, i との結合形よりも少なくなっている。しかし、1 つのコーパス内に結合形と同音同綴異義語が混在しているものもあった。よって、同音同綴意義語が存在する結合形は、混同を防ぐため使用を避けるのが普通だという坂本 (1979) の指摘と完全には一致していない。同音同綴異義語が存在しない結合形でも使用割合が低いものがあることから、結合形の現れる条件が他にないか検討していく必要がある。

4.2. 調査 2

本研究で用いたコーパスの範囲内では、前置詞の全語数に占める割合と結合形の使用割合に相関関係がほぼ見られなかった。紙幅の都合上、詳細な結果は省略する。

4.3. 調査 3

調査 3 の結果のうち、共起する語を登場回数の多い順に上位 5 位までをまとめると以下のようになった (括弧内は登場回数)。英語の縮約現象に注目した今道・石川 (2006) が「縮約形の構文の方が縮約されていない構文よりもその後に『具体性のある名詞』[8]が多く出現している」と指摘していることを踏まえて語の具体性に着目し、「具体性のある名詞」には網掛けを施している。旧式の綴りは全て現代式の綴りに直して示す。

<[前置詞 con＋定冠詞] と共起する語>

[6] 後続語が i で始まるときに用いられる X-gl'形も含む。
[7] 男性複数形につく定冠詞。現在は使われていない。
[8] 人を表す名詞・普通名詞・具体名詞のこと。本稿でもこの今道・石川 (2006) の定義に従う。

結合形：*quali* REL.PL (24), *animo* mind.M.SG (16), *quale* REL.SG (12), *favore* favor.M.SG (4), *sangue* blood.M.SG (4)
分離形：*altri* other.M.PL (5), *amici* friend.M.PL (3), *strani* stranger.M.PL (3), *amico* friend.M.SG (2), *occhi* eye.M.PL (2)

<[前置詞 su＋定冠詞] と共起する語>
結合形：*fatto* fact.M.SG (2), *lito* beach.M.SG (2), *porta* gate.F.SG (2), *letto* bed.M.SG (1), *albeggiare* dawn.INF (1)
分離形：*aurora* aurora.F.SG (1), *occhi* eye.M.PL (1), *uscio* door.M.SG (1)

<[前置詞 per＋定冠詞] と共起する語>
結合形：*quali* REL.PL (4), *avvenire* happen.INF (2), *figliuoli* son.M.PL (2), *padre* father.M.SG (2), *tedio* tedium.M.SG (2)
分離形：*quali* REL.PL (5), *avvenire* happen.INF (4), *amici* friend.M.PL (3), *quale* REL.SG (3), *virtù* virtue.F.SG (3)

本研究で用いたコーパスの範囲内では、前置詞によって差はあるものの「具体性のある名詞」は結合形よりも分離形の方が共起しやすいという結果になった。分かりやすくするため、表 5 に「具体性のある名詞」の登場回数と出現率をまとめている。

表 5: 「具体性のある名詞」の登場回数と出現率

		登場回数	出現率
con	結合形	78/216	36.11%
	分離形	25/31	**80.65%**
su	結合形	15/21	71.43%
	分離形	3/3	**100.00%**
per	結合形	16/40	40.00%
	分離形	25/56	**44.64%**

con では結合形と分離形で「具体性のある名詞」の出現率に大きく差が出た。他の前置詞も出現率はいずれも分離形の方が高くなっていることから、結合形／分離形の選択は共起語彙と何らかの関係を持つということが推察できる。結合形が分離形よりも「具体性のある名詞」に該当しない名詞 (以下「抽象的な名詞」とする) と共起しやすいと言う方が適切であろう。具体的に名詞を見てみると、con では関係代名詞 quale とその複数形 quali がいずれも結合形の後にのみ現れた。用例は少ないが所有代名詞 tuoi や suoi も結合形の後にのみ現れた。以下、用例の日本語訳はアルベルティ (2010，池上・徳橋訳) による。

(1) 結合形の後に現れる関係代名詞 quale の例

quello mutamento d'animo *col* quale noi
that.M.SG change.M.SG of+mind.M.SG with+ART.DEF.M.SG REL.SG 1PL
appetiamo e ci cruciamo tra noi.
desire.IND.PRS.1PL and REFL.1PL fret.IND.PRS.1PL between 1PL
「…それによってわれわれが願いや怒りを感じる『魂』の力」

(2) 結合形の後に現れる所有代名詞 tuoi の例

...e fai sì che essendo tu *coi* tuoi,

and do.IND.PRS.2SG so that be.GER 2SG with+ART.DEF.M.PL POSS.M.2SG

「あなたときたら、家族と一緒にいながらも...」

con とは異なり、per では関係代名詞 quale とその複数形 quali が分離形の後にも現れていた。これは Alberti コーパス全体を見たときに con より per の方が結合形の使用割合が低かったためであると考えられる。

表 6 は、統語上は等位接続で意味的に並列・対比・比較の関係にある前置詞句の調査結果である。一つの文に複数共起した例もあるため用例数と各形態の数の合計は一致しない。

表 6: 等位接続された同じ種類の前置詞句の形態

先項の前置詞句 ＼ 後項の前置詞句		用例数	結合形	分離形	無冠詞
con	結合形	52/216	**35**	6	17
	分離形	13/31	3	**9**	2
per	結合形	6/40	4	3	1
	分離形	5/56	2	0	3

con では、等位接続された同じ種類の前置詞句がもう一方の前置詞句と同じ形態を選択することが最も多いという結果になった。特に、意味的に並列・対比の関係に置かれているものでは、形を揃えることで語調を整える働きや関係性を明示する役割を果たしていると予想できる。なお、su では同じ前置詞が等位接続された例が見つからなかった。

(3) 並列関係に置かれた con + 前置詞が結合形で揃っている例

E solevano gl'infermi, uno tempo, solo

and be used to.IND.IPRF.3PL ART.DEF.M.PL+infirm.M.PL ART.INDF.M.SG time.M.SG only.M.SG

colla dieta e *collo* esercizio purgarsi e

with+ART.DEF.F.SG diet.F.SG and with+ART.DEF.M.SG exercise.M.SG purge.REFL.INF and

raffermarsi.

reaffirm.REFL.INF

「かつての時代には、病人は食餌療法と運動だけで体内を浄化し、健康になったものでした。」

per では、用例数が少なくはっきりとした結果が現れなかった。con のように同じ形態を選択する傾向は見られなかった。こちらも共起する語の調査結果と同様、コーパス全体で con より per の方が結合形の使用割合が低かったためであると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究の 3 つの調査で得られたデータから、イタリア語の前置詞 con, su, per と定冠詞の結合について、本研究で用いたコーパスでは以下の傾向・特徴があることが分かった。

- 第Ⅲ期 (1375～1525) の Alberti コーパスと第Ⅴ期 (1612～1840) の Viviani～Leopardi コーパスを中心に、いずれの前置詞においても結合形が比較的多く現れる。
- 定冠詞別に見ると、il, i と統語的に連続した時に結合形が多く現れる。
- コーパス内における前置詞の登場回数は、結合形の現れる頻度と強い関係はない。
- 特に con において、結合形は分離形よりも「抽象的な名詞」と共起しやすい。
- 特に con について、前置詞句が統語上は等位接続で、意味的に並列・対比・比較いずれかの関係で置かれたとき、その両方がともに結合形、もしくは分離形のどちらか一方を選択する傾向がある。

今後は次のことを課題とする。まず、コーパスとした文学作品の歴史的位置を踏まえることが不十分だったため、調査結果がその時代全体の傾向を示すものなのか単なる作者の傾向なのかを区別出来ず、結果の理由や原因を求めることも難しかった。イタリア語歴史言語学の観点から一つ一つのコーパスをより細かく分析すべきである。調査 1 では、いずれの前置詞も il と i で結合形の使用割合が高いという結果が出たが、これら 2 つは他の定冠詞と異なり母音で始まるという特徴がある。イタリア語音韻論の観点からも前置詞と定冠詞の結合について考えてみる価値がある。調査 3 で共起語彙を調べた際には「抽象的な名詞」が分離形よりも結合形と共起しやすいという結果が出たが、これは語彙の指示性や定性が関係していることも考えられる。例えば、ドイツ語の前置詞と定冠詞の融合現象では「融合によって現実界の対象物に対する指示関係があいまいになる危険性のある場合には、融合を避けなければならない。他方、指示関係が常に明確な場合、特に固有名詞においては必ず融合が起こる」(ヘルビヒ・ブッシャ 2001: 434) とされている。前置詞と定冠詞が結合する他の言語との対照研究を行うことも、研究方法の展開の一つとして有り得る。

本稿で、筆者は前置詞 con, su, per が定冠詞と結合する条件として考えられるものをいくつか挙げたが、su, per で得られた用例が少なかったことからその条件を確固たるものとして結論づけることは出来なかった。他の前置詞 a, di, da, in も含めより多くのデータを用いて多角的に調査を続けることによって、その諸条件が正しいことを証明する必要がある。

〈略号一覧〉 1: 一人称 / 2: 二人称 / 3: 三人称 / ART: 冠詞 / DEF: 定 / F: 女性 / GER: ジェルンディオ / IND: 直説法 / INDF: 不定 / INF: 不定詞 / IPRF: 半過去 / M: 男性 / PL: 複数 / POSS: 所有 / PRS: 現在 / REFL: 再帰 / REL: 関係詞 / SG: 単数 / +: 融合

〈参考文献〉 アルベルティ，レオン・バッティスタ (2010)『家族論』池上俊一・徳橋曜 (訳) 東京: 講談社 (*I libri della Famiglia*. Torino: Einaudi, 1994). / 今道晴彦・石川慎一郎 (2006)「縮約がもたらす構文の意味的・機能的変化 : 言語コーパスに基づく there is/there's 構文の研究」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』3: 15-36. / 上野貴史・谷岡弘二 (2006)「イタリア語冠詞前置詞の時系列的考察 : 冠詞前置詞 a / da / di / in」『NIDABA』35: 65-74. / 坂本鉄男 (1979)『現代イタリア文法』東京: 白水社. / ヘルビヒ，ゲアハルト・ヨアヒム・ブッシャ (2001)『現代ドイツ文法』在間進 (訳) 東京: 三修社 (*Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*, 4., durchgesehene Auflage, Leipzig, 1977). / D'Achille, P. (1990) *Sintassi del parlato e tradizione scritta della lingua italiana : analisi di testi dalle origini al secolo XVIII*. Roma: Bonacci. / Dardano, Maurizio and Pietro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*. Bologna: Zanichelli.

ベトナム語の動詞助詞の生起順序に見られる意味的制約

小林　剛士
（言語文化学部トルコ語専攻）

キーワード：ベトナム語，動詞句，意味的関連性，モダリティ，コーパス

0.　はじめに

本研究はベトナム語（モン・クメール）の動詞助詞の生起順序について記述，考察するものである．ここで動詞助詞[*1]とは主語より後，動詞より前の位置に現れ，動詞を修飾する機能的な語のことを指す．動詞助詞は一つの動詞に対して複数現れるため，動詞助詞が複数生起した際にどのような順序で生起するのか，なぜそのような順序で生起するのか，記述・考察の必要性がある．そこで本研究はコーパスで動詞助詞が複数生起している用例数を元に生起順序を記述し，ベトナム語の動詞助詞の生起順序には動詞との意味的関連性という意味的な制約が働いていることを主張する．本稿中の図表番号，例文番号，例文の日本語訳とグロス，非日本語文献の翻訳，図表は特にことわりのない限り筆者による．

1.　用語の説明

意味的関連性は Bybee (1985) が接辞の生起順序を説明するために定義したものである．Bybee (1985) は 50 の言語について動詞につく接辞の生起順序を調べ，接辞の生起順序には通言語的な傾向があることを明らかにした．Bybee (1985) について簡潔に記してある 上原・熊代 (2007) を以下に引用して示す．

> Bybee は、関連性（relevance）を語根と接辞のそれぞれの表す意味の関わりの深さと定義し、語根に意味的関連性の高い接辞 / 形態素ほど語根に近い位置に生起する（またそれによって融合形になることが多い）ことを示している。具体的には、例えば以下のような形態素 / 接辞の順が考えられる。
>
> (27)（動詞語根）+ 結合価（valence）+ 態（voice）+ 相/アスペクト + 時制 + ムード +（数・人称・性などの）一致（agreement）
>
> これらの接辞 / 形態素は、この順で動詞語根と意味の関わりが深く、これらが動詞語根からこの順番で近いところに現れるとしたのである。（中略）日本語の例でこれを見ておこう（中略）
>
> (29) 着 | せ | られ | てい | た | だろう
> 語根 | 結合価 | 態 | 相 | 時制 | ムード
>
> (上原・熊代 2007: 186-187)

Bybee (1985) では「意味の関わりの深さ」という定義をしているが，南 (1989: 1684) では違った角度から説明を行っている．南 (1989) は日本語の接辞順序について「表される内容の面については，左，つまり，述語のあたまの部分に近いほど，客観的なことがらを描

[*1]注意すべきは本研究で動詞助詞として取り上げる語のいくつかは動詞としても使用されることがある点である．ベトナム語の動詞助詞の中には動詞が文法化してできたと見られるものが存在し，動詞としても動詞助詞としても使用される．ベトナム語には動詞連続も存在する．したがって動詞助詞と動詞の連続は動詞連続との判別が困難である．これはビルマ語についての研究である安田 (2006) でも指摘されており，動詞連続を持つ言語の特徴と言えるだろう．本研究では安田 (2006) に従って両者は明確に区別することはできず連続的であると捉えた上で，動詞としての用法がある語でも，「主語より後，動詞より前の位置に現れる」という動詞助詞としての側面を持っていれば動詞助詞として扱う．

く，または，ものごとの論理的関係を述べる，といった性格（proposition 的性格，または dictum 的性格）が強く，右，つまり，述語の末尾の部分に近よるほど，話し手の判断，態度，意向，さらに，聞き手に対するはたらきかけといった性格（modal 的性格，または，modus 的性格）が強くなる」と説明している．

Bybee (1985), 南 (1989) を踏まえると，ある要素が語根と意味的関連性が高いというのはその要素が命題内容に影響を与える度合が大きいということと考えられよう．意味的関連性に順序が影響されるのは，意味的に密接なものほど構造的にも密接になるという点で，一種の類像性制約であると捉えることができる．

2.　先行研究

2.1.　動詞助詞の生起順序

宇根 (1994) は 31 個の動詞助詞を 6 個のグループに分類し，生起順序を以下の表 1 のように整理した．核動詞，必須補語以外の要素は任意要素である．

表 1: ベトナム語の動詞句構造

<table>
<tr><td rowspan="2">Cũng</td><td>Đã</td><td rowspan="2">Không</td><td>Phải</td><td rowspan="2">核動詞</td><td rowspan="2">核直後</td><td rowspan="2">必須補語</td><td rowspan="2">任意補語</td><td rowspan="2">句末</td></tr>
<tr><td colspan="2">Hãy</td><td>副詞</td></tr>
</table>

(宇根 1994: 131 を基に筆者作成)

2.2.　Đã グループ内部の共起

Phan (2013) は「ベトナム語の動詞に前置される TMA 標識は実際は共起しうる」としている．同論文に挙げられている，*đã, đang* の共起する用例を示す (1).

(1)　*Lúc*　*tôi*　*đến,*　*cả*　*bọn*　***đã***　***đang***　*đánh*　*chén*　*rồi.*
When　1SG　arrive,　all　group　ANT　DUR　hit　dish　already.
「私が着いたとき，皆は食べていた」　(例文の出典・グロスは Phan 2013: 72)

さらに Phan (2013) は *đã, sẽ, đang* の 3 つの形式についてそれぞれ「統語的に独立している」とし，「*đang* は絶対に *sẽ, đã* に先行しない」，「(たとえ未来完了の文脈でも) *sẽ, đã* は絶対に共起しない」ことを記述している．Phan (2013) は「ベトナム語に見られる *đã* と *đang* の厳格な順序制約は他の多くの言語にも見られ，PERF>PROG[*2]が合法 (legitimate) な順序で，PROG>PERF が非合法である」と述べている．

3.　先行研究の問題点

動詞助詞の分類と生起順序は 宇根 (1994) がある程度全体的に記述している．しかし Phan (2013) が示す通り，*đã* と *đang* は共起する上，順序には制約があることが示されている．これは宇根 (1994) には記述されていない事実であり，宇根 (1994) のグループ分けと生

[*2]PERF の方が PROG より構造的に高い位置にあることを指している．

起順序は再検討する必要がある．さらに，生起順序の動機は先行研究で十分に説明されていない．そこで本研究ではグループ分けと生起順序をより精緻に記述し，記述結果を元に生起順序の動機を明らかにすることを試みる．

4. 調査

コーパス検索ツール Sketch Engine を用いてコーパス調査を行った．コーパスは大規模ベトナム語 Web コーパス Vietnamese web corpus (viWaC)（語数 106,464,835 語）を用いた．このコーパスの N-GRAMS で対象の 41 個の動詞助詞のうち任意の動詞助詞 2 つの連続を検索した．N-GRAMS を使うことで，ある形式がコーパス中に何例存在するか知ることができる，検索方法は ADVANCED を選択し，N-gram length を 2 と指定，Additional criteria を matching regular expression と指定し，クエリ[*3]を “(cũng|đều|cứ|vẫn|còn|vẫn còn|đã|sẽ|đang|từng|vừa|mới|vừa mới|mới vừa|sắp|không|chưa|chẳng|đâu|có|phải|nên|được|bị|có thể|dám|cần|muốn|hãy|đừng|chớ|hay|mới|thường|luôn luôn|ít|hiếm|quá|rất|khá|hơi|được|phải|mãi|lại|lên|ra|về|xuống|đi|thấy|nhau|xong|rồi|đi|đã|đâu|hết|lắm|quá) (cũng|đều|cứ|vẫn|còn|vẫn còn|đã|sẽ|đang|từng|vừa|mới|vừa mới|mới vừa|sắp|không|chưa|chẳng|đâu|có|phải|nên|được|bị|có thể|dám|cần|muốn|hãy|đừng|chớ|hay|mới|thường|luôn luôn|ít|hiếm|quá|rất|khá|hơi|được|phải|mãi|lại|lên|ra|về|xuống|đi|thấy|nhau|xong|rồi|đi|đã|đâu|hết|lắm|quá)” として検索した．このクエリは “cũng cũng”, “cũng đều”, “cũng cứ”,……, “đều cũng”, “đều đều”, “đều cứ”,…… という風に動詞助詞が 2 つ並んだ形式にヒットする．41 種類の動詞助詞が 2 つ並ぶ場合の数は 41 の 2 乗すなわち 1681 通りなので，理論的には 1681 個の形式についてそれぞれの用例数が得られるはずだが，実際には 956 個の形式についてそれぞれの用例数が得られた．1681 個に満たないのは 5 件未満の用例は結果として出力されないためである．得られなかった 725 件の形式は用例数 0 として解釈した．

5. 分析・考察

5.1. 分類の再検討

宇根 (1994) と Do-Hurinville and Dao (2019) の分類を矛盾なく結合してできた 7 個のグループについて，同じグループ内での共起数を考えることで妥当性を判断する．グループの分類は機能的に近しく，体系的に対立するものを同じグループにまとめていくことで行われると考えられる．その場合，同じグループに属す形式は共起しないのが一般的である．しかし用例数を見るとこの分類では同じグループ内で多数の共起が起きている (表 2)[*4] [*5]．

[*3] ここでは，どのような形式を検索対象とするか指定するための表現のこと．

[*4] 各グループの機能が大まかに分かるように機能を元に各グループに名前を付けた．TA はテンス・アスペクト，NEG は否定（極性），MOD はモダリティ，IMP は命令，FREQ は頻度（FREQuency），DEG は程度（DEGree）を表す．ただし *cũng* を含むグループはその機能を包括する文法カテゴリーを見つけることが難しかったため，宇根 (1994) に倣って Cũng という名前を設けた．

[*5] 扱った形式は次の 41 個．Cũng グループ: cũng「～も」, đều「等しく」, cứ「～し続ける」「かまわず～」, vẫn「依然として」, còn「なお，まださらに」, vẫn còn「まだ」/ TA グループ: đã 過去時制標識, sẽ 未来時制標識, đang「～している」（進行形）, từng「～したことがある」（経験）, vừa「～したばかり」, mới「～したばかり」, vừa mới「～したばかり」, mới vừa「～したばかり」, sắp「まもなく～する」/ NEG グループ: không「ない」（否定詞）, chưa「まだ～ない」, chẳng「決して～ない」, đâu「全然～ない」, có 肯定標識 /

表 2: 同じグループ内での共起数

Cũng	TA	NEG	MOD	IMP	FREQ	DEG
40350	23974	140163	73350	186	4532	863

同じグループ内で共起が起こる原因は 3 つの可能性が考えられる: 1. 複数の用法を持つ形式がノイズとなっている．2. 本来は同じグループとしてはいけないものが同じグループとされている．3. 第三に似た機能を持つ形式が熟語的に接続詞なしで並列されている．

そこでまず第一の可能性をできる限り除外するため，表 3 に示した形式および当該形式を構成要素に含む *vẫn còn*, *mới vừa*, *vừa mới* を除外した．

表 3: 除外した形式

	グループ	動詞助詞	非動詞助詞 (川本 2011)
còn	Cũng	「なお，まださらに」	「しかし一方では」
nên	MOD	「～すべきである」	「それゆえに」
hãy	IMP	「…しよう，…しなさい」	「それから，つぎに」
chớ	IMP	「…すべきではない」	(= chứ)「…であって…（でない）」
hay	FREQ	「しょっちゅう…する」	「あるいは」
mới	TA	「～したばかり」	「新しい」
đâu	NEG	「全然～ない」	「どこ」

次に第二の可能性を除外するため，同グループ内の共起数が 1000 以下[*6]かつ機能的なまとまりがあるグループになるようグループ分割を行った．TA グループから *đã*, *sẽ* を TENSE グループ，それ以外を ASP グループとした．NEG グループから *có*「肯定標識」を独立させた．MOD グループから *có thể*「～できる」を独立させ，*được*「受益受身」と *bị*「被害受身」を VOICE グループと分割した．すると表 4 のように分類できた．

表 4: 新分類に基づく同じグループ内での共起数

Cũng	TENSE	ASP	NEG	có	có thể	MOD	VOICE	IMP	FREQ	DEG
9390	182	638	579	220	33	**28572**	336	0	240	863

MOD グループ: phải「ねばならない」, nên「～すべきだ」, được「恩恵」の意,「許可をもらう」の意,「受益受身」の意, bị「被害受身」の意, có thể「～できる」, dám「あえて～する」, cần「～する必要がある」, muốn「～したい」/ IMP グループ: hãy「～しなさい」, đừng「～するな」, chớ「～するな」/ FREQ グループ: hay「しばしば」, mới「～してはじめて」, thường「いつも」, luôn luôn「いつも」, ít「あまり～しない」, hiếm「めったに～しない」/ DEG グループ: quá「～過ぎる」, rất「とても」, khá「かなり」, hơi「少し」

[*6] 1000 という数値の根拠は，第一に動詞としての使用によるノイズを無視するため，第二にひとまず 1000 以下になるよう分類できれば大雑把過ぎず，細かすぎない分類ができると判断したためである．

以上の新分類の中で同じグループ内の共起数が 1000 件を超えているグループが 2 つある．Cũng グループは共起制限が緩く，上述の基準ではすべての語が独立したグループに分割されるため，全体的な傾向を明瞭にするために分割せず別途考察することにした．

MOD グループについては，共に義務を表す *cần*, *phải* が同じく義務を表す *cần phải*, *phải cần* という熟語的な表現を形成しており，28572 例中 *cần phải* が 27130 例，*phải cần* が 934 例でその他が 508 例だった．つまり第三の可能性であったため，分割しなかった．

以上の考察によって 宇根 (1994) より精緻に動詞助詞を分類することができた．

5.2. 生起順序

次に前節でたてた新分類にしたがって生起順序を考える．

任意の 2 つのグループ A, B について A B の順で出てきた用例数を B A の順で出てきた用例数で割ったものを順序 AB の評価値と呼ぶことにする[*7]．順序 AB の評価値が 1 より大きければ A B の順序が典型的であり，順序 AB の評価値が 1 未満であれば B A の順序が典型的であることを意味する．次に任意の順序を考え，その順序の反例となる順序の評価値の合計を求め，その合計が最も小さくなるような順序が最も言語事実を良く説明する順序だと考える．たとえば 3 つのグループ A, B, C に対して，順序 ABC を考えるとき，B A, C A, C B の 3 つが反例に当たる．反例の評価値が小さければ小さいほど反例が非典型的，つまりその順序で予測可能な例が多いことを意味する．したがって，ある順序の反例の評価値の合計を求めることでその順序の妥当性を測ることができる．

ただし *có thể* は TENSE の前後どちらにも高頻度で生起し（TENSE の前に 4709 例，後に 3907 例），どちらの位置にも生起しうる要素に見えた．このような形式はこの分析と相性が悪いため一度除外し，§ 5.4 で個別に検討することとした．分析の結果，以下の表 5 の順序が反例となる順序の評価値の合計が最も小さくなった．

表 5: 新分類での並び替え済み生起順序

Cũng	TENSE	NEG	IMP	ASP	DEG	FREQ	MOD	có	VOICE	(動詞)

IMP は共起する動詞助詞が限られているので，命令文は [Cũng IMP DEG có VOICE 動詞] という別構造と考えることもできる (表 6)[*8]．

表 6: グループごとの IMP との共起数

	Cũng	TENSE	NEG	**IMP**	ASP	**DEG**	FREQ	MOD	**có**	**VOICE**
IMP ANOTHER	12	0	0	0	5	354	0	36	1915	137
ANOTHER IMP	1130	0	44	0	0	0	0	42	0	0

[*7] 有効数字は 10 桁とする．B A の順で出てきた用例数が 0 の場合は，A B の順で出てきた用例数をそのまま順序 AB の評価値とする．

[*8] ここでもある程度のノイズを考慮して，100 例以上 IMP と共起するグループのみ挙げている．

同様に Cũng グループ内部についても分析を行った（次節で詳述）．以上の考察によってベトナム語の動詞助詞の生起順序をより精緻に記述することができた．

5.3.　生起順序と意味的関連性

表 5 と 上原・熊代 (2007) を照らし合わせると，動詞に近い方から VOICE, ASP, TENSE と並ぶ．よってベトナム語の動詞助詞の生起順序は，MOD 以外は意味的関連性制約に矛盾しないことが分かる．MOD は上原・熊代 (2007) でいうムードにあたり，時制よりも動詞から遠くに出ることが予測される．しかし表 5 では MOD が ASP と VOICE の間に現れている．つまり，ベトナム語の MOD は意味的関連性制約に違反する形で生起しているように見える．なぜ，MOD は意味的関連性制約に違反するのか？ 本研究ではこれはそもそも意味的関連性制約に違反していないと考える．

ベトナム語の意味的関連性を考える上でモダリティは命題的モダリティと事象的モダリティ (Palmer 2001) の 2 種類に分けることが有効である．上原・熊代 (2007) のいうムードは命題的モダリティを指していると考えられるが，ベトナム語において動詞助詞によって標示されるモダリティは *có thể*「〜できる」[*9]を除き事象的モダリティである（*cần*「〜する必要がある」，*muốn*「〜したい」，*phải*「ねばならない」，*dám*「あえて〜する」）．

一方，ファム・ティ・タイン (2019) によれば本研究でいう命題的モダリティである「chắn chắn『〜に違いない』，rõ ràng『明らか』のような法形容詞や hình như『〜ようだ』，có lẽ『たぶん〜だろう』，chắc là『きっと〜だろう』のような法副詞は文頭または節の前に」現れると記述している．したがって意味的関連性制約に違反しない (§ 6 の 表 8 参照)．

次に Cũng グループ内部の生起順序について考察する．

表 7: Cũng グループ内部の並び替え済み生起順序

cũng	đều	vẫn	cứ

これは機能の側面から，*cũng*「〜も」, *đều*「等しく」で一つの下位グループ，*vẫn*「〜し続ける」「かまわず〜」, *cứ*「依然として」で一つの下位グループを成すと考えられる．前者は動詞との関連が浅くその節の主語について説明を加える表現であり，一方後者は動詞の特にアスペクト的側面について説明を加える表現である．

以上の考察から動詞助詞の生起順序は意味的関連性制約に矛盾しないことが分かった．

5.4.　có thể の文法化

§ 5.2 で除外した *có thể* について本節で説明を加える．*có thể* は 宇根 (1994) では EVENT-MOD グループの形式と同じグループに分類されていたが，その他の EVENT-MOD グループの形式と比べると，TENSE の前に現れる用例数が多い．[EVENT-MOD TENSE] の順序の用例数と [TENSE EVENT-MOD] の順序の用例数を比べると前者 : 後者が 562 : 19533 なのに対し，同様に [*có thể* TENSE] の順序の用例数と [TENSE *có thể*] の順序の用例数を比

[*9]ファム・ティ・タイン (2019) の記述によれば事象的，命題的両方の用法があるという．

べると前者 : 後者が 4709 : 3907 であり，*có thể* は EVENT-MOD とは異なった分布を見せる．この理由は何だろうか？ それは *có thể* の意味機能が可能と推定という意味的関連性の点で大きく異なる領域にまたがっており，可能のような事象的モダリティを表す場合は EVENT-MOD の位置に出るが，推定のような命題的モダリティを表す場合は時制より前の PROP-MOD の位置に現れるからである．ファム・ティ・タイン (2019) から例文を示す．

(2)　事象的モダリティ

Người	*đó*	*có thể*	*đọc*	*được*	*tiếng Trung.*
人	あの	できる	読む		中国語

「あの人は中国語が読めます．／あの人は中国語を読むことができます.」

(3)　命題的モダリティ

Có thể	*nó*	*nhỡ*	*tàu.*
〜かもしれない	3SG	乗り遅れる	列車

「あいつは列車に乗り遅れるかもしれない.」

したがって *có thể* は複数の用法を持つがゆえにデータ上分布が EVENT-MOD グループと異なっていたが，実体としては意味的関連性制約に何ら矛盾しないことが分かる．

ここで *có thể* の文法化について考えたい．*có thể* は 2 つの内容語から成り立っており，*có* は「持つ」という動詞，*thể* は「能力」という名詞である．*thể* は後ろに動詞を取って「〜する能力」という意味を表すことができる．したがって，元々は *có thể* Verb で「〜する能力を持つ」という内容的な動詞句であったと考えられる．*có thể* が元々動詞のすぐ近くに現れるものだったのにも関わらず現在 *có thể* が節頭にも現れるのは，以下のような筋書きを考えることができる．すなわち，まず文法化によって *có thể* の意味機能が拡張され命題的モダリティを表すようになった．命題的モダリティは意味的関連性が低い意味であるため，統語位置的に意味的関連性の高い要素があるべきである動詞近くに生起することを回避したい力が働いた．その結果，命題的モダリティを表す *có thể* は意味的関連性の低い要素があるべきである動詞から遠くの位置に現れるようになった．この一連の文法化と文法化に伴う生起位置の変化はまさに意味的関連性制約が生起順序に直接的な影響をもたらしている実例であり，意味的関連性制約が働いていることの証左と考えられる．

6.　まとめ

本研究はベトナム語の動詞助詞の生起順序について記述，考察した．宇根 (1994) と本研究の生起順序の記述の対応関係を示す (表 8)[*10]．

[*10]PROP-MOD は PROPositional MODality（命題的モダリティ）の略であり，EVENT-MOD は EVENT MODality（事象的モダリティ）の略である．

表 8: 宇根 (1994) と本研究の生起順序の記述の対応関係

<table>
<tr><td rowspan="3">Cũng</td><td rowspan="2">Đã</td><td rowspan="2">Không</td><td>Phải</td><td rowspan="3">核動詞</td><td rowspan="3">核直後</td><td rowspan="3">必須補語</td><td rowspan="3">任意補語</td><td rowspan="3">句末</td></tr>
<tr><td>副詞</td></tr>
<tr><td colspan="3">Hãy</td></tr>
</table>

(PROP-MOD)	Cũng	TENSE	NEG	IMP	ASP	DEG	FREQ	EVENT-MOD	có	VOICE	(動詞)

記述結果を元に生起順序を意味的関連性の観点から考察した．まず，ベトナム語の意味的関連性を考える上ではモダリティを命題的/事象的の 2 種類に分けることが有効だと主張した．意味的関連性制約に矛盾する順序が現れにくいことと，*có thể* の文法化の過程で起こった生起位置の変化が意味的関連性制約によって説明できることから，ベトナム語の動詞助詞の生起順序には意味的関連性制約が働いていることを主張した．

7.　今後の課題

NEG, IMP, DEG, FREQ, có の生起位置についての動機は考察できていない．意味的関連性の高さをどの程度に位置づけるべきか類型論的証拠を見つけられていないためである．

記述した生起順序の反例が説明しきれていない．動詞助詞ではなく動詞などとして使用されているケースがカウントされていると予測しているが，最終的には個々の用例を見て判断する必要がある上，動詞か動詞助詞かは連続的な物である以上，判断が困難なケースもあるだろう．

略号一覧

1: 1 人称 / 3: 3 人称 / ANT: anterior / DUR: 継続 / SG: 単数

参考文献

Bybee, Joan L. (1985) *Morphology: A Study of the Relation Between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins Publishing. / Do-Hurinville, Danh Thành and Huy Linh Dao (2019) Vietnamese. in *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area*. 384–431. Berlin: De Gruyter Mouton. / ファム・ティ・タイン・タオ (2019)「ベトナム語におけるモダリティ」『語学研究所論集』第 24 号: 437–445. / 川本邦衛 (2011)『詳解ベトナム語辞典』東京: 大修館書店. / 南不二男 (1989)「日本語（現代日本語の輪郭）」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典第 2 巻 世界言語編 中』1681–1692. 東京: 三省堂. / Palmer, Frank R. (2001) *Mood and Modality*. Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge: Cambridge University Press. / Phan, Trang (2013) *Syntax of Vietnamese Aspect*. Ph. D. Thesis, University of Sheffield. / 上原聡・熊代文子 (2007)『音韻・形態のメカニズム : 認知音韻・形態論のアプローチ』東京: 研究社. / 宇根祥夫 (1994)「ベトナム語の動詞句構造」『東京外国語大学論集』第 48 号: 119–132. / 安田哲 (2006)「ビルマ語の動詞句の構造について」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』第 1 号: 69–75.

調査資料

Sketch Engine. https://www.sketchengine.eu/. [最終閲覧日: 2020 年 12 月 7 日].

英語とフランス語の冠詞の対照研究

瀧島　菜央
（言語文化学部　フランス語専攻）

キーワード：英語，フランス語，冠詞，対照研究

0. はじめに

本稿は、英語とフランス語における冠詞の先行研究を概観し、それらを踏まえたうえで両言語の冠詞の用法を整理するとともに、両言語における冠詞の用法の共通点や相違点を見出だすことを目的とする。これまでは様々な文献の情報を基に考察が行われていることが多いが、実際に冠詞の使用頻度などやその実態を調査したものは見つからなかった。ゆえに具体的な資料を用いて両言語を対照的に調査し、実際の冠詞の使用頻度やその幅について議論することは有意義であると考えられる。

なお、図表番号、和訳、グロス、下線は特に断りのない限り筆者によるものである。

1. 先行研究

1.1. 樋口（2009）

樋口 (2009) によると、英語では以下の場合に不定冠詞を取る。

【指示範囲の限定】指示範囲が限定されている場合。

【個別事象】個別事象や個別行為を表す場合。

【名詞部[1]の構造】名詞部の構造が“形容詞＋数詞＋複数形”である場合。

次に樋口 (2009) によると、英語では、話し手が、聞き手は話題となる指示対象を同定できると判断した場合に定冠詞を取る。この判断パターンは以下にまとめられる。

【文脈内同定】文脈によって指示物を同定することができる。

【複数構成物】名詞部の構成物が全て同定される場合。

【状況的同定】発話の状況から指示物を同定可能な場合。

【文化的了解】文化や背景知識を共有していることにより同定可能な場合。

【対立】名詞部の指示対象が他の事物と意味的な対立関係にあり、一方を排除すれば他方が特定できる場合。

【総称】名詞部の指示対象を含む種全体を指す場合。

【the+固有名詞】名詞部の指示対象が大規模で知名度が高い場合。

【修飾語句+人名/地名】同一人物 (事象) の別の姿との比較対照が含意される場合。

[1] 樋口 (2009) において、英語に不定冠詞が必要かどうか見極めるためには名詞だけの意味を考えるのではなく、「名詞 + (修飾語句)」の意味を考えることが大事だと述べられており、「名詞 + (修飾語句)」を名詞部と呼び定義している。

1.2. 松原（1978）

松原 (1978) によると、フランス語の不定冠詞単数は数詞的意味 (1 つの) の他に以下の 2 つの意味を持つ。

【無差別物】無作為に選ばれたものであるため、その種の全てにも適応される。

【差別物】話し手にとって既知であるが聞き手にとっては未知である。

次に、松原 (1978) によるとフランス語の定冠詞には以下の 2 つの用法がある。

【限定】名詞の指示物が限定されるのは以下の場合である。

I. 既に話題に挙がった場合。
II. 文脈から判断できる場合。
III. 一般的知識から判断できる場合。
IV. 名詞部の指示物が、あるものの唯一の付属物である場合。
V. 自然の理から推定できる場合。
VI. 序列
VII. 連続する日
VIII. 最上級
IX. 同格
X. 関係代名詞
XI. 対立
XII. 強調
XIII. 絵画的描写

【総称】ある名詞 (概念) が示すもの全てを取り上げる場合。

次に、松原 (1978) によるとフランス語の部分冠詞は以下の場合に使われる。

【物質名詞/抽象名詞/不可算名詞】

【代替】総称の定冠詞と取って代わることができる。

1.3. 関口（2017）

関口 (2017) によると、総称用法とは「種族全体を表す言い方」である。

英語における冠詞表現のタイプは

A) 不定冠詞単数　【a + 単数形】
B) 定冠詞単数　【the + 単数形】
C) 不定冠詞複数 (無冠詞複数)　【Ø + 複数形】
D) 定冠詞複数　【the + 複数形】

の 4 通りに分類でき、フランス語における冠詞表現のタイプも

A') 定冠詞単数　【le (la) + 単数形】
B') 定冠詞複数　【les + 複数形】
C') 不定冠詞単数　【un (une) + 単数形】
D') 不定冠詞複数　【des + 複数形】

の 4 通りに分類できるという。英語とフランス語の冠詞の総称用法を意味のレベルで対比させたときに、種類・種族の属性を意味する場合には定冠詞単数 (B) (A')、無差別に選ばれた 1 つを意味する場合には不定冠詞単数 (A) (C') と英仏それぞれ同種の冠詞が対応しているが、種類・種族を個々の事物の総和として考える場合には、同じ複数形を取るにしても、英語では不定冠詞 (無冠詞) (C)、フランス語では定冠詞 (B') を使用する。

1.4. 福谷 (2019)

福谷 (2019) によると、不可算名詞において、ある名詞の部分を指す場合、英語は無冠詞単数を取り、フランス語は部分冠詞を取るとされている。一方、ある名詞を総称的に指す場合、英語は同じく無冠詞単数を取るのに対して、フランス語は定冠詞単数を取る。次に福谷 (2019) はフランス語における無冠詞について、冠詞のない名詞は実世界には実態を持たず観念的なもの及び概念のみを表すと述べている。

2. 先行研究の問題点

関口 (2017) と福谷 (2019) の 2 つの先行研究では他の文献からの引用を用いて考察を行っているが、記述の検証はいずれの先行研究においても行われておらず、元となる資料の情報量が不足している。更には、どちらの先行研究においても両言語の冠詞の使用の幅や頻度についても具体的には述べられていない。

3. 調査方法

調査には、以下の表 1 に示した英語が原作である本とそのフランス語訳、フランス語が原作である本とその英語訳の計 4 冊を用いる。なお、調査方法は英語とイタリア語の 2 言語における定冠詞の対照研究に関する佐田 (2017)[2] 及び英語とスペイン語の 2 言語における冠詞の対照研究に関する弓削 (2020)[3] を参考にした。両研究では、原作が英語で書かれている調査資料として本研究でも用いる "The catcher in the rye" を用いている。なお、今回の調査では時間の制約上 "The catcher in the rye" は 1 章から 4 章 (英単語 12,319 語 / 仏単語 12,045 語) を、原作仏語で書かれている調査資料として用いる "À la recherche du temps perdu" はそれとおおよそ同量の語数 (英単語 11,954 語 / 仏単語 11,036 語) までの範囲を調査対象とした。なお、この小説を調査資料に選んだ理由としては、"The catcher in the rye" と出版年が近かったことが挙げられる。

表 1: 調査資料に関する情報

言語	タイトル	著者・訳者	出版年	略号
英語 (原作)	The Catcher in the Rye.	Salinger, J. D.	1951	SE
仏語 (翻訳)	L'attrape-cœurs.	Saumont, A.	2018	SF
仏語 (原作)	À la recherche du temps perdu.	Marcel, P.	1946	MF
英語 (翻訳)	In Search of Lost Time.	Scott Moncrieff, C. k.	1992	ME

① 紙媒体のテキストを、スキャナーを用いて PDF 化する。ただし、PDF ファイルをオンラインで入手できたものはそのまま使用する。

[2] 定冠詞の用法について英語とイタリア語は重なる部分が多いが、イタリア語の方が広く定冠詞を用いる傾向にあるという結果をはじめ、その他にも両言語の定冠詞に関する様々な知見を示した。
[3] 不定冠詞と定冠詞の使用傾向について、英語の方が不定冠詞を、スペイン語の方が定冠詞をよく用いるという結果をはじめ、その他にも両言語の冠詞に関する様々な知見を示した。

② 両 PDF ファイルの全文を、OCR を用いて変換する。
③ 表計算ソフトを用い、一列に原作の文を、もう一列に翻訳を入力する。対応する文同士が同じ行に並ぶよう調節し、対訳コーパス化する。
④ 原作の文章から冠詞を伴う名詞部を全て抜き出し、翻訳版の対応する名詞部がどの冠詞を伴っているか確認する。
⑤ 同様に、翻訳版の文章からも冠詞を伴う名詞部を全て抜き出し、原作の名詞部がどの冠詞を伴っているか確認する。

4. 調査結果および分析

本節では、1 節で取り上げた冠詞の 11 の組み合わせの用例数 A~K に加え、一方の名詞部に冠詞を伴い他方の名詞部で冠詞以外の限定詞や他の品詞が対応する組み合わせの用例数①~⑧を以下の表 2 に示す。ただし、一方のテキストで冠詞を伴う名詞部が現れたものの、他方のテキストで意訳や省略等により対応部分が無いと判断したものは除外した。

表 2: 組み合わせごとの用例数

組み合わせ	英 (原) -仏 (翻)		仏 (原) - 英(翻)		合計	
A. [a : un]	150	(9.1)[4]	220	(13.3)	370	(22.4)
B. [a : Ø][5]	13	(0.8)	34	(2.1)	47	(2.8)
C. [Ø : un]	10	(0.6)	8	(0.5)	18	(1.1)
D. [the : un]	3	(0.2)	12	(0.7)	15	(0.9)
E. [a : le]	10	(0.6)	14	(0.8)	24	(1.5)
F. [Ø : le]	106	(6.4)	80	(4.8)	186	(11.3)
G. [the : Ø]	9	(0.5)	21	(1.3)	30	(1.8)
H. [the : le]	240	(14.5)	463	(28.0)	703	(42.6)
I. [a : 部分]	2	(0.1)	1	(0.1)	3	(0.2)
J. [the : 部分]	1	(0.1)	0	(0.0)	1	(0.1)
K. [Ø : 部分]	2	(0.1)	5	(0.3)	7	(0.4)
① [a : 他の限定詞]	2	(0.1)	6	(0.4)	8	(0.5)
② [a+N : 他の品詞]	6	(0.4)	4	(0.2)	10	(0.6)
③ [他の限定詞 : un]	21	(1.3)	26	(1.6)	47	(2.8)
④ [他の品詞 : un+N]	7	(0.4)	10	(0.6)	17	(1.0)
⑤ [the : 他の限定詞]	11	(0.7)	18	(1.1)	29	(1.8)
⑥ [the+N : 他の品詞]	4	(0.2)	1	(0.1)	5	(0.3)
⑦ [他の限定詞 : le]	62	(3.8)	55	(3.3)	117	(7.1)
⑧ [他の品詞 : le+N]	10	(0.6)	4	(0.2)	14	(0.8)
合計	669	(40.5)	982	(59.5)	1651	(100.0)

[4] ( ) 内の数値は表 6 中の用例数全体における割合を%で示したものであり、小数点以下第二位で四捨五入した。以降の表においても同様の扱いとする。
[5] 以降の分析で特に取り上げる数値には二重線を付す。

4.1. 全体の傾向

まず、不定冠詞について見ると、少なくとも一方の言語で不定冠詞を伴う組み合わせの用例のうち、最も用例数が多かったのは A. [a : un] であり半分以上の割合を占めている。一方、少なくとも一方の言語で定冠詞を伴う組み合わせの用例のうち、最も用例数が多かったのは H. [the : le] であり約半数の割合を占めている。このことから、両言語は不定冠詞と定冠詞の用例どちらにおいても重なる部分の割合が高いということがわかる。

4.2. B. [a ： Ø] の詳細な分析

次に、A. ~ K.の中で一方に不定冠詞を伴う組み合わせのうち、最も用例数の多かったのは B. [a : Ø] の組み合わせで 47 例であった。該当する文を見ていくと、47 例のうちのほとんどが可算名詞かつ新出の名詞を伴っており、このことから英語はフランス語よりも新出かつ指示範囲の限定されている可算名詞に対して不定冠詞を用いる傾向が高いと考えられる。

更にその中でも名詞が職業や性質を表しかつコピュラ文であるパターン (以下の例文) と、名詞が前置詞に続く前置詞句であるパターン (特に英語の “of” フランス語の “de”) がよく見られた。

I’ve had them ever since I was a kid. (SE: 26)

Je les ai depuis que je suis môme.

I them have.3SG since REL I be.1SG kid (SF: 27)

4.3. F. [Ø ： le] の詳細な分析

続いて A. ~ K.の中で一方に定冠詞を伴う組み合わせのうち、186 例と最も用例数の多かったのは F. [Ø : le] の組み合わせである。該当する文を見ていくと、不可算名詞が多く見られた。このことから、フランス語は英語よりも抽象的な概念や姿形のはっきりしない不可算名詞に対して定冠詞を用いる傾向にあると考えられる。

更に、その中でも B. [a : Ø] と同じく、名詞が前置詞に続く前置詞句であるパターン、(特に英語の “before”、“after”、フランス語の “avant”、“après”) と、名詞が固有名詞であるパターンがよく見られた。特に多かったのは 1.2.節の IX. 同格の例である。

Old Spencer started nodding again. (SE: 26)

Le père Spencer a recommencé à branler du chef.

DEF.M father Spencer have.3SG restart.3SG.PST to loose PART head (SF: 27)

4.4. ③. [他の限定詞 ： un] の詳細な分析

続いて①~⑩の中で一方に不定冠詞を伴う組み合わせのうち、42 例と最も用例数の多かったのは③ [他の限定詞 : un] の組み合わせである。他の限定詞には指示限定詞、所有限定詞、数詞の one が入った。その中でも一番多くみられたのは[指示限定詞 : un]である。なお、[指示限定詞 : un] に該当する名詞はその語の直前に語られていることを指すものが多かった。

このことからフランス語は既出の語に対して不定冠詞を用いることが多いということが

わかった。

[指示限定詞 : un] の例

直前には、「ニューヨークで買った帽子を被った」という記述がある。

It was this red hunting hat, with one of those very, very long peaks. (SE: 46)

C' était une casquette de chasseur, rouge

it be.3SG.PST INDF.F cap of hanter red

avec une très très longue visière.

with INDF.F very very long peak (SF: 47)

4.5. ⑦ [他の限定詞 : le]の詳細な分析

続いて① ~ ⑩の中で一方に定冠詞を伴う組み合わせのうち、128 例と最も用例数の多かったのは⑦ [他の限定詞 : le] の組み合わせである。他の限定詞には指示限定詞と所有限定詞が入った。その中で一番多く見られたのは [所有限定詞 : le] である。なお、[所有限定詞 : le] に後続する名詞は新出のものが多く、またその名詞は目的語であるパターンがよく見られた。

このことから、フランス語はある名詞の既存先が明確である場合、定冠詞をより好んで用いる傾向があることが分かった。

[所有限定詞 : le] の例

My father would shrug his shoulders (ME: 12)

Mon père haussait les épaules

my.M father raise.3SG.PST DEF.PL shoulder.PL (MF: 23)

4.6. その他先行研究に該当のない表現

続いて例文の数が多くは集まらなかったものの、先行研究で挙げられている用例に当てはまらなかったものを以下に挙げる。

【関口 (2017) の検証】

関口 (2017) によると、英語とフランス語の冠詞の総称用法を意味のレベルで対比させたときに、定冠詞単数と不定冠詞単数はそれぞれ同種の冠詞が対応していると述べているが、以下の例文のように現れた冠詞が異なる例は 8 例あった。

like a titmouse which the breeze gently rocks at the tip of a sunbeam (ME: 32)

comme la mésange balancée par la brise

like DEF.F titmouse rock.PTCP by DEF.F breeze

à la pointe d' un rayon

to DEF.F point of INDF.M beam (MF: 17)

上記のように同じ意味の文中においても英語とフランス語で現れた冠詞が異なったということから、総称用法においても同種の冠詞が必ずしも対応するとは限らないと言える。

【松原 (1978) の検証】

E.[a : le]に該当する例文の中で数例見られたのが以下のような文である。

One of those little English jobs that can do around two hundred miles an hour. (SE: 8)

une de ces petites merveilles anglaises

INDF.F of these small.PL wonderful.PL English.PL

qui font du trois cents à l' heure.

REL do.3SG PART.M three hundred.PL par DEF.F hour (SF: 9)

上の文は「1 時間ごとに」、「1 度に」という意味であるが、松原 (1978) にはこのような用法は記されていなかった。このことから、フランス語の定冠詞単数には一定量を表す用法もあることがわかった。

4.7. 調査結果まとめ

まとめとして、英語とフランス語は定冠詞と不定冠詞の用法について重なる部分が多かったが、英語は特に不定冠詞を、フランス語は特に定冠詞をより広く用いる傾向にあることが分かった。加えてフランス語に不定/定冠詞が現れる場合にも英語にはその他の限定詞が現れることが多かった。図にまとめると以下のようになる。なお、より広く用いられている英語の不定冠詞とフランス語の定冠詞は太線で表すものとする。更に不定冠詞は点線、定冠詞は実線で表し、アルファベットの後の数字は用例数とする。

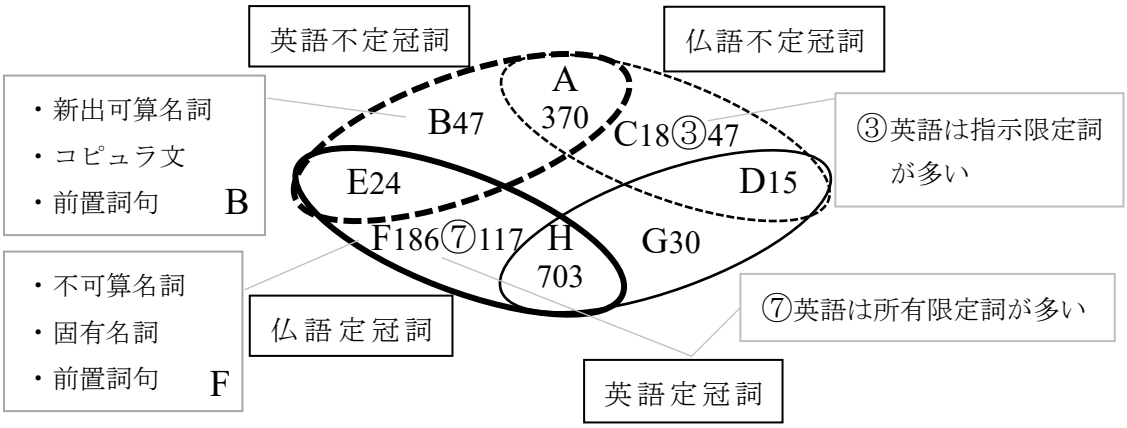

図 1: 英語とフランス語の冠詞の対照

更に先行研究と今回の調査結果を比較した内容を以下の表 3 にまとめる。

表 3: 先行研究との比較

先行研究	先行研究の記述	調査でわかったこと
樋口 (2009)	英語は名詞部が働きを表す場合に不定冠詞を取らない。	コピュラ文においては例外。不定冠詞を取る。
松原 (1978)	定冠詞の同格用法	現れる頻度が高い
	定冠詞の用法	先行研究に指摘がなかった「～毎に」の用法
関口 (2017)	総称用法では英語とフランス語で同じ冠詞 (単数) が対応する。	対応しないこともある。

調査の結果、上記のように 3 つの先行研究の記述と異なる点が見られたり、先行研究では記述のなかった新たな用例も見られたりした。

5. 今後の課題

今後の課題として、無冠詞、そして英語にはない部分冠詞についてより研究を進めたかったが、英語とフランス語のどちらも無冠詞である用例や部分冠詞の出現する用例を集めることができなかったことが挙げられる。加えて今回は小説における冠詞の対照研究を行ったが、小説が執筆された時代や内容によって集められる用例の種類に偏りが出てしまうことが懸念されるため、今後は一般のコーパスにおいても調査を行いより多くの用例数を集めることが望ましい。

略号一覧

1：1 人称 ／ 2：2 人称 ／ 3：3 人称 ／ ART：冠詞 ／ F：女性 ／ FUT：未来 ／ INDF：不定冠詞 ／ INT：間投詞 ／ INTER：疑問詞 ／ IPFV：不完了 ／ M：男性 ／ NEG：否定 ／ PART：部分冠詞 ／ PTCP：分詞 ／ PL：複数 ／ PRN: 代名詞 ／ REFL：再帰 ／ PREP：前置詞 ／ PST：過去 ／ REL：関係詞 ／ SG：単数

参考文献

佐田陸 (2017)「英語とイタリア語の定冠詞の対照研究」『思言: 東京外国語大学記述言語学論集』13, 111-118. / 関口智子 (2017)「冠詞の総称用法再考: 英語とフランス語の用法から」『地域政策研究』19 (4), 229-241. / 田辺貞之助 (2007)『フランス文法大全』東京: 白水社. / 樋口昌幸 (2009)『英語の冠詞: その使い方の原理を探る』東京: 開拓社. / 福谷美保子 (2019)「ゼロ冠詞/定冠詞の英仏比較」『立命館言語文化研究』31 (2), 51-62. / 松原秀治 (1978)『フランス語の冠詞』東京: 白水社. / 弓削諒太 (2020)「英語とスペイン語の冠詞の対照研究」東京外国語大学, 卒業論文.

調査資料

Proust, M. (1946) *À la recherche du temps perdu*. Paris: Éditions Gallimard. / Proust, M., C. K., Scott Moncrieff (tr.) and Terence Kilmartin (tr.) (1992) *In search of lost time*. New York: Random House. / Salinger, J. D. (1979) *The catcher in the rye*. Boston: Little, Brown and Company. / Salinger, J. D., Annie Saumont (tr.) (1986) *L'attrape-cœurs*. Paris: Éditions Robert Laffont.

メキシコスペイン語の指大辞について

東　紘生
（言語文化学部スペイン語専攻）

キーワード：示大辞／指大辞，メキシコスペイン語，コーパス調査

1. はじめに

指大辞 (augmentative) とは、名詞や形容詞から派生し、それらの性質や程度が大きいことを意味する派生語を指す[1]。

本稿の目的は、メキシコのスペイン語の指大辞に関してコーパス調査を行い、指大辞の主要部の品詞と、指大辞の形成の際に選択される派生接辞との選択に関する傾向を調査、さらに先行研究の主張を検討することである。メキシコスペイン語を調査対象とした理由は、コーパス調査において、地域を限定しつつ、用例数を確保できるためである。なお、本稿中の例文・図表番号、グロス、先行研究の日本語訳・要約については、特に断りのない限り著者によるものである。

2. 背景知識

2.1節で普遍的観点からの指小辞および指大辞、2.2節でスペイン語における指大辞、2.3節でメキシコのスペイン語の方言分布に関して、先行研究の記述を参照し背景知識をまとめる。

2.1. 普遍的意味合いでの指小辞および指大辞

この節では、指大辞およびその対となる指小辞 (diminutive)[2] 一般に関して、Dahl (2006: 594-595) に基づいて概説する。

指小辞および指大辞は、派生によって大きさに関わる意味を付加された語のことである。これらには単なる大きさの意味合いの表示に留まらない用途も含まれる。各言語によって指小辞・指大辞の形成の頻度は異なるが、指小辞は常に指大辞よりも頻度が高い。

多くの言語で、指小辞・指大辞は接辞によって形成されるが、声調 (tone) や重複 (reduplication) によっても形成される例がある。

2.2. スペイン語における指大辞

スペイン語の指大辞は派生接辞によって形成される。この節では、スペイン語における指大辞に関して、Gooch (1967) を基に概説する。

---

[1] 指大辞の定義は Dahl (2006: 594) から引用したものである。示大辞、増大辞とも呼ばれるが、本稿では指大辞で統一することとする。

[2] 示小辞、縮小辞とも呼ばれるが、本稿では指小辞で統一することとする。

2.2.1. -ón

派生接辞 -ón[3] は、指大辞を形成する派生接辞の中で最も用途の広いものであるとされる。一般的には、主要部の程度やサイズが大きいものであるという意味を付加する。人物の性質を示す名詞や形容詞に接続する際には軽蔑的な意味の語に接続し、その意味を強調する傾向がある。一方、好ましい人物の性質を示す名詞や形容詞に接続し、好意的な意味を強調することも可能である。ただしその場合にも、軽蔑的な意味を含意する場合もある。例外的に、好ましくない人間の性質を示す名詞や形容詞に接続し、親密さの意味を付加することで軽蔑の意味を弱める緩衝表現的な用法や、指小辞的な用法も存在する。加えて、行動または行動の結果を増大・軽蔑の意味を交えて表現するため、-ón を用いる例もある。

2.2.2. -azo

派生接辞 -azo も、先述の派生接辞 -ón と同様に好意的な意味・軽蔑的な意味の両方を強調しうる。ón と同様に、行動または行動の結果を示す用法も存在する。それに加えて、-azo の場合、物理的にも比喩的にも「打撃」という意味合いを含意する用法、さらに、「主要部名詞が表すものの打撃を伴った使用」の意味を付加する例もある。

2.2.3. -ote

派生接辞 -ote　は、軽蔑的な意味の語に接続し、その意味を強調する傾向がある点と、親密さの意味を付加し、軽蔑の意味を弱めるという用法がある点から、派生接辞 -ón に似た働きをすると言える。

2.2.4. -udo

派生接辞 -udo は形容詞化接尾辞であり、軽蔑的な意味を含意することが多い。

2.3. メキシコの方言分布

この節では、本稿の調査対象であるメキシコのスペイン語方言の分布に関し、Basols et al. (2017) を参考にし、概説する。メキシコでは主にメキシコ・中央アメリカ方言が話されているが、カリブ海に面するユカタン半島地域では、カリブ方言も話される。本稿では、いずれかの方言に限定せず、メキシコでのスペイン語の用例を広く対象とする。

3. 先行研究

3.1節では、名詞から指大辞を形成する際の派生接辞の規則性に関し述べた Miguel (1989: 289-312) を取り上げる。さらに3.2節では指大辞を形成する派生接辞が名詞に接続した場合と形容詞に接続した場合のそれぞれにおいて観察される特性を述べた Kornfeld (2015: 135-170) を取り上げる。最後に3.3節で先行研究をまとめ、問題提起を行う。

[3] スペイン語の名詞および形容詞は、男性形と女性形に派生する。主要部が男性形の場合は、それに伴い指大辞も -ón であれば女性形の場合は -ona と変化するが、ここでは男性形で表記する。これ以降に述べる派生接辞に関しても同様に扱う。

3.1. Miguel (1989)

Miguel (1989: 289-312) は、指大辞は主に名詞に用いられることが多いとした上で、指大辞を形成する際の名詞-派生接辞の組み合わせに確固たる規則は存在せず、多くの名詞が各指大辞に伴って用いられると主張する。

3.2. Kornfeld (2015)

Kornfeld (2015: 135-170) は指大辞を形成する派生接辞が形容詞に接続した場合と名詞に接続した場合、それぞれにおいての特性を述べている。

まず、指大辞が形容詞に接続する場合、常に増大の意味ではなく、むしろ情緒的な意味を追加するとしており、またこの傾向は -ón のほうが -ote よりも強い。

さらに、名詞から指大辞が形成される場合、その名詞が人・物・事象のどれであっても常に派生接辞の意味は増大であるとしている。

3.3. 先行研究のまとめと問題提起

Miguel (1989: 289-312) の主張は、指大辞を形成する際の名詞-派生接辞間に規則は存在しないとするものだった。しかし、Gooch (1967) によれば、各々の派生接辞によって指大辞が含意するものに傾向があることが述べられており、規則が存在しないとしても実際の使用状況としてある名詞がある派生接辞と共起する傾向が存在する可能性がある。

Kornfeld (2015: 135-170) では、名詞から形成される指大辞は、常に増大の意味が付与されるとされていた。一方で Gooch (1967) では緩衝表現的意味が付加される例や、指小辞的な意味が名詞に付加される例が紹介されていた。

以上のように、指大辞の形成によって付与される意味・派生接辞の主要部の品詞・派生接辞の 3 つの関係性について、文献ごとの主張が一致していない。

4. 調査

指大辞の主要部の品詞と、指大辞の形成の際に選択される派生接辞との間に傾向があるのか、コーパスを用いて調査する。4.1節で調査方法、4.2節で得られたデータの取り扱い、4.3節で調査結果についてまとめる。

4.1. 調査方法

コーパスは、Corpus del Español: Web / Dialects (以下 CEWD) を用いて検討する。CEWD は全米人文科学基金によって提供されている、2020年11月現在、約200万の Web ページから収集された延べ語数訳200億語を収録するスペイン語コーパスであり、地域指定を含めた様々な検索条件をかけることができる。検索結果として、用例数とその用例を得ることができる。以下の方法で調査を行った。

① 指大辞が網羅的に掲載されている Gooch (1969) の指大辞リスト (総語数 762 語) を、主要部が名詞のもの、形容詞のもの、動詞のものに分ける[4]。
② CEWD を用いて、派生接辞が -ón, -ote, -azo, -udo であるそれぞれの指大辞[5]の用例数を得る。その際、条件付き検索機能を利用して、検索対象をメキシコに限定する。
③ それぞれの派生接辞の用例のうち、主要部がどの品詞であることが多いのか、用例数とその割合から考察する。

4.2. データの取り扱いの特記事項

Gooch (1969) に形容詞として掲載されている指大辞は、単数形・複数形それぞれにつき男性形・女性形を含めた4通りの派生形を統計の対象とした。男性名詞または女性名詞として掲載されている指大辞は異なる性の形を対象とせず単複のみの2通りの派生形を対象とした。他に、語彙化して突出した用例数となっている例の除外などデータの集計上考慮した点があったが、詳細は紙幅の都合上割愛する。

4.3. 調査結果

以下の表 2 は各種の指大辞の用例数を主要部の品詞ごとに分類した結果である。なお、( ) 内に示した割合は、各型の指大辞それぞれの用例数全体を 100%としたときの、各品詞を主要部とするものの割合[6]である。

表 2: 主要部の品詞ごとの各型の指大辞の用例数

	ÓN 型	AZO 型	OTE 型	UDO 型	合計
主要部が名詞	9004 (43.4%)	3202 (78.6%)	670 (45.4%)	1039 (82.1%)	13915
主要部が動詞	9758 (47.1%)	773 (19%)	0 (0%)	0 (0%)	10532
主要部が形容詞	1946 (9.4%)	98 (2.4%)	805 (54.6 %)	227 (17.9%)	3075
合計	20708	4073	1475	1266	27522

調査対象となった指大辞は、ÓN 型が 296 語, AZO 型が 214 語, OTE 型が 84 語, UDO 型が 66 語で、合計 660 語であった。そこから得られた用例数の合計は 27522 件であった。これらのデータをもとに、先行研究の主張を検討する。

[4] この品詞の判定は宮城・山田 (編) (1999) を参考にした。
[5] 便宜上、以下ではこれらをそれぞれ ÓN 型, OTE 型, AZO 型, UDO 型の指大辞と呼ぶ。
[6] 小数点第 2 位で四捨五入している。以後の表内に記載する割合も同様である。

5. 検討・考察

調査結果を踏まえ、5.1節で先行研究の主張の考察を行う。次に、Miguel (1989: 289-312) の主張の検討のため、5.2節で主要部が名詞である指大辞のより詳細な分析を行う。

5.1. 先行研究の主張の考察

5.1.1. Miguel (1989) に対する考察

Miguel (1989: 289-312) では、指大辞は主に名詞に用いられることが多いという点と、指大辞を形成する際の名詞－派生接辞の組み合わせに確固たる規則はないという点の 2 点の主張があった。まず前者の主張に関して、表 2 のとおり、総用例数 27522 件のうち、主要部が名詞であるものは 13915 件で過半数を占めており、本稿の調査結果は Miguel (1989: 289-312) を支持している。後者の主張に関しては、5.2 節での分析を通じて検討する。

5.1.2. Kornfeld (2015) に対する考察

Kornfeld (2015: 135-170) は、指大辞が形容詞に接続する場合、常に増大の意味ではなく、むしろ情緒的な意味を追加するとしており、またこの傾向は -ón のほうが -ote よりも強いと主張した。しかし、今回の調査によれば、ÓN 型の指大辞の中で主要部が形容詞であるものの割合が 9.4% (1946 件) であるのに対して、OTE 型の指大辞の中で主要部が形容詞であるものの割合は 54.6% (805 件) であり、単純な用例数としては Kornfeld (2015: 135-170) の主張通りであるものの、全体の用例数に対する割合を考慮すると、OTE 型の方が ÓN 型よりも形容詞を主要部として持っている傾向が強く、自ずと派生接辞が情緒的な意味を付加する用例の割合も多いと推察できる。

さらに、Kornfeld (2015:135-170) は、名詞から指大辞が形成される場合、その名詞が人・物・事象のどれであっても常に派生接辞の意味は増大であるとしている。しかし、今回の調査で、以下のように例外的に縮小の意味を含意する例が見られた。よってこの主張には反証の余地がある。

(1)

Con	shorts	diminutos	o	vestidos	**rab-ones**
with	shorts.M.PL	tiny.M.PL	or	dress.M.PL	tail-AUG.M.PL

「小さなショーツと**丈の短い**ドレス」 (chicabloguera.com)

5.2. 主要部が名詞である指大辞の分析

指大辞を形成する際の名詞－派生接辞の組み合わせに確固たる規則はないという Miguel (1989:289-312)による主張の検討のため、主要部が名詞である指大辞をより詳細に分析する。ここでは、主要部が名詞である指大辞の用例数のデータを Gooch (1969) の指大辞のグループ分けに基づいて分析する。なお、UDO 型指大辞に関しては Gooch (1969) におけるグループ分けがされていないので、分析を行わない。

5.2.1. ÓN 型の分析

以下の表 3 は、Gooch (1969) の指大辞のグループ分けに基づき、主要部が名詞である ÓN 型指大辞の用例数を集計したものである[7]。

表 3: グループごとの主要部が名詞である ÓN 型指大辞の用例数

グループ	用例数 (%)
(ÓN-A) ある性質の人を表す男性名詞	2484 (27.6%)
(ÓN-B) 人の性質を表す形容詞	747 (8.3%)
(ÓN-C) 物事の性質を表す男性名詞	4409 (49%)
(ÓN-D) 行動またはその結果を表す男性名詞	48 (0.5%)
(ÓN-G) 主要部の表すものの縮小や軽蔑を含意する形容詞	647 (7.2%)
(ONA-A) 女性名詞	669 (7.4%)
合計	9004 (100%)

Gooch (1969) では ÓN 型指大辞を 10 のグループに分類していたが、主要部が名詞であり、かつ語彙化もしていない指大辞が確認できたのは表中の 6 グループのみであった。最も多かったのは約半数をしめた (ÓN-C) 物の性質を表す男性名詞であった。ついで (ÓN-A) ある性質の人を表す男性名詞が 27.6%で、残りのグループは横並びであった。

5.2.2. AZO 型の分析

以下の表 4 は、Gooch (1969) の指大辞のグループ分けに基づき、主要部が名詞である AZO 型指大辞の用例数を集計したものである。

表 4: グループごとの主要部が名詞である AZO 型指大辞の用例数

グループ	用例数 (%)
(AZO-A) 好意的または否定的な意味を伴う男性名詞	1366 (42.7%)
(AZO-B) 行動またはその結果を表す男性名詞。	1686 (52.7%)
(AZA-A) 好意的または否定的な意味を伴う女性名詞	150 (4.7%)
合計	3202 (100%)

Gooch (1969) では AZO 型指大辞を5のグループに分類していたが、主要部が名詞であり、かつ語彙化もしていない指大辞が確認できたのは表中の3グループのみであった。最も用例数が多かったのは、(AZO-B) 行動またはその結果を表す男性名詞であった。これは、2.2.2節で述べた、「 (主要部の名詞が表すもの) を用いた一撃」という意味を付加する

[7] () 内の数値は、主要部が名詞である用例全体の数に対する、各グループの用例の割合である。後述の表 4 および表 5 に関しても同様である。

指大辞の用例が多く存在したためである。次に、(AZO-A) 好意的または否定的な意味を伴う男性名詞が42.7%であり、女性名詞を形成する例は4.7%と他の型の指大辞と比較して一番少なかった。以下は、(AZO-B) 行動またはその結果を表す男性名詞の例である。

(2) (AZO-B) 行動またはその結果を表す男性名詞

Recibió	un	botell-azo
receive.IND.PST.3SG	ART.INDF.M.SG	bottle-AUG.M.SG

「瓶による殴打を受けた」 (WWE-LIVE.NET)

5.2.3. OTE 型の分析

以下の表 5 は、Gooch (1969) の指大辞のグループ分けに基づき、主要部が名詞である AZO 型指大辞の用例数を集計したものである。

表 5: グループごとの主要部が名詞である OTE 型指大辞の用例数

グループ	用例数 (%)
(OTE-A) 多くの場合軽蔑的な意味を含意するが、親密さを示す例もある男性名詞	211 (31.5%)
(OTE-C) 名詞的にも用いることができる形容詞	1 (0.1%)
(OTA-A) 増大および軽蔑を含意する女性名詞。男性形や、形容詞的な用法でも用いる。	458 (68.4%)
合計	670 (100%)

Gooch (1969) では OTE 型指大辞を 5 つのグループに分類していたが、主要部が名詞であり、かつ語彙化もしていない指大辞が確認できたのは表中の 3 グループのみであった。最も用例数が多かったのは (OTA-A) 増大および軽蔑を含意する女性名詞であり、68.4%と女性名詞の指大辞の例が他の型の指大辞と比べて格段に多くなっている。これはこのグループの指大辞が男性形や形容詞的な用法でも用いられることから、使用頻度が他のグループに比べて高いことに要因があると考えられる。それについで男性名詞である (OTE-A) のグループが多く、(OTE-C) 名詞的にも用いることができる形容詞の例は anchote の 1 例のみ確認した。以下は、(OTA-A) 増大および軽蔑を含意する女性名詞の例である。

(3) (OTA-A) 増大や軽蔑を含意する女性名詞。

su	pinche	nariz-ota
his	f*cking	noose-AUG.F.SG

「彼のくそ大きい鼻」 (alt1040.com)

6. まとめ

本稿では、派生接辞の主要部の品詞と派生接辞との間の関係性について先行研究の主張が一致していないことに対し問題提起をおこない、使用状況の実態として何らかの傾向があるという仮定を立てたうえで、コーパス調査を通じてその傾向を調査した。以下、先行研究の主張の考察のまとめを記す。

まず、Miguel (1989: 289-312) の「指大辞は主に名詞に用いられることが多い。」という主張を検討したコーパス調査の結果は、4.3 節に示したように、全ての型の指大辞において主要部が名詞であるものの割合が高く、それを支持するものとなった。もう一点の「名詞－派生接辞の組み合わせに確固たる規則は存在しない。」という主張に関して、本稿の調査では主要部が名詞である指大辞にはそれぞれの型ごとにある程度の傾向の存在がうかがえる結果となった。というのは、5.2 節で述べたように、「行動またはその結果を表す男性名詞」が AZO 型指大辞の用例の多くを占めたことや、OTE 型の指大辞における女性名詞の割合が高かったことが、傾向の存在を示唆しているからである。しかし、これは Miguel (1989: 289-312) の主張を完全には否定しない。

次に、Kornfeld (2015: 135-170) の「主要部が形容詞の指大辞は情緒的な意味を含意し、またこの傾向は -ón のほうが -ote よりも強い」という主張については、まず本稿の調査において全体の OTE 型の方が ÓN 型よりも形容詞を主要部として持っているものの割合が高かった。このことから自ずと派生接辞が情緒的な意味を付加する用例の割合も多いと推察できる。したがって、本稿の調査はこの主張を支持しないものとなった。もう一点の「主要部が名詞の指大辞は、常に増大の意味が付加されている」という主張に関しては、本稿のコーパス調査で取り扱った「縮小の意味を含意する」ケースから、反証の余地があるという結論となった。

参考文献および参考資料 (参考文献→参考資料の順)

宮城昇・山田善郎 (編) (1999)『現代スペイン語辞典』東京: 白水社. / 岡田辰雄 (1996) 『現代スペイン語文法』東京: 芸林書房. / B. asols, Javier et al. (2017) *Introducción a la lingüística hispánica actual: teoría y práctica*. NewYork: Routledge. / Dahl, Östen (2006) Diminutive and Augmentative. In: Brown, Keith. *Encyclopedia of Language and Linguistics*. Second Edition, 594-595. Amsterdam. Elsevier Science. / Gooch, Anthony (1967) *Diminutive, Augmentative and Pejorative Suffixes in Modern Spanish*. London: Pergamon Press. / Kornfeld, Laura (2015) Notas sobre los sufijos aumentativos en el español de la Argentina. *Revista Saga* 4: 135-170. / Pereira, Miguel (1989) The acquisition of morphemes: Some evidence from Spanish. *Journal of psycholinguistic research* 18: 289-312. / *Corpus del Español* (https://www.corpusdelespanol.org/web-dial/) [最終閲覧日：2020/12/19]

略号一覧

1, 2, 3: 1, 2, 3人称 / ART: 冠詞 / DEF: 定 / F: 女性 / IND: 直接法 / INDF: 不定 / INF: 不定詞 / M: 男性 / PL: 複数 / PRS: 現在 / PST: 過去 / REFL: 再起 / SG: 単数 / SBJV: 仮定法 / -: 形態素境界

デンマーク語の未来表現について

古屋　さくら
（言語文化学部　ウルドゥー語専攻）

キーワード：デンマーク語，未来表現，現在形，法助動詞，アクチオンスアルト

1. はじめに

デンマーク語では、法助動詞 ville、skulle の現在形 (以下 ville、skulle とする) や動詞の現在形を用いて未来の事柄を表す。本稿では、未来表現における ville、skulle、現在形の使用割合やアクチオンスアルト[1]の傾向等、未来表現全体の特徴を明らかにすることを目的とする。なお、本稿の例文番号、図表、グロス、日本語訳等は特に断りのない限り筆者によるものである。例文では、未来の事柄を表す動詞部分を太字で示した。

2. 先行研究

2.1.節では未来表現全体について Diderichsen (1964: 58-59) の記述を、2.2.節では現在形を用いる未来表現に関して Davidsen-Nielsen (1990: 122-123) をまとめる。さらに、2.3.節ではデンマーク語の動詞のアクチオンスアルトについて新谷 (2018: 1-6) を要約する。

2.1. Diderichsen (1964)

2.1.1. ville + 不定詞

ville + 不定詞は、動詞が継続的な動作を表す場合 (状態動詞、動作動詞、達成動詞) や、主語が 1 人称の場合に未来表現として用いられる。

(1) Jeg **vil** **savne** dig ved festen i morgen.
1SG will.PRS miss.INF you at party.DEF.C tomorrow
「私は明日のパーティーであなたが恋しくなるだろう。」

2.1.2. skulle + 不定詞

skulle + 不定詞は、基本的に義務的、強制的に何かを行うことを示唆する。

(2) De **skal** **rejse** i morgen.
3PL will/must.PRS leave.INF tomorrow
「彼らは明日出発するだろう / に違いない。」

[1] 斎藤・田口・西村 (2015: 4) は、アクチオンスアルトについて「動詞に内在する時間的特性。(中略) ベンドラー (Z. Vendler) は、この時間的特性を基準に動詞を 4 つのタイプに分類した。」と述べている。新谷 (2018) は、アクチオンスアルトを動作態様と呼び、4 つの動詞のタイプをを状態動詞、動作動詞、変化動詞、達成動詞としている。本稿では、アクチオンスアルトに統一し、動詞の分類は新谷 (2018) に倣う。

2.1.3. 現在形

現在形は、副詞節中だけでなく、主節においても未来の事柄を表すことができる。動詞が主語の変化を示唆する場合 (変化動詞)、現在形を用いて未来の事柄を表す。

(3) Når min søster **kommer**, **går** vi en tur.
when my.C sister.SG come.PRS go.PRS 1PL INDF.C walk
「妹が来たら、散歩に行こう。」

2.2. Davidesen-Nielsen (1990)

現在形と法助動詞のどちらを用いるかは動詞のアクチオンスアルトに左右される。限界的動詞 (達成動詞、変化動詞) の現在形を用いる未来表現は未来を表す副詞を必要としない (4)。非限界的動詞 (状態動詞、動作動詞) は補語と結合して、限界的な述語を作る場合があり、その際に現在形は未来の事柄を表す (5)。一方、非限界的動詞の現在形は、未来を表す副詞[2]もしくは疑問詞 hvornår (= *when*) と共起して未来の事柄を表す (6)。

(4) Han **kommer** allegevel ikke.
3SG.M come.PRS anyway NEG
「彼はどうせ来ないでしょう。」

(5) Vi **spadserer** **til** Gilleleje.
1PL walk.PRS to Gilleleje
「私たちはギレライエまで散歩します。」

(6) Vi **taler** om det senere.
1PL talk.PRS about it later
「それについては後で話しましょう。」

2.3. 新谷 (2018)

新谷 (2018) はデンマーク語のアクチオンスアルトについて、その動詞の意味が状態的 [+] か非状態的 (=動的) [−] か、到達点があり限界的 [+] か非限界的 [−] か、さらに瞬間的 [+] か継続的 [−] かによって、状態動詞、動作動詞、変化動詞、達成動詞の 4 つに分類できると述べている。以下に、新谷 (2018: 6) を基に表にまとめる[3]。

表 1: アクチオンスアルトの全体像

	状態性	限界性	瞬間性
状態動詞	−	−	−
動作動詞	+	−	−
達成動詞	+	+	−
変化動詞	+	+	+

(新谷 2018: 6 を基に筆者作成)

[2] 未来を表す副詞の例: snart (*soon*), derpå (*afterwards*), i morgen (*tomorrow*)。Nimb (2002: 802-803) より。
[3] 新谷 (2018) にはそのような記述はなかったが、おそらく Vendler (1967) を参考にしてこの分類を行ったと考えられる。

3. 先行研究のまとめと問題点

各先行研究を表 2 にまとめる。Davidsen-Nielsen (1990) の ville、skulle に関する記述と、新谷 (2018) の現在形の未来表現についての記述は、紙幅の都合上本文では割愛した。

表 2: 先行研究のまとめ

	Diderichsen (1964)	Davidsen-Nielsen (1990)	新谷 (2018)
ville + 不定詞	主語が 1 人称。動詞が表す動作が継続的 。	現在に起因する未来の結果、意志を表現。	
skulle + 不定詞	主語が 1 人称の時、丁寧な表現になる。義務的、強制的。	*be to / be about to* に近い表現。	
現在形	主節でも未来の事柄を表す。 動詞が状態の変化を表す場合は、未来の事柄を表す。	現在に起因する未来の事柄を表す。 限界的動詞は未来を表す副詞を必要としない。非限界的動詞は、未来を表す副詞、もしくは hvornår と共起する。	現在形は、動詞のアクチオンスアルト に関わりなく、未来の事柄を表すことができる。

Diderichsen (1964) は、「ville + 不定詞は動詞が表す動作が継続的である場合 (状態動詞、動作動詞、達成動詞)、現在形は動詞が状態の変化を表す場合 (変化動詞) に、未来の事柄を表す」としている。しかし、Davidsen-Nilesen (1990)、新谷 (2018) では、ville、skulle の未来表現における動詞のアクチオンスアルトについて言及がなく、動詞の現在形に関しては両者とも「動詞のアクチオンスアルトに関わりなく未来の事柄を表すことができる」という立場を取っている。主語の人称に関しては、Diderichsen (1964) のみ言及がある (skulle の丁寧表現については十分なデータが得られなかったため割愛する) が、他の先行研究では触れられていない。さらに、デンマーク語における現在表現と未来表現の割合や、未来表現における ville、skulle、現在形の使用割合等を示した研究は、筆者の知る限り見当たらなかった。

副詞の共起について、Davidsen-Nielsen (1990) の「限界的動詞 (達成動詞、変化動詞) は未来を表す副詞を必要としない」という主張に対し、新谷 (2018) では変化動詞 kommer が副詞 snart と共起する例 (Han kommer snart.) が見られ、動詞の限界性と未来を表す副詞の共起関係について議論の余地があると考えたが、この点に関して十分なデータを集めることができなかったため、本稿では割愛する。よって本稿では次の [1] から [3] について調査結果のまとめと考察を行う。

[1] 未来表現における動詞の現在形と法助動詞 ville、skulle の使用割合
(現在表現と未来表現の割合)

[2] 未来表現におけるアクチオンスアルトの傾向 (現在形、ville、skulle)

[3] ville の未来表現が示す諸特徴 (ville の主語人称と動詞の限界性)

4. 調査方法

調査には表 3 の資料を用いた。なお、今回の調査では時間的な制約のため、原作の全 18

章 332 ページのうち 5 章 93 ページまでを調査範囲とした。

表 3: 調査資料に関する情報

言語	題名	著者・訳者	出版年	範囲	略号
英語(原)	*Harry Potter and the philosopher's Stone*	Rowling, J.K.	1997[2013]	p.1 - p.93	EV
デンマーク語(訳)	*Harry Potter og De Vises Sten*	Lützen, Hanna	1998[2017]	p.5 - p.104	DV

資料 DV から、現在形か ville、skulle を含む文を全て抜き出す。抽出したデータから、明らかに現在もしくは未来を表さない文 (現在完了など) を除外し、残ったものを 3.節であげた [1] から [3] の観点で分析する。

動詞、法助動詞が現在表現か未来表現かについては、資料 EV を参考に判断した。しかし、自分自身で判断できなかったものについては、デンマーク語を母国語とするインフォーマント 1 名 (1998 年生まれ / 男性 / オーフス市出身) に確認した。

アクチオンスアルトの分類に際しては、新谷 (2018: 1-9) を参考にした。記述がないものは、Den Danske Ordbog[4]という現代デンマーク語のインターネット辞書で動詞の意味、用法等を調べ判断した。さらに、Davidsen-Nielsen (1990: 213-214) で動詞の限界性を区別する際に有用であるとされている問いも参考にした。紙幅の都合上、原文の訳のみ引用する。

> [一次的に動詞をその意味によって分類すると、限界的動詞 (*buy*, *die*, *fall*, *go*, *turn*, など) と非限界的動詞 (*admire*, *love*, *live*, *sleep*, *walk*, など) に分けられる可能性がある。その 2 つの意味範疇 (「アクチオンスアルト」) を区別するためには、以下の問いが有用である; 「もし誰かがその動作を行なっている場合、動作が邪魔されたとしても、その動作を行なったことになるか」(Garey 1957: 105)。この問いに対する答えが Yes であれば、その動詞は非限界的である (例: *sleep*)。答えが No であれば、その動詞は限界的である (例: *drown*)。]
>
> (Davidsen-Nielsen 1990: 213-214, 訳は筆者による)

5. 調査結果と考察

本節では 3.節で述べた [1] から [3] について、調査結果をまとめ考察を行う。

5.1. 未来表現における動詞の現在形と法助動詞 ville、skulle の使用割合

収集したデータからは合計で 592 個の現在形と ville、skulle の使用が確認された。そのうち 145 個が未来表現として用いられていた。表 4 にデンマーク語における現在表現と未来表現の割合と出現数を、表 5 に未来表現における ville、skulle、動詞の現在形の割合と出現数を示す。

[4] Den Danske Ordbog は、デンマークの文科省とカールスバーグ財団により管理されている、インターネット上のデンマーク辞書である。1955 年から今日まで更新され続けている。

表 4: 現在表現と未来表現の割合

	現在形	ville	skulle
現在	**87.9% (435)**	11.6% (5)	13% (7)
未来	12.1% (60)	**88.4% (38)**	**87% (47)**
合計	100% (495)	100% (43)	100% (54)

表 5: 未来表現におけるそれぞれの表現の割合

	現在形	ville	skulle	合計
未来	41.4% (60)	26.2% (38)	32.4% (47)	100% (145)

表 4 から、現在形は約 9 割が現在表現、ville と skulle は約 9 割が未来表現となることがわかる。現在形の未来表現は 12.1%と少ないようだが、おそらく英語と比較するとデンマーク語においての方が現在形の未来表現は多く出現するだろう。英語だけでなく、ドイツ語やスウェーデン語など他のゲルマン語と対比を行うと、より明確な傾向が掴めると考える。

表 5 では、未来表現におけるそれぞれの使用割合を示しており、動詞の現在形が 41.1%、ville が 26.2%、skulle が 32.4%を占める結果となった。ville や skulle は全体の 9 割が未来表現として用いられるにもかかわらず、未来表現のみに着目して比較すると動詞の現在形の割合が法助動詞よりも 1 割ほど高い。一見、動詞の現在形の方が法助動詞に比べ未来表現として用いられる確率が高いように思えるが、そもそもの出現数 (現在形; 435 件、ville; 43 件、skulle; 54 件) を鑑みると、現在形は法助動詞に比べ出現数そのものが非常に多いため、未来表現において現在形の例が一番多いのは自然なことだと思われる。

5.2. それぞれの未来表現におけるアクチオンスアルト

表 6 には、未来表現の現在形の動詞、ville、skulle の後に続く動詞の不定詞をそれぞれ、状態、動作、達成、変化、N に分類した。N は、法助動詞の後の動詞がない、もしくは別の法助動詞の不定詞形が続くことを示している。未来表現において N に分類されたのは、ville が 3 件 (可能の法助動詞 kunne が続く)、skulle が 10 件 (いずれも動詞がない)であった。

表 6: それぞれの未来表現と動詞のアクチオンスアルトの関係

	現在形	vil	skal
状態	15% (9)	34.2% (13)	**44.7% (21)**
動作	26.7% (16)	15.8% (6)	21.3% (10)
達成	6.7% (4)	18.4% (7)	4.3% (2)
変化	**51.7% (31)**	23.7% (9)	8.5% (4)
N		7.9% (3)	21.3% (10)
合計	100.1% (60)	100% (38)	100.1% (47)

表 6 より、現在形、ville、skulle のいずれの表現でも、4 つのアクチオンスアルト全てに対応していることがわかる。現在形では変化動詞が、ville、skulle では状態動詞が未来表現になりやすい傾向があるようだ。特に skulle は約 45%が状態動詞、約 21%が動作動詞であり、非限界的動詞が過半数を占める。一方、ville は現在形や skulle と比較すると使用される

動詞のアクチオンスアルトにあまり偏りがない。3 つの表現の中では、最もアクチオンスアルトに左右されないと言えるだろう。

ville と skulle を比較すると、skulle においての方が非限界的動詞を用いる場合が多い。その理由として、skulle は ville よりもより確定度が高く、時間的にも比較的近い未来を表すのではないかと推測する。以下の (7) から (10) は ville、(11) (12) は skulle の例文である。ville を用いた例文では (9) を除いて、比較的遠い未来、漠然とした未来について述べている。一方、skulle の例文 (11)、(12) では、ほんの数分先の未来について述べており、ville に比べその出来事が起こる確率が非常に高い。このことから skulle は、すでに決められているがまだ起こっていない事や、起こる確率の高い事を表す可能性があると言える。

(7) Han **vil** altid **have** det ar.
3SG.M will.PRS always have.INF DEF.N scar
「彼はその傷を持ち続けるだろう。(状態動詞)」

(8) Man **vil** **skrive** bøger om Harry.
man.SG will.PRS write.INF book.PL about Harry
「誰かがハリーの本を書くかもしれない。(動作動詞)」

(9) Jeg **vil** også **læse** det brev,
1SG want.PRS also read.INF DEF.N letter
「僕もその手紙を読みたい(読んでしまいたい)。(達成動詞)」

(10) Du **vil** hurtigt **tage** ved lære.
2SG will.PRS fast take.INF with learn
「君もすぐに分かるようになるさ。(変化動詞)」

(11) **Skal** Harry Potter virkelig **udsættes** for det?
be_going_to.PRS Harry Potter really exposed.INF for it
「ハリー・ポッターは本当にこのような状況に置かれるのですか? (状態動詞)」

(12) Sig, han **skal** **gøre** det.
say.IMP 3SG.M be_going_to.PRS do.INF it
「彼がそれをするように言って。(動作動詞)」

現在形に関しては、現在表現と未来表現でのアクチオンスアルトの比較を行った。表 7 から、現在表現では状態動詞と動作動詞の非限界的動詞がほとんどを占めている。一方、未来表現では変化動詞が約 51%、動作動詞が約 27%を占める結果となった。これについて、Diderichsen (1964) は「動詞が主語の変化を示唆する場合に、未来の事柄を表す」と述べているが、確かに現在形の未来表現には変化動詞が多く、変化動詞は未来表現になりやすい傾向にあると言える。

表 7: 動詞の現在形におけるアクチオンスアルト

	現在	未来
状態	**76.3% (332)**	15% (9)
動作	16.3% (71)	26.7% (16)
達成	0.7% (3)	6.7% (4)
変化	6.7% (29)	**51.7% (31)**
合計	100% (435)	100.1% (60)

Davidsen-Nielsen (1990) と新谷 (2018) は「動詞の現在形は限界的動詞あっても、非限界的動詞であっても未来の事柄を表すことができる」という立場を取っているが、現在形の未来表現には 4 つ全てのアクチオンスアルトが現れており、この主張の裏付けとなった。

5.3. ville の未来表現が示す諸特徴

Diderichsen (1964) は、ville + 不定詞は「動詞が継続的な動作を表す場合や、主語が 1 人称である場合にも、未来表現として用いられる」と主張している。しかし、Diderichesen (1964) が、1 人称主語だけでなく 3 人称主語の例も挙げていたこと (“Jeg / han vil savne dig ved festen i morgen.”) から、「動詞が継続的な動作を表す」ことと「主語が 1 人称である」ことは、絶対条件ではなく必要条件、或は単なる傾向ではないかと思われる。表 8 に、ville の未来表現について主語の人称とアクチオンスアルトの観点からまとめた。なお、網掛け部分は、動詞に継続性があることを示している。さらに表 9 には、Diderichsen (1964) が挙げた 2 つの条件の両方を満たすか、一方を満たすか、どちらも満たさないか、という観点でまとめ直した。

表 8: ville +不定詞の未来表現 (主語の人称、アクチオンスアルトの観点から)

	1 人称	2 人称	3 人称
状態	4	0	9
動作	2	2	2
達成	6	1	0
変化	2	2	5
N	0	0	3
合計	14	5	19

表 9: それぞれの条件における数と割合

両方を満たす	一方を満たす	どちらも満たさない	合計
31.6% (12)	**42.1% (16)**	26.3% (10)	100% (38)

表 9 から、vil + 不定詞における未来表現のおよそ 7 割が「主語が 1 人称」「動詞が継続的な動作を表す」という条件の両方、もしくはどちらか一方を満たしていることがわかる。このことから、Diderichsen (1964) の挙げた条件は、絶対条件でも必要条件でもなく、vil + 不定詞が未来表現になる場合のおおよその傾向であるとえる。しかし “(…前略) vil du komme til at tilbringe al din tid i pulterkammeret fra nu af og til jul.” 「(…前略) 今からクリスマスまで、物置でずっと過ごすことになるぞ。」という文のように、al din tid 「あなたのすべての時間

を (＝ずっと)」のような表現を用いて、文全体が継続的になっている例も見られた。以上のことから、単なる憶測ではあるが、ville＋ 不定詞の未来表現は、主語が 1 人称でも、動詞が表す動作が継続的でもない場合、文の他の要素の中に副次的に継続的な意味が現れる可能性がある。

(13) Og han **vil** **få** den bedste læremester,
and 3SG.M will.PRS get.INF DEF.C best headmaster
Hogwarts nogensinde har haft, (…後略)
Hogwarts ever have.PRS have.PP
「彼はホグワーツの歴代校長の中でも、一番の校長になるだろうね (…後略)」

6. 反省と今後の課題

今回の調査の反省点として、データの量・分析が十分ではないということが挙げられる。特に法助動詞 ville、skulle を用いる表現における主語の人称の傾向や、未来の事柄を表す現在形と副詞的語句の共起に関しては、収集したデータ数が十分ではなく調査に至らないものもあった。これらの原因は使用した資料が小説であったためと考えられる。小説だけではなく、新聞、雑誌、ドラマなど様々な媒体を用いて調査を行うことを今後の課題としたい。

略号一覧

1: 1 人称 / 2: 2 人称 / 3: 3 人称 / C: 共性 / DEF: 定冠詞 / IMP: 命令 / INDF: 不定冠詞 / INF: 不定詞 / M: 男性 / N: 中性 / NEG: 否定 / PL: 複数 / PP: 完了 / PRS: 現在 / SG: 単数

参考文献、参考資料

Davidsen-Nielsen, Niels (1990) *Tense and Mood in English: A Comparison with Danish.* Berlin: Mouton de Gruyter. / Diderichsen, Paul (1964[1982]) *Essentials of Danish Grammar,* 5th edition. Copenhagen: Akademisk Forlag. / Garey, Howard B (1957) Verbal aspect in French. *Language,* 33: 91-110. Washington: Linguistic Society of America. / Nimb, Sanni (2002) Adverbs in Semantic Lexica for NLP — The extension of the Danish SIMPLE lexicon with Time Adverbs. *Proceeding of the Third International Conference on Language Resources and Evaluation,* 800-806. Spain: European Language Resources Association (ELRA). / Vendler, Zero (1967[1954]) Verbs and times. *Linguistics in philosophy*, 97-121. Ithaca, New York: Cornell University Press (Originally published: Verbs and times. *The philosophical review*. 66 (2) :143-160) / 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (2015)『明解言語学辞典』東京: 三省堂 / 新谷俊裕 (2018)「デンマーク語中級文法 1 デンマーク語の動詞の aktionsarter (動作態様) について ーデンマーク語の動詞の意味・用法をよりよく理解するためにー」『IDUN ー北欧研究ー』別冊 3: 1−24. 大阪: 大阪大学デンマーク語・スウェーデン語研究室. / Den Danske Ordbog: https://ordnet.dk/ddo (最終閲覧日: 2020 年 12 月 17 日) / Litteratursiden: https://litteratursiden.dk/forfattere/hanna-lutzen (最終閲覧日: 2020 年 12 月 16 日)

調査資料

Rowling, J. K. (1997[2014]) *Harry Potter and the Philosopher's Stone.* London: Bloomsbury Publishing Plc.
_____(1998[2017]) *Harry Potter og De Vises Sten.* translated by Lützen, Hanna. Gylling: Gyldendal.

ベトナム語の有声破裂音の音響音声学的研究

宮崎　哲雄
（言語文化学部　中国語専攻）

キーワード：ベトナム語，音響音声学，有声破裂音，入破音

0. はじめに

ベトナム語[1]の 2 種類の有声破裂音 /b d/ は，入破音として実現することがあるということが先行研究[2]で指摘されているがその音声的実現の傾向について言及がなされていない．本研究はベトナム語の有声破裂音を音響音声学的手法で観察しその音声的実現の傾向を明らかにすることを目的とする．

1. 背景知識

本節では Kirby (2011) に基づきベトナム語の音韻体系のうち，本研究の内容に大きく関わる音節構造 (A)，音節頭子音 (B)，母音 (C)，声調 (D) についての概説を行う．

(A) 音節構造

Kirby (2011: 388) によるとベトナム語の音節は音節頭子音[3]，声調，母音の 3 つの義務的な要素からなり，これに選択的な要素として音節末子音が含まれる．

(B) 音節頭子音

Kirby (2011: 382) はベトナム語の 19 個の頭子音を以下の表 1 のようにまとめている．

表 1：ベトナム語の音節頭子音

	Labial	Labio-Dental	Dental	Alveolar	Palatal	Velar	Glottal
Plosive	ɓ		t　tʰ	ɗ	t͡ɕ	k	ʔ
Nasal	m		n		ɲ	ŋ	
Fricative	w	f　v		s　z		x　ɣ	h
Approximant							
Lateral Approximant			l				

(Kirby 2011: 382 を筆者が一部改変)

[1] Thompson (1987: 3) は「教養のあるハノイ出身の話者の発音が標準語の一種として最も受け入れられている」としている．本稿ではこれに従い，文中の「ベトナム語」は特に断りのない限りはハノイを中心に話される北部方言を指すものとする．
[2] 本稿における非日本語文献の日本語訳は特に断りのない限りは筆者が行ったものである．
[3] Kirby (2011: 382) によると音節頭子音は唇音化の二次的調音が起こる場合がある．

(C) 母音

Kirby (2011: 384) によるとベトナム語は 9 つの母音音素 /i e ɛ a ɯ ɤ u o ɔ/ と 3 つの下降二重母音 /iə ɯə uə/ を区別する．母音の長短は /a/ と /ɤ/ のみ閉音節で区別される．

(D) 声調

ベトナム語は開音節もしくは共鳴音で終わる音節に現れる 6 つの声調と内破音で終わる 2 つの声調の計 8 つを区別する (Kirby 2011: 385-386)．以下表 2 は Kirby (2011: 386) が示した 8 声調の情報[4]をまとめた表である．

表 2：ベトナム語の声調

名前	調値	説明
ngang (水平な声調)	A1 (˧)	level
huyền (懸かる声調)	A2 (˨˩)	mid falling
sắc (鋭い声調)	B1 (˧˥) D1 (˧ˀ)	rising rising checked
nặng (重い声調)	B2 (˨˩) D2 (˨˩ˀ)	low glottalized low checked
hỏi (問う声調)	C1 (˧˩˧)	low falling
ngã (倒れる声調)	C2 (˧ˀ˥)	broken

(Kirby 2011: 386 を基に筆者作成)

2. 先行研究

2.1. ベトナム語の有声破裂音について

2.1.1. Kirby (2011)

Kirby (2011: 382) はベトナム語の有声破裂音の音素を /ɓ ɗ/ とし，その音声的実現について「有声破裂音は規範的に入破音として実現するが，常にそうなるわけではない」(Kirby 2011: 382) と述べている．

2.1.2. Thompson (1987)

Thompson (1987: 19) はハノイ方言の有声破裂音をまず "Fortis Oral Consonants" (硬音[5]の口腔音の子音) に分類しており，IPA での表記はそれぞれ [ɓ], [ɗ] としている (Thompson 1987: 4-5)．具体的な音の特徴について「前声門化しておりしばしば入破する」と述べている (Thompson 1987: 23).

[4]「名前」はベトナム語での名称である．和訳は冨田 (1988) に基づく．
[5] 子音のうちで音声器官の緊張が強いものである (「硬音」．亀井 他 (1996: 520)).

2.1.3. Hoàng and Hoàng (1975)

Hoàng and Hoàng (1975: 76) はベトナム語の有声破裂音 /b d/ を "lax" (弛緩音[6]) の子音に分類し，そこから閉鎖音の有声音に分類し，音素表記は /b d/ としている．補足説明として「弛緩した有声の子音は任意に前声門化する」としている (Hoàng and Hoàng 1975: 76).

2.1.4. 冨田 (1988)

冨田 (1988: 768) はベトナム語の有声破裂音の音素を /b d/，音価を [ʔb ʔd] としている．これらの音を具体的な特徴については述べていない．

2.2. 有声入破音の通言語的な傾向について

2.2.1. 遠藤 (2011)

遠藤 (2011) は東アジア・東南アジアに見られる入破音について「入破音は有声音であるが，こうした声調言語で出現する場合，歴史的には無声音に由来する系列の声調に現れるのが普通である」としている．

2.2.2. Ladefoged and Maddieson (1996)

Ladefoged and Maddieson (1996: 82) は入破音の通言語的な傾向について「有声入破音はほとんどの異なる調音位置で見られるが，前方に閉鎖がある方が好まれるという傾向がある」と述べている．

3. 先行研究のまとめと問題点

表 3 は Kirby (2011)，Thompson (1987)，Hoàng and Hoàng (1975)，冨田 (1988) の記述を表にしたものである．

表 3：ベトナム語の有声破裂音についての主張のまとめ

	音素	音価	補足説明
Kirby (2011)	/ɓ ɗ/	[ɓ ɗ]	canonicically realized as implosives.
Thompson (1987)	/b đ/	[ɓ ɗ]	Fortis. preglottalized, often imploded.
Hoàng and Hoàng (1975)	/b d/		Lax. optionaly pre-glottalized
冨田 (1988)	/b đ/	[ʔb ʔd]	

表 3 で示した通り，先行研究の主張には矛盾している点が見られ，ベトナム語の有声破裂音についての見解が先行研究の間で統一されていないということがわかる．遠藤 (2011)，Ladefoged and Maddieson (1996) は有声入破音の通言語的な傾向を示しているが，ベトナム語がこの両者の主張に従うかについては明らかになっていない．

[6] 子音では軟音 (lenis)，母音ではゆるみに対応するものである．(以上「弁別的素性」．亀井 他 (1996: 1249))

4. 本研究の方法

4.1. 仮説

本研究は以下に示す 3 つの仮説を検証するものである.

・仮説 1：音節頭子音の違いが関係する.

・仮説 2：声調の違いが関係する.

・仮説 3：後続母音の違いが関係する.

4.2. コンサルタント

表 4 は今回の調査に協力してくださったコンサルタントの方々の情報をまとめたもの, 図 1 はベトナム社会民主主義共和国 (以後「ベトナム」とする) の地図, 図 2 はベトナム北部の地図にコンサルタントの出身地を書き加えたものである[7].

表 4：コンサルタント情報

通し番号	性別	年齢	出身
F2	F	30	フート省
F4	F	23	バクザン省
F5	F	25	ハイフォン
F6	F	20	ハノイ
F11	F	25	ハノイ
F12	F	23	バクニン省

図 1：ベトナムの地図

図 2：コンサルタントの出身地

[7] 白地図専門店 (https://www.freemap.jp/) で無料配布されているものを筆者が一部加工.

4.3. 分析資料

4.1 節で述べた仮説を検証するために，声調の異なる語でつくられたリストと，後続母音[8]の異なる語でつくられたリストを用いた．以下表 5, 6[9]は実験に用いたリストである．

表 5：リスト 1・2 (/b d/ を音節頭子音に持ち，声調の異なる語)

リスト	声調	-/a˥/	-/a˧˩˧/	-/a˨˩˦/	-/a˥˥˧/	-/a˧˨˨˧/	-/a˧˩˧˥˥/	-/a˧˩/	-/a˨˨˨/
1:/b/	語	/ba˥/	/ba˧˩˧/	/ba˨˩˦/	/ba˥˥˧/	/ba˧˨˨˧/	/ba˧˩˧˥˥/	/ba˧˩/	/ba˨˨˨/
	英訳	three	grand mother	embrace	scramble	she	garbage	at random	silver
2:/d/	語	/da˥/	/da˧˩˧/	/da˨˩˦/	/da˥˥˧/	/da˧˨˨˧/	/da˧˩˧˥˥/	/da˧˩/	/da˨˨˨/
	英訳	banyan	start	stone		beat	already		measure

表 6：リスト 3・4 (/b d/ を音節頭子音に持ち，後続母音の異なる語)

リスト	母音	-/i/	-/ɯ/	-/u/	-/e/	-/ɤ/	-/o/	-/ɛ/	-/a/	-/ɔ/
3:/b/	語	/bi˧˩/	/bɯ˧˩/	/bu˧˩/	/be˧˩/	/bɤ˧˩/	/bo˧˩/	/bɛ˧˩/	/ba˧˩/	/bɔ˧˩/
	英訳	marbles		mother	calf	butter	old man	build	three	stingly
4:/d/	語	/di˧˩/	/dɯ˧˩/	/du˧˩/	/de˧˩/	/dɤ˧˩/	/do˧˩/	/dɛ˧˩/	/da˧˩/	/dɔ˧˩/
	英訳	go		rock	dike	dirty	inflexible	anvil	banyan	measure

4.4. 実験の手順

録音は 2020 年 7 月～9 月にかけて行われた．リストの語を各 2 回発音してもらいそれを録音した[10]．本研究では 2 回の発音のうち 2 回目の発音[11]を観察するという方法をとった．解析には Praat Version 6.1.04 を用いた．分析対象となる音節の閉鎖維持部の波形を観察し，以下に示す基準に基づきラベリングを行った．同時に筆者のその音声に対する聴覚的印象に基づき，同様にしてラベリングを行った．ラベリングを行った後，音響的に，聴覚的に入破音と思われるものの割合を算出した．以下にラベリングの基準とそれに該当する波形の例を図 3～5[12]で示す．

---

[8] 本研究では 9 つの単母音音素のみを扱った．

[9] リスト内の語の英訳は，SEAlang Library Vietnamese Corpus (http://sealang.net/vietnamese/dictionary.htm 収録語数 1.5 万語) 及び SEAlang Library Vietnamese Text Corpus (http://sealang.net/vietnamese/corpus.htm 収録語数 900 万語，新聞，文学，Wikipedia の記事) に基づく．

[10] 録音には「PCM 録音」というボイスレコーダーの機能を持つアプリケーション (iOS，Android に対応) を使用した．サンプリングレートは 44.1kHz，量子化ビット数は 16bit，モノラル録音という条件で録音を行い，それを WAV ファイル化して保存した．

[11] 一部のコンサルタントには筆者の指示がうまく伝わっておらず，1 回のみの発音データもあったためその場合はそのデータを観察した．

[12] 筆者が集めた音声データから作成．3 つの画像は全て /da˧˩/ の波形である．本研究で観察する「閉鎖維持部」とは画像中の v (Voicing：声帯振動の開始) から b (Burst：閉鎖の開放) の部分を指す．

・閉鎖維持部の振幅に減衰が見られる：「破裂音」

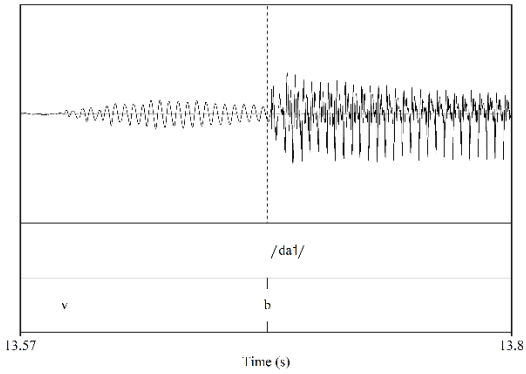

図 3：「破裂音」とラベリングする波形の例

・閉鎖維持部の振幅に増幅が見られる：「入破音」

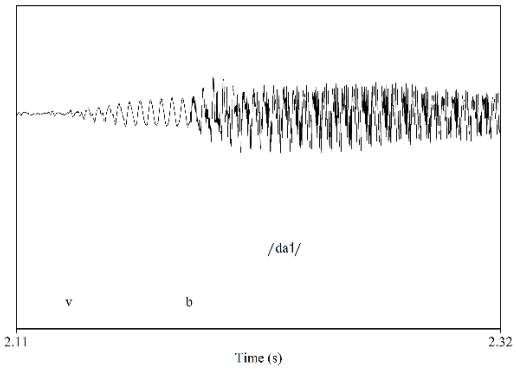

図 4：「入破音」とラベリングする波形の例

・振幅に目立った減衰も増幅も見られない：「不明」

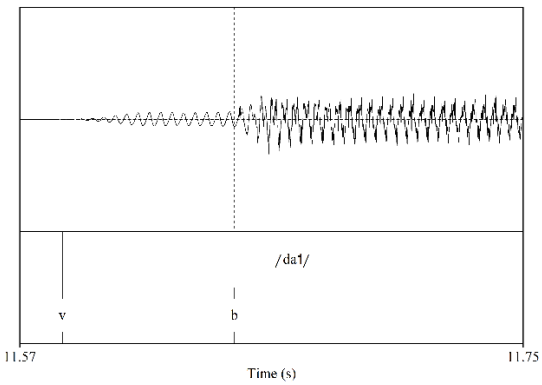

図 5：「不明」とラベリングする波形の例

5. 分析結果

5.1. 仮説 1 の検証

分析したトークン (リスト 1・2 はそれぞれ 48 トークン，リスト 3・4 はそれぞれ 54 トークン) のうち, 音響的, 聴覚的に入破音と思われるものの割合は以下の表 7 のようになった.

表 7：入破音の割合 (単位：%，条件：音節頭子音の違い)

	リスト1：/b/	リスト2：/d/	リスト3：/b/	リスト4：/d/
音響的特徴	75	40	56	37
聴覚的印象	69	48	60	63

表 7 より，ベトナム語では /b/ で始まる音節の方が，/d/ で始まる音節よりも入破音と思われる形で実現する割合が高いということがわかる.

5.2. 仮説 2 の検証

表 8 はリスト 1・2 のトークンのうち，入破音と思われる形で実現したトークンの割合を声調ごとにまとめたものである.

表 8：入破音の割合 (単位：%，条件：声調の違い)

リスト	声調	-/a˥˩/	-/a˧˩˧/	-/a˨˩˨/	-/a˥˥/	-/a˧˨˧˨/	-a/˧˩˧˥/	-/a˩˧/	-/a˩˨/
1: /b/	音響的特徴	67	83	83	67	83	67	67	83
	聴覚的印象	67	67	83	67	83	67	67	50
2: /d/	音響的特徴	33	33	50	67	50	33	33	33
	聴覚的印象	67	67	50	50	67	50	33	50

表 8 より本調査では声調の違いによる /b d/ の実現の割合に目立った傾向は見られなかったことがわかる.

5.3. 仮説 3 の検証

表 9 はリスト 3・4 のトークンのうち，入破音と思われる形で実現したトークンの割合を後続母音ごとにまとめたものである.

表 9：入破音の割合 (単位：%，条件：後続母音の違い)

リスト	後続母音	-/i/	-/ɯ/	-/u/	-/e/	-/ɤ/	-/o/	-/ɛ/	-/a/	-/ɔ/
3:/b/	音響的特徴	50	67	50	67	33	33	60	67	83
	聴覚的印象	67	83	33	67	67	33	83	83	83
4:/d/	音響的特徴	50	33	33	17	50	33	33	33	50
	聴覚的印象	50	67	50	17	83	83	67	67	83

表 9 より本調査では後続母音の違いによる /b d/ の実現の割合に目立った傾向は見られなかったことがわかる．なお，本調査では /e/ が /d/ に後続した際に入破音と考えられる形で実現した割合が音響的，聴覚的のどちらも 17%と他に比べて極端に低い値が出たが今回の調査ではその原因まではわからなかった．

6. まとめ

5 節で示した結果よりベトナム語の有声破裂音 /b d/ の音声的実現について

・/b/ を音節頭子音に持つ音節の方が，/d/ を音節頭子音に持つ音節に比べて入破音として実現する割合が高い．

・声調及び後続母音の違いは，有声破裂音 /b d/ の音声的実現に影響しない．

という 2 つの結論を主張できると筆者は考える．このうち 1 つ目の結論は Ladefoged and Maddieson (1996) が示した入破音の通言語的な傾向に従うと筆者は考える．

7. 終わりに

本研究はベトナム語の有声破裂音を音響音声学的手法で観察し，その音声的実現には音節頭子音が関係するという結論を出した．しかし今回は 6 人からしかデータを集められなかったため，分析したデータが少なく統計的な検定を行える量には至らなかった．今後はより多くのデータを集め，音声的実現の傾向をより客観的な形で示す必要があると筆者は考える．

参考文献・インターネット上の資料

［参考文献］　Hoàng, Tuệ and Hoàng Minh (1975) Remarks on the phonological structure of Vietnamese. *Vietnamese Studies* 40, 67-97. / 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）(1996)『言語学大辞典：術語編』第 6 巻．東京：三省堂. / Kirby, James P. (2011) Vietnamese (Hanoi Vietnamese). *Journal of the International Phonetic Association* 41(3): 381-392. / Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The Sounds of the World Languages*. Oxford: Blackwell. / Thompson, Laurence Cassius (1987) *A Viernamese reference grammar*. Vol.13. Hawaii: University of Hawaii Press.

［インターネット上の資料］　白地図専門店：https://www.freemap.jp/ (最終閲覧日：2020/09/06). / SEAlang Library Vietnamese Dictionary：http://sealang.net/vietnamese/dictionary.htm (最終閲覧日：2020/12/06). / SEAlang Vietnamese Text Corpus：http://sealang.net/vietnamese/corpus.htm (最終閲覧日：2020/12/06).

Tokyo University of Foreign Studies Descriptive Linguistic Papers

SHIGEN

vol. 17

Articles

The Ablative Form of Words Ending with the Semi-vowel /j/ in Mongolian ····· YAMADA Yohei (3)
The Particle =jAA in Urad Mongolian: From the Viewpoint of *toritate* ····· HAO Rile (27)
Predicative Possession in Fijian ····· OKAMOTO Susumu (49)
On the *krije*-passive in West Frisian ····· SATA Hitoshi (63)
Questions in Papiamentu ····· VARELA ALMIRON Patricio (81)

Abstracts of the MA Theses

An Analysis of Polar Question Markers in Salar ····· HARA Akimi (111)

Abstracts of the Graduation Papers

The Present Situation for Using Five Stage Conjugation in Japanese Causative Suffix "-seru" and "-saseru" ····· ABE Yoshitaka (123)
A Study of [*werden*＋(perfect) infinitive]: From the Perspectives of Co-occurrence, Context, and Comparison with English ····· ISHII Mako (131)
The Semantic Function of the "bi-" prefix in Cairene Arabic Verb Conjugation ····· ISHIBASHI Kotaro (139)
An Analysis of Italian Contractions: A Focus on the Prepositions "con", "su", "per" and Definite Articles ····· KOGISO Madoka (147)
A Semantic Constraint on the Order of Verbal Particles in Vietnamese ····· KOBAYASHI Tsuyoshi (155)
A Comparative Study of English and French Articles ····· TAKISHIMA Nao (163)
Augmentative in Mexican Spanish ····· HIGASHI Koki (171)
Future Expressions in Danish ····· FURUYA Sakura (179)
An Acoustic Study of Voiced Plosive Sound in Northern Vietnamese ····· MIYAZAKI Tetsuo (187)

2021
Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies / School of Language and Culture Studies
Tokyo University of Foreign Studies